第三種郵便物認可　毎月一回五日發行

女學世界

第七巻
第四號

博文館發行



化粧用美顔水は品質最もよろしく方今満天下の貴婦人令嬢佳人争ふて之を用ひ賞賛の聲囂すし色を白くしきめをこまかに光艶をだしうつくしくなる殊に化粧に用ゆればおしろい意のまゝにのりむらにならず常に用ふれば「花の顔せ雪の肌となり」真に玉を欺く美しき顔となるべし

（本品御購求の節は化粧用美顔水と御指名を乞ふ）

▲東京市名は勿論日本全國各地いたる處の有名なる小間物店にて販賣す



◉美顔水は天下唯一の美白光艶剤なり◉



最新流行

呉服、太物、洋服
小間物、雑貨類

三越呉服店

東京市日本橋區駿河町

女學世界 第七巻第四號 目次

登録商標

良藥にして口に甘し

淺田宗伯先生直傳

登録 **淺田飴** 商標

たんせき一切

肺病の持藥

ひきかぜ・よはき人

老人の滋養藥

登録商標



十二日分	金五拾錢
一週間分	金參拾錢
四日强	金貳拾錢
二日分	金拾錢

日本全國到る處の藥店に販賣す

（郵送料壹個拾錢）

本家

東京市神田區鍛冶町

大阪市安堂寺町堺筋

（電話本局壹壹二一番）

（電話東三九五八番）

堀内伊太郎

東京博覽會出品及紀念品進呈廣告

東京勸業博覽會に於ける弊店の出品は美術館に象牙彫造の女神、銀製彫刻の花瓶、朧銀地銀製卷莨筥等の類、第一號館東京小間物部に婦人用美術裝身具携帶品、髪飾品の標本等にして此外に博覽會場に出すべき素志にて製作したる美術品即ち縉士淑女方の愛賞に屬する物また嶄新粹挺の品類は弊店の階上に陳列して御高覽に供することゝ爲したり、何卒都下の華客方は勿論地方より御出京の方々市內御散步の途次御一覽を辱うするに至らば弊店の本懷之に過ぎず候尙ほ東京博覽會紀念品として弊店意匠部の考案になる「貨幣入」は博覽會開設地上野東叡山に由緒ある愛たき物なり之は博覽會開會中弊店に御立寄下されたる華客に開會の當日より進呈致し平素の御愛顧に酬ひ參らせんとす

貴金屬宝石
美術携帶品
婦人粧飾品
商

大西白牡丹

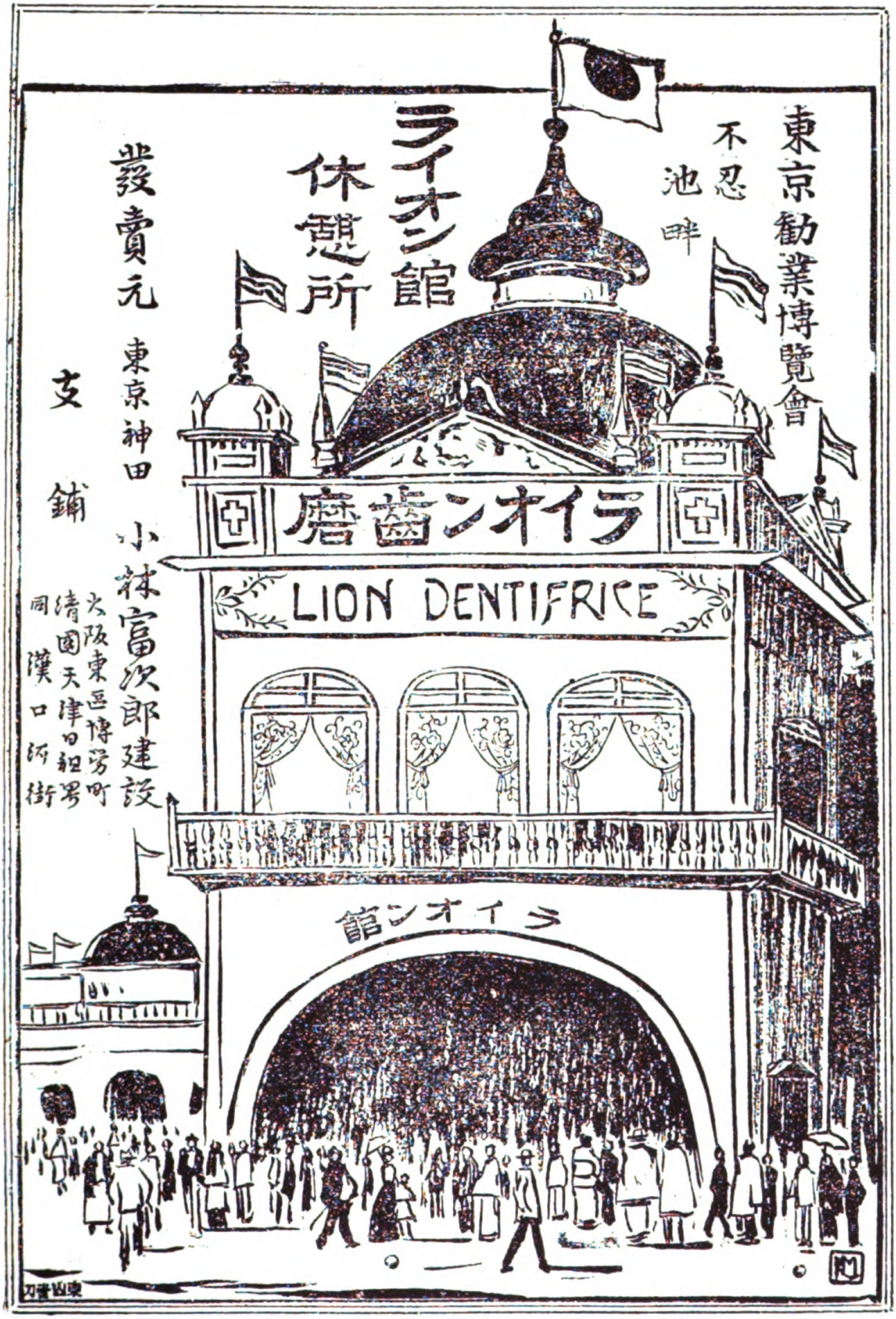
東京市京橋區南傳馬町三丁目

特 電話本局三十番



女(いの二)

女(いの二)


東京勸業博覽會
不忍池畔
ライオン館
休憩所
發賣元 東京神田 小林富次郎建設
支鋪
大阪東區博勞町
清國天津日租界
同 漢口河街
ライオン齒磨
LION DENTIFRICE
ライオン館

女(いの四)

書齋



尾竹國觀筆

袴乃親玉



卸 ㋯ 部

東京日本橋長谷川町
美濃磯本店
(電話浪花二八五九番)

本郷五丁目 美濃磯支店 (電話下谷一四一五番)
淺草區諏訪町 美濃磯支店
日本橋佐内町 美濃磯支店
深川區高橋際 美濃磯支店
神田區小川町 美濃磯支店
芝區新櫻田町 小田商店
牛込區神樂坂 伊澤商店
四谷傳馬町一丁目 伊澤支店

化學的大發明 **純金代用 旭印 人造金** 完成

● **無代價**同樣非常**の大安賣**

見よ保證付眞正人造金製品十種僅壹圓とは實に可驚安價に非ずや品目左

印臺指輪　養生目鏡　時計鎖　新式襟止　羽織紐鐶　以上**拾種**

[redacted]

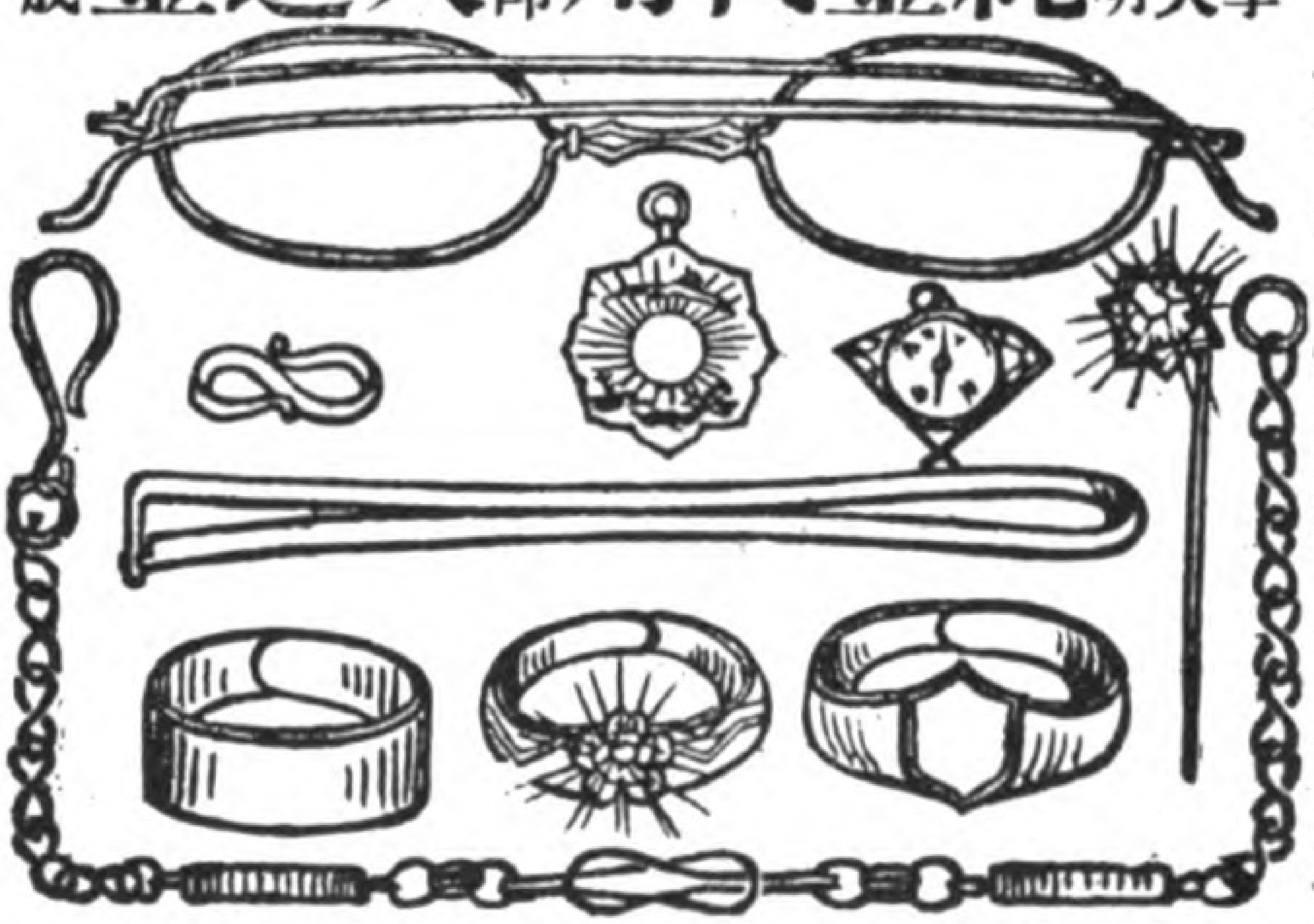
平打指輪　石入指輪　新形磯石　メタル　帶止金具　取揃箱入　特別減價

金壹圓 送料拾錢

葉書にて御注文あれば代金引替小包にて送る但し引替料拾錢申受

弊堂專賣の旭印完全人造金は在來の消金又延金細工の如き無責任なる山師的僞物と異り學理と實驗とに基き發明し最も進歩せる名譽的美術品なれば品質の純良高雅なるは勿論**金色燦爛**として麗々たる光彩を放ち遙に**眞正の純金**を凌駕す故に貴紳令孃達の御愛用品として毫も遜色なし殊に本品に就いては飽迄無限**責任**を帶び永久的**保險證**を添附し以て其の正確を保證す

名譽本品は上流社會殊に**華族**方の御愛用を蒙る其の他實驗の好評山の如し論より**證據**御買求の上其好評を知玉へ



● 大阪市東區和泉町貳丁
金賞堂商店

女(ろの二)

(300)

桃ばやし



宮川安信筆

女子通信傳習生募集

入學　試驗は小學卒業の程度（讀書作文算術地理理科）
年齢　滿十三年以上二十年以下にして夫なきもの
傳習　期間は八ヶ月以內にして在學中日額金十五錢の
手當金を給與す
義務　卒業後二ヶ年遞信省の通信業務に從事する義務
あり
卒業　後日給貳拾錢以上の事務員に採用す但卒業證書
を有する者は遞信省判任官となるの資格を有す
保證　人は東京市內若くは附近に居住する土地又は家
屋所有者若は所得税を納むる丁年の男子一名を要す
願書　受附は三月末日限り書式等は芝公園內當局分室
監理課養成掛へ承合すべし但書面は郵券封入を要す

明治四十年三月

東京郵便局

醫科大學病院を辭職
專門的治療院を開設

院長　**平田章之丞**

◎男子婦人**生殖器科** 睾丸、卵巢、其他の疾病 子宮の疾病

◎**梅毒、痳毒、痔疾、寢小便**

◎**殊に** 神經衰弱、陰萎、遺精、早漏 包莖無感覺、不姙症、月經障害、ヒステリー

（入院隨意）

明治療院

東京市淺草區七軒町二番地

優美!!!

別けて御令孃樣方には此廣告をお見落し給はざらんことを……

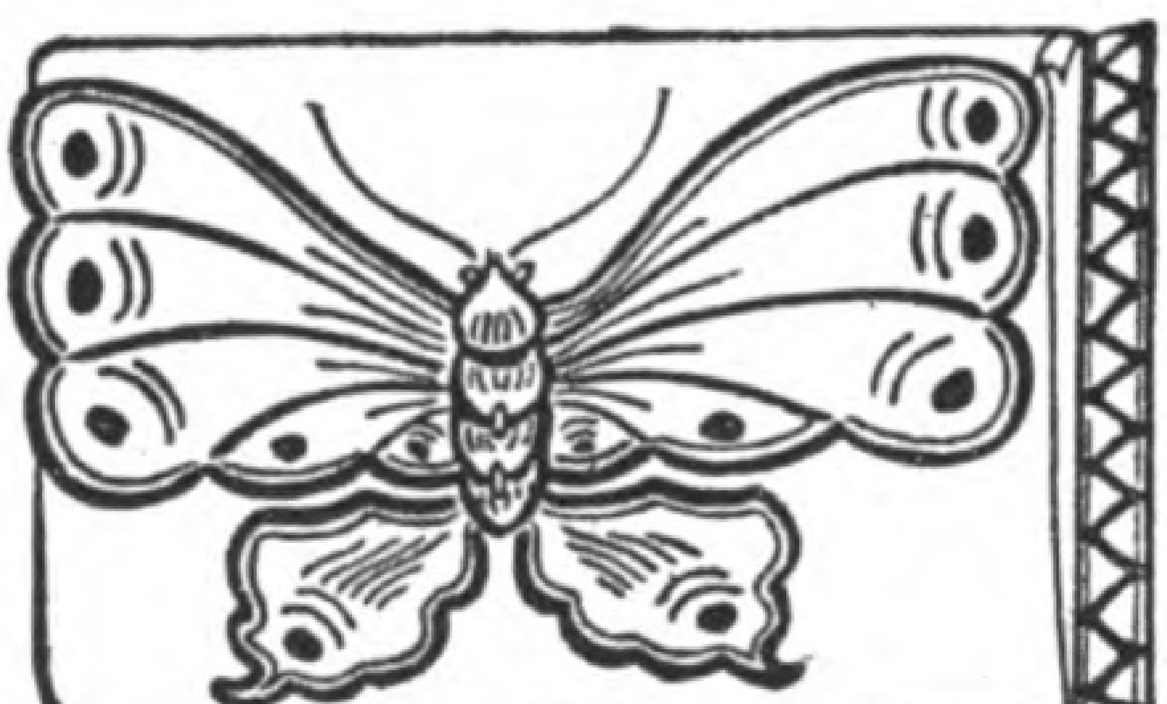
佐竹新意匠 **意匠登錄三七九三號 蝶冠せ紙挾み**

◎**壹圓五十錢**

上等シオゼに蝶の分體を刺縫し冠せをなすことによりて蝶の全身を形造る頗る優秀美麗なる空前の紙挾にして價格以上の秀逸品なり

地色は、赤、紫紺、利久柳、勝色等なり

送料十錢臺灣清韓卅錢
市內五錢爲替新橋局宛
郵券代用一割增代金引
換は別に十錢申受



內國博覽會各展覽會優等賞受領美術袋物**商**煙管金銀彫刻

東京市新橋際 **佐竹袋物店** 電話新橋千卅一番

女（はの一）

●材料豐富の三月號出でたり●

▲輕薄なる時代の思潮に染まぬ健全なる

毎月壹回

第五卷第三號

繪入女學雜誌 日本の家庭

三月一日發行

一日發行

▲挿花(兒島晩翠)

▲『こそ』の用ひ様(岸本柳子)

▲二疋の蜂(沼田笠峰)

▲童話の起源(木村小舟)

▲世界諸人種の子供……(坪井博士)

▲世帶染まぬ奥様……(西村渚山)

▲女學生の禮儀……(高島平三郎)

▲女は殊に己を愼むべし……(三宅花圃)

▲女は女らしくせよ……(棚橋絢子)

▲通俗教育問答……(大村仁太郎)

▲歐米家庭遊戲……(松浦政泰)

▲男子のしつけ……(下田次郎)

▲雛の里(平井晩村)

▲猫の別れ(菊緒)

▲西洋手輕料理(ゆふつき)

▲蟇のオペラブツク(尾上新兵衛)

見本は郵券五錢にて有合號呈す

▲女學雜誌を以て自任する本誌を見られよ!!!

定價 壹冊拾貳錢郵稅金壹錢六冊前金七拾錢拾貳冊前金壹圓參拾五錢(郵稅共)

東京神田 同文館 表神保町一〇

(はの二)



山葉風琴

《附險保》

號	價格
第壹號	一八、〇〇
第貳號	二八、〇〇
第參號	二五、〇〇
第四號	三五、〇〇
第五號	二七、〇〇
第六號	三八、〇〇
第七號	四五、〇〇
第八號	五〇、〇〇
第九號	五八、〇〇
第拾號	六八、〇〇
第拾壹號	八〇、〇〇
第拾貳號	一〇〇、〇〇
第拾參號	一二五、〇〇
第拾四號	一三〇、〇〇
第拾五號	一五〇、〇〇
第拾六號	二〇〇、〇〇
第拾七號	三〇〇、〇〇
第拾八號	三五〇、〇〇
大和オルガン壹號	四八、〇〇
同貳號	八五、〇〇
座敷用オルガン壹號	二一〇、〇〇
同貳號	二七〇、〇〇



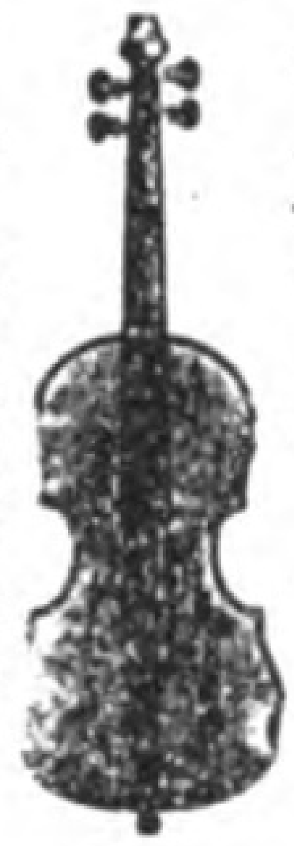
○山葉洋琴 ●●●● 金參百參拾圓以上金壹千參百圓迄各種

●●舶來洋琴 三百圓以上三千圓迄各種

舶來風琴 百圓以上千五百圓迄各種

○鈴木ヴァイオリン

金貳圓以上百貳拾圓迄各種弓金七十錢以上箱金壹圓五十錢以上各種



●舶來ヴァイオリン及弓箱等各種

●樂隊用陸軍々樂用吹奏樂器各種

●戰捷紀念國旗印銀笛數種

●八人組織簡易吹奏樂器一組金參拾圓

右の外手風琴、ハーモニカ、舶來フラジヨレーット各樂器附屬品、和洋音樂書各種郵券貳錢御送附あらば美麗なる目錄進呈す

楠美恩三郎先生編 （久しく品切れの處彌々再版出來）

デュエット トリヲ 唱歌集

伴奏附

大形美本全一冊

定價金六十五錢 郵税金八錢

近時音樂書の發刊漸く其多きを加ふるは洵に樂界の爲め欣喜の至りに不堪然れども中等教育以上に適する完全なる唱歌集の如きは恰も曉星の寥々たるが如し編者楠美先生夙に之を憂ひ今回本書を公刊せらる書中收むる處の貳拾五の歌曲はグルック、メンデルソン、アプト、モツアルト、ルビンスタイン、ウェーベル等の歐洲諸樂聖の作に係る歌曲中精を取り粹を拔きたるものにして殊に配するに本邦名家の作歌を以てせらる、されば其曲節と歌詞の調和の美妙に到ては一度試唱するもの感嘆措く能はざるべきことと信ず又伴奏部のみ彈奏するも、ピアノ、オルガンの曲譜として實に趣味津々たるもの多し希くは大方諸賢の御愛唱あらんことを

ピアノオルガン

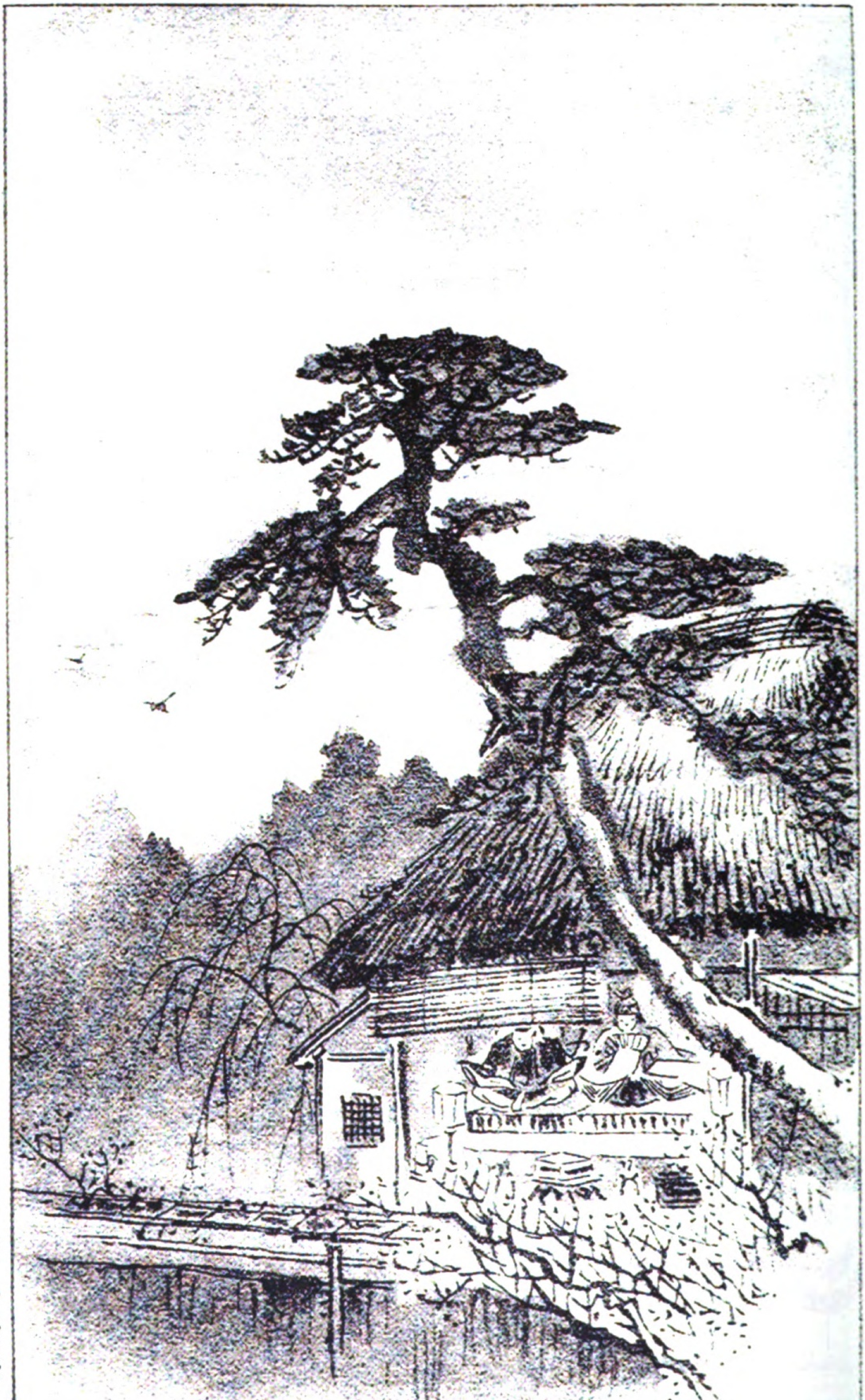
調律修繕

（振替貯金口座壹五八〇番）

東京市京橋區竹川町十三番地 合資會社 共益商社樂器店 電話新橋五二九 電報略號キヨ

女（はの四）

雛まつり



戸田玉秀筆

舞子の松



福田麥僊筆


各女學校御用
美術造花材料
附屬品、製造器械類一式
東京市日本橋區横山町一丁目十六番地
天野卯兵衛
電話(長)浪花一六四三番
振替貯金口座四九七〇番
營業目錄御入用ナレバ此切取チ添ヘ御申越被下度候
(切取線)
縣　郡　町(村)
女學世界第七卷第四號

女(その一)

明治卅四年十月
創刊

每號 皇太子殿下 賜上覧

▲天下無双青年筆戰雜誌之覇王

第七卷

第五號（三月一日發行）
第六號（三月十五日發行）

秀才文壇

▲壇友之優待每號奬學大懸賞付

▲每號選評擔任大家▼
○叙事文……文學士 中内蝶二
○抒情文……同 上
○短篇小說……德田秋聲

○俳句……高濱虚子
○新體詩……文學士 馬場孤蝶
○新派和歌……尾上柴舟
○和歌……佐々木信綱

○漢詩……小笠原虚舟
○評論文○日用文○五行文學○人物評論○文士會（以上編輯局選）

大判百三十頁

〈正價表〉
一冊郵稅共金拾壹錢○六冊同六十三錢○十二冊同一圓廿錢○廿六冊同二圓卅四錢
每月二回
一日十五日發行
定期增刊二回

日本少年作文雜誌

少年少女 第二卷三號

少年之友

三月一日發行

▲毎號少年習書帖 山中古洞先生 吉本雅美先生 執筆を所錄とせり

第三號目次
◉嘘をつかぬ子供（教訓）……記者
◉わたしの日記
◉梅花草紙（續）……西蒲人
◉ひいな酒……きみ子
◉血染の雪（歷史譚）……貢水
◉學生の年の暮……記者
◉ひつじ太郎（續）……はくう

少年文壇
○普通文○日記文○はがき文○和歌○俳句○お笑草○新考物○友達會○筆蹟○スケッチ……

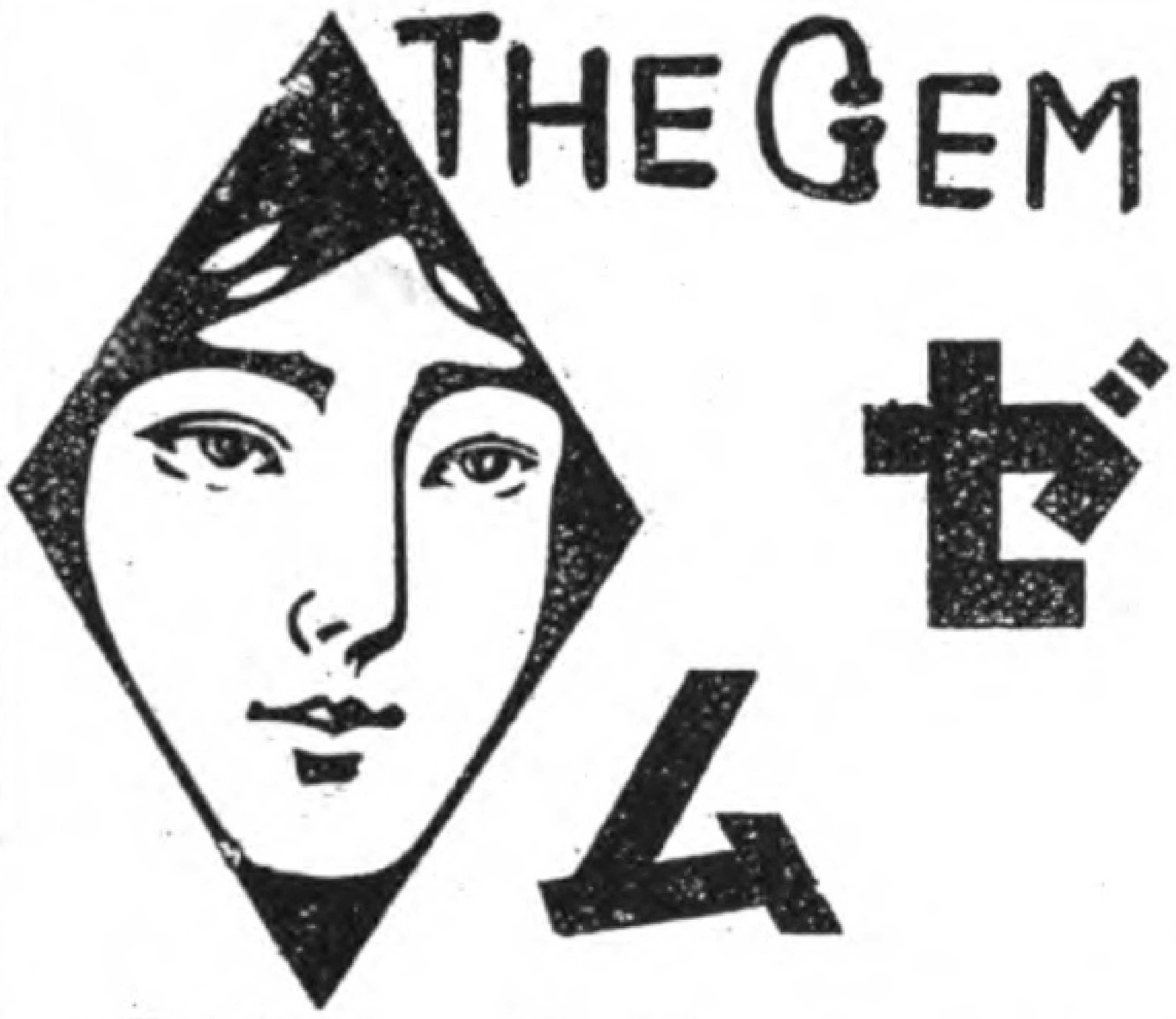
正價
一冊がたッた金五錢 六冊郵稅共金廿七錢○十二冊金五十四錢（郵券代用一割增）

發兌元 東京神田區旅籠町一丁目 文光堂（振替口座壹九五五番）

賣捌 東京堂 北隆館 東海堂 良明堂 上田屋 外書店

女(にの二)


美術造花材料
造花用材料一式
刺繡用材料一式
摘細工用材料一式
東京市本郷區眞砂町十五番地
百花堂
地方御注文ノ節ハ代金引替
小包郵便ニテ御送リ申上候





（ヘ一の四）

つみ草



婦人界の一大福音

東京慈惠醫院卒業産婆 山田逸子考案

月の帶

（最新式の月經帶）

正價｛（甲）金七拾五錢 送料四錢 （乙）金四拾五錢 送料二錢 郵券代用一割增

此の（月の帶）は近く醫學の進歩に鑑み、遠く歐米の例に準ひ、多年の實驗と專門大家の指導とに依り、創製したるを以て、婦人衞生に欠くべからざるは勿論、婦人の活動に一大革新を來すべき發明品なり、

現に村井弦齋先生は其著書『婦人日常の生活法』中に本品の有益なることを紹介され、又近時畏くも宮内省より御買上げの光榮を得たり

◉『月の帶』の効用は月經時に使用すれば、各種の生殖器病を豫防し、日常の動作を快活ならしむ、

◉白帶下の多き人、常に用ゆれば、其惡臭と、滲液の漏出を防ぐ、

◉殊に『月の帶』は製造の親切なるを以て幾回使用するも破れ損することなし、

故に貴婦人、令孃、女教員、音樂家、女學生其他日常快活の動作を爲す婦人には實に缺くべからざる重器なり、

發行所 東京市神田區猿樂町二丁目三番地 醫療藥品并器械舖 資生堂藥局

●珍奇有益品發賣 金壹圓以上景品進呈

征露紀念 砲形文具

漆塗蒔繪製



全部金屬を以て筒形二重に製し中筒は回轉して紙となり入用の時引出し使用され中心には印村と小刀付の筆とを仕込む上部の蓋内には肉池と切手挾の設備あれば旅行漫遊の伴侶たるは論なく文士の机上を飾るに足る●一號壹圓●二號五拾錢●三號卅五錢送料各拾錢

男學生女 貯金函



斬新の意匠を以て優美に製造し逐次貯金して一杯となれば自然に口を開く

一號七十錢 二號卅八錢 三號拾五錢 送費四錢宛

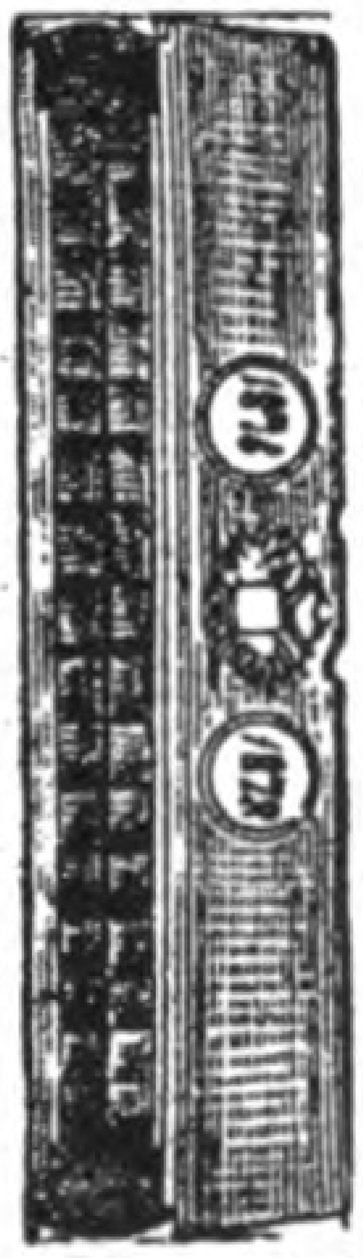
新式輕便懷中 手風琴



（竪五寸巾四寸）乙一圓卅五錢 甲一圓五十錢
（竪七寸巾六寸）乙一圓八十錢 甲二圓三十錢
送料各十錢 引換料十錢增

音律正確、風韻淸雅なる事、普通大形の手風琴に優るの高評を博す

新式改良 舶來口風琴（ハモニカ）



一本卅五錢、五十錢、七十錢、九拾錢、一圓廿錢一圓半送料各四錢

一種微妙の製作になり唯口にて吹けど律呂聲調に適ひ軍歌、唱歌、淸元、常盤津其外如何なる歌曲をも吹奏し得

（帝國發明協會新案）發賣一手所 大阪東區釣鐘町谷町西ヱ入 東洋社

（無代進呈）新奇發明品數百千種記載の本社營業案内は往復葉書で申込ば送呈す

女（ほの二）

女（ほの三）

心つかひ



小林呉嶠筆

女（への一）

見よ陽春の装ひを凝らして現はれたる婦人世界を

趣味滿幅

婦人世界

有益無比

三月一日發行 毎月一回 二卷第三號 一冊拾五錢 五錢税 郵税一錢五厘 半年分郵税共九十錢 一年分一圓七十五錢

口繪 ◉彩色石版畫三枚皆美麗 ◉東京勸業博覧會の全景 ◉名家新婚寫眞 獨逸貴婦人日本服を着て歡樂す ◉名家の令嬢寫眞 ◉其他悉く珍奇

◉私の肺病全治實驗（野村敏子）

◉茶ばなし（名家奥様方の珍談奇話）

◉感心なる女學生（女子美術學校谷氏）

△女中奉公して初志を貫きたる女學生

◉小兒感冒の手當（加藤博士）

△子供の感冒はどうして起るか

△感冒の手當はどうすればよいか

▲第二回大懸賞珍附錄當選發見法！

◉新案の氷嚢自在器（家庭の大要具）

◉インフルエンザと恐るべき鼻病 ドクトル佐藤敏夫

◉名家結婚年齢調べ ◉流行の衣服…

◉家庭の重寶（飯を早く炊く法其他皆有益）

◉少女欄（面白き事無類）懸賞讀者文藝

空前の大文字

娘時代の生活法 村井弦齋

△心の修養は何を先とすべきか

△虚言の癖は如何にして起るか

△虚言の癖は如何にして矯せべきか

△多辯の癖は如何に矯むべきか

△惡口の癖は如何に矯むべきか

△我儘の癖は如何に矯むべきか

△依頼心の癖は如何に矯むべきか

△嫉妬の癖は如何に矯むべきか

△色々の癖は如何に矯むべきか

◉完美なる自由結婚の實行者 鳥井君子女史面影

◉雛祭の準備と雛道具の保存秘法

◉電話交換手の實歷談

◉子供の部屋の造り方とその設備

◉小遺帳（小說）……米光關月

◉弦齋夫人 三月の珍料理 御覧なさい

△くわゐは如何に料理するか…

△嫁菜飯は如何に造るか……

△玉子は如何に選ぶか……

△玉子は如何に貯へるか……

△ムツは如何に料理するか……

△ひらめの煮凍りは如何に造るか

◉米國大統領候補者ブライアン氏の夫人（大政治家の夫人書生の靴下の破れを繕ふ）米國文學博士 山下彌七郎

發行所 東京京橋南紺屋町十二番地 實業之日本社 郵便振替貯金口座参貳六番 賣捌全國書店

女（への二）

女（への三）

此券御持參の方は一割引「女學」（第四號）（取切線）

本品は

宮内省御買上

の光榮を辱す

高等化粧料

日ノ出クリーム

●何故に美は人生の最大幸福なるか？美は愉快を感じ心を爽然とす、愉快の感覺は精神の滋養となり、精神の滋養は追次に肉體の健全となり益々色艶美はしくなる●其初めに美人となるは日ノ出クリームを朝夕使用するにあり

美人トナル秘密？

歐文ハウツービーピフチフル參照

色の白きは七難かくすと申し御婦人は勿論男子にても皮膚の奇麗な程快きものはなし此皮膚を奇麗にすると云ふことは平素の食物と衛生に依るとは云へ彼の歐米人が艶の美はしく纖の少なきは日ノ出クリームを缺くべからざる化粧品として使用しつゝある所以にして日ノ出クリームが又東洋の御方にも適當なることは衛生試驗所の證明其他各位の實驗に上明かでありますが色を白くしキメを細かに美麗ならしむることは勿論日ノ出クリームは電氣乳劑なれば皮膚を摩擦する時は脂肪が一面に普及し柔軟ならしむる故老衰に至るも纖の寄ることなく如何に其花の如き姿を永く保ち得るでしようか又皮膚のあれ注の方は必ず朝夕御使用あれひしもやけ等にかゝることなく又全治する特効を有す彼の恐るべき白粉の鉛毒を防ぐには無類日本流の薄化粧白粉や白粉下を用ゆるの要なく。又つき惡き眞の無鉛毒の白粉を使用前日ノ出クリームを用ゆれば極めて美しくつき。眞正の美人となることは獨逸國醫學博士エヱボーン氏の證明する所さて如何に日ノ出クリームを使用すべきか「初め微温湯を浸したるタオルの切れにて面部を數分間温蒸し自然と顔の毛孔に吸取られたる塵と垢を發出さしめ其後日ノ出クリームの極少量を指先きに付け充分（マッサージ）擦り込たる後はハンカチーフ或は紙にてふき取るべし」尚厚化粧を望まるゝ方は前記の如く拭ひ去りたる後無鉛毒の粉白粉を使用さゝる時は衛生上有効なるのみならず櫻花の滿開せし如く實に美麗を極むべし

尚毛髮用日ノ出クリームはコスメチックと水香油を合せし如くにて適度に亂毛を止め毛髮を保護養成する煉香油なり化粧用毛髮用共に佳香馥郁の佳品にして衛生的に完備せり

化粧用は美人劑　毛髮用は煉香油

日ノ出クリーム

定價

特製	大瓶	中瓶	小瓶	見本瓶
二圓	一圓	五十錢	三十錢	十五錢
郵税（十錢）		税（四錢）		

本品發賣三ヶ月有餘にして賣上數三十萬個に達したり此御愛顧に報ひん爲め壹千個中へ一個純金紀念指輪引替券を一瓶のソコへ入れあれば御使用中少さき金物あれば本舖へ御持參或は御郵送相成度引合の上速時進呈すべし

各宮妃殿下御用

高等水香油（フケトリ）

日ノ出オイル

大一圓。中五十錢。小廿五錢。

香水香油

日ノ出ブリ、ヲンチン

壹瓶三十五錢

右は何れも衛生に適する佳品なり郵税各十錢

日本一手販賣元
舶來化粧品商

東京日本橋區村松町廿二番地

須原啓三郎商店

（振替貯金口座七〇五七番）

特約店

大阪市博勞町二
ライオン齒磨本舖
小林支店
名古屋末廣町
村瀬谷三郎

市内

通り三　順天堂
銀座壹　佐々木
小川町　信盛堂
傳馬町　大西白牡丹
本郷　鯱康
須田町　三ツ井屋
神樂坂通　山城屋

全國到所有名勉强なる和洋化粧品販賣店にあり必ず日ノ出印御注意御買求乞不正僞品あり

（その四）

夜の湖畔



戰國時代婦人の精神



山崎朝雲氏作彫塑

（女との一）

當代無類の奇文!!!毒舌文の一大機軸!!!

龍門を見ざれば天下の深きを知らず
元祿姉さんを見ざれば天下の文を知ることなし

巫山を見ずして天下の勝を說くこと勿れ
元祿姉さんを知らずして天下の文を談ずる勿れ

元祿姉さん著

▲咳唾珠を成す奇才子の文!!!▼

▲人を魅する妖婦の文!!!▼



噫是れ現代婦人の心裡を解剖せる

正價金參拾五錢　郵稅八錢

觀象國也、見よ現代婦人千百の疑問が奈何に靈警なる著者の眼光に映じ如何に燃犀なる著者の筆に依つて解決されつゝあるかを。著者元より小說家にあらず、然れども實在の滄海より掬び來れる一滴の甚麼を千倍の顯微鏡に映じこれを萬人の眼前に展觀せしむるの技に至つては眞に是れ當代の傑品一度び卷を繙かば、老婦は嫉み、壯婦は怨み、貪婦は恥ぢ、嬌婦は怒り、而して妙齡の才人は忽ち紅潮して以て手に汗を握らん。

本書綱目

▲嫁の贔負？姑の贔負？
▲唾付られたる女
▲女性を呪へる口
▲お嬌姿を作りし社會
▲囚はれたる女
▲鬮を引損ひし女
▲美人の立場と醜婦の立場
▲武器を持てる女
▲侮辱されたる女

▲手腕ある女
▲札は野心家に落ちたり
▲女は三世の祟り
▲離婚の原因
▲女學生の現在
▲都と鄙の婦人兩面觀
▲婦人と文章
▲化粧哲學
▲情の研究

東京　博文館　本町

女（その二）

最近
子宮病
自宅療法

全一册

▲如何にせば子宮、血の道の難病を根治し▼
▲子寶を擧ぐべき健友性となるを得べきか▼
◉本書は著者が多年の實驗より得たる成効と、最近の學說を基礎とし、親切叮嚀に自宅の療法を記述せるもの◉郵劵貳錢を送れば當分の内無代進呈す

申込所 東京市築地新榮町四丁目一番地 笹岡省三

☛ 靈能轟内外 ☚

●人の生命は地球より重し

農商務省特許 内務省免許

有効無害

山龍堂

東京 山龍堂謹製

りん病せうかち大妙薬

麻消丸

電話新橋 五三二四

發賣元 八 東京銀座三丁目 松澤八右衛門

此新藥は重患者も服用一時間後特効有

定價改正	一日分金拾錢	七日分六拾五錢
	拾四日分 壹圓貳拾錢	遠國送料 一日七日

子宮神藥

女宮丸

◎ちの道●産前産後●ヒステリー●子宮痙攣●寸白●しらち●ながち●つわり●のぼせ●づゝう●めまひ●きのふさぎ●顔色あしく手足だるく食すゝまざる等に用ひて奇効あり特に身體滋健となりて子なき婦人に一日も缺くべからざる特効藥なり

藥價 七日分五十五錢●十四日分一圓●卅日分二圓●五十日分三圓●百日分五圓五十錢●小包料十錢

美容散

やせる藥

藥價(一週)七十錢(二週)一圓(五週)三圓廿錢

●血ぶとり、あぶらぶとり、酒ぶとり、顔赤く、のぼせ症等總て肥胖質の人用ひて害なく身體美容となる保證藥なり

僞物注意

皮膚病專門藥

おまづ	いんきん	たむし
あか鼻	ざくろ鼻	あざ
ぜにがさ	ひぜん	わきが

小瓶五十錢中瓶一圓大瓶一圓五十錢特製二圓送料十錢宛

專賣本舗 東京本郷區本郷三丁目 新宮藥館

家庭の清福

前列右ヨリ、二女かれ子（磯崎海軍造船大技士夫人）長女なつ子（平石福島縣知事夫人）六女ふみ子、夫人たか子、平子爵（順位）二女、永井岩之丞氏、六男誠、長男壯吉氏（海軍造船大技士）



後列右ヨリ、三女あい子（第一高等女學校卒業）二男亨（農商務省特許局事務官兼參事官法學士）五女きよ子（上野高等女學校在學）三男細谷啓（法學士第一銀行員）四男繁（法科大學生）四女じゆん子（第一高等女學校在學）五男大屋敦（第一高等學校在學）

六男六女の同胞を儲けられし永井判事の一家

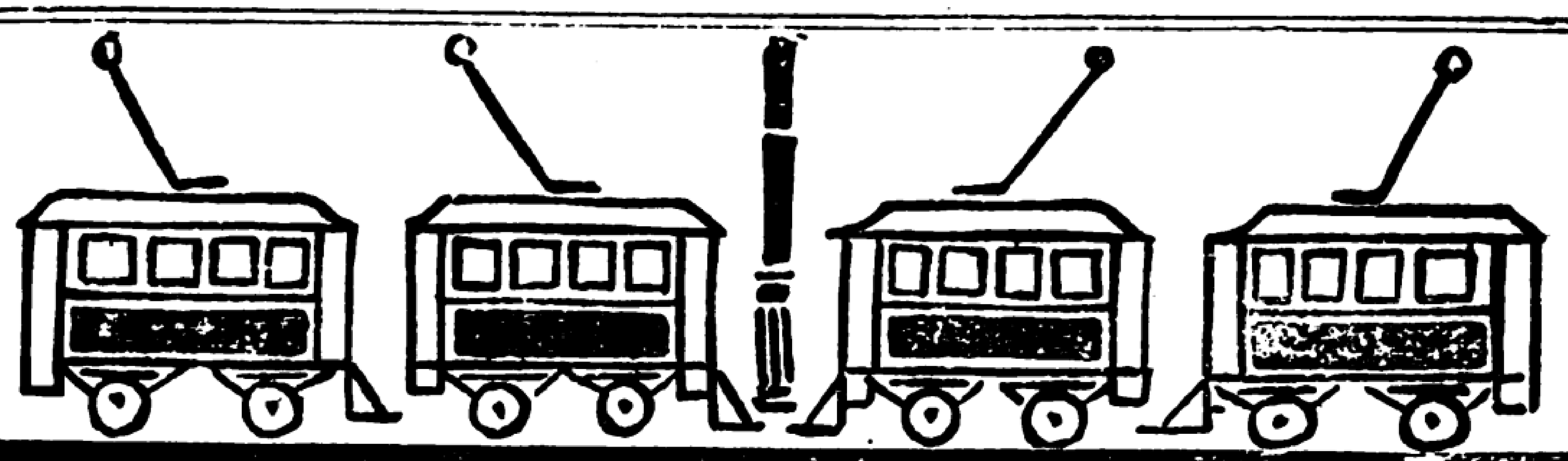
信州姥捨山





（神保荷月氏撮影）

信州松本城



◎幼年畫報 第二卷第四號 定期增刊

東京見物

三月廿日發行

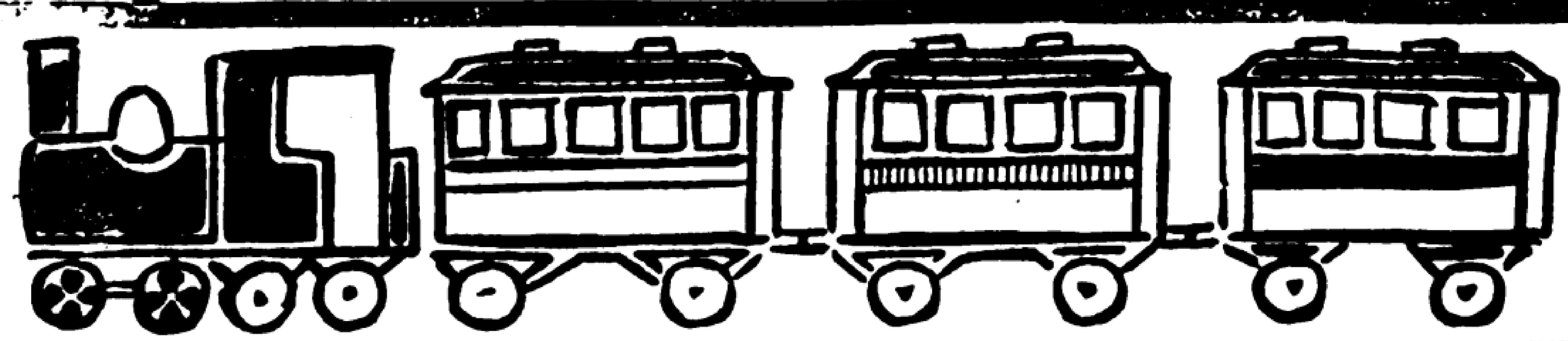
小波君作　永年君畫

玉の宮居の千代田城、東洋一の大都會、いざ見物に出で立たん、日は暖かに風もなく、隅田川原の櫻花、上野の岡の博覽會、行きかわ人は織る如く、人家は櫛の齒の如し、空には電線張り廻し、地には電車の絶え間なく、文明の利器備りて、見るもの凡て智慧となる、昔しの人も云ふ如く、物を百度きくよりも、一度事を見るはまし、いざ來てみよや文明の花の都の東京に。

附錄　動物園　東京名所橋づくし

▲正價拾錢
▲郵稅五厘

發兌元　東京日本橋區本町三丁目　振替貯金口座第二百四十番　博文館



女（ちの三）

喀拉沁王と其妃





盛裝したる王妃



（記事参照）



同王教習 鳥居氏夫妻

女(りの一)

三月十日發行

商工世界太平洋臨時增刊

東京勸業博覽會

三月二十日より上野公園にて開設さるゝ東京博覽會は名は地方的なれ共事實は全國的なり。又た世界的なりとも言はる。陳列區域のみを廻つても四里の長に達すれば、大阪の第五回博覽會に比して遜色なきのみならず、其建築と其の出品の進歩は同一の比にあらず、大に傳ふべく記す可きなり。

◎口繪には二色刷極めて鮮明なる寫眞版十數葉を附す

◎正價拾貳錢　郵稅一錢五厘

此臨時增刊は博覽會に關する一切の事を網羅せり、見物する者は之を携へて案內書にすべく、見ざる者も一讀せば宛から目の當り見るの思ある可し。何が出品されるかも知るを得べく、如何なる珍らしき餘興かあるかも知らる。花咲き出てゝより夏の初まで上野に行く者、東京に來る者は是非買つて備置かざる可からず。

發兌元　東京市日本橋區本町三丁目　振替貯金口座二百四十番　博文館

女(りの二)

書道一斑

中村不折先生新著（既成發賣）

●洋裝クロース上製口繪三色版寫眞版入 ●本文三百五十餘頁
定價金八拾五錢　小包料金拾錢

世評一斑

▲**太陽**　口も八丁手も八丁の不折子が、書道の要旨を說き其意義を明らかにしたる書也。引證該博、行文痛快、實際家の主張なれば、美術學者の所說よりも深く傾聽すべし。

▲**讀賣新聞**　系統的に秩序を立てゝ論じたる美術書は之れのみ、誠に書道の爲めに喜ぶべし。附錄過去一千年間の年表あり。實に有益の書、畫家は是非一讀すべし。

▲**趣味**　近頃生硬にして卑近なる譯書や手引類の多く出づる時、かゝる良著を得たるを喜ぶ。丹青に經驗深き氏の事とて流石と感服さるゝ節多し。

▲**二六新聞**　洋書は勿論、日本書彫刻建築に迄切り込んで大に氣焰を吐く。諄々として說き、痛快に罵倒するところ、專門家の議論として他に見られぬ味あり。

▲**日本美術**　現時の書家中東西の書論に通ぜるは不折先生のみ吾々後進者は繰返しく精讀するを要す卷尾の年表名匠訓書家年齡は至れり盡せり挿繪も多く草稿は殊にうれし。

▲**みづゑ**　所說穩健、文章簡勁、繪具用筆の末に走らず繪畫の根本事項を指示しあれば、畫學者は必らず一讀すべし。余はかゝる眞面目なる美術書の出版を歡迎し之を讀書に勸む。

●**繪畫講話**　橋本春郊譯（紙數三百五十四頁、泰西名畫十數葉　定價金六拾五錢　送料六錢）

●**水彩畫手引**　三宅克己著幷に書（紙數貳百五十餘頁コロタイプ、寫眞版、木版數十葉入　特製價九十錢並製七十五錢郵税拾錢）

●**繪葉書趣味**　日本葉書會編（紙數貳百五十頁餘口繪三色版挿繪入　定價金二十五錢　送料八錢）

●**旅行とスケッチ**　三宅克己著幷に書（紙數二百頁木版、寫眞版十數箇入、石版極彩色スケッチ十葉入頗美本　定價金五拾五錢　送料六錢）

●**水彩習畫帖**　三宅、丸山、大下三先生合著及書（全六冊）（袖珍羅紗紙表裝頗美本四輯迄（既刊）價一冊三十五錢郵税二錢六冊貳圓）

●**鉛筆スケッチ習畫帖**　橋本、太田、和田十二大家著及書（全十二冊）（石版極彩色羅紗紙臺紙付頗美本全部郵税共貳圓五十錢一冊廿五錢税貳錢）

發賣元　東京市日本橋區本町　博文館
東京市小石川久堅町　日本葉書會

女（りの三）

三井家の三夫人



（守之助氏夫人　楷光）



源右衛門氏夫人
五十子



（得右衛門氏夫人　鉞子）

受驗問答叢書

全部三十六册洋裝袖珍紙皮金文字入上製
正價一册金貳拾錢　郵税四錢宛

前金 ●十册金壹圓 ●貳拾册金參圓五拾五錢 ●卅六册金五圓四拾錢
▲郵税一册四錢宛

發兌元 東京本町 博文館

編次

一編 改訂増補 新撰日本地理問答　左川櫻桃君編補
二編 新撰日本歷史問答　宮田修君編
三編 新撰世界地理問答　武田櫻桃君編
四編 新撰東洋歷史問答　松原岩五郎君編
五編 新撰西洋歷史問答　長谷川誠也君編

一九編 新撰心理論理問答　德谷豐之助君編
二〇編 新撰和英文典問答　上村貞子君編
二一編 新撰農業要項問答　志岐守二君編
二二編 新撰英語會話作文問答　森美文君編
二三編 明治三十六年 文官高等試驗答案集　相澤新八君編

女（ぬの二）

六編 新撰國文問答 鷹野勇雄君編

七編 新撰漢文問答 大田才次郎君編

八編 新撰算術問答 竹貫登代多君編

九編 新撰代數問答 竹貫登代多君編

一〇編 新撰幾何問答 竹貫登代多君編

一一編 新撰化學問答 武田櫻桃君編

一二編 新撰物理學問答 寺崎留吉君編

一三編 新撰動植物學問答 寺崎留吉君編

一四編 新撰地文天文問答 木村定次郎君編

一五編 新撰法制經濟問答 中村重造君編

一六編 新撰文官普通及裁判所書記試驗問答 小野柘君編

一七編 新撰倫理教育問答 永廻藤一郎君編

一八編 新撰鑛物地質問答 寺崎留吉君編

二四編 新撰商業要項問答 濱田四郎君編

二五編 新撰獨逸文典問答 藤井憲君編

二六・二七編 新撰工業要項問答（上下二冊） 加野友次郎君編

二八編 新撰作文問答 西村眞次君編

二九編 新撰衛生生理問答 首藤環君編

三〇編 新撰家事問答 近藤正一君編

三一編 新撰憲法行政法問答 法學士辻宏吉君編

三二編 新撰商法問答 太田法學士編

三三編 新撰國際公私法問答 土屋法學士編

三四編 新撰刑法問答 石原法學士編

三五編 新撰民刑訴訟法問答 清水法學士編

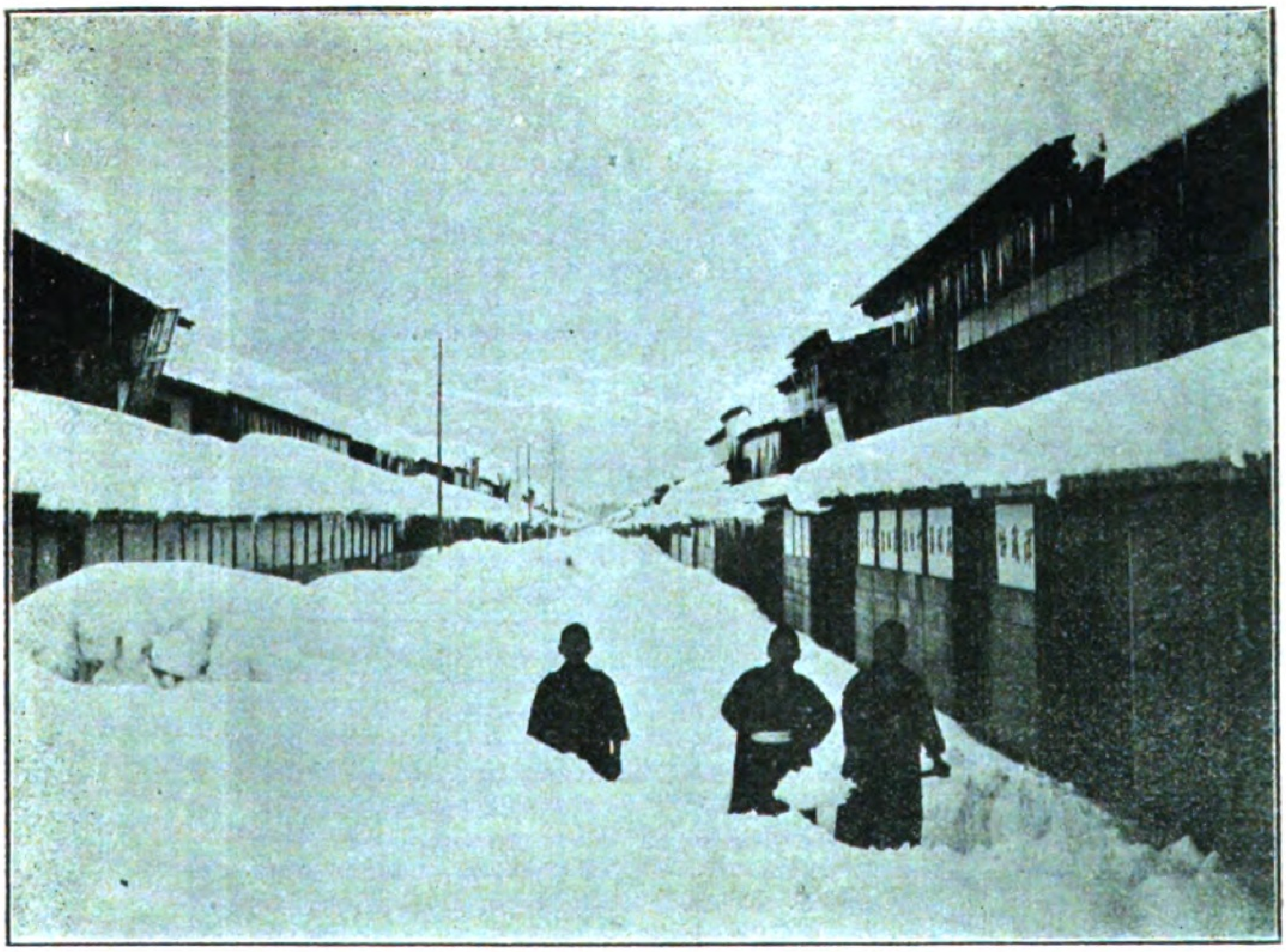
續刊

三六編 新撰民法問答 宮川大壽君編

（三の六）女

北越の雪

越後高田町





（藤井女史寄贈）

女（ろの一）

怒濤庵江見水蔭君著並畫



海洋文學者として既に定評有る江見水蔭氏が、身自ら捕鯨船に乘り組みて、遠く朝鮮の惡灘に漂泊し、諾威砲手が狂瀾の裡に照尺を定むるの時、氏は怒濤の間に起ちて、一管の筆棹を呵し、捕鯨の大壯觀を實寫して、深く海底の秘奥を發く。本篇は此紀念帖也。氏の意氣や豪宕、氏の詩想や壯大、本書が如何なる快文字を以て成るかは茲に云ふを俟たざるべし。されば事實上の冒險小說として、頁紙を繰るに遑無き間に、遠洋漁業の智識をも了解し、豫ては韓國の風俗をも窺ふに足る。葢し近時出色の好著述なり。

全一册

菊判洋裝
紙數約二百頁
實況寫眞版入
近日發行

卷中目次

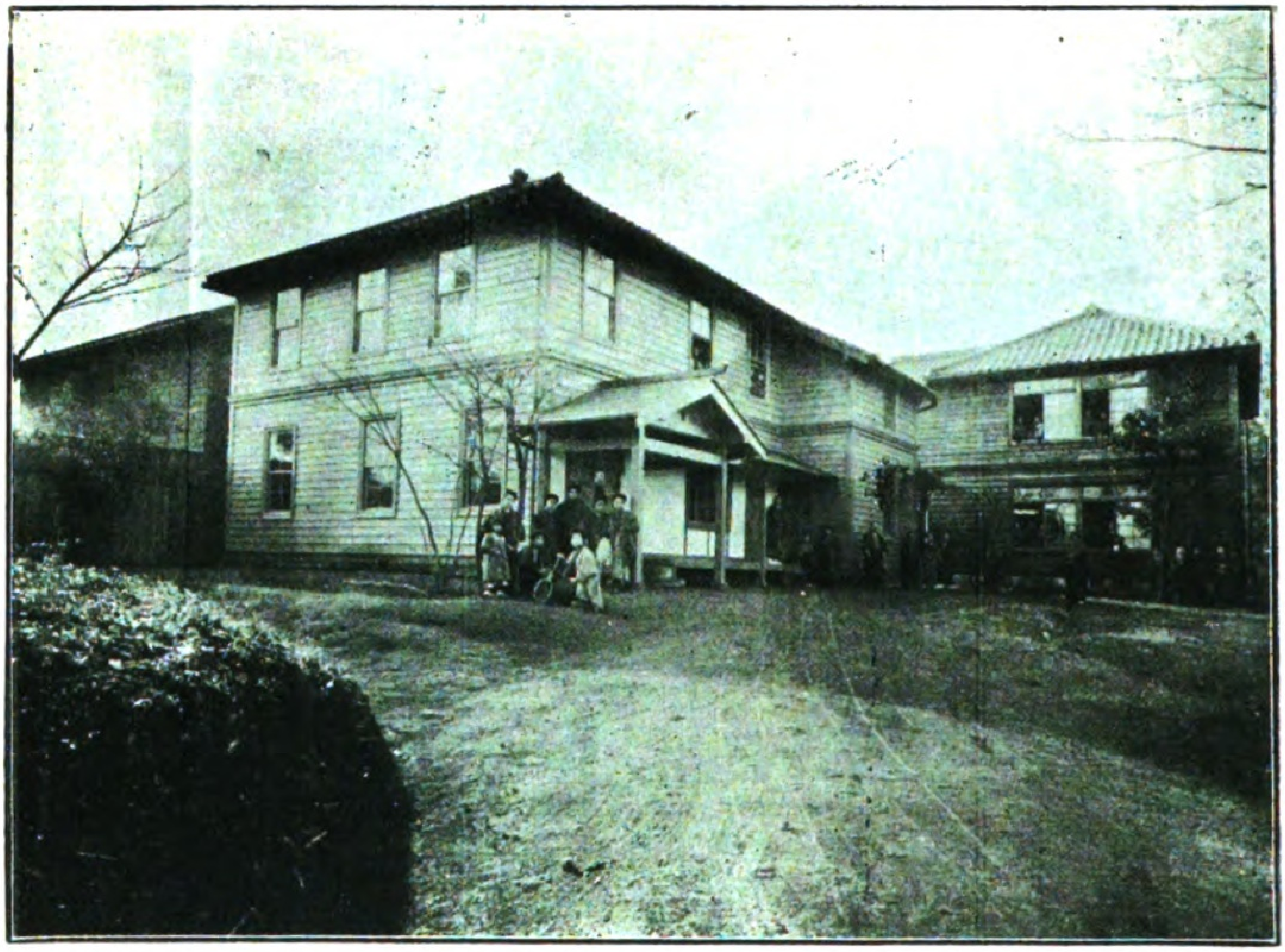
▲日本海の沈獸
▲暗夜韓國に入る
▲出漁の前日
▲捕鯨記（ニコライ丸にて）
▲鯨の解剖（蔚山にて）
▲韓人の三（奇異なる社會の一端）
▲相模と鯨歌
▲鯨擊の名人（レックス號便乘記）
▲蔚山の一日
▲鯨の油
▲月峰寺
▲鯨組
▲女一人
▲歸航記
▲渡韓前記
▲大冒險？
▲蔚山行
▲其他數篇

振替貯金口座番號 第二百四十番
東京本町 博文館
販賣部電話番號 本局二六二〇番

女（ろの三）

女(ろの四

女學校と婦人會



精華女學校

（記事參照）



愛國婦人會

家庭整理の指導

當代第一流の女子教育家編著



家庭百科全書

全部五拾册＝毎月一回發行＝第一卷三月創刊す

和裝頗美本　◉紙數三百頁　◉石版彩色口繪一葉。挿畫十數個

▲定價一册金四拾五錢＝郵税八錢

近時婦人教育の普及するや、女流の才學は一般に著しく進みたりと雖も、尚ほ之を日常家庭の上に施こすに臨み、輙もすれば實際に適せざるを憾むこと多し。是れ學校に在るの日には概ね理想の學修に止まるが故に、實際の應用に臨み、或ひは學ぶ所高尚に過るか、然らざれば未だ十分ならざるの憾ある所以なり。若しも家庭に教師ありて一々實際の問題に就て指導せんには、世の良妻賢母は言ふも更なり、未だ在學中の女流學生達の爲にも如何に裨益の多かるべきかは、敢て多言を須ゐざることながら、人ことに家庭に教師を聘するが如きは、得て望むべからず。是に於て本書は、最良なる家庭教師たる目的を以て編述發行し、敢て婦人教育の缺點を補はんと欲するなり。

發兌元　東京

（その二）

婦女必讀の大全書發行

去れば本書は全部を五十卷と爲し、每月一卷づゝ、左の諸大家に請ひ、編を逐ふて發刊す。著者は皆な現代婦人敎育界に第一流の諸名家にして、各家皆な多年の經驗に徵し、最も實際に適切なる事物を選み、文章は平易流暢を旨とし、之れを讀で趣味多く、記事は明細精確に之を實地に施して遺憾なきを期せらる。幸ひに世上の女流にして、各一本を家庭に備へられんには、恰も常に家庭敎師を自家に聘し、日々に起る所の事物に對して、一々指導を受くるに異ならざる裨益あるべきなり。

第一編

新家庭訓

三輪田高等女學校長　三輪田眞佐子女史著

紙數三百頁
石版極彩口繪挿入
挿畫十數個

續刊

四季料理
宮中臣民兩流料理師範
大日本割烹學會々長　石井泰次郎君著

和洋裁縫指南
女子高等師範學校敎授　喜多見佐喜子女史著

家政要訣
女子高等師範學校敎授　後閑菊野女史著

本町　博文館

(その三)

大日本淑女學會

會員募集 規則書進呈す

御自分のお宅に居つて高等女學校の課程を講習しやうとする人は本會におはいりなさい本會は文部省令に據り正則完全なる女學講義錄を發行します講義の親切丁寧な事は固より新式の教授法によつて獨習に最も便利な方法を計ります卒業は貳箇年會費も低廉であります

第四回新學期開始

本會の講義錄

▲大版三百頁優麗なる冊子
▲講義平易にして興味多し
▲各科講義の程度一定せり
▲各科皆聯絡し組織的なり
▲講師は專門女子教育家也
▲科外講師は博士學士卅家
▲毎號科外講話を附錄とす
▲純潔高雅の家庭小說あり
▲會員の質問は直に解答す
▲學期毎に修業證書を與ふ
▲講義錄は貳ヶ年完結とす

● 三月三十日限り入會金**全免**す

本會機關雜誌 **姫百合** を發行し會員に限り進呈す

● 東京神田南甲賀町（電話本局三千四番）

大日本淑女學會

▲報知新聞評　本講義錄は高等女學校の全學科を知名の專門女子教育家が講述せる者也平易懇切を主とせるものなれば何人も難解の虞なかるべく各科皆聯絡を保ちて其程度を一にせるなど講述者の苦心を見るに足る且つ有益なる科外講話の外に雜錄五十頁の附錄あり博士學士等の婦人に關する評論史傳衞生家庭等の文字を滿載し卷末更に純潔高雅の小說あり凡そ天下講義錄多しと雖も實益と趣味と併せ有する事斯くの如きは稀也

（其の四）



女學世界

第七巻第四號

三月五日發行

▲春の女神

梅花歴亂として空氣は酒よりも濃やかなり、野に出づれば麥緑ます〱濃かに、菜の花も咲き初め、田の畔の野茨も簇々芽を吹きつゝあり、試みに田川の水の音を聞け、裡に無限の平和と長閑さあり、更に去つて海を眺めよ、溶々として又漾々たり、霞一面に棚引きて、遠山近島影さだかならず、忽ち白帆一つ霞を穿ちて來るを見ろ、嗚呼是れ春の女神を載せたる玉輦か、!。

春の海終日のたり〱哉



婦人の世界眼

伊藤鈴子

現代教育の方針は男女を論ぜず一般に世界的知識を注入するにありて、高等女學校以上に課せらるゝ英語、外國歴史、外國地理、乃至は理科博物の如き皆世界的知識を與へて、その狹隘なる家庭的鄕土的思想より、廣濶なる世界的眼界を開かしむるに非るは無し、古く擇ばれて文部留學生となり遠く英米獨佛の異境に螢雪の功を積みし人を除き、數年前河原操子が單身蒙古に入りて、朔風の胡沙吹く國に新文明の空氣を注入し來りたる以來、婦女子にして淸國公私の依賴に應じ、千里の外に或は學校敎員となり或は家庭敎師となりて、纎手に敎への鞭を揮ふ人漸く多く、中には矢島楫子の如き身七十餘の老軀を以て單身太平洋を渡り、萬國婦人矯風會の大會に臨みて、日本婦人の意氣を北米の天地に吐き來りたるが如き、婦人の眼界大に擴がりて淸韓は隣りの村よりも近く、米國又は英獨は河一つ隔てたる向ふの村に行くが如きの感あるに至りたるは、一は敎育普及の結果に依るべしと雖ども、日露戰爭の結果一般に自國の地位を知ると同時に、世界の何物たるを知り得たるに依

れり。

一面には斯る現象ありて婦人の世界眼は確かに開かれたるが如しと雖ども、その多數は今尙島國根性、我家主義、引込思案を懷き、間口數間、奧行數間の小家屋を我世界となし、蛙が池水を我領土として自由に快活に游泳するよりも、遙かに狹隘にして因循なる生活に甘んじ、時々の芝居見物と梅見花見の外には社會の有樣を知らず、日々の新聞紙に對しても三面雜報の野卑なる下劣なる不德なる無益なる記事の外には何等の理解もなく記臆もなく、現在に於ける桑港の日本學童排斥事件の如き、旣に日米間の國際問題となりて、世界列國の注目する所となり、ルーズベルト氏の日本に對する親厚の態度は、却つて米國民の大統領排斥の聲と化せんとする有樣なるを知るものは、二千餘萬中果して幾人かあらん、恐らく此問題に對しては今の高等女學校生徒と雖ども、完全なる答案を提出し得るもの極めて少かるべし。

さらば今日の婦人世界眼の濶さは、その程度甚はだ狹小にして、河原女史の如き、矢島刀自の如きは晨の星の寥々たる類のみ、月なき空に沙の如く見ゆる多數の星は月明の前に顏色なきが如く、今の婦人の多數は世界的知識に關しては殆んど小學兒童に等しき耳、女子の敎師として淸國に傭聘せらるゝ者近來漸く現はるゝを見て、日本婦人の意氣大に進みたりと思ふは、當今の羽織紐の房のみを絹糸にして、其他を瓦斯糸にしたるを知らず、全く絹糸より成りたる者と思ふが如し、瓦斯糸の買被りは丈夫の點に於て利する所あるべし、婦人世界眼の買被りに至りては、敎育の前途を誤まり社會改良の將來を誤ること少なからず、よくその廣狹深淺を測りて、廣むべきは益々廣くし深むべきは彌々深くするの方法を採らざるべからず、之を廣くし深くするの道は外にありては敎育の方針を尙一層實際的にし、內にありては婦女子の眼を新聞紙の二面的記事の上に注がしむるにあり、是最も行ひ易く遂げ易き方法なり。

第一の方法は文部大臣の訓令を俟たざるも教員一個の見識を以て、地理歴史の教授の間に實例を擧げて世界の現狀を語らば、聽く者も亦一層の興味を以て其耳を傾くべし、第二の方法に至りては所謂二面三面と稱するが如き新聞記事の區劃を廢し、政治的雜報に挾むに社會的報道を以てし、地方的出來事に次ぐに世界的記事を以てして、硬きもの軟らかきものゝ差別を滅却し、文章を平易にして傍訓の必要なき程に至らしめ、強ひて世界的知識を求めんと欲するの意なきも、自然に其目を導びきて世界的報道中に入らしむるやうにせば、求めずして世界的知識は得らるべし、然れども新聞紙が一人の記者によりて作らるゝにあらざる以上、此注文は聊さか難かしき處あるべし、假令絶對的不可能の事にあらざるも、實行に多少の差支へを免かれじ、而かも勉めて人智開發の爲めに此方法を取るは、新聞紙を編輯するものゝ尊き責任の一ならん。

以上の方法は世界的知識を供給する者の方面に於ける方法にして、是よりも第一に必要なるは之を需要する者の意思なり、縱令食道によりて滋養物を注入するも、胃に於て之を受容るの作用なくば、滋養物は空しく逐返さるべし、又若し胃に消化の機能を缺かば、滋養物も徒らに停滯して胃の害を爲すに過ぎざるべし、世界的知識の婦女子の頭腦に於けるも亦之に等し、教育上の方法により新聞紙の記事によりて、絶えず種々なる報道訓示を受くるも、能く之を受容し之を消化するの作用なくば、有益なる知識も徒らに高慢の種となり自尊の源となりて、却つてその德を傷つけ其身を害するに過ぎざるべし、されば學校に於て教授の方法に苦心するよりも新聞紙の編輯に文章排斥の方法を講ずるよりも、婦女子自からその目を放ちて廣く新聞紙の記事を讀み、世界の出來事に接近するこそ、最も早くその世界眼を啓くの捷徑なれ。

濶く世界眼を開きて世界の狀態を見ば、自國の位置は直ちに明らかなるべし、自己の位置も亦隨つて明らかなるべし、自己の位置明らかならばその德の缺けたるか全きか、その行ひの正しきか正しからざるか、その智

力の深きか深からざるか、將たその勇氣の大なるか大ならざるかも、三たび省りみずしてやがて自づから明らかならん。

此に至らば婦人の社會的交際は漸やくその必要を感ぜられ、從來長火鉢若くは針箱を中心として、其周圍十間以内を限りとしたる婦人の世界は、公會堂を中心とし倶樂部を中心として、小さくも一市一府、大なるは亞米利加歐羅巴の天地に亘りてその領土を擴げ、臺所の女王たる椅子を離れて、假令交際界に女王たらざる迄もその社會の花となりて、「三足出れば敵と思へ」と云はれたる世間に多くの味方を得、斯くて引込思案、我家主義、島國根性を撲滅して、眞に滿韓は壁一重の隣の如く、英米は川一筋の對岸にも等しかるべく、千の矢島楫子、萬の河原操子は是に至りて現はれ、世界を一呑にすべき智者と勇者とはその胎より生れ出ん、婦人の眼狹きこと一日なれば一日文明の進歩遲がるべし、眞に國土の文明を希はゞ先づ其婦人の眼を開かざるべからず。

女學生問題の一轉化

戸板關子

其一

浮雲は月を遮り狂風は花を妬むは天の約束といふべきにや、前代未聞の女學の旺盛を讃美するの聲盛んならんとして、却て其間に忌はしき嘲罵冷評囂々たるは我等女子の身として如何にも殘念に堪へざるとなり。某警察署長の意見なりと云ふを聞けば、今日の女學生の腐敗は殆んど言語に絶へたる者の如く、女學生と云へば皆悉

く墮落したる者なるかの如くに言ひ放たれたり、其他新聞にも演說にも同一の筆法を以て女學生の包圍攻撃を試みつゝあり、甚しきは某婦人自ら一雜誌を經營して、女學生の風儀を矯正し、此の墮落より女學生を救拯せんとしたるさへありと。是れ取りも直さず世の風評をして事實ならしむるに等しく、其の志は稱すべきなれども、曾參が母と同じく多少輕信の譏りを免かれざるべし。

我等婦人は此の惡評冷罵を甘んじて受くべきか、卿等の唱ふる所實に然りと首肯すべきか。良しや世間の喧々囂々が虛を吠へたる狂犬の聲であるとしても、之を捨置くは餘りに温順し過ぎたる態度なれば、之に向つて寃を雪ぐの處置を取ると同時に、我等女子自らも人の眼に附き易き異樣の形振を爲さぬ樣氣を附けざるべからず。ハイカラも良い加減あり、庇髮も程のあるもの、物凄じき姿も見ッとも無きもの、斯樣な點にまでも心を置き、假初めにも嫌疑の位地に己を立しめざる樣心すべきことなり。

其二

偖私等の視たる所では、地方は兎に角、東京に在る女學生は、世間で騷ぎ立つる程に、墮落腐敗はせぬものとおもへり、或女學生は情夫と心中せしとか、或る女學生は其の情夫を裁判所に訴へたりとか、其の他種々なる噂も聞くことなれど、斯くのごとき事は今日始まりしものにあらず、世間で注意せざりし以前は、また甚しき事實が數多くあつたかも知れず、其を今日如何にも眼に餘る程の醜態が勃然湧き出でたるかの如くに云ふは恰も釘を打て終に板を打破はすと同樣で、國家のため女學のため決して利益あることにあらず、恰も人心不穩なり、人心洶々たりなどゝ殊更に言ひ觸らして、世間の不景氣を來すと頓と異る所なし。

のみならず世間にては變り色の袴を着け、庇髮に花束の簪と云ふ扮裝の女子さへ見れば皆な女學生なりと思へど、電話交換局、印刷局乃至は停車場の切符賣子、銀行、會社、郵便局の雇れ人も、又女學生にあらざる只の

女子も自から嗜みて袴を穿つものあり。中には世間を騙かる手段として、如何にも女學生と見え、令嬢と思はるゝ風を爲る者もあり。世間の人々は此の束髪、袴搭への女を見れば直ちに女學生なりと云ひ、是等の女子に寸分の非行ありても、其れを直ちに女學生が腐敗せりと針小棒大に言ひ立てゝ忽ち攻撃の矢を射掛くるものなれば、純粹無垢の女學生に取りては實に迷惑の限りなり。屢々世間の眼に觸れたる者は、多くは是等學校以外の似非女學生なりしならんと思へり。

其三

女子の或る學校に籍を置く者は、大概父兄の下に在つて通學するか、又地方より出でし者は多くは親戚の家に寄寓するか、學校附屬の寄宿に入るかにて男女混合の下宿屋より通ふ者は殆んどなし、又如何に迂濶な親達なりとも可愛き手弱き小羊の如き娘を虎狼の棲家の如き處ろに此の惡書生と同じ屋根の下に住はせるなどはあり得べからざる事なり、世の常識ある者には誰にも分り切りたることなり、下宿屋に住ひて浮き名を世間に流す輩は矢場女にあらざれば銘酒屋の女中の如く、男を絲瓜とも思はぬ、いゝ、すれからし女に外ならず。

又一方には絣の着物に兵兒帶、之が學生校外の制服であるから、此の風をしたる青年さへ見れば、直ちに之を學生なりと云へど、之も純乎たる學生に取りては頗る以て迷惑の至りといふべし、身形は一樣でありとも下宿屋を荒し歩く無宿者同樣の青年もあれば、無資、無職の壯士もあり、某學校在籍證を持ちながら、學校に出でたることなき惡書生あらん、其他驛夫の如き者、職工の如き者も、猶且つ同樣の制服を着けて出掛るものなれば一見したばかりでは到底彼是の區別は附かざるなり。良家の子弟が世の無頼漢と同一視さるゝは實に忍びざる處ろなり此間に確然たる區別を立てんと欲せば、男學生も兵士と同じく一定の制服を着用して學校に出でしむること、或は之を實行することの出來ざる私立學校の如きも校の内外を問はず必ず袴を穿かしむること

と徽章ある帽子を冠らしむること〻、今一つは在籍證書を必ず持參せしむることは飽くまでも勵行せざるべからず、恰も無鑑札の車夫が巡査に咎めらるゝと同じく此の服裝を爲さゞる者は生徒と見做ざる如く、學校に出づる時は必ず袴を穿たしむること〻、其校の徽章を必ず佩用することゝすべし或は私立職業學校や技藝學校の生徒にして事情ありて袴を穿くことの得ならぬ者あらんも、學校の内外を問はず、家を出づる時は必ず此徽章を身より離さぬやう、而して教師と父兄とが嚴重に之を守らしむるならば、玉石混淆の憂も無く、男女學生の風儀も今一層美となるに相違なからん。

其四

勿論中には外面を檢束して品行を矯むるなどは面白からずと云ふ人もあらんかなれども聖人君子も行ひ難き高尙なることを强いんよりは寧ろ小人にも行はれ易き此の卑近なる方法を取るこそ却て良法便ならんと思はるなり、要するに其結果如何に在るのみ。路に教育の任に當る者は勿論、家庭に在つて監督の任に在る者も、常に意を玆に注いで其の子女をして生涯の徑路を蹈み過らしめざるやうすべきなり。

されば世の父兄も只徒らに世間の大聲に聞怖して不安の念を懐くにも及ばじ、諸君の子女は決して斯くの如く墮落したる者にあらず、女學生たる者も必ずしも周圍の蚊虻の雷聲に耳を假さず、步武堂々と進んで其の爲す所を爲せば足れり。乍去また決して油斷することなかれ、人間の意志は思の外弱きものなり、道理に於て打勝つべきものが人情に於て負くることあり、追手の敵を走らせて、搦手の敵に敗らるゝことある試し、智慧、分別、學問も人並勝れたる婦人にして時に身を過る者のあるは皆な此の弱點に附入らるゝが爲なりと知るべし。戀愛は神聖なりと云ふ、之れ固より天與の情の發動なれば、戀すてふことは罪とは謂はれざるも戀愛が動ともすれば其人の生涯の汚點となる場合もあることなれば其善惡、正邪、清濁の別るゝ機微の間には、一筋の

髪毛も容るゝ餘地はなきものなり、一滴の墨汁は能く全盤の清水を黒からしむ、生涯の中に一度、不義、不德あれば此人既に善人にあらず、義人にもあらず、古の哲人は世界の人類を誡めて『爾等の敵なる惡魔は吼る獅子の如く經回りて呑むべきものをさがし索む』と、青年女子の世に處する唯克己自制の勇あるのみ。人生の行路は難にして且つ危きものなるを知るべし諺に雨降つて地固まるの譬へ、狂風怒濤にさいなまれたる女學生は是より更に大に修養して他日の發展を期すると同時に世の識者も又女子の本分を盡すに就て更に大に指導する處ろあるべきなり。

禮儀の修復

羅馬敎主敎　リギヨール

女子は人生の花なりとは先哲の言である、女子と美育は殆ど自然の約束によりて相離されぬものであるから天性の美を敎育によりて尙一層美ならしむると云ふのが則ち美育の主眼である、然し玆に美育と云ふも形體美のみと思ふて精神美を忘れては可かぬ。即ち容貌の美も大切には相違ないが、操守の美に至りては尙一層大切である併し人間には天の寵辱によりては時に容貌の美を缺くこともある、が敎育によりて操守の美を添ふることは何時でも出來る、形體の美には精神の美が隨伴して始めて高尙な美となるのである、故に古人の詞にも『美貌と善行とは常に仲が惡い』と云ふことがある、精神美が揃はぬときは自然の勢で此の如くなる此の方面より見て世の美術敎育よりも寧ろ道德敎育の方が女子の眞正なる美育である。

日本では美術學校、技藝學校が出來て頗る女子の形體美、藝術美を發揮發展せしむるに資して居るやうであるが精神美、道德美を發揮發展せしむるを以て主旨とする學校の設なきは洵に遺憾である、此の如くば古人の所謂美貌と善行とが並行せず日に月に背馳し去りて其の結果自他墮落の因となりはせぬかと氣遣はれる。

從來日本の敎育は概して皆美育であつた、勿論美を好む心は何れの國の人にもあることながら、東洋禮讓國の民には尚更に著しく顯はれて居る、活花、茶の湯などは何れも審美心の發して外に顯れたるものである、此の心は日本人の庭園、座敷、家屋、家具等一切のものに顯はれて、眞に美しいものである、其の最も美しく發顯して居るのは禮儀作法で禮讓國の稱是より起り、歐洲諸國にも(立派な家庭を除く外)餘り見受けられぬ所である、特に珍しいのは下女に至るまで其の禮容、儀禮の美しいこと、形容に辭なき程である、是等は勿論外形美の方ではあるが、思ふに中心美も確に揃つて居つたに相違ない、武士道の盛なりしより推測しても略ぼ察せられる、武士道は凡ての陋劣なる心、卑怯なる行を戒め、廉恥の心、高潔なる行を貴んだものであるから、精神美の魂の如きものと見做すべきもので、所謂忠孝の道は凡ての人の心を司配し、長上者に對する尊敬心の深き東西に類例なき程で、內外相對の美育と稱しても溢美の言ではない、所謂躾がよいと云ふのは一種の美育であつたのである。

處が今日に至りては昔時の美育が漸々衰滅し、禮讓心も薄らぎ、尊敬心もなくなり、平等主義の敎育が益す熾になると同時に美育は單に外形の美と藝術の美を發揮せしむるのみに止まり、美の魂が殆ど消えかゝつて來た、是れは主として歐化主義、西洋主義の餘弊とも云ふべきものである、日本人は西洋の心育の方面を採らずに、西洋の形育の方面を餘計に採りはせぬかと思ふ、平等主義、社會主義を入れた日には心育は根本的に滅茶になつて了ふ、即ち尊敬も禮讓も殆ど不必要になつて了ふ、此等の主義を唱導するものは、從來の禮讓儀禮を

指して虛禮々々と呼び、形式々々と呼び、虛禮形式の名の下に一切の禮儀を破却せんとして居る、「君失禮」「失敬」などで濟むやうになつたのは便利かは知らねど、さりとは餘り簡便過ぎはせぬか、此風は漸々女子と女子との間にまでも浸入し、知らず識らず昔の禮儀作法が可笑しくなり、厭になつて了ふところから、禮儀作法の肝要な魂までも消えて行くのは、洵に歎かはしい事である、勿論今日は衣服も變り、居室も變ると云ふのであるから、昔の禮儀を其儘應用する事は出來まいが、只東洋禮儀の魂だけを保存し、それで其の禮讓の魂を失はしめぬ爲には形體美よりも精神美に重きを置く敎育が目下の急務であると思ふ、一體女子が形容の美を重んずることは、殆ど天性であるから、急に之を失ふやうな患はあるまい、毎日鏡を見、帯の中にまで鏡を入れ顏面などに汚點でもあれば、直ぐに鏡に照らして之を拭ひ取らうとして居る有樣を見れば、女子が如何に其の形體美を重んじて居るかを知るに足りる、然しこれと同時に心に汚點があるとき同じく道德の鑑を出して直に之を拭ひ取るか否かは疑問である、此際西洋の新主義によりて精神美はどうでもよいやうに敎へられたならば益々之を遺棄するやうになるは必然である、是れ精神美を重んずる敎育が目下の急務であると云ふ所以である精神美を失つて了つた日には國家は墮落をして仕舞ふのである、今日ですら西洋人は日本を目して婦人國と稱へる、婦人國は美人國、美人國は形體のみの美人國であるやうに思ふならば、日本國の爲に迷惑千萬、曾て佛國の文士ピエール、ロッチーが長崎邊でお菊夫人を弄び之を描寫して「マダム、クリザンテーム」と題する醜書を著はしたことがあるが、ロッチーの文士として醜なるは別問題として、日本婦人の斯くまでいやしめられ、隨て其の耻を世界各國に吹聽する事となつては、日本全體の恥辱である、余は日本國をして「婦人國」と稱せられ「美人國」と稱せらるゝよりは、寧ろ「淑女國」の稱を得せしめんことを望むのである日本の女子が「淑女國」の稱を得せしむるには精神的美育を重じなければならぬ。



蒙古の別天地

喀拉沁王府教習
鳥居喜美子

昨年四月下旬、河原操子女史の後を承け蒙古の喀拉沁王に聘せられ、東亞の別天地として、數千年來秘密の門を鎖し、胡笳一曲征人を愁殺すてふ、朔漠の地に入り、親しく兒童敎育の任に當り妙くも日本の文明を未開の民に宣傳しつゝありたる、人類學者鳥居龍造氏夫妻は、寒中休暇を利用して、昨年中より調査に着手せる、支那苗族の研究を取り纏むる爲と且つは同國永住の準備を爲さん爲めに、一月三十日を以て無事歸朝せられたり、記者は早速同夫人を、本鄕駒込東片町なる其の寓居に訪ひ、趣味多き蒙古談を聞くを得たり、長き旅の疲れにや稍や面窶れしたるが如く見えしも、眉宇の間に溢れたる、千里冒險の氣象は蔽ふべくもあらず、最も快活なる口調にて左の如く物語られり。

△大漠の氣候

一口に蒙古と申しましても、非常に廣ふございます元來蒙古は階段なりの高原で、北に進むほど高くなりますが、私共の居る喀拉沁はホンのその入口であります、氣候は一帶に寒う御座いまして、每年新曆の九月には結氷を見ると云ふ位で、月見の時分には雪が降ります、月見を雪見と同時に兼ねるとは、我國では見られぬ現象であります、氣候が此の通り寒いから、夏などは極く凌ぎ好うございますが、冬などは寒くて堪つたものではありません、夫れ故最も寒氣の强い、舊の十一月下旬から三月下旬までは、寒中休暇を行ふ例になつて居ります、併し其の代り暑中休暇と云ふものはありません、で、防寒の用意といふのは即ち床下にはズット火を通し、窓や壁は、南だけ明けて悉皆張りつめますから、室內に居れば少しの寒さも感じませんが一歩外へ踏み出すと、風が强くて針かなんどで刺されるやうです、此の寒中に每年蒙古の群王は、北京の朝

廷へ朝貢されますから、喀拉沁は極めて寂びしくなります。

△風土の美

夫れから寒が明けて三四月頃になりますと、野が一面に草花で飾られ、五月頃からは蒲公英、菫、野菊、女郎花など花色々の妍を競ひ、日本で見まするやうな目も彩なる光景を呈しますが、其草花には日本にない種類のものが澤山あります楊柳、楡など大抵落葉種の物ばかりで松などはありません、王様の御住居になる王府は、約六丁四方位でせうか、周圍は煉瓦を繞らし王、王妃、王母等二十間乃至四十間を隔てゝ、各自居室を搆へられ、自分等夫婦も王府内に住居を戴いて居ります、一體に蒙古の景色は、所謂朔漠の地で、落寞としてありますが、そこが即ち大陸的の雄大の所であります、夕暮に王府の四阿屋などに昇りて四方を見渡すと、廣い〳〵原野が涯もなく開けて、蒼々茫々と末は長天の雲に入ると云ふ風で、氣も心も誠に暢び暢びしますが、また其廣い野原に、羊が三々伍々夕陽を浴びて、悠暢に遊んで居るのを見ますと、全く世の中の事を忘れて仙人になつたやうな心持ちが致します、また彼方の雲は大概薄紫で、夫れが如何にも莊厳で綺麗で、夫れを凝乎と見て居ると、氣が恍惚とする位です、此の薄紫の雲は日本では容易に見られません、夫れから雨ですが、彼方では滅多に雨が降ると云ふことはありませんから、随つて下駄などを穿く必要がない位ですが、歸朝て見ますると、雨が降つて鬱陶しいばかりでなく、道が泥濘て誠に悄悵します、總じて彼方に居りますると、宛で仙人か太古の民のやうになつてしまつて、急に此方へ歸つて參りますと、餘り賑かで何だか氣が茫然とする位です、丁度着京た時に、新橋から電車に乗りましたが、電車賃は幾何と聞いて笑はれましたが、良人などは電車に乗ると、乗りつけませんですから胸がダク〳〵して仕様がないと申して居りました。

△風俗の異様

夫れから風俗ですが、氣候は前に申す通りですから

冬は誰れも羊毛を被て居ります、で私共夫婦も彼方では、矢張り彼方の服装を致して居りますから、良人などは、宛で喇嘛僧其儘です夫れで男子は辮髪、女子はヲヤンパ頭と稱する髷に笄を挿し、男も女も踵に達くやうな長い衣物を纏ふて居りますが、大體の風俗は滿洲と大した違いはありませんです、儀式は種々の古い習俗が遺つて居りまして、鎧などを被ることが折々あります、又墓は一般に土饅頭の簡單の者で、埋葬の儀式は、只今は喇嘛式を用ゐて居ります。

△水の缺乏

前述の通り、雨が降りませんから水が乏しくて、是れには一番困ります、私共は王府内に住居を致して、給侍を三人づゝ十日交代に附けて下さいますから、其點は少しも不自由は御座いませんが、此の水の尠いのには私共ばかりでなく上下一帶に困つて居ります、井戸と云へば、廣い王府内に一つあるぎりですから、中々水道の水を使ふやうな譯には參りません、夫れで川と云へば、一里も隔てゝ、極く細い谷川がある位ですから、誠に不便で入浴などは容易に出來ません、入浴と云へば、王府では西洋風の浴槽を、北京から取り寄せて使つて居りますが、王族でも月に二三回しか入浴なされません、で私共は王府に居る難有さに、月に二度や三度は、入浴が出來ますが、普通人民は一年中湯に這入るなどゝ云ふことは出來ません位です。

△不斷の食物

次ぎに不便を感ずるのは、郵便物で、是れは毎月二度、王府より態々夫れを北京へ取りに遣りますが、私共は其間に別の使を頼みます、夫れから一般の常食ですが、米は少しも取れませんから、粟が一般の常食となつて居ります、たゞ王族のみが、北京から米を取り寄せて食して居ります、併し副食物には羊肉豚肉野菜抔が澤山ありますから、少しも不自由を感じません。

△醫療の事

夫れから醫療ですが醫療については面白い話しが御座います、元來蒙古には醫師と云ふものがありませんが、幸ひ昨年私共の參る時、丁度某雜誌で河原操子さ

んへ寄贈する義捐金を募りました、所が河原さんが彼方へ參らぬことになりましたから、其金を私共に下されたので、夫れで悉皆藥品を買ひまして澤山藥品を持つて參りまして、藥局法に依つて、好い加減に調合して與へました所が、生れてから藥餌と云ふものを口にしたことがないものですから、直きに全癒するので、夫れが大評判となりて、投藥を乞ふ者が非常に多くなり中には百里も先きから貰ひに來まして、忽ち藥が失なつてしまひました、今度參る時は、是非澤山藥品を持參致したいと思ひます。



△生活狀態

一般の生活狀態は、王府は別として、普通人民は、天幕生活であります、喀拉沁は北京から十日路で、馬もあれば馬車もあるから、交通には更に不便を感じません、ですから日用品は、大抵北京から送り込まれるから、誠に便利です、其中日本の製品は、たゞ燐寸だけです、夫れから食物の煮方ですが、之れは粟なり豚肉なり一所に鍋に入て、雜炊のやうに煮たらして了ひます、副食物は前に申した羊豚肉や野菜の外に、牛乳を固めた乳豆腐と云ふものがあります、之れは寒晒しにしたもので、我國の高野豆腐と同じやうな製り方です、以上は喀拉沁の生活の

一般ですが、實際面白い生活狀態を見るには、更に深く內地に這入らなければ駄目です、私等の居る喀拉沁地方は、支那語ばかり少し通じますが、日常の用を辨ずるには不足です。

△子供の敎育

元來私共夫婦は、兒童敎育の爲め、蒙古王に聘せられて、彼地へ參つたのですが、今一つの目的は、良人が多年硏究して居ります、人類學の硏究に資する爲めですから是非蒙古語を學ぶ必要があるのです、何故と云ふに蒙古語を知らなければ、十分彼地の事情を知ることは六つかしいからです、夫れで私共も蒙古へ着きますと同時に、一生懸命に蒙古語の硏究をやりました、で今では最う十分用を辨ずる程になりまして、兒童の敎育にも此の蒙古語と日本語を敎へるやうにして居りますから、敎授の上に大變便利です、夫れで蒙古語は日本と文法が同じですから大變都合がようございます、夫れでなくては敎授の上に手間がかゝります、偖て敎育の現狀は、元來喀拉沁王は、頗る文明的の頭腦を持つて居られ、敎育には非常に熱心で御座います、夫れで王の敎育方針は「蒙古の國民的特性を發展するやうに」と云ふ主義です、只今私共夫婦が敎鞭を取りて居りまする學校は、丁度我國の小學校程度で、蒙古語で敎授を致し、傍ら日本語を敎へて居りますが、生徒は男女合せて二百名程あります、其中卒業生が五名ありまして、是等の卒業生は、助敎をして呉れるので誠に好都合です、敎室は男女別々で、良人は男生を受持ち、私は女生を預つて居りまして、私の方は毓正女學堂と申し、王妃福晋殿下が、總裁となつて居られ、毎日出校せられて、種々の御世話を爲さいます、生徒は總て七十四名で、在學中は夏冬の被物及び晝飯を給養されますが、其晝飯は粟の粥で、小使が桶に入れて舁いで參りますと、生徒は銘々夫れを酌んで喰べるのです、其他

△學校の用品

は總て王府から下されます、科目は、體操、唱歌、算術、日本語等ですが、彼方の者は一般に、音樂とか

圖畫とか、毛筆畫とか、唱歌とか云ふ優美のものが上手です、唱歌などは日本の小學校で敎える者を其儘敎えてもなか〳〵上手に歌ひます、併し王樣の意見で、日本の唱歌を日本語の儘に敎えるは不適當であると云ふので、『ひいらいた〳〵』とか『舌切り雀』とか其他軍歌などを、蒙古語に譯して敎えて居りますが、彼方の人々は、概して質朴の愛すべき美質を持つて居ります、夫れから又昨年の秋から新らしく

△幼稚園

のやうなものを始めた所が、入學者がなか〳〵澤山で、目下は三十名も生徒があります、又た十六歲以上の者を募りました所、三百

桃ノ里



里位の遠方から續々入學を申し込んで來まして、中には良人を持ち一家の主婦となつて居る者などが駱駝に乘つて參りました、

△王妃の性格

王妃は元と、肅親王の妹で蒙古語など少しも御存じなさらないに拘らず、今では自由に日本語を操つられ、常に來朝の意を漏らされて居ります、王妃は非常に聰明の御方で、內外一切の仕事を切り盛りなさつて居ります、又た今年卒業した生徒の中に蘭貞と申しあぐる王樣の妹があります、此の王妹は殊に音樂と編み物を好ませられ、此の頃喀拉沁の北のパーリンと云ふ所へ、御輿入れになりましたが此パーリンと申す所は、水や薪の

乏しい所で、常に馬糞を新にすると云ふ所ですから、見送りに行かれた妹君などは、御茶が飲みたいと云つて、泣かれたと云ふことです。

△王の家庭

王は御年卅八歳で王妃は卅九歳、御二方にも大の日本贔負で、御身の調度なども大抵日本式で、殊に先年大阪博覧會の時に日本へ御出でになりましたから、中々よく日本の事情に精通されて御居でゝす、王は天性非常に聰明で、殊に讀書と繪畫に深い趣味を以て御居でになり、日本語にもお通じになり、好んで日本の新聞雑誌をお讀みになりますが、別けて日本の繪畫の雑誌を好まれ、繪は日本に限ると申され、學堂で敎授する繪畫も、洋畫を廢めて、全く日本の毛筆畫になさいました、又た王は自轉車が御好きで、自轉車に御召しになつて、郊外を輪行される事もあります、お狩の催しは派出な方で、美々しき御行列を造らせられて、御獵地へ臨幸遊ばされ、御自身に銃を執つて、澤山の獲物を得させられるといふ活潑さ、朝は八時に御起床になり夜は何時も遲い方で、私が參邸して御話しの興に入らせられて、時として深更に及ぶこともあります、私は王に日本語をお敎え申し王より蒙古語を學んで居るのですが、兼て王と共に漣山人の日本昔噺しの、猿蟹合戰、桃太郎、かち〳〵山、文福茶釜を蒙古語に譯したことがありましたが、お悟りの早い王のことゝて、直ぐ其譯柄が御分りになり「面白い話しじや」と仰せられました。

△圖書館とお妾

王はまた、學校へ入學の出來ぬ一般人民の智識を開發する爲め、王宮内に圖書館を設立され、目下世界の圖書を御蒐め中で御座います、王は此の通り開化主義の御方ですが、王妃も亦た非常に開化主義で、喀拉沁國は一夫多妻の國ですから、王樣には四五人の、嬖妾が御座いますが、是等の嬖妾との中も最と美はしく、王妃にはお子供衆は御座いませんけれど、嬖出の王女おは、御自分の子同樣に可愛がつておられます、昨年王女が幼稚園へ入學される際も、御自分がついて御出

でになりて、色々御世話をなすつて下さいました、又先王の王妃を母君として尊重して御居でゝす、幽閉主義の支那で人となられた方としては、王妃は珍らしい程開けて御居でになります。

△王妃の嗜好

王妃の御嗜好は先づ音樂で、殊にピヤノが御得意です私は放課後常に音樂をお敎え申すが、お分りが早くて大抵の日本唱歌は御存知です、分て活潑の日本の軍歌をお好きですが、普通の唱歌では『君が代』『箱根の山』『金剛石』が別して御好みになつて居ります、何でも日本のものがお好きで被在ますから、王府内で御馳走の時には、乾度一品なり二品なり、日本料理が出ます、其内茶碗むしとお刺身が一番御好きで、御馳走のすんだ後は、乾度定つた様に、妾に唱歌を歌へと被仰るのが例で日本唱歌を一緒にお謠ひなさるのです。

△山遊びは馬

また王妃は馬に召すのが好きで、馬術にはなか〳〵長けて御出でになり、折々近所の山へ、馬に召して山遊びに行かれます私も近頃やうやく馬に乘り馴れまして、山遊びの時には、乘馬で御伴を致しますが、其時は何時も馬上二人で途次、唱歌を合唱しながら勇ましく參るのです、山へ參りますと、色々の草花が咲き亂れて、一面綺麗な絨氈を布きつめたやうですが、其處で面白く一日の清興を縱まにして、歸りには矢張り唱歌を合唱しながら戻るのです、學校では週に二度唱歌がありまして、其折には何時も王妃が臨幸になり、妾の横に御着座遊ばされ、一々生徒の間違ひを正されます、また幼稚園へも時々御いでになり、色々と生徒の世話をなされます、また王妃は演說がお好きで夫れが非常に御上手で、時々生徒を集めて、滔々と奬勵演說を爲さいます、以上の外王妃のお好きになるは體操で、今では啞鈴、球竿一通りの體操をお覺えになり、食事後などには、一、二の懸聲勇ましく、御復習を爲さいます。

△僻地の感想

蒙古のやうな人煙の稀れな、名を聞いてさへ、僻陬

する位の處ですから、人は寂びしくはないかと云つて慰めてくれますが、私は薩張り寂しいとも、悲しいとも思ひません、夫れは良人と一所ですからでせうが、夫れ以外の慰籍があるからです、何が慰籍かと申せば畢竟人類學を研究すると云ふ、良人の多年の志望の一端を助けることが出來るだらうと云ふ希望を前途にかけて居るからでもありませうが、格別寂しいとか悲しいとか云ふ考へは起りません、殊に私は基督の教を信じて居りまして、神の祝福が常に自分の頭の上に在ると思つて居りますから、自分の盡すべき任務を全うしてさへ居れば、末は必ず何うにかなるだらうと、心は常に希望の光明に照らされて、衷心云ふに云はれぬ滿足幸福を感じて、愉快で堪りません、尤も國に二人の子供を殘して置いて行きましたから、子供のことを思はぬではありませんけれど、夫れとて決して自分の志しを鈍らすなどと云ふやうなことはありませんでした併し子供を連れて行つて居りましても、格別業務に差支へはありませんから、昨年實は子供を呼び寄せやうかとも思ひましたが、北京に居りまして能く私共の世話をして與れる服部博士などは、子供は一所に居らぬ方が、研學の爲めには都合がよからうと忠告して下さいましたので、一時見合せて居ましたが、

△永住の準備

も出來ましたしするから、只今腹の中に居る子供(夫人は目下妊娠中にて今月は臨月なり)と一所に、今度行く時に連れて行かうと思つて居ります、で今度の出發は四月上旬ですが、少くも三年は居たいと思つて居ります、是非其位居らなければ、十分の研究は出來ませんから、妙なものでして、其土地の言葉などを覺えますと、却つて其土地が懷かしくなるもので御座います、私は文學などは知りませんが、彼地の景色は落寞ではありますけれど、一種神々しい所がありまして斯う仙人にでもなつたやうな心持ちが致します、今までは彼方に居りましても、餘り外へは出ませんでしたが、此次參りましたならば、內地へ深く這入り込んで種々研究して見たいと思つて居ります。(泥洲生筆記)



米國婦人の交際振

跡見玉枝女史

洋行中の御話しで御座いますか、之は歸つた當座皆樣に申上げて了ひまして一向御珍らしうも御座いません。私は元から參つて見度と存じて居ましたけれど、老母が存命の間は親戚で許しませんでした。最早老母も見送り、托せられた兄の遺孤も一人前に成ましたので、一昨年漸く素志を達して參りました米國の市中は無趣味な景色ですが、田舍の風景は實に壯大で、日本は箱庭と云はれても仕方が無いと存じます。ロッキー山なぞ山脈ばかりが二千哩もあつて汽車で四日路かゝりますが、其間の奇巖絶壁と申したら何に喩へやうなく、誠に仙人の門とでも申すべき處が多いのです。それに連れて亭々として雲を磨する喬木が晝尚暗き林を作り、鳥も通はぬ幽境が多い。低い山にはクロチとか申す鳥がよく遊ぶのを見ました。此旅路の寫生には大分嶮阻な處を歩いて廻りましたが、後で聞けば滅多に婦人が踏み込まぬ危い場所であつたとの事で、よく怪我もせなんだと可笑しう御座いました。歸りましてから百枚清書して、皇后陛下に獻納致した處、畏れ多くも叡感を賜はり、數々の賜物を頂戴して身に餘る光榮で御座いました。その節宮內大臣は西洋の風景を純粹の日本畫風で寫生したのが面白いと言はれました。

▲展覽會

華盛頓では學者方が私のために展覽會を斡旋されたのですが、元來彼地の展覽會は製作品の優劣に依つて會場を美術館と倶樂部とに區別するのだ相で、先づ私の作品が見たいとの事でした。丁度百枚斗り携帶して參つた畫を見て貰ひました處、幸ひに學者連の氣に入り美術館で開く事にされたのです。夫れから愈々開會、新聞に報告や批評が出て可なり評判となり、日々千人餘の貴婦人が參觀され、一々私に握手を求められましたので、馴れぬ私は上せて了つた位、誠に分外の面目を施したので御座います。是と申すも全く戰勝の餘澤で强鄰を制した日本の婦人が遙々渡來したと云ふ觀念から、優遇して呉れたので御座います。

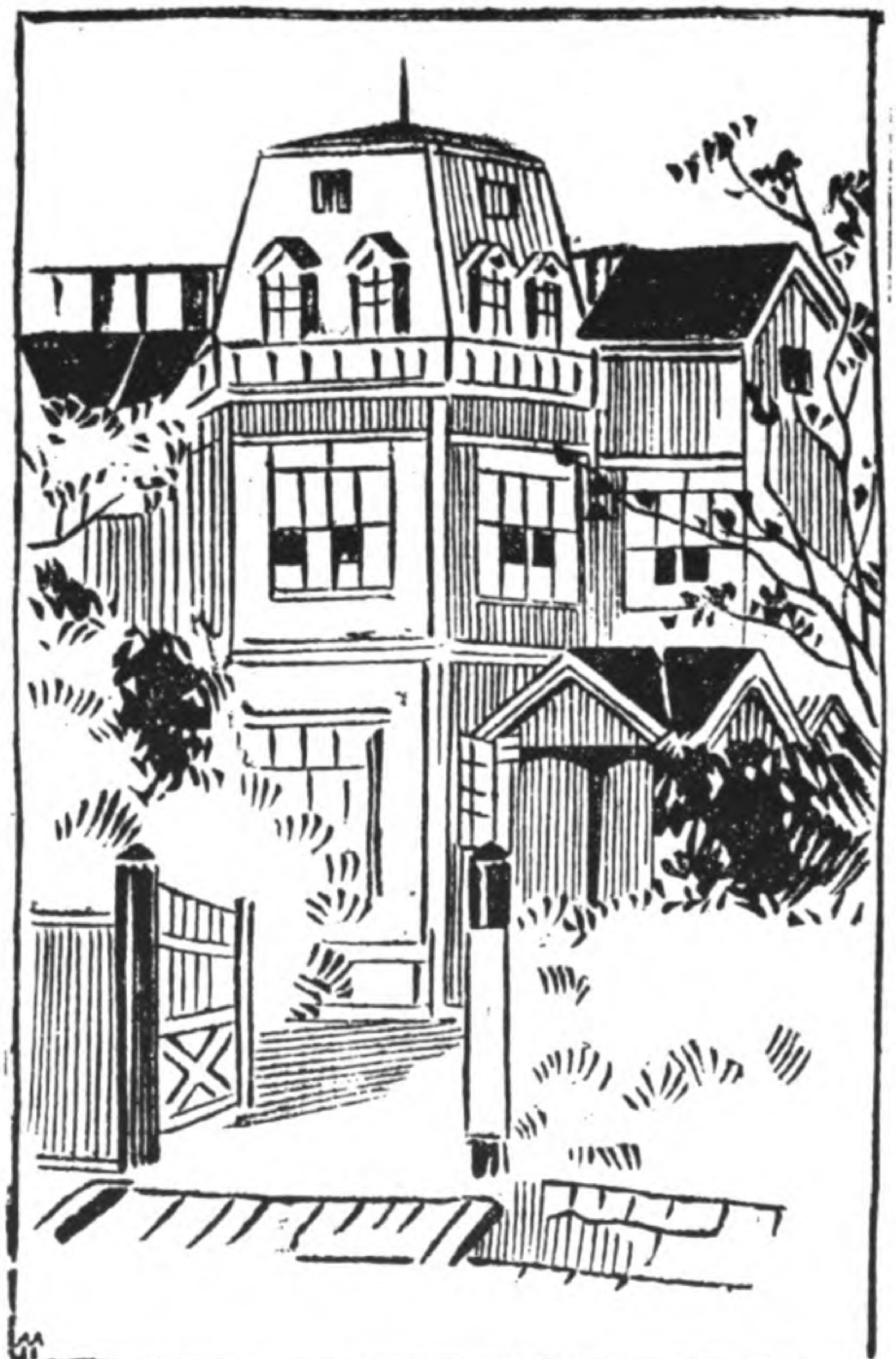
▲質問雨の如く下る

展覽會へ來られた貴婦人達は交る〳〵私を自宅へ招待され、何か日本の話しを爲て呉れと望まれましたが是には閉口で、其質問が又思ひよらぬ事が多く、返答にドギマギする場合もありました。先づ誰でも第一に尋ねましたのは、今度の偉功を奏した貴國の御婦人は如何に立派な性行を有せらるゝかと云ふ事でした。私は「我國の婦人は別に是ぞと云ふ華々しい事もなけれど、我子や我夫の出陣に臨んでは、萬斛の涙を呑み込んで、女々しい素振を見せず、何卒御國のために潔く戰死を遂げて下さい、私共に心を殘さず力の限り奮闘して大君の御恩に報いて下され、若し卑怯の振舞して笑を後世に殘せば、私共は生て居りませんと勵すので御座います。將校より下士卒に至るまでの母や妻は悉く此覺悟を以て出陣を送るのであります」と答へました處、貴婦人達は非常に感歎して「私の國の婦人は何卒戰ひ勝て無事に歸つて呉れ、夢々怪我のないやうに氣を付けて呉れ」と縋り着いて送ると云ふ風でありますのに、驚くべき貴國婦人の健氣さ、かゝる烈婦が在りてこそ此度の大勝を得られたのでせう」と賞賛の言葉が降るやうで御座いました。

▲負傷の探究

彼國婦人が研究心の强いのには驚きました。私が各都會の旅館へ着きますと、直ぐに婦人のドクトルが多

勢訪問に參り、勇敢なる貴國兵士の負傷は多く那邊でありますか。醫學上研究のため委細承りたいと質問しましたが、此質問は尤も多くの婦人から受けたので御座います。私は「我國の兵士は敵に背嚢を見せるなと云ふのが平生の觀念で御座いますから、後疵を受けたものは一人もありません」と答へました處、是れにも衷心から敬服されました。餘り誇大な答へばかり申して自分ながら可笑しいのでしたが、同胞方の偉勳の御蔭で、どんなに片身が廣う御座いましたか知れません。



女子學院（下二番町）

▲茶の湯の滑稽

或る貴婦人が御茶を上げたいから日本服で御出で下さいと招待しました。參りますと夫人が褂姿で玄關へ出迎へられ、奥へ通ると知己の令孃方が島田髷に振袖で多勢來會されて在りましたが、未だ日本へ來遊されない方々で唯風俗畫を參考として着付をされたのですから、襟を突つき合せにして針で止め前がはだかつて居りました。私の姿を見て初めて心付いて急に襟を掻き合せて着直し、私が手傳つて上ると云ふ騷ぎで厶いました。それから座蒲團の上へ靴を履いたまゝ座り込むので、靴を御拔ぎにな

らなければ可ませんと注意した處、靴を拔ぐと風を引くと困つて居られました。兎も角も茶の湯の式で御茶を立てられたのには感服でしたが、イザ飲み廻しと成ると、苦くて如何しても飲めないと令孃方が皆顔をしかめ、日本の御方は斯樣な苦い物を能く御飲なさいますと不思議がつて居ました。妙齡の方々が虚飾もなく斯樣な滑稽を演じ、客を喜ばせる處など却々快活なものでムいます。

▲行屆いた親切

米國の婦人が交際に行屆いて居るのは今に始めぬ事ですが、何れへ招待されても、入口や食堂に日本の國旗を交叉し、其他日本流の裝飾を施してあるなど嬉しく感じました。而して身體の事に就ても細かく注意をされ、私が買物などに日本服で帽子を被らず出掛ますと、日本の氣候と違ひ、斯樣寒い土地で帽子を被らないと腦貧血を起して卒倒して了ひますと心配して呉れるのです。それで日本服で帽子を被りポンチ繪のやうな姿をして出掛る事も御座いました。

▲食時の道路

朝夕や正午頃、市街を歩きますと、婦人がドロ〳〵と歩いて居り、突當る位で御座います。之は婦人が多い故でもあるが皆職務に出勤するからであります。而して此種の婦人は皆吾が家で食事する者なく、割烹店へ出掛る爲に御飯時は非常に往來が賑ふのだ相です。

▲博士婦人の働き振り

ウエスターに滯在中は大學教授のポーター氏と植物博士のハージ氏との兩家へ一週程づゝ寄留して居りましたので、家庭の一斑が略分りました。何れも夫人は克く働かれ特にハージ氏の夫人は子供も多し、家も廣し、交際も却々手廣いのに拘らず、下婢は唯一人で繰り廻し、自身は毎朝五時に起て下婢を起し、食事の仕度を致し、主人出勤後は下婢の先立になつて掃除に掛りますが、毎朝絨氈を取り除けて板の間を拭き淸め、廣い部屋々々を隅から隅まで叮嚀の掃除に車輪のやうに働らき、九時までに全然片付ける事は判を押したやうに定まつて居ります。九時がチンと鳴ると直ぐに裁

縫に掛り、夕飯後は讀書と整然と定めて御座います。勿論來客には定日の外接見致しませんから、用事が果取る次第ですが、何に致せ一事を働くのに全力を注ぐのには感服致します。洗濯日など山の如く溜つて居る汚れ物を下婢と共にセッ〳〵と洗ふ有樣は、身分に合してよく働くものと熟々感心したので御座います。

▲日本の貴婦人に外遊を望む

私は日本の貴婦人方に何卒一度は海外へ漫遊して頂きたいと切望致します。それは彼の婦人に接して趣味を養はれたい事と今一つは日本婦人の品位を彼に見せたいことでムいます。私は在留中彼地下流の婦人から屢々忌しい質問を受けました。『貴國の婦人は家庭に在つて良人の留守に何事も爲ず、終日火鉢の前へ座り込んで居て、美しい男子でも來ると直に赤い裾を見せる相ですね』と。私は非常に腹が立て返事も出來ませんでしたが、日本人居留地の或る種類の婦人を見ますと實に御耻しい風俗で、波止場などへ厚面しくも出掛て來る此等婦人は成程赤い湯巻をちらつかせて彼等の嘲笑を受けるのも尤もであると口惜しく悲しく感じました。又勞働に従事する日本の青年など毛唐人などと罵る者が往々ありま



東京裁縫女學校

すので、若し日本語が分ると悪いでせうと注意致しましても『ナアに先方で冷酷に仕向けて居るんだから、聞えたつて構ふものか』と云ふ勢で御座います。私は最早斯様な土地で忌な事を見たり、聞たりするのが辛いので成る可く縁の離れた土地を廻つて居つたのです。日本へ一度漫遊した上流の人達は日本の上流婦人に接して居りますから、大に其美點を解して居ますし、又丸で下等の居留婦人を見た事のない人達は皆私を歡迎して呉れたのです。併し是等の人達も追々忌な噂を耳に入れませうし、又實見もしやうかと考へますと、誠に心配で堪りません。ですから何卒日本の貴婦人方が澤山御出掛になつて、高尚優美な模範を示されて彼の國人に深き印象を與へて頂きたいものと考へます。

世界奇聞

▲一萬圓の帽子　米國に駐在せし前清國公使の帽子は一萬圓にして其の前部にはダイヤモンドを挿入し又シエラード氏の帽子は其の製造に二個年を要したるものなるが、其の價格は同じく一萬圓なりしといふ。

▲四萬圓の柩　近頃英吉利にてヒリアーといへる夫人は其の夫の葬式に際し、其柩に約四萬圓を費せりと云ふ、其の柩はマホガニーといへる高價の材木にて作りたるものにて、之に種々の彫刻を爲し處々には金製の装飾を加へ、又一インチ四シリングの高價の絹布にて縦横に装飾を加へたるものなりと。

▲一回百圓の食事　佛蘭西の一富豪は一週二回巴里の最も有名なる料理店に行きて食事する爲め其の有り餘まれる金を使用せりと云ふ、しかも此富豪家は食慾甚だ弱ければ、其の金の使ひ方も餘程贅澤なるものにて、即ちスープでも肉類でも大きな皿に山盛りにして出させ之に一箸つけては其のまゝ退け、食事の間隔を滿すには極上等の葡萄酒又は三鞭酒を用ふ一回の食事に消費する代價は約六十圓、給仕頭への心附は毎回二十圓、其の他の給仕へは十圓、會計係へは五圓、門番へは二圓半にして合計百圓の費用を毎回消費せるなりと。



新式の幼稚園

女子大學豐明幼稚園主任　甲賀ふじ子

女史は米國より歸朝後、女子大學構内に新たに設立された幼稚園の主任保姆として、兒童敎育に身を委ねて居られるが、居は特に世塵を避けて、雜司ヶ谷停車場附近の一農家に寄寓し、田園生活を樂んで居られる。記者は、女史を其農家に訪問したのであつた。「突然に伺ひまして」と云ふと、「ようこそお訪れ下さいました。併し此處は何方にもお知らせ申しませんです。まだ家が極まりませんので、假りに此農家の坐敷を借りて居ります樣な始末で、御用の御方には、學校の方でお目に掛かることにして居るのですが」云々。

左は即ち其談話です。（一記者）

御承知でもありませうが、幼稚園の兒童敎育も、只今では新式の敎育法が出來まして、米國邊では、之れが中々盛んです。新式と云ひ、舊式と云ひ、雙方の相異なる點を、極簡單に申すと、新式の方は、フレベル氏の書いた、幼稚園の組立、敎育法を、其文字に拘泥せずして、専ら精神を採つたもので、即ちスピリットと云ひます。舊式の方は、それに反して、専らフレベル氏の書いた通りに行つて居るので、之れをレトラレと申します。

▲兒童敎育の方法

元來幼稚園と云ふ處は、未だ學齡に達しない兒童を集めて、其好む所の遊戲をさせ、面白く遊ばせる間に、

教訓を與へる場所ですから、其組織は小學校の樣なの處もあれば、家庭の樣でもあり、と云ふ工合、處が舊式の幼稚園では、兎角敎へると云ふ方に傾いて居て、何らかと云へば學校と云ふ側に近い。乃で兒童をして愉快に遊ばせながら、其間知らず〳〵の中に、物を敎へて行くので、兒童は物を敎はつて、設へば色なり數なりを遊戲の中に自然と覺えると云ふ工合にしてあるのです。だが夫れを別に敎はつたとは思はないで居るのですから、自家へ歸つて、お父樣なりお母樣なりに、今日は何を敎はつて來たか、と尋ねられても、是々だと云ふお返辭は一寸出來難いです。

また、新式の方では、遊戲をさせるにも、其兒童の境遇相應な事を選んでさせることになつて居ります。設へば海邊の兒童ならば、舟とか、魚を漁るとか云ふ樣な遊戲をさせ、山間の村落に育つた兒童には、鳥を捕るとか、山に登るとか、總て場所柄相應の事をさせるのです。若し然うでなく、山村に生れた兒童に海邊の事を敎へた處で、少しも興味を感じない。

それから粘土細工の手工品を作らせるにしても、其間に家庭の事をも敎へると云ふ樣に、お父樣のお机の上には何があるか、それを作つて御覧なさい、と云へば、筆筒とか硯とか墨とか云ふ樣なものを拵へる。またお臺所には何があるか、それを作つて御覧なさい、と云へば、お茶碗とか鉢とか種々の器を拵へる、其中には自然と父母の職業も細工物の上に現はれて、兒童のする事を見て居ると、中々面白いものですが、兒童の方でも細工物に興味を有つて、愉快を感じつゝ、知らず〳〵の間に家庭の事を覺える。私は生徒の粘土細工に一つ非常に面白いのがありましたから、特にそれを仕舞つて置きました。何う云ふ細工かと云ふに、それが木の葉の樣にも見えるが、何だか能く分りません。乃で聞いて見ると、お池にお玉杓子が居る處だ、と云ふのです。成程然う聞いて見ると、お玉杓子に見えるのでありまして、其お玉杓子も、之れがお父樣で、之れがお母樣で、此方のが誰で、と夫々拵へて、之れに自づと家庭が寫してあるのでした。何と面白いではあ

りませんか。
また、色紙を紙に貼付けて、種々の形を作らせるにしても、新式の方では、樹木の在る處ならば、其落葉を拾つて來て、それを貼付けさせると云ふ樣な方法にしてあります。而して、新式の方では、保姆が木積や手工の教案を立てゝ夫れを兒童にさせて居る中にも、兒童が何か思出して、設へば自家の庭の木に鳥が巣を作つて、雛を育てゝ居ると云ふ樣な事を言出し、皆なが其話に興味を感じたと見れば、今までの教案を棄てて、更に鳥の話に移る。と



青山女子手藝學校

マツ斯う云つた樣にして、兎に角兒童に愉快を與へ、其間に物を教へて行きます。
只今私の預かつて居る女子大學の幼稚園は、生徒も僅か十五名程しかありませず、總ての設備とても甚だ不完全ですが、私の考へて居ります處は、先づ校舍の建築から改造して行かねば、何うも面白くありません。幼稚園と云ふ處は、時間其他規則立つた點は、學校の樣でもあり、また保姆の監督を受けて、愉快に遊戲をする點は、お母樣の側に居る樣な心持もして、家庭の樣でもあり、と云ふ工合にしなければならないのです

が、今までの幼稚園は、何處のを見ても、一體に校舍からして學校風に出來て居ります、で之れを先づ改良して、今少し普通の家に近い建築とし、其他の事も今少し家庭的にして、在來の遊戯も別に害のないものは、之れを採り、子守歌其他の童謠の中にも、文句の卑猥なとか、殺伐なとか云ふ樣なのを除いて、別に害の無い歌は、之れを唄はせると云ふ事にし、またズヰ〳〵ズッコロバシなど云ふ樣な、昔から兒童のする事なども、幼稚園の生徒にさせて可からうと思ひます。

▲優美なる子守歌

子守歌のお話から思出しましたは、先年私が東京の人に聞習つた一つの子守歌の事です、夫れが誠に優美な文句で、而して幼兒に對する愛情が溢れるばかりです。それで私は、米國在留中、試みに其文句を英譯して、之れを歌つて彼國の婦人達へ聽かせました處、日本のお母樣達は誠に感心だ、何と云ふマア優しい愛情の籠つた子守歌であらう、と云つて大層褒めて呉れました。其文句は斯う云ふのです。

ねんねこよ、〳〵。坊やは好い兒だ、ねんねこよ。坊やの可愛さ限りなし、山で木の數、茅の數。七里ヶ濱の砂の數。天に譬へて星の數。坊やは好い兒だねんねこよ。

何と優しい好い文句ではありませんか。然るに今度東京へまゐりまして、聞いて見ますと、今までの處、此子守歌を知らないと云ふ方ばかりです。或ひは新らしい歌かも知れませんが、文句の中に七里ヶ濱と云ふことがあるので見ると、兎に角關東の子守歌には違ひあるまいと思はれます。

▲婚姻乘車切符

題名の如き乘車切符今回、米國太平洋鐵道會社より發行せられたり、右の切符は東北殖民地の婦人にして、結婚を求むる爲めに旅行を爲す者に、無賃乘車を許す者にして、其目的は殖民地の結婚を奬勵するに在り、而して其の婦人が旅行して首尾能く、配偶を得れば、歸途には新婚の該乘車切符には、麗々しく新郎の名を記入する規則なりと云ふ。

卒業試験

楓蔭

新玉の年を迎へてかるた遊びに夜を深しゝは、ついきのふとこそ思ひ侍るに、いつしか梅も散りはてゝ、今ははや三月の半ばとなり、試驗の期は日一日と近づきぬ。あゝいかにして此の難關を通過せんか。

勉强は平素にあり盜賊を捕へて繩綯ふことのおろかさはよく知れるものから、とかく其の日、其の日の復習は怠りがちに過し、今となりては、其の天罰の一時に集ひ來てあれもこれも忘れたるふしのみ多く、何一つ安心して試驗受くべき學科とてなし。今更に幾たび悔むも詮なし。いで及ばぬまでも全身の精力を注ぎて復習を試みん。鳥のそらねならねど、夜をこめて勵みなば、なでゝ此の關門の通過せられざるべきと、勇氣ひき起して、机に向ふに、心ばかりはあせれど、進步は捗々しからず。足の痿るゝをこらへ、眼も眩まんばかりなるをも我慢して、勉强すること幾時。ほつと一息つきて暫時は茫然たる折柄、表に聞ふる郵便の一聲、何れよりかと胸とゞろかしながら急ぎ出でゆきて、手に取り



上げ見れば、懐かしき母上よりの御消息、もはや試驗に近づきぬれば、さぞ心勞にやあらん。神かけて及第を祈るとの御言葉、嬉しとも辱し。かくまでに母上が思はせたまふに、若しや不幸にして落第せば、いかにせんかと思へば、胸は裂けんばかりに苦し。

髮も梳らず湯あみもせず、食に味なく夜の目も合せず、苦しき幾日を過して、一わたり學科の復習を了へたれど、もとこれ紙張の俄普請、難問の矢丸には堪へ得べくもあらず。されど今は絶對絶命、明日より試驗の序幕は開かれんとす。出るは佛かはた鬼か。まゝよ運を天に任さんと、此の場に臨んで運呼ばはりもあつかまし。

けふは特に我が不得意なる數學の試驗なれば心配は一しほなり。控所に在る間も心付かねば、教科書取り出して、こゝかしこ拾ひ讀みする間に、時計は刻々に進み、やがて始業の號鐘聞ゆ、胸は早鐘つくが如し。足もそらに教室に入り、すばやく見渡す黒板上の問題、いづれも思ひしよりは、いと易かり。これに心も落ち居て、胸の動悸も靜まり、鉛筆の運びもいと滑かに、一題一題考へもてゆくに、見事に答の出づる嬉しさ喩へんかたなく、壽命の幾年も延びたらん心地す。こは試驗受けし人ならでは得知らぬ愉快なり。第一日の成功に元氣づきて、次日の準備はさまで苦しとも思はず。二日目も三日目も滿點とまではゆかねども、先づ八分の出來ばえ、その後は破竹の勢もて此の難關を過ぎけるが、意外にもわれは終に第二位の好成績を占めぬ。

昔し唐の詩人なにがしは、科擧に及第して、春風得意馬蹄疾、一日看盡長安花と歌ひしとかや。われらが試驗に及第したる喜は、それにも增して、げに手の舞ひ足の踏むをも知らず、成績聞きて學校を出づる時の嬉しさは、隱さんとすれど、ほに現はれて、途行く人も、ながむめり。とりあへず此の吉報を故鄕なる父上母上に告げまゐらせんと、消息か筆の運びもいと輕く、書き終るまでに、幾たびか獨りほゝゑまる。嗚呼試驗前の苦しみにひきかへて、試驗後の樂しみは何に喩へんものもなし。前に苦あれば後に樂ありとは、

げによく言ひけるものかな。

卒業式の答辭

かしこかれども校長の君、師の君、さてはけふの式に一層の光榮あらしめんとて參列したまへる紳士淑女に一言答へ奉らんとす。足らはぬ妾等が、けふこゝに卒業の光榮を荷ひし喜びは言ふまでもなく指折り數へて待ち詫びし父母の嬉しさはいかならんと思ふにつけて、五とせの間、ねもごろに敎へ導きたまひし師の君の御恩は、いかでか忘れ侍るべき。願ふに今の世の女子に敎育の必要なることは言はでもの事なるを世には倘は敎育受けたる女子は却て素行修まらず淑德缺くる所ありて、わづかなる才學を鼻にかけ、人を人とも思はずなど、非難するもの多きは、これ決して敎育の罪にはあらず、はた學校の罪にもあらず、全く敎育受けたる女子の心ばえのよからぬ故ならんかし。申すもをこなれど妾等は五とせの間の御敎訓をかたく肝に銘じぬれば、たとひ今こゝに御手を離れて、社會に出づればとて、ゆめかゝる忌はしき非難を受けて多年の御恩をあだにし學校の御名を汚すなどの事なく、ひたすらに女たるべき道を守りて、世の人に敎育のかくまでも女子に必要なることを知らしめんとす。これ聊か多年御敎養の御高恩に報い奉る道にこそと思ひ定めけるよしをかいつまみてかくなむ。あなかしこや。

奇聞

△男子精神上の比較――此の頃北米のコロンビア大學に於て、智識的能力について、男女の學生を試驗したるに、女學生は目よりする記憶力、識別力、及び聽神經の鋭敏なる點に於て、男學生に勝り、男學生は耳よりする記憶力、精神的活力、及び聯想に富む點に於て女學生に優り、論理よりする記憶力及び疲勞に堪ふる力に於ては、男女共全く同一なりしと。

△印度小兒の早熟――世界中にて小兒の最も早熟なるは印度にて、六七歳にて勞働者となり、八歳にて彫刻師美術家となり、十三歳にて美しい毛氈を織り出す腕前を有し、また十歳にて結婚する者少からずと。



月の手鏡（三月）

遲塚麗水

風は和風と名を換えたり、雨は酥雨とも催花の雨とも呼び做され衢に起つ埃をさへ、綺陌の香塵など〻賞でらる〻三月の月は來れり水は鴨綠の波を湛えて、雁の宿りしは何くの處ぞ、一夜平沙に留めたる趾の痕は蒼頡をして讀ましめなば正に鶯花の春に別る〻を惜しむの辭なるべし、曉霞む遙天に、前陣後陣、相呼び相嚮へて、ノ字と作り又たへ字となる、途に告天子に逢へば何の奇語するところぞ、日暖たかき書窓の邊、双々去來の影をうつすは、去年の故巣に何時歸へり來し女夫燕か、昨雨いまだ啼かず、轉泥軟らかくして飴のごとし、落花を合せ啣みて、忙はしく舊居を修理するなり、主翁の閑事業は椽の上りに負暄しつ〻釣道具を點檢するに在り、輕暖日每に催し、川底深く蟄居せる鮒魚の水温み行くに醒覺して、細流淺渠に遡ぼり、正に是れ野釣の好時節となれるなり。

三日 稚き女兒の指かゞなへて、待つ雛祭の今日は來れり、緋の毛氈を敷きわたしたる雛壇に、陳べたる內裏雛、官女、五人囃子、左右の大臣の弓執りて護るさまなど、實に昔の禁裡のさまぞ偲ばる〻玻璃の瓶子に充てる白酒、蒔繪の高杯に載せられし紅白の菱餠、はぜ豆炒、人形に相應はしき器具調度、室に咲きたる桃の花も打ち渡したる貝屏風と落花の幕、ア、寒さの風にも顰まず絳唇露濃かに咲き亂れ、宵の灯の上る時睡むげに見えし雛の君に、我も歌を詠むとて聞え上る風情に、籠の榮螺、蛤の、人なき夜闌に鳴くなるべし『古雛やむかしの人の袖几帳』『雛の灯に、いぬきが袂か〻るなり』蕪村の句面白し。

王朝の昔には此の日、曲水の宴といふが催されたり王羲之が蘭亭に賓客を會して、觴を曲水に浮べてうた

げしたる故事に始まるといふは疑はし、一代の豪奢を極めたる彼の紀の國屋文左衛門が、舟を隅田の上流に浮けて、朱の盃を放ち流したる風流は、濶達なる斯の人の面目見えて欽すべし。



十日　は金刀毘羅神社の大祭なり、虎門のは最も賑ふ、朝詣でする狹斜の人の鬢邊に、青竹に挿みし護符のかざさるゝは、此の祭りにのみ見る景物なり。

十三日　奈良は春日の祭なり、地には香ばしき歴史あり、山容水態も亦た温籍優雅なり、其間に執り行はるゝ華麗の祭典、詩として餘りに妙に、繪として餘りに美くし、人一たび此の地に遊びなば名物の霰酒を飲まずとも、言ひ知らぬ舊都の趣きに陶然として醉ふごとき心地するなり、其の奈良驛より汽車を出でゝ先づ温然たる嫩草山に對する時は歩趨も自づから徐かに、衣帶も亦た自づから寛やかなるを覺ゆ、扨て線香と墨と、根來塗の器物と奈良人形と、霰酒、有丹よしの菓子を賣る市塵の間を過りて猿澤の池

の邊に行けば、繪に、寫眞に、毎に看る五重塔の、挺然として霞む天に立つを仰ぎ見るなるべし、南圓堂、東金堂、鐘樓の鐘は神龜四年に鑄るところ、竈太鼓の火焔の斷片數枚は大さ各々丈餘もあり、天平年間、東大寺の大佛供養の時に用ひしものとぞ、此の鼓一たび鳴りし時には七堂伽藍の屋瓦も盡く震ひしならめ、佛殿に在る乾漆の維摩、文珠は國寶に錄せらる、老朽あり、華の松、其の翠りの朱と照り合ふ五重の寶塔、奈良博物館より東大寺、巍々十五丈の大殿堂、法幔深く垂るゝところ、金銅の盧遮那佛坐す、傘を披いて鼻孔に入るを得べしとは、唯だ其の大を假喩したるに過ぎざれども、掌上に十數人を載せて尙ほ餘地ありとは眞なり、佛前にある靑銅の蓮葉の、直徑三尺數寸なるもの、見て尋常一樣の荷葉の看を做す、大佛殿より二月堂、三月堂、堂に安置する不空羅索觀音は、天平美術の精髓を極めたる乾漆の立像なり、松村の間より丹碧の廟宇の見ゆるは手向山神社老楓多し、一路の靑松、自づから人を嫩草山の麓に導く。

宛がらに饅頭笠を覆せたる形の嫩草山、滿山皆な草巓きに數株の松あるのみ、まことに優しき姿の山なり日溫かに草を蒸して草畑のこきところ、早蕨を摘む人のさまは、繪よりも美し、毎年、立春の前後に、山燒の式あり、燒痕雨過ぎて取次に翠に、柔黃春風に相招く、拾翠に好き處なり、これより春日明神の境域、老朽古柏の中を行けば、幾群の麀鹿、人を見て走り來り俛して食餌を乞ふさまをなす、甚だ馴れたり。

春日神社の廟宇、華麗なること勿論なり、莊大なる樓門を入れば一百五間の廻廊左右に渡る廊簷に懸けたる古鐵燈籠、古意古色、鑑賞家の流涎三尺するところなり、都て九百八十八個あり、中に就いて、寒蟬、祓戸、雲朴、臥鹿、金烏、玉蟾と名づけたるもの尤も希品、皆な世の模型となれりとぞ、又た祠廟の邊に立てる燈籠は、實に一千七百八十九基と注せらる、所謂春日燈籠なり、正廟の南に若宮八幡社あり、社前の巫祝の家、巫女皆な妙齡、白衣に緋の袴、粉黛を凝して容儀端麗なり。

春日野の平蕪、雪消の澤、野守の池あり、春麗かに草煙る其中に、麋鹿の優游する、何かは知らず昔しを今に見る心地するなり、櫻時、櫻散りて藤の時、雨つながら游ぶに好し。

此の月の中旬、月が瀬の梅正に盛りなり、香は二州に渡り花は九村八谷に亘と聞えたる天下の絶觀、名張の川は、玉つむ村雪薫る里を貫ぬいて、白樫より桃香野、花は峻峰に簇り寒灘に枕む、例年春分前後に滿開なりと。



十九日 此の日より彼岸に入る、寒さも此の日までなり、空霽れ日温かにして、春風處々の梅花、桃花、彼岸櫻もはやちらほらと蕾を破る、家に居るの人、癈者ならずは病客なるべし、霞を分けて花を穿ち、儘ま吟興を縦まゝにするに堪えたり。

霜髪の媼眉雪の翁、相携へて六阿彌陀詣でをするも此の時よりなり。

二十日 上野の東京博覽會開會式

二十一日 弘法大師入道の正忌日とて、川崎平間寺の大師の開帳あり、西新井の總村寺も亦開帳あり、賽客雜沓す

二十二日 春分にて彼岸の中日、晝夜平等の日なり

春季皇靈祭。

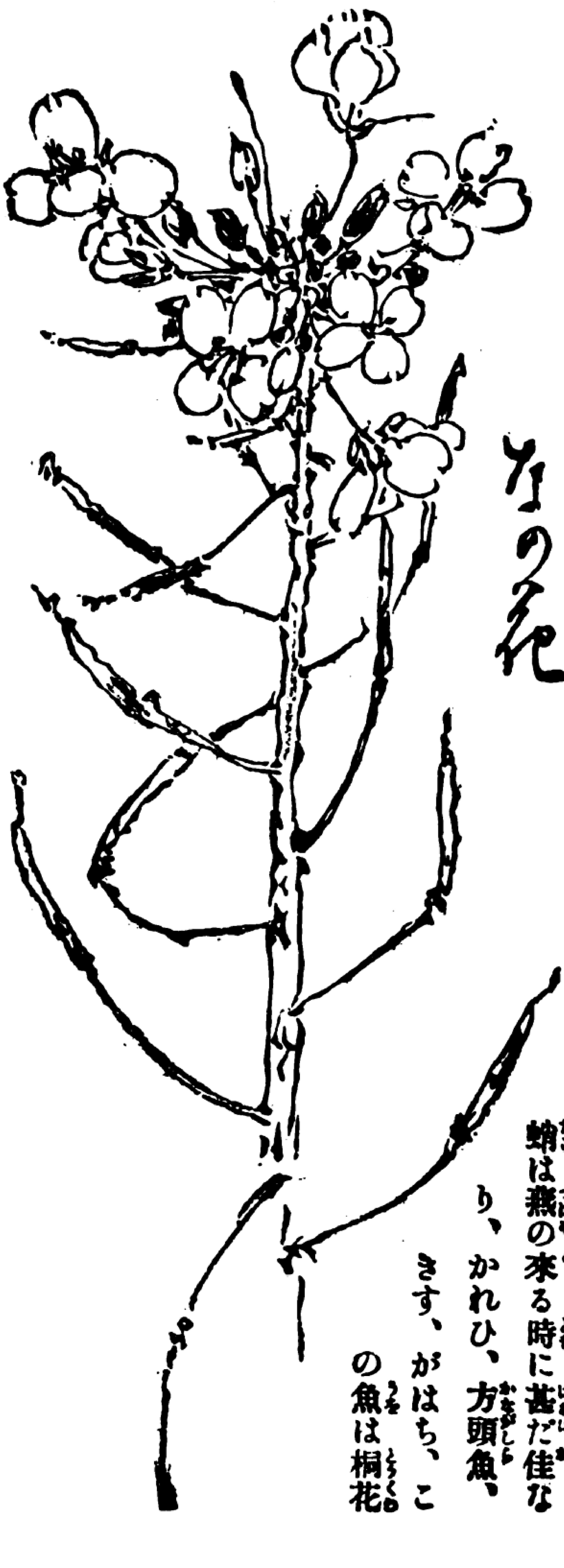
二十八日　品川東海寺の少林院に茶博士、千利久忌を執行す、茶に參するの人集り來りて茗筵を開く、燕來れば風呂となし、雁來れば爐となすは斯道の約束、この日の茶筵は爐名殘といふ。

此の月の花は、月の初めの梅なり、中ごろ以後は桃の花なり、彌生の四月の初めにかけては彼岸櫻なり、桃ある里は、越谷の曾根、數百千株あり、下總の市川中山、こゝも桃の名に高し、大師河原、こゝも好し、桃は元來いやしき木ぶりにて、梅櫻の物好風流なる氣色も見えず、喩へば下司の子の俄かに化粧し一威の着飾りに出でたるごとし、爛熳と咲きみだれたる中にも首筋わ耳のあたにり、產毛のふかき所ありて卑しなど許六が言へりしは、宛から劒をも佩きたる髯男の正宗の空罎を前に並べて、舌なめずりしつゝ、酌に出でたる女共も、口ぎたなく罵る口氣ありていやしげなる、我々この花の野趣あるは甚はだ愛す、此の花のある里は家も淸らかに長壽の人の棲むかと想はれて奥床し、此の村より奉公に出る乳母に、乳の少なくて氣質の荒荒しきはなかるべし、家に紺絲威の鎧など持ち傳へたる浪士の末孫も住むあるべく、繼なる母の怒りに觸れて、振り袖の姬樣の、今は茜裏の手織木綿に姿を窶して、村の童と遊ぶもあるべく憶はるゝは此の花のある村なり、梅は茶を飲んで看るには餘りに寒寂なれど、桃は澁茶に草餠など喫べながら看るが自づから妙趣あり、倦牛の背に散りかゝる花吹雪は、一幅太平の好畫ならずや、霞み空の雲雀の音、わけて村社の太鼓の音飴賣の唐人笛の音など、此の花には好き配合なり、木の芽田樂、稻荷鮨、一夜酒、花の陰の酒帘よりは、糕子、汁粉、赤飯の看版さて又た却つて相應しけれ。

東海道にて桃に名高きは、駿州沼津在の桃鄕なり、家々桃を栽えざるなし、近く牛臥、吾入道あり、畏くも東宮殿下の御避寒あらせらるゝ御館あり、此の邊の松原は舞子の濱にも勝れて麗はしき景色なり、靜浦、獅子が濱こゝより富士を仰ぎなば、浮世の事も忘れ果つべし、同じ千本松原、濱の觀音邊には此の月の末より松露を產す、海を隔て、臥釋迦山、つゞいては天城

山、伊豆の山、呼へば答へんばかりに見えて、春の波風煙漂渺たり。

沼津より原、鈴川の邊にも亦た桃林あり、富士川を渡りて蒲原江尻、江尻より左りに折れて清水港、龍華寺は、樗牛博士の塋域あるところ、大覇王樹のあるところ、富士を看るに東海道第一と稱せらるゝところなり、舟を傭ふて三保の松原に遊べば羽衣の故事は、天女の祠の記録に殘りぬ、松原とて松ばかりにはあらず松に交りて桃の花多し、遠く望めば丹霞のごとく、清水より久能山に行く途中、何れも桃なき村はあらず、駿河の國は桃の國なり。



春あさ碧の草の色も、雨ごとに萌えたちて、此の月の末より彌生にかけては拾翠の好時節なり、廣尾、目黒の里、澁谷青山の邊、王子、飛鳥山、道灌山、蒲公英、嫁菜、土筆、足弱のわたりて濁る春の水、水ぬむ頃や女の渡守、又た野興の津々たるものあるべし、

魚には若鮎、鱒、飯蛸、鱒は桃の花の咲く頃尤も美に蛸は燕の來る時に甚だ佳なり、かれひ、方頭魚、きす、がはち、この魚は桐花

むすぶ頃美なり、とり貝、みる貝、蛤も春分より眞味出づ、さゞゑ、赤貝も亦た然り、蔬菜にては新蕗、三葉せり、木の芽、はな柚、山葵、生椎茸、春の膳立は既に整のひぬ、花蔭より幾朝々、催花の雨又た幾宵々旋て彌生の月に入りて雲と蒸す滿城の花、夜も光るばかりなるべし、別ては此の月の二十日より上野に開かるゝ博覧會、蜃樓、貝闕、花と相映帶して、應に一代の盛觀を極むるなるべし。

口繪說明

山崎朝雲氏は現今彫塑界の一異材にして技巧の儁拔と着眼の奇警とを以て鳴る、曩に元寇紀念碑として千代の松原に建てられたる龜山天皇の尊體の如きは氏の作品中にありて尤も規模の大なるものなり、上掲寫眞版中婦人執弓の圖は今春東京博覧會に出品さるべきものなるが這は戰國時代婦人の精神氣魄を發揮したるものゝ由風俗は關保美氏に就て考證したるものとあれば古實に謬りなきは言ふまでもなく、その人物の活動せるその姿態に優趣ある誠に苦心の作たるを知るべきなり。猶山崎氏の作品中にて傑出せる數品あり次號に掲載。



古今雛もの語

畏きあたりの御愛翫
華族紳商の秘藏

凸翁

雛遊びの事は、古くより行はれたりしが、後世特に上巳の日の遊びとして、人形に酒饌を供ふるに至りしは、上巳の供物の紙人形と混じたるものならんと云へり。雛にして形の異なれるもの幾種もあれど、何れも變らず男女一對の人形にて、公卿女官の束帶裝束して座るものを、總て內裏雛と稱し、紙または絹などもて、立てる姿に作りしを、紙雛と稱す。

△紙雛

は、今東京には殆んど絕えて無きやうなれど、山陰道の或る地方にては、例年節句前となれば、紙雛を携へて戶々を賣歩く者あり、人々其を買求めて、內裏雛と共に雛壇に飾り、當日を過ぐれば、直ちに河に棄つるを例とす。故に此紙雛を流し雛とも稱する由。是れ昔の撫物の遺風ならんか。

△內裏雛

は、近世のものにして、享保の頃菊岡沾涼の著はしたる「近代世事

談」に雛の事を記せる條に「近世大裏雛とて、公卿の形に作るあり、昔は紙雛なり」とあるを見ても、其古きものにあらざることを知るべし。異種もある内裏雛の中にも、一般に其名を知られたるものは、次郎左衛門雛、有職雛、親王雛、町雛、古今雛等なるが、最も古きは、次郎左衛門雛なりといふ。

△次郎左衛門雛

は、慶長の頃始めて世に出でたるものにして、松永貞徳の門人雛屋立圃之れを作ると云ふ。立圃は京都の人にして、本名を野口市兵衛と呼び後[illegible]田次郎左衛門と改む。其作る所の雛なるを以て、俗に次郎左衛門雛と称し、公卿、大名等上流社會の奥向に愛玩されしが、其後



△町雛

とて、別種の内裏雛現はれ、町家、百姓等の女子も、之れを愛玩するの風を生じ、上巳の節句に雛祭を行ふこと一般の慣例となれりとぞ。此雛は、男女共に手を附けずして、單に袖口を前に合せたるものなるが、束帯装束は、綿又は錦襴の類を用ふ。其後

△古今雛

と称する内裏雛出で來りぬ、此は町雛に手を附け、服装を一層華美にしたるものにして、今廣く行はるゝもの即ち是れなり。始めて之れを作りたるは、江戸の人形師原舟月なりしが、京都の人形師川端玉山も亦同樣の雛を作りて、之れを販賣せしに、其顔の寫生的にして、次郎衛左門雛とは大に異なり、束帯装束も所謂金ピカの綺麗事に作り上げられたる所より、一般女子の嗜好に投じ、忽ち内裏雛中の流行ッ子となりて、今日に至れり。

△有職雛

とは、衣冠其他悉く古實に據れるを以て、此稱あり。次郎左衛門雛即ち之れなり。されど今の所謂有職雛は、其首を古今雛のと同様のものを用ひ、永德齋專賣の雛なり。

△親王雛

と稱するは、男雛の冠を、俗に所謂大臣烏帽子に代へ。女雛の頭には、天冠を着けず、其代りに玉簪を用ゐて、頗る高尚優美なり。昔時

△將軍家の大奥

に飾られたる雛は、次郎左衛門雛と定り居たるを以て、彼の雛屋立圓の家筋なる雛屋次郎左衛門代々御用を勤め、また諸大名の奥向にても、主に次郎左衛門雛を飾りし由。

△町家の雛

は、始めは前記の町雛なりしが、其後古今雛出來しより、比較的粗造にして然かも形の小なる町雛は、忽ち勢力を失ひ、古今雛之れに代りて、町家向に大流行となりぬ。然るに德川時代の太平は、一般に華奢風流を好み、雛の如きも、其形の大なるを喜び、且つ華美を競ふの風を生じたるより、幕府は製造者を戒しむると共に、町家の雛は、大さ八寸を踰ゆべからずとの制限を設けて、之れを嚴命したりと云ふ。さて申すも畏多き事ながら、仄かに承れば宮中に於かせられては、昔より雛祭の御儀式は行はせられざれど、長くも

△皇后陛下

に於かせられては、雛、其他の人形をば御愛玩遊ばされ、未だ御在家に在らせ給ひし頃、雛屋次郎左衛門が一家なる京都の雛屋が、特に御用を承りて、調進しまゐらせたるものある由。其中にも、別して

△御秘藏の御人形

に、十七世次郎左衛門の製作せるものあり。此次郎左衛門は、今の山川永德齋の實父なるが、或時二個の人形を作りたるに、我ながらも其出來の見事なるを喜び、別號永德の銘を記し置き、後其一個を京都へ送りたるが、長き澄の御用となりし事は、少しも知らざりしとぞ。斯くて維新の後、店を日本橋十軒店に開き、屋號は元の如く雛屋と稱し居たるが、偶々宮內省より人形御用命ぜられ、其際命婦の菊野と呼べる老女官より陛下御秘藏の御人形に、永德の銘あることを洩れ承りしかば、其無上の光榮を喜び、夫れより專ら永德齋の號を稱すと云ふ。今の永德齋其技父に讓らず、常に自ら人形製作の事に從ひ居れるが、先年其筋の命に依り、

△東宮妃殿下の御人形

三個を製作して奉りぬ。此は智仁勇の德を、夫々容貌に現はしたるも

のにて、最も大なるを仁とし、頭髪を文金高髷に結びたる少女に作り、其長二尺五寸。次は長二尺三寸にして、之れを智とし、稚兒髷の少女に作る。次はお河童頭の少年にして、之れを勇とし、衣裳は悉く三越呉服店より調進し、まゐらせたる由。又昨年永徳齋が製作を承りたる。

△有栖川宮御用の人形

文金島田と唐人髷の二少女にて、前者は長一尺八寸、後者は一尺五寸とし、衣裳は之れも三越呉服店が御用を承り、履物は、淺草の香取屋より調進したるが、二個共外國の貴賓へ御贈進相成りしと。

△閑院宮御用の御雛

先年永徳齋が製作して、附屬の人形及び小道具共一式を調進したるが、頗る見事の御品にて、御買上げの價格は、一個平均二十五圓以上なりしと。昨年三越呉服店より

△コンノート殿下

へ獻上したる二個の人形も、是亦永徳齋の作にて一つは島田髷の少女とし、其長二尺。今一つはお河童頭の少年にして、長一尺五寸なりしと云ふ。次に貴族社會の中にも、結構なる昔の雛其他の人形を所蔵せるは、



△舊大名華族

の奥向に最も多く見る處なるが、別けても島津公爵家、前田、鍋島の兩侯爵家、伊達伯爵家等には、頗る見事なるものありと聞く。其他現今

△實業界の名家

にして、本年の雛祭に數百金を投じて、雛一式を新調せりと聞えしは日本橋堀江町一丁目齋藤辨之助氏、同區大傳馬町一丁目長井利右衛門氏及び横濱の大谷嘉兵衛氏、箕田長三郎氏等の紳商なりとぞ。次に

△雛一式

とは、内裏雛二個、隨身二個、官女三個、樂人五個、囃子五個、衞士三個、稚兒二個、以上二十二個を取揃へたるものを云ふ。但し稚兒のみは、特に注文せざる時は、雛屋にては、之れを加へざるを例とす。また

△雛の大小

を擧ぐれば、最も小なるを俗にケシと呼び、長二寸とす。夫れより三寸、五寸、更に七寸を十番と稱へ、九番八番と一寸宛を增して一番まであれど、一番二番と稱する如き大物は、實際之れを求むる客稀なるを以て、何處の雛店を見ても、出來合の品は殆ど皆無の有樣なり。現今普通に謂ふ所の大雛は、五番にして、即ち長一尺二寸のものなりと云ふ。

△上等の雛

は、首並に手足共に木彫とし、其材料は桐とす。胴の心も亦桐の木なるが、極上等物に至りては、裸人形の如くに全身を作り、衣裳も本式に仕立てゝ、之れを着せ、平素箱に納め置く時は、雛を裸として衣裳と別々に爲し置く樣に作れり。閑院宮家にて御新調遊ばされたる前記の雛と申すは、即ち是れなり。

△並の雛

は、首も手足も、煉物細工とし、鋸屑を膠にて固めたるものを用ゐ、胴の心には猶且桐の木を用ふれど、値安物に至りては、藁を以てす。

△裸人形

も、上等物は桐の木彫とし、並の品には一閑張を用ゐ、値安物に至りては、是亦鋸屑煉物とす。何れも全體を白く塗れるは胡粉なるが、上等物には十五六回も塗れど、並の品は五回、其れ以下は僅か三回の手數にて塗上げとするなり。同じ裸人形にも、

△三ツ折と泣人形

との區別あり。三ツ折人形とは、前項に記せし島田髷や、稚兒髷等の精巧なる人形にして、普通の品は、一閑張なれど、上物は悉く木彫とす泣人形は、腹部を押す時は、其名の如く、キユウ〳〵と泣聲を發する赤ン坊の人形にして、主に一閑張とし、其製作簡單なるを以て、價も從つて三ツ折よりも廉なり。

吉田松陰と其慈母

葉末露子

吉田松陰といふ名を聞くと、年少氣鋭、頭熱し意昂る青年を想像するが、それと同時に心やさしきその辭世の歌

　親思ふ心にまさる親心
　　今日の音づれ何と聞らん

を思ひ出ずには居られません。

松陰先生の生涯は、波瀾の生涯です、東奔西走の生涯です、寧日なき生涯です、けれど先生はその間に家庭の事を忘れませんでした。彼の欽慕すべき點は最も此處に現はれて居るのです。

彼年僅に廿五歳、米艦に乗じて海外に遊んとして失敗し、長門の野山の獄に投られし時、妹に送りし書簡の中に、

「十一月廿七日と日附御座候御手紙并に九年母、みかん、かつをぶし、ともに昨晩相とゞき、かこひ内はともしくらく候得共大がい相わかり候まゝ、そもじの心の中をさつしやり、なみだが出でやみかね夜着をかぶりてふせり候得共いよ〳〵涙に咽び、ついに夫なりに寝入候得共、まもなく目がさめよもすがら寝入り不申色々な事思ひ出だし候……」。

と書てあります、此で松陰先生が如何な人であつたかが分明るではありませんか、又此手紙に別紙を添へ、

「凡そ人のかしこきもおろかなるも、よきもあしきも、大てい父母の敎による事なり、就中男子は多くは母の敎へをうくることまた其大がいなり、去乍男子女子共に十歳以下は母の敎を受ること一しほ多く、或は父はおごそかに、母はしたし、父は外に出で、母は常に内にあればなり、然ば子の賢愚善惡に關する所なれば、母の敎へゆるがせにすべからず、併し其敎といふも十歳以下小兒の事なれば言語にてさとすべきにあらず、只正しきを以てかんずるの外あるべからず。」

と家庭敎育の忽せにするとの出來ざるを說き、更に婦人は嫁ては、

「婦人は己が生れたる家を出で、人の家にゆきたる身なり、然れば己が生れたる家は先祖の大切なる事は、生れ落るときより辨へ知るべけれど、やゝもすれば行きたる家は先祖の大切なるに思ひつかぬ事もあらん、能々心得べし、人の家に行きたる家が己の家なり、故に其家の先祖は己が先祖なり、ゆるがせにする事なかれ、又先祖の行狀功蹟等をも委しく心得置き、子供等へ昔噺の如く噺し聞すべし、大に益あることなり」

と書き、懇々妹を敎へるの文は、實に紙數十數枚の多きに亘つて居ます。

尚三十歳の時、同じ野山の獄から妹に與へたる書に、

「此間は御文下され觀音樣の御せん米三日の中に精進にていたゞき候樣との御事御親切の御こゝろざし感入申候、精進潔齋などは隨分心の堅まり候ものにて宜敷事とぞんじ候に付、拙者も二月廿五日より三月晦日まで少々志の候へば酒肴共一向給不申、其間一度靈神樣御祭のもの頂戴致候ばかりにて御座候、まして三日の精進は左まで六ヶ敷事共も無之、御親切の事に候へば相果し度存候共、當所にては當り前の精進の外にまた精進と申候へば連中または番人共何故かと怪しみ尋ね候に付、夫を夫とも相こたへる事面どうに存候、八日は幸精進日なれば其日一同にいたゞき申候」。

と妹より送り越たる施米に就て感謝し、其心根に從ひ、尚之より迷信を說きて之に敎へ、進むで、

「去年端午の客の多のに人は目出度目出度と嬉貌すれど、拙者は先の先が氣遣でたまらんから終始稽古場へかゝんで人の知ぬ所にては獨落涙した程の事であつた」。

とその家の行末を思ひ、最後に、

「夫で是からは拙者は兄弟に代りて此世の禍を受合ふから、兄弟中は拙者の代りに父母へ孝行して與るがよい、左樣ならば縮まる所兄弟中も皆よくなりて、果は父母樣の御仕合又子供が見習へ候へば子孫の爲、是程目出度事はないではないか」

と敎へて居ます。

この手紙は先生が僅に三十歳の波風荒き生涯を終

り、死刑に處せらるゝため、江戸に赴むく一ヶ月以前へに書かれたものであります。

其用意の周到なる、誠に得難い一部の家庭教訓ではありませんか。國家を憶ふに寧日なき松陰先生が、奈何して斯まで家庭の事に濃かなる思を凝すことが出來るでありませうか、殊に東洋豪傑の小事を顧みないのを榮譽とするこの國、この時代に、先生の如き人が生れたのは寧ろ不思議といはなくてはなりません。然し先生が終生家庭を忘るゝを得なかつたのは、實に彼の年少時代に於る父母の温かき家庭教育の裏に歸因して居るのであります。

これを思ふと、先生、及び先生を生だした父母の欽慕すべく、また家庭教育の忽せに爲可らざるを深く感ずるのであります。



△さま／＼なる希望

女子教育の隆盛につれ職業を求むる者及び其の他の希望も又種々に分るれど地方より東京に遊學せるものは、農家の子女其の六分を占め、他は實業家と官吏の子女にして、從て其の學ばんとする學科も家庭の事情によつて異なり、裁縫、造花、家事科及師範科を學ばんとするものは、農家出の子女に多く、音樂、繪畫、及び教員たらん志望を有するものは官吏若しくは軍人の子女に多しと、尙ほ彼等女學生が將來良人とせんとする理想を調査したるに、軍人、外交官、豪商、學士、文學者、醫師、宗教家、小說家、教師等にして、軍人の妻を理想とするもの一番多かりしと。

臺所の經營

大西よし子

赤坂一ツ木に教場を設けて家庭的の割烹教授をさるゝ、大西氏は、料理に熱心で且つ其人が却々の食道樂家なるより總菜料理では滿足が出來ず、赤堀氏に就いて料理の奧義を究め、又西洋料理をも兼修されて、これを日常家庭に適用すべく輕便なる方法を發明されし人なり。

▲炭の遣ひ方

料理の稽古を爲た方とせぬ方とは炭の遣ひ方で分ります。稽古の初めたては隨分無茶苦茶な方でも、半年程學ぶ内に自然と呼吸が分つて、普通の素人方とは判然と違ひが分るものです。一寸例を申せば、鍋と七輪に隙間を拵へぬやう炭で塞ぐことなぞで、其他物に依つてつぎ方を加減しなければなりません。魚を燒く時は七輪の眞中は火を弱くし、煉瓦を四方へ立てかけて置きます。總べて無益に湯を煮立せるのは第一の禁物ですから、切るものは悉皆切つて置いて、火に掛け初めたら夫から夫と隙間なく鍋をかけるのです。私共では稽古用にも宅料理用にも、大小二つの七輪で足ります。日本料理には如何しても七輪が宜しい。炭は樫炭と土竈とを用ゐて居ります。

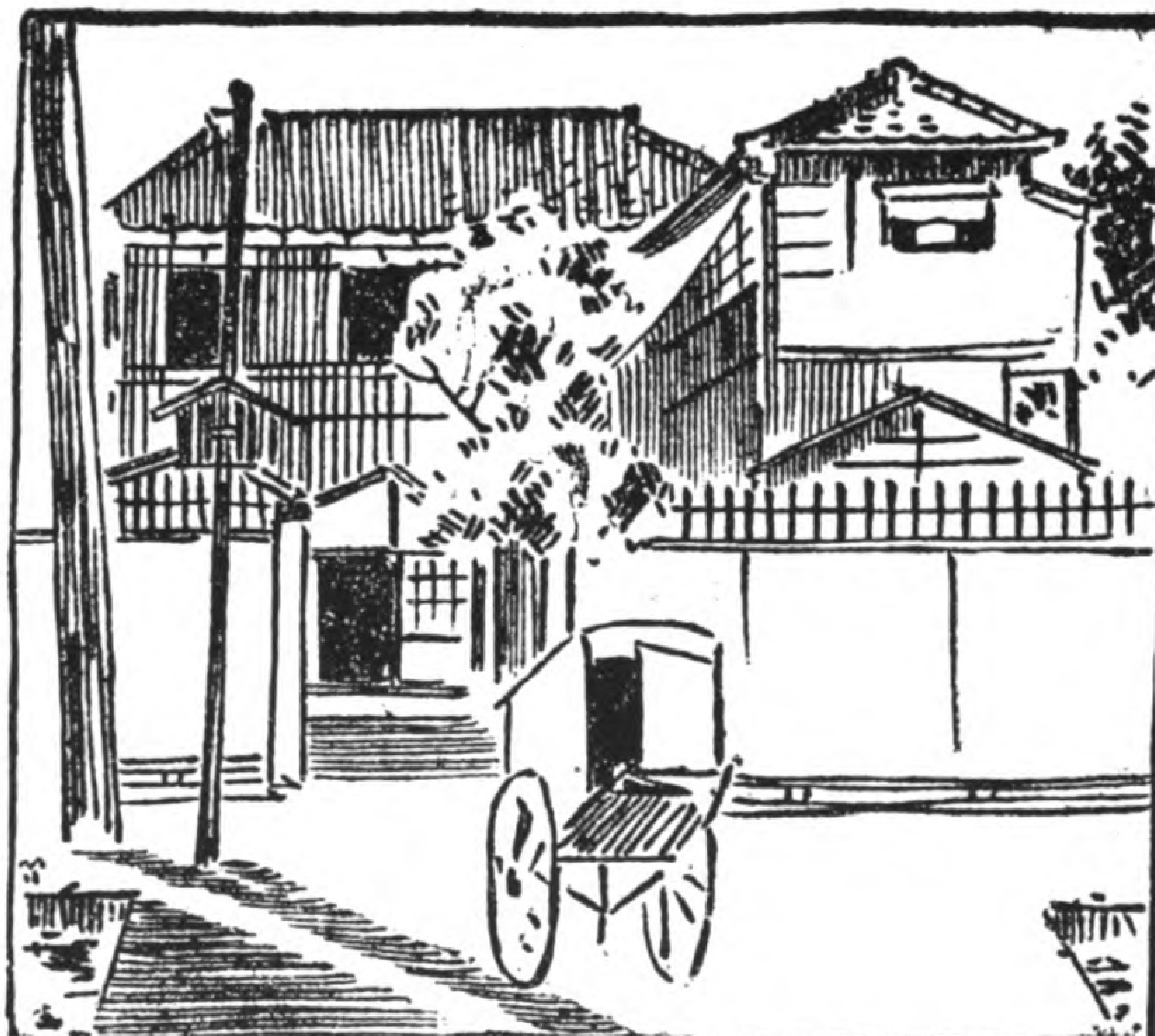
▲砂糖、醬油

料理用の砂糖にはBと申すのを用ひます、これは普通の三盆白より一層上等ですが、Bを買ひに參つても砂糖屋では大抵三盆白をBだと申して賣り、此方でも一寸分り兼ねますから三盆白をBの値で買つて參る事があります。並の三盆白は摘んで拈つて見るとザラリとしますが、Bはシツトリとした樣な氣味があり、段々取り扱ふ内に判然と分つて來ます。此Bは此頃の相場で一貫目一圓拾錢三盆白より一貫目に就て五錢位高いだけで、効も風味も宜しく餘程割合のよい砂糖です。御料理に砂糖の多いのは、直に飽が來て永く食べられませんから、私共では定則より少々控へ目にします。先づ金團でも隱元豆一升に付砂糖百八十目入れる處を百五十目に減ずると云ふ風にして居ます。醬油は舍か

龜甲萬、上菱などを用ゐますが、隨分料理に遣ふやうでも一樽が五人の家内で二ヶ月程あります。上等醬油を用ゆるのが經濟です。

▲道具の遣ひ方

私共では如何な料理でも薄刄、出刄、刺身庖刀、此三つで間に合せて居ります。總て庖刀(菜切庖刀は例外)は使用後一々清潔に拭ひ、一寸火で焙り布巾で卷いて置けば銹が付きません。日本料理の鍋は唐金が一番ですが、これも使用の度毎に叮嚀に拭ふて丁いませんと白味が剝れ易いものです。而して新らしい鍋を用ひ初める時、墨を尻へ塗つて置きますと、大層煑へが早ふ御座います。新らしい漆器の臭ひを去るのには、豆腐糟をつめて二日程置くとよい、御櫃の新しいのは熱湯を度々通すと早くかれるものです。



和洋裁縫女學校（中阪上）

▲買物の仕方

料理法を心得て買物を致せば無駄がありません。例へば何程のシチユーには何程の腿の肉と指名して買ふ如く魚類野菜も適切な品を定つた分量だけ取るからです。毎日の獻立は朝肴屋が參つてから、其種類に依つて、野菜は之に應じた品を求めると云ふ順序にして居ます。東京の方は昔から魚軒を魚屋に作らせる習慣でこれを當前のやうに思つて居られますが、京都の婦人は魚軒を自分で作ります、自分で作れば同じ直段でも中おちだけ餘分に取れて御

汁の實になるだけが利益。

▲廢物利用

叮嚀な料理を致すと、魚肉でも野菜でも棄てる處が多いかと申すに、遣り方で棄てる物を旨く食べさせるのです。例へば鰹魚節のダシ殼は次のダシを取る時に加へても宜し、又ダシ殼へ汁の殘りなどを入れ、砂糖を少し加へて、夕刻使用後の七輪か火鉢のとろ火へ掛け放しにして置けば、翌朝の副食物となります。又肉の兩端の切り落しで翌朝の汁の身ともなり、或は一寸炙つて食べても結構です。大根の皮なども二つに合せて、糠味噌へ漬けます。

▲料理書の應用

書物に據つても出來ぬ事はありませんが、筆で書けない加減と云ふものが、稽古しない方には一寸分り兼ねるでせう。例へば寒天を拵へるのに、寒天何本に水何程と云ふのは分りますが、煮詰める際に箸で掻き廻して此位どろりとした時分に火から下ろすと云ふ、其此位の加減が實地でなければ分り兼ねます、併し一と通り稽古を濟した者には料理書を參考として容易に新奇なものを拵へる事が出來るのです。夫れから段々經驗を積むと料理の味で割烹店を鑑識する事が出來るので、宴會から持つて歸つた折を一寸一口味つて見ますと、これは八百膳か三河屋か、萬安かと鑑定しますが大抵間違いません。畢竟ダシの加減でも分りますし、魚の出處を見ても分ります、下等の料理店はダシに念が入りませんし、魚の出處を撰んで御座いませんから。

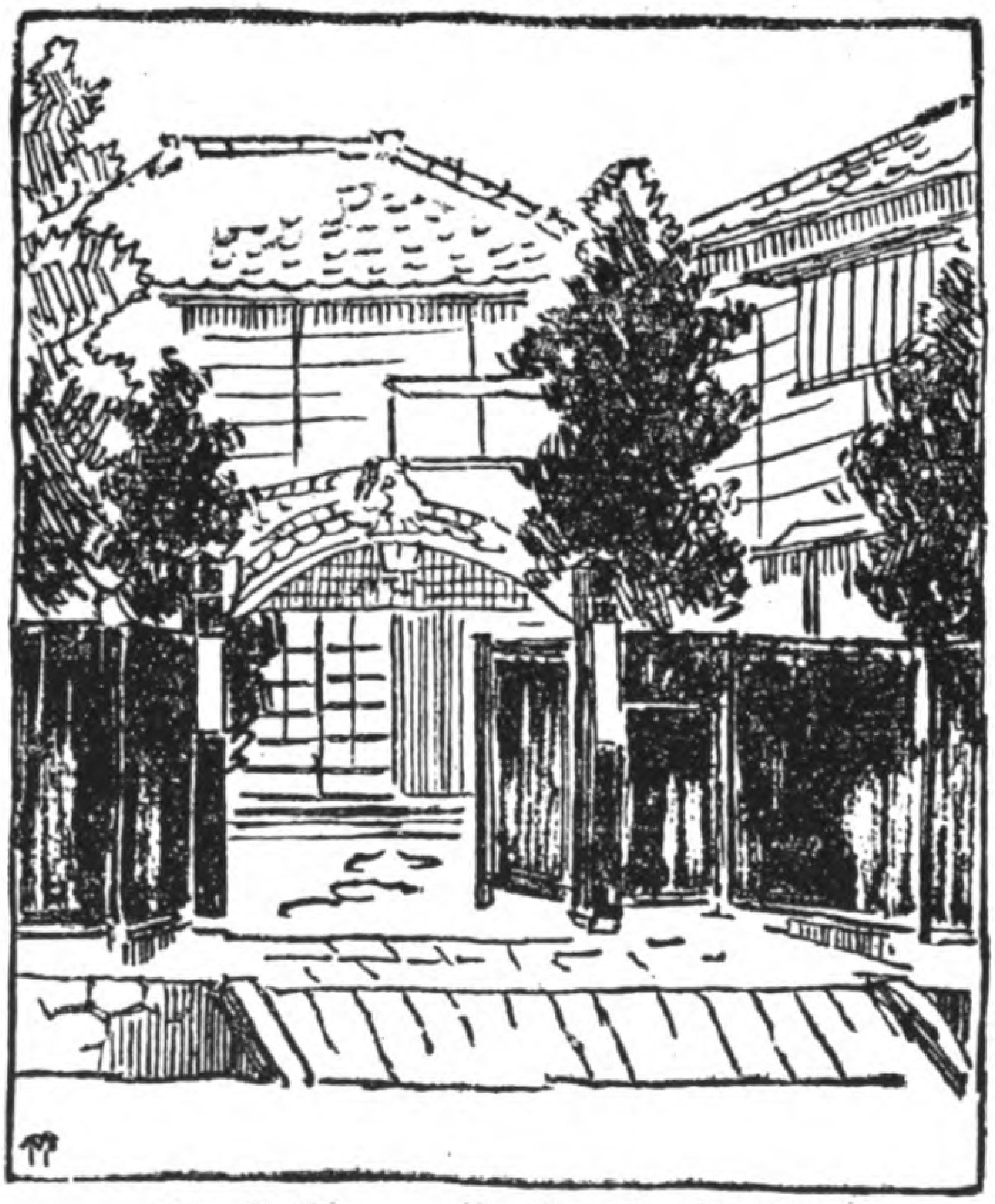
▲和漢洋三料理の比較

此三つの内では日本料理が一番難かしく、時間と手數を掛けなければ旨い物は出來ません。此點は西洋料理の方がズット輕便でせう。尤も總菜向には經濟上洋食の方が掛るやうですが、畢竟原料に輸入稅の掛つた物が多い爲ですから、實際計算して見れば大差はないのでせう。私は近頃支那料理を少し學びましたが、西洋料理より經濟的で日本人の口にもよく合ふやうに思はれます、而して日本料理より身體の工合にも宜しく皮膚の光澤も餘程よくなり下女などは肉飽、雀斑など

が漸々取れたと喜んで居ります。料理が油濃く見えるのは、油に浮粉を交せるから、どろりとして、しつこく見えるけれども、實際左程の油を用ゐるのではムいません。尚ほ醬油、酢、油なぞ日本の物で間に合ひますから至つて調法です。

▲支那料理

支那料理は庖刀が一寸面倒です。肉を短册形に切れば之れに添へる野菜も矢張り短册形に切ると云つた樣な工合で、肉に添へるものは乾物類が多く椎茸なぞ主なもので、其他は葱、土生姜、樣々の物を用ゐます、而して普通一品に四色を用ゐ、肉に乾物二種と季節物一色を取り合せます。日本では三色とか五色とかですが、支那では四色、六色、八色と云ふ組立です、先づ一番面倒なのはスープで、それは一羽の鷄を三合の水でゆる／＼と煮出すので一寸時間が掛りますが、一度拵へて置けば度々のダシに用ゐ、若し急場で此スープが間に合はねば、白湯を用ゐても宜しい、宅では一週に三度支那料理をしますが、急ぐ時は二十分間位で食膳に上ばせる事が出來ます。費用は百目の豚肉で三人前の料理が三品出來て二拾二錢、他に野菜乾物から醬油、油等の原料を二拾錢と見積れば澤山ですから、五拾錢內で一人前三品づゝの料理が三人前出來ます。尤も器は日本のより小さいから、分量は少うムいませう、御飯は極上等米を選ぶので本當は蒸籠で蒸すのですが、略して



水原産婆學校（猿樂町）

強目に焚く時も厶います。

▲煮出しの取り方

日本料理は鰹節の出しを上手に拵へるのが肝心で又むづかしいのです。第一最初の内は鰹節の削き方が困難で、細か過ぎたり大き過ぎたりしますと旨いダシが取れません。鰹節は土佐の小節（大節は體裁ばかりで味わろし）が一番上等で次は伊豆の小節、本當の料理には此二種より他は用ゐません。削くのは鉋を用ゐて手前から向へと削くので、此削き方で稽古の如何が分る位です。而して削いた鰹節をぐら〳〵と何時までも煮出してはいけません。鍋の湯が煮立つた時鰹節をサツと入れ、一と煮立したらば直ぐ火より下ろして、鰹節の下へ沈むのを見計らひ、ダシを取りますと、實に佳いのが取れます、煮過ぎると一種の臭ひが付いて本當の滋養分が取れぬそうです。

△水銀の池

南亞米利の墨西哥の山奥に深さ一丈、面積三百坪餘の水銀の池ありて、此水銀の價ば、一千萬圓の以上に達する由。

△兩手使用會

左手が右手の如く自由ならざるは常に之を働かせざるが故にて、若し左右平等に使用する習慣をつくれば決して左手の右に劣る理なしとの主意を以て此程英國の婦人間に、兩手使用會なるもの組織されたりと。

△教育上の恨事

就學兒童十六萬人中、尚ほ四萬人の不就學童あり。看來れば帝都の學務教育は北海の邊陬よりも不振の感なき能はず。

△食後運動の可否

暖國にありて身體強壯の人は食後直ちに運動するを可とすれど、神經質の人及び虚弱なる人は少くも食後一時間の休憩をとらざれば遂に心臟を傷ふに至るべしと。

△女權論者の氣焔

帝國議會に婦人の傍聽を許して民間の政談集會に其参列を禁ぜんとするは、不順にあらずやと一女權論者は息捲居れり。

△流行を追ふ費用

一ケ月三百圓平均を投ずれば毎に最新流行の服裝を調進し得べしされど目下二百圓を費す婦人は少なからざれど、三百圓以上の人に至つては數ふる程もなし、と三越呉服店員の談。

珍饌田舍料理

鹿山

前號には田舍料理の頗る珍なもの二三種書きましたが、田舍だからとて、さりとて一から十まで、何でもかでも蠻カラな料理計りであるかといふに、決して然う見くびつたものでもない、婚禮だとか、法事だとかになると、素人ながらも腕自慢の料理天狗が、それ〳〵寄つてたかつて、色々な込入つた料理もします、それは〳〵中々くろうとも舌を捲くやうなのも、ないではないが、併し、普通は、成るべく手數のかゝらない錢の餘計にかゝらない樣にと、それから又、都會地のやうな、一寸外へ出れば、魚でも漬物でも、牛でも鳥でもあるといふやうな便利は無いのですから、食料品を長く貯藏することの必要がある爲め、魚類、野菜類に限らず、割合に漬物の方が發達し、山形縣の米澤近在、秋田縣の大曲などいふあたりでは、色々なおいしい香の物があります。

前に飯料理の方を少し計り述べましたから、矢張り飯を遣ふ料理の事を今少し書て見やうと思ひます、それは、あの地方で『すし』と言のですが、普通の鮨とは違ひまして、永く保存して置く方の『すし』漬であります。

普通の鮨なら、手早く申せば味附け飯といつたやうなものですから、海苔にしろ、まぐろにしろ、皆附けたりものゝ景物のやうなものに過ぎないのでありますが、彼地の『すし』は飯を以て野菜なり、魚類なりを漬けるのであります。

『すし』は孰れ貯藏する目的で漬けるものではありますけれども、其中にも、長く置くのと當座漬との二種があります、それで當座漬なれば、鹽加減も薄くしますし、又飯も幾らか軟かく炊き上げるのであります。

今拵へて今食べるお總菜等には成るべく簡短な料理法を擇みますが、其反對に此『すし』には隨分手間のかかるのを厭ひません、否手間のかゝることを厭はないではありますまいけれども、長く置く中に變味

したり、又は腐敗するに困りますから、それで念を入れるのである。

▲雷魚の「すし」

雷魚といつても、恐らくお解りになる方は稀れでせうが、是は秋田で、而も男鹿と八森といふ二ヶ處にしか獲れない魚です、併し他の地方でも、水戸海岸と、長州と、加賀には、少し許り獲れることがあるさうです、一昨年の冬には、小川町通りの乾物屋へ、此雷魚の目刺が來てありましたから、見た人も、喰べた人も或はありませうが、彼地では、正月の儀式に、是非此雷魚の「すし」が必要で、これがなければ、歳が取られないといふ程の事になつて居るのであります。

此「すし」にする雷魚は、雌でなければ可けないので、腹に卵の一杯あるのを賞美します漬方は先づ新らしい雷魚をよく／＼水で洗つて、ヌルを去り、それから更に清水に浸して置くのです、それで翌日になると水が赤くなりますから、其水を捨てゝ、又よく／＼洗つて清水に浸して置きます、つまり、赤い液の出る間は何日も何日も水を替えて浸して置きますが、大抵一週間も經つと、赤い液も出なくなります、さうなると水を切つて、漬込みの段となりますが、それを漬ける飯は、普通よりも餘程強く炊いて、それを木鉢の大きなのへうつし、杓子でよく／＼かへしながら鹽を交せるのです、鹽の分量は人によりますが、長く置くのは餘程鹽辛く／＼しなければいけません。

それで飯がよく冷めたらば、桶の底へ一寸位の厚さに飯を布いて其上へ雷魚を布並べ、其上へ又飯を布き、雷魚を並べ、幾重にも／＼右の手順を繰返して、桶一杯に漬込み、其上へ桶の内側に沿ふて周りに藁の辮を廻してから蓋をし、壓石を掛けます、それで大抵二三日位經つと液が出て來ますから、其時に桶を傾げて液を切り、今度は餘程重量のある壓石をかけて置くのです、上手に漬けたのは一ヶ年も持たれるさうだが、普通は舊暦五月頃迄蓄へて、田植の肴に用ゐられゝば、それで澤山との豫定であります。

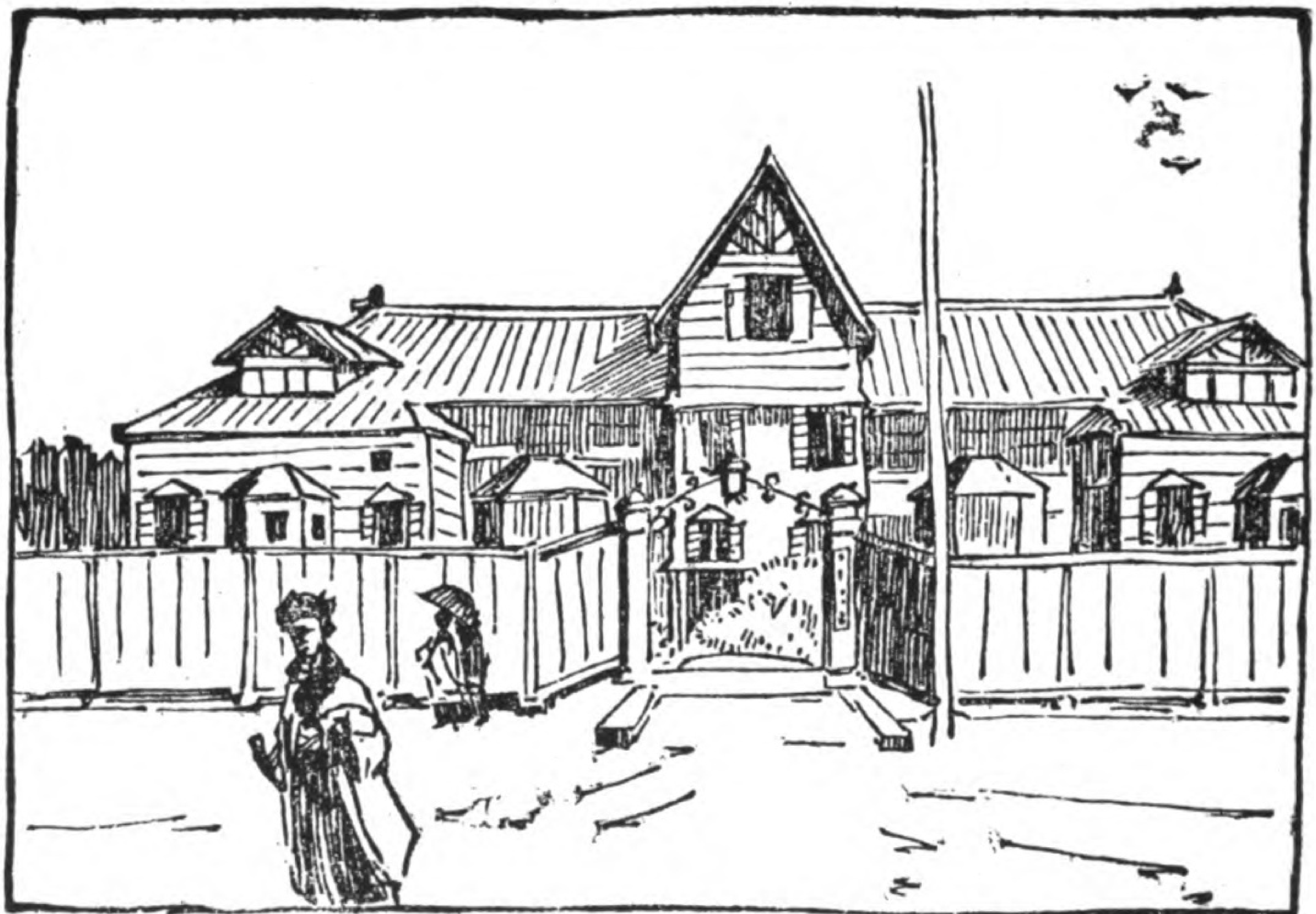
以上は一匹儘の「すし」ですが、其外に又切「すし」と

いふのがあります。

▲切『ずし』

切『ずし』は前の如く雷魚を水に浸す前に、頭と尾を切捨て四ッ位ヅヽに切ります、それを前の如く赤い液が出なくなつてから水を切つて、前同様に漬けますが、此切『ずし』の方は、飯の中へ、料理菊、短册に打つた人参、同じく短册にした蕪などを交せて漬けます、それで一匹『ずし』よりは飯も餘程軟かく、鹽も餘程控え目にします。飯のまだ熱い中に漬けると、早くなれるさうですが、其代り長くは持てません。

▲喰べ方



東洋英和女學校

一匹『ずし』の方は、桶から出すときに飯を指で扱いて其儘焼いて喰べます、又焼かずにも喰べられます、切『ずし』の方は、飯も共に喰べます、是は焼きません。どちらも漬けてから三十日位で喰べられます。

▲鮭の『すし』

是は雷魚の切『ずし』と飯の拵へ方は同一であります、鮭は三枚に卸したのを刺身よりは少く厚めに皮のまゝ切つて漬けます、矢張り菊、人参の短册打、及び鮞子などを交せて漬けます。

▲鰊の『すし』

是は生鰊を一鹽してから、

身をおろします、尤も尾の方は切離しません、頭を持つて下げると尾の下へ兩方の身はダラリと下るやうにして天日に乾します、天氣の好い日なれば、大抵一日位でシナ〳〵となりますから、其頃合を適度として、身許りを五分位の幅に切つて、雷魚の切「すし」のやうな飯拵へをして漬けます。是は雷魚と違つて脂が多いから、滋味が出て、どちらかと云ふと、餘り感服したものではありません、魚類の方では大抵斯んなものですが、次に野菜類では、

▲蕪の「すし」▲筍 の「すし」

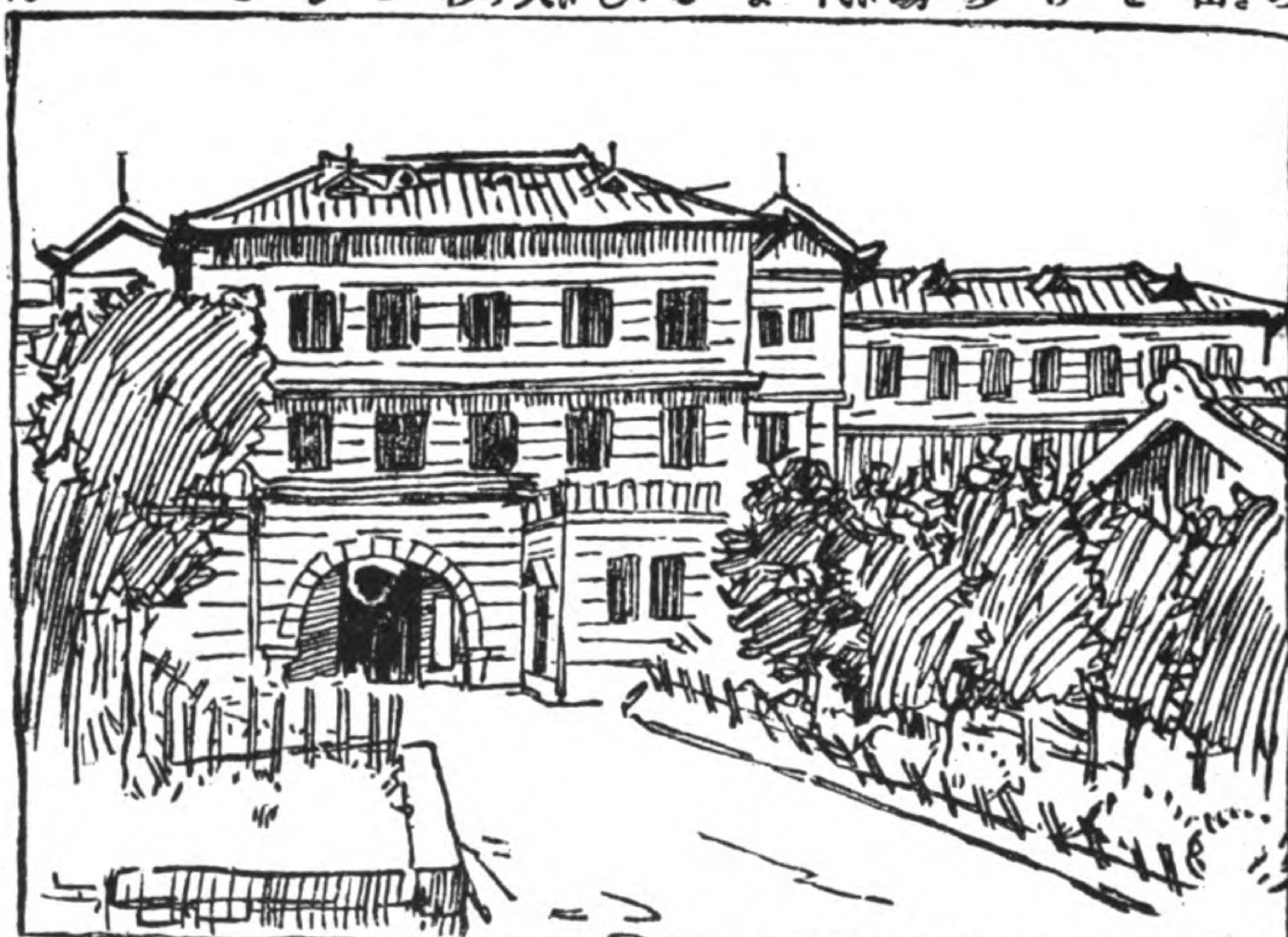
などあります、飯拵へは皆孰れも同じことです、蕪の「すし」は漬ける時に少し許りの味淋を振かけると好い味になります、筍は孟宗ではいけません、尤も孟宗はあちらにはありません、太いのは淡竹と若竹としか無いのですが「すし」にするには地竹の子といふのを用ゐます、是は深山にあるので篠竹の子であります。其外まだ二三種ありますが、方法は大同小異ですから推して知るべしです。

▲朝漬

あの地方は、米作の豐かな土地ですから、勿體ない程に惜氣もなく米を色々なことに用ゐます、此「すし」類の外、前號の山餅其他の外、飯を使ふことの料理は、まだ〳〵あります、一々枚擧に暇がありませんから、玆に朝漬といふのを書いて見ます、東京であさ漬といふとベツたら市へ出るあさ漬のことゝ思ひませうが、全く別物で、矢張り飯料理の一種であります、それをするには、先づ飯を摺鉢でよく〳〵摺り潰し、水を加へてドロ〳〵にして、それへ酢と鹽と砂糖で味を附け、大根の千六本に、同じく莖の湯がいたのを入れて掻廻して、姑らくならして喰べるのです、又飯を潰さずに米の粉を姫糊のやうに煉つてすることもあります、粉は糯米の粉を少し混せると宜しいさうであります、尤も漬る材料は大根に限つたこともありません、又片栗あさづけと稱して、葛の粉とか片栗の粉とか乃至は馬鈴薯の粉とか、孰れ食用澱粉を糊に煉つて、ツマリ葛湯に、前のやうな味を附けて、それに梨子とか林檎と

かの皮を剝いてへぎたるものやら、山葵の莖（但し西洋山葵にても宜し）のザツと湯を見せたのを適宜に切つて漬けることもありますが、是は多少氣取つた方で、酒の肴の塲合の料理で、前のは香の物代用といつたやうな譯であります、飯料理も並べ立てゝ見ると隨分蠻カラで、餘りおいしさうにもありませんから、大抵是位に止めて、別の方に移ります、併し是れならばやつて見やうか知らと思ふやうなおつなものはどうせありません。

けれども、田舍の料理は、やり方に手數がかゝりません



第三高等女學校

で、品によつては、却つて天然の味をそこなはぬところに妙なうまみのあるのも亦無いでもありませんから、頭から侮しつけたものでもありません。

▲粕汁

是は酒の粕、即ち板粕ですが、それを水で煮て鹽を加へますれば汁になるのでありますから誠に簡單です、汁は此通り無器用なやり方で濟みますが、實は、鯛のアラでなければ本當でありません、それから今一層、粕汁相當な贅を云はせると鹽の代りに、前號に一寸述べて置きました『魚醬』の極々古い上等なのが宜

いのであります、けれども普通は鹽で澤山です、又生鮭の頭なども此汁の實としては頗る適當であります、又鹽鮭の頭でも宜しいが、此場合には鹽加減を極めて薄くし、實も一旦細かに切つてから鹽出しをしなければいけません、加藥には生姜や山葵では納りません、生葱の刻んだのに限ります。又精進料理の粕汁は味噌を用ゐても宜しいのですが、別段何も實を入れるに及びません、黒海苔か、刻み昆布とかをチヨツと放せば、それで宜しいのです、併し菠薐草とか小松菜位は實にしても惡くはありますまい、尤も始めから煮てはいけない、お浸物のやうに茹でゝ置いて、汁をお椀によそふときに入れた方が宜からうと思ひます、勿論あちらでは、精進の粕汁には何も實を入れません。

酒粕を其儘に煮るんでは、塵も有らうし、何だか汚ならしいやうで氣味が惡いと思ふ方もありますかは知りませんが、併しそんな汚ないことはありません、けれども、何處までも鐵カラ論を主張するでもありませんから、今少し綺麗事に行きたいとならば、粕をよく摺り潰して竹の篩にでもかけて裏漉しをしたら宜からうと思はれます。

▲鮞子汁

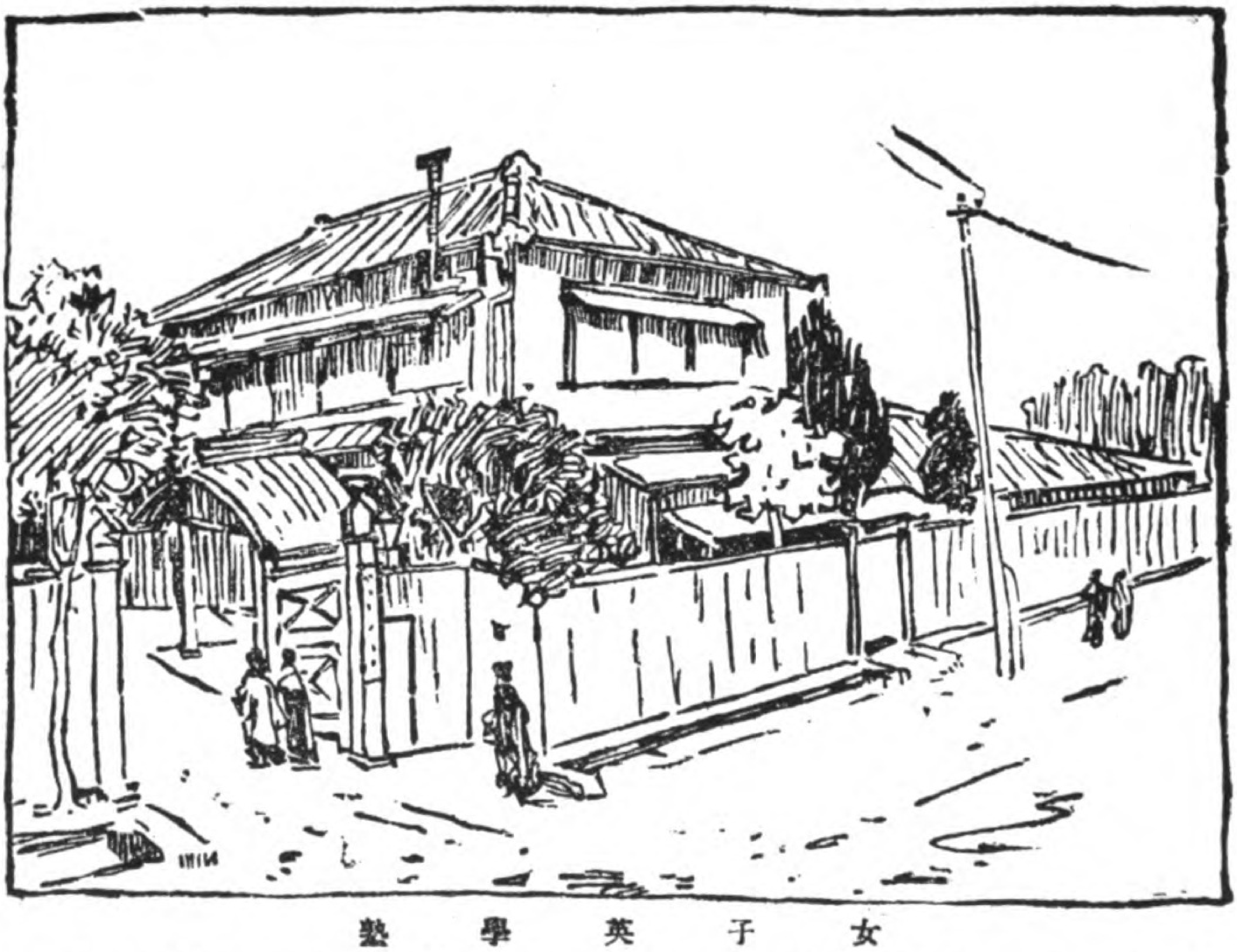
東京の人は餘り生鮭を好みません、尤生鮭の輸入されるやうになつたのは極近年の事ですから、西洋料理屋でフライにしたり又はボイルドにしたのを喰べた外は、上野邊の忍川で味噌漬にしたのを喰べた位のものです、殊に其鮞子は、魚屋の盤臺に時偶見かけることもありますけれ共、餘り買手も無いやうですが、東北地方では大層賞美して、あの儘生醤油で喰べたり、又は三杯酢で喰べたりします、鹽をすれば例の筋子になりますが、薄鹽の一夜漬などは、酒の肴にも、飯のおかずにも中々の珍味であります、處でそれより今一層珍な料理の仕方といふのは、標題の鮞子汁であります。

それは生の鮞子の外皮をよく〳〵取去て粒々にし、摺鉢でよく〳〵摺つて、それを別によく〳〵摺つて置いた甘味噌と混せて、又よく〳〵摺合せて、適宜の水を加へて

汁にするのであります、ドロ〳〵した工合は一寸納豆汁のやうで、味はたとへやうのないオツなものであります、汁の實には賽形豆腐、しめじ茸、松露などが宜しいのであります、一見精進料理に似て、喰べて見ると、さうでも無い、さりとて鰹節の煮出しの味でもないやうな、と云つて煮込んだ魚も見えず、知らない人は一寸頭をひねる料理であらうと思ひます。

▲押し鮒

鮒は、鯉、泥鰌など同じく淡水の魚で、淡水の魚は潮煮には適しません、煮る



女子英學塾

ならば味噌に限ります、淡りした、附味よりは、濃りとした附味をしなければなりませんが、鮒には一つあつさりと喰べられる法があります、それは押し鮒といふので、是は小さい鮒では可けない、成るべく大きなので、而も卵を腹一杯に孕んだのならば尚宜しい、先づ鱗を去つてよく〳〵水洗ひをし、それから鹽を澤山にふりかけて、燒くのであります、よく火が通つたら、板二枚の間に挾み兩手でグツと押して、押し乍ら少し許り捻るのです、實際は只の板よりも鍋蓋が宜しい押すにも占るにも手があるから、やりよ

いので、それに酢をかけて喰べると、中々好い味です、そして細いＹ字形の小骨などが少しも邪魔になりませぬのが不思議であります、是はお總菜向としても別に不適當ではありますまいが酒の肴には頗る珍妙なものでありますし、何も難かしい料理でありませんから、試しにやつて御覽なさい。

泰西智識の藏

△最高價の墳墓

只今現に存在せる世界中の墳墓の中、最も高價の墳墓は、回教の始祖マホメツトの墓にして、其の墓標に附着せるダイヤモンドと紅石のみにて、二千萬圓の値ありと。

△合衆國の女宣教師

亞米利加合衆國に於ける女宣教師の數は、千八百九十年には、一千百四十三人なりしが、今年の統計表に據れば、三千三百七十三人に達し、即ち一年三百人宛增加する割合なりと。

△獨逸の造花事業

獨逸にては、人工にて花を造り、植物を生長させ、果實を作る會社四百餘の多數ありて、是等の會社にては、皆な數百の人を使ひ居れるが、其職工は大抵婦人にて、一個月二三十圓の給金を取り居れり。

△女のない國

露領西比利亞のバイカル湖の南に當る、蒙古と亞細亞露西亞との境にある賣買城にては、古來よりの法律にて、此の地方に婦人の住むを禁じ居るを以て、全部落悉く男子のみにて婦人は一人もなしと。

△布哇の高野山

日本にても昔しは、罪を犯しても、高野山に入れば、其罪を問はれざる習はしなりしが、此の高野山に似たる山現今布哇にあり、此の山はサンドウイツチ島にありて、如何なる重罪人も一度び此山に逃げ込めば、政府は少しも追窮せざる由にして、罪人が山に在る間、其の家族親戚等は、衣類食物等の日常品を支給し飢寒を免れしむるが常なるが、罪人は山を逃げ出すとも故郷に還ることは絶對に嚴禁され居るよし。

△世界の最小婦人

現今世界に於ける、最小なる婦人は、波蘭のミル、ハウリナ孃なるべし、孃は身長二十吋にして、體量は三貫目に達せずと云ふ。

△英國の墮胎數

墮胎數は何れの國にても、生活難の程度に比例する者にして英國は生活難の少なきだけ夫れだけ墮胎數は他國に比して尠き由なるが、尙ほ且つ一年十萬餘の墮胎數、即ち一日百人以上の殺兒數ありと云ふ。

婦人好みの履物

高貴婦人好みの品いろ〳〵

観風子

△昨今流行の駒下駄

一般の婦人方に一番氣受けの好いのは両刳形、之れに次ぐは小町形、其他は所謂變り形で、大美津新案の江戸褄形、喜楽形、ハート形、ハイカラ形など云ふ樣なものや、香取屋新案の香取形、シユース形、さては江戸ッ兒形など、それから榮三形と云ひ、或ひは淺妻形とも稱する中折形の類もチラホラ見受ける。また堂島形は、近頃關西地方では、婦人間にも大分持噺されて居る處もあるさうだが、東京では、今の處男子のみに限られて居ると云ふ有様です。

△臺は總じて低い方

で、大抵が先づ一寸三四分位。上等物は奥州南部産の桐材で、柾目が細かく通つて居て、然かも一番重量が輕い。之れに次ぐ桐材は、上州及び秩父邊に産するもので、一見南部産の桐と變りが無い。それゆゑ不正な下駄屋では、南部のだと詐つて賣附けると云ふことです。南部産の桐の臺だと、昨今流行の低いのゝ重量が、一足百四十目位、會津や越後地方から出す桐の臺だと、餘程重量が重いから、下駄としては下等であるが、簞笥や其他の道具を作るには適當ださうです。

△鼻緒は幅狭

のが流行で、普通六分位。品質は、綴れ織、金襴、厚板織、繻珍其他種々あるが、昨今最も多く行はれて居るは、金華山織で、之れに次ぐは格子模様の本天、ツナ天など、色は鳩羽、銀鼠、葡萄、薄葡萄、勝色、滿洲茶などです。

△表は猶且南部

が一番であるが、原料の竹の皮は、九州久留米に産するものが一等であるから、昔から之れを用ゐて、南部表は造られたものです。今は諸方に表も製造者が出來ては居るが、何分にも仕上げが甚だ拙で、板で締めた

り燒饅を使つたりするので、竹の皮と脂氣が脫けて了つて、艶が無くなる。然るに南部の職人は、指頭のみで巧みに仕上げをするから、艶があつて然かも保がよい。尤も近年甲府地方から頗る上等の表を出す樣になつたのを、橫着な下駄屋では、それを南部表と詐つて賣附けると云ふから、注意せねばなりません。

△駒下駄の今昔

談などを、茲に擔ぎ出すは、餘り妙でもありませんが、近頃元祿下駄と云ひ、桃山下駄と云ふ名の附いた立派なものが、一しきり大流行でしたので、若い方の中には、昔も此樣な贅澤な履物があつた樣に、誤解して居る方がないとも限らぬから、一寸申して置きます。ツイ四五十年程前までは今から見ると、餘程お粗末な下駄を穿いたもので、表と云へば、上から釘で打附けてあつた。それを今の樣に隱し釘で打附けることになつたのは、大美津が工夫したもので、釣道具にウキの釘から思附いて、夫れが見事に成功し、乃で表の附方が一變して、今の樣に體裁よくなつたと云ふことです。

また

△今の駒下駄の幅

を昔のと較べて見ると、餘程廣くして體裁が好い。昔は一體に幅狹で、連雀表など〻云ふ表は、僅か一寸八分位しか無いが、今の女下駄の幅は、普通二寸五分、長さ七寸二分で、男物は幅三寸で、長さ七寸七分で、女物よりも五分宛伸びて居ります。さて昨今

△上流の婦人方の好み

の履物と云ふは、如何であるか、將た中流以上は如何であるか、其一斑を窺ふに足らうかと、近頃夫々新調されたものだと云ふ分を探つて見たから、それを茲に記します。

△北白川宮大妃殿下の御草履

と申すを漏承はるに、御表は古代紫の絹糸を、網代に編上げたもので、五枚重ねの緣を一枚宛甲斐絹で包み、御鼻緒は、菊花模樣と綴れ織。

△東伏見宮妃殿下の御下駄

は、金の磯草模樣の二段小町で、御鼻緒は、紫地に一

輪牡丹の模樣に綴れ織。

△華頂宮妃殿下の御下駄

は、高さ一寸四分位のハート形で、御鼻緒は、陰陽の龜甲模樣の厚板繻珍。また御草履は、絹糸網代の五枚重ねで、御鼻緒は桃山模樣のワナ本天。

△島津公爵夫人の草履

も、古代紫絹糸の網代表の五枚重ねで、鼻緒は綴れ織に草花模樣を現はしたもの。

△毛利公爵母堂の下駄

之れは、四五年以來黒塗りの、江戸ッ見下駄が好みで、鼻緒は、寂利休と云ふ燻んだ色の繻珍と極つて居て、臺は普通のよりも低く作らせ、草履代りに好い履物と言つて居らるゝさうです。

△侯爵池田博仲夫人の下駄

浮舟形と云ふ新形で、表は晒蝉と稱する籐の四本さし、鼻緒は、滿洲茶の厚板織に土耳其模樣を現はしたるもの。

△相馬子爵夫人の下駄

高さ一寸四分程に兩刳形で、鼻緒は鴨川鼠の金華山織で、太さ五分と云ふ極細の意氣な好み。

△榎本子爵嗣子夫人の下駄

蠟色艶消し塗りの、ハート形と云ふ新形で、鼻緒は、薄桃色地に匹田二段模樣の金華山織、之れも太さ五分の極細。

△金子男爵夫人の下駄

竹塗りの二段小町で、鼻緒は、菊花模樣の綴れ織。いつも却々凝つた好みとやら。

△高橋捨六氏夫人の下駄

夫妻とも、頗る見立上手と云ふことであるが、夫人が近頃求められたと聞く駒下駄は、後丸の都小町で、鼻緒は綴れ織。

△高橋義雄氏夫人の下駄

は、茶の艶消し塗りの、榮三形と云ふ低い中折形で、鼻緒は、寂茶無地の綴れ織で、五分と云ふ細物。

△武田政智氏夫人の下駄

人造肥料會社支配人の夫人で、澁澤男の令孃であると

か、此人は非常の履物凝りで、臺の格好は無論、蒔繪の模樣から、鼻緒の仕立と、吟味に吟味を盡し、却々好みの八釜しい方であるが、其代り氣に入つたとなれば、價の如何を問はず買求めると云ふ風で、近頃穿いて居るのは蠟色塗りの小町形で、光琳風の菊の蒔繪。鼻緒は刺繡をした綴れ織。

△高田愼藏氏夫人の下駄

は、柾目の三十五本以上も通つた江戸ッ兒の、丸形兩刳で、鼻緒は雲井鼠の本天の六分物。令孃は一人は喜樂形、今一人のは江戸ッ兒形で、何れも夫人のよりも餘程高價なものださうです。

△鄕誠之助氏夫人の下駄

高さ一寸一分と云ふ低い江戸ッ兒形で、鼻緒は、極細の白のワナ天。

△木村長七氏夫人の下駄

古川鑛業會社の重役で、元足尾銅山の事務所長、今も坑夫に慕はれて居ると云ふ評判の木村氏、其夫人の好み下駄は、浮舟形で、鼻緒薄鼠色の七分と云ふ太い本天。また令孃のは、金の溜塗りの式部形で、柳に蹴鞠の蒔畫、鼻緒は本天に桃山模樣の刺繡。

△二橋元長氏夫人の下駄

二橋氏は、元日鐵の重役で、其邸宅は向島、氏の夫人は、履物道樂と云ふべき側の人で、硝子戸の履物戸棚を造つて、之れに何時見ても二三十足位陳列してあると云ふこと。そして新形のものが出來たと聞くと、早速其れを買取る。また自分でも新形を考へて、黒柿で後歯ノメリの樣なものを作らせ、其歯に紫檀を使つて見た事もあるし、リボンで鼻緒を仕立てゝ見た事もあると云ふ。同家の裏穿は、桐の臺に朱の總塗りと云ふ珍らしい下駄で、之れも夫人の好みださうです。

（をはり）

△過世の影面

如月の空寒く、雲の去來するを眺れば遊子の魂は遠く故山に馳せて自ら畵中の人たるを覺ゆ、小川に芹摘む乙女、南天の實に雪の降りかゝれる、軒の氷柱の長く地に垂れたる、踏めばザク〳〵と音して碎くる背戸の霜柱、其處に無限の悲哀あり。



來朝せる二大樂手の樂話

女子と音樂

ヘンリート、マーキンス孃

記者曰。孃は和蘭國海牙音樂學校の出身で、十四歳の時已に天才といはれた程の名手である。今茲一月十日、横濱入港の郵船で來朝し、この月十四日の夜、横濱オリエンタル、パレース、ホテルで演奏を試み、妙技入神の稱を恣にして、帝都の樂壇に聘せられ、一月二十二日及び二十四日、東京青年會舘に前後二回の演奏をなし、同じく二十六日には横濱で第二回の演奏會を開き、二月八日の夜再び帝國ホテルの外人等に聘せられ、尚ほ阪神地方の有志からも招かれて、到處賞讃を博し、今や頓の名は啻に歐米人のみならず、我同胞の間にも喧傳さるゝに至つた。左に掲ぐる樂話は孃が吾等への置土産である。

△風土と音樂　これを遠き曩昔の歷史に顧みたといふのではありませんが、妾は音樂の發達と風土の如何とは、少からぬ關係があると存じます。勿論これは妾の直覺かも知れませんが、南方溫暖の地に生れた人は、足一度戶外に出れば、香ぐはしき花の枝に、綠なす樹の梢に、いろ〳〵の鳥の、種々の音色が聞えて、つまり自然の音樂を耳にすることが出來ますが、北方寒冷の地に生れた人は、どうしても此等自然の音樂に接する機會が少い結果、人爲的にこの音樂を耳にし得るやうの技術が發達して、扨てこそ獨逸だの露西亞だの

いふ北方の邦土に、音樂は最も著るしく成長したのだと存じますので——。

△音樂の効果　右に述ました通り、音樂といふものは、自然的にも亦人爲的にも、兎に角人心を樂ませるのが其の本來の職責で、然れば比較的戸外に於ける娯樂に乏しい北方の人には、人爲的の音樂が發達して、室内での娯樂をより多からしめ、南方の人は戸外に於いて自然の音樂に其の神を欣ばせ、彼も此も等しく吾れ人に平和の福音を傳ふるものでありますから、人はこれに仍つて怒、悲、嘆その他の總有忌はしきを忘れ喜、樂、慰を得なければなりません。此の目的に對して、音樂の効果は最も多大で、例證の如きも決して乏くはありません。

△家庭と音樂　如此、音樂は平和を齎すべき多大の効果あるものですから、家庭に於ける最大の須要たることは言を俟たずして明かですが、此の點に於いては、獨り北方の人ばかりでなく、南方の人にも亦大いなる必要を有することゝ存じます。何となれば、世の文明は、漸く物質的方面に向つてより多く進歩し、彼の花紅鳥歌の境であつた南方の邦土も、今や次第に大厦高樓相櫛比して、此等自然の音樂を聞くべき所少く、又或は業務繁多となつて時と處とを擇ずに是を樂むわけに行かなくなりましたから、勢ひ一日の業務を了て、家に歸つた後、一家團欒の折にこの樂を恣にしなければなりません。爰に於いてか家庭と音樂とは全く離るゝことの出來ぬ關係があるではありませんか。

△音樂と女子　扨て恁うなりますと、女子と音樂とは又離る可らざる關係があらうと存じます。男子は社會の戰場に奮鬪する勇士で、彼等が終日の戰ひに勞れて歸つて來た時、女子はその慰問者となつて、或はその創痍を劬り、或はその成功を稱へて、明日の戰ひに臨むべき勇氣を百倍せしめ、以てその夜を樂く過させなければなりませぬ。此際慰問者が其の目的に適ふものを求めたら、恐らくは音樂を措いて他に是れ以上のものを得ることは出來まいと存じます。して見れば音樂は女子に先天的必要を有し、必ずしも音樂家にならなければならない

ないでも、これを知らねばならなからうと存じます。現に歐米諸國では、一般の女子がこれを認めまして、多少ともこれを彈奏し得ぬものはありません。そして中流以上の家庭にはピアノやヴアイオリンの備へて無い家はなく、中流以下の家庭でもオルガンの一臺位は大抵備へて居ります。

△日本人と音樂　以上述來つたごとく、音樂は何れの國、何れの家、何れの人にも必要で、隨つて日本の方々とて之れを不必要とはなさりますまい。妾は歐米諸國を漫遊して居る際、屢々日本のことに就て聞く所がありましたが、其の内腑に落ちませんでしたのは、日本は自然の美には富むで居るが、音樂思想の如きは極めて幼稚で、夫れ故、日本に往つて演奏をしやうなどとは得て望む可らざることで、妾が漫遊を思立ちましたのを、寧ろ無謀だと迄申したものさへありました。併し妾は決して此の言葉に耳を傾けませんでした。と言ふのも前に申した通り音樂は何れの國民にも必要で、人として是を聞いて不快を感ずるものはありません。既に然らば、日本の方方とてこれを嫌ふわけでは無く、只だ是れまで所謂自然の音樂に餘り多く親むで人爲の音樂と相遠ざかつて居た結果、馴染が薄いので自づと趣味が深く感せられないで、詰りは恁うした說も出て、段々馴染がついて來たら、恐らく歐米人以上に其の趣味を感受することも無いと限るまい。如此確信を抱いて、東洋の巴里で、兼ねて又東洋の瑞西たる評ある日本に、久しい前からの希望であつた演奏を試むる爲め遥々來て見ます


マーキンス孃

と噂に聞いたよりも萬づに愛で度く、殊に日本の方々が音樂に對する趣味を、風説に聞いたとは打つて變つて、妾の豫想したよりもより多く有て居られたのが、何より嬉しく懐かしく存じます。で、妾は、近い將來に日本からも世界的大音樂家があらはれることゝ斷言して憚りません。而して其の大音樂家は女流の方であることを信じませう！

△音樂家の用意　扨て、それでは音樂家たるに何れ程の用意が必要かと申しますと、先づ手よりも耳の機能を達者にしなければなりません。故に多く聞いて多く咀嚼し、何んでも耳を肥して置くことが最も急務で耳さへ出來て居たら、その技は自から上達して、軈ては神に入ることが出來ます。彼の表情や姿勢や形式やを彼此いふのは形而下のことで、これ等は故意に作りなさずとも、熱誠で、虚僞といふものさへ無くば、求めずとも得るに難くはありません。要するに音樂家たるの用意は、熱心で、誠實で、邪念を挾まず、吾れから音樂に親むで、心から樂中の人になつてしまへばよいので、藝術と品性とは別問題だといふ人もありますが、矢張品性が高く無くてはなりません。

△日本人の天職　今、この點について深く考へますと、日本の方は、熱心で誠實で、物と同和し易い天性を具へ、且つ鋭敏で、而かも頗る無邪氣の所が見られますから、或は想ふに音樂は日本人の天職では無いでせうか。若しさうとすれば、日本人と音樂とは最も親い交情であらねばならぬわけで、蓋し遠からずして此二つが相合するの機會が來やうと存じます。そして其の天職は、日本の女子の方々によつて完全うせられんことを祈ります。

ピアニストの用意

イー、ボナヴヰヤ、ハント孃

記者曰。孃も亦マーキンス孃と共に來朝した英國の大音樂家で其の妙技は歐米人の夙に稱する所である。孃が今日あるに至つた所以は、全く平生の用意如何にあるもので、次の談話が此の大

音樂家の既往と現在を審らかにし、兼て我が愛讀者諸姉の好座右銘なるかは、少時その記す所に徴せられよ。

△生涯の研究　恐らく何事でもさうと存じますが、音樂家とて一家をなしたから是でよいとは言はれません。妾は人樣の事は扨て置いて、自分だけのことを申しますが、ピアニストとして世に立つ以上、生涯をあげて此の研究を怠ることは出來ぬのみならず、其の進路には或は到着點が無からうかと存じます。巧妙だと言はれ、上手だと囃されましても、果して何程巧妙で、何程上手なのか想に評者自身にもそれは言ひあらはすことが出來ますまい。隨つて評せられた者に夫れが判らう筈は無く、して見れば褒められたからとて、夫れに安心して、直ちに滿足してしまうやうでは物の役に立つは愚か、恁る人は決して最後の受讚者にはなれるものではありません。で、妾は鄕國に居りますと、毎日毎夜のやうに音樂會にまゐりまして、其の都度新しいものを彈奏しなければなりませんから、晝となく夜となく、食事の間よりピアノの前を離れたことは無く、恁うやつて旅行をして居ても、船中や旅館で只だの一日その研究を怠つたことは有りませんが、夫れでもついぞ飽きて退屈したことはありません。未だ他人に褒められやうの感心されやうのと思つて居る間は、研究も表面だけで、それでは直ぐに飽きも來ますし、少しでも他人から褒められると最早滿足してしまつて、此の上に研究するとは無いもの〻樣に思つてしまひますが、物の研究は決して其樣な手輕にゆくものではありません。故に忍耐と熱心と、誠實と勉强とを伴はねばならず、此等のものは妾の生涯の伴侶なのであります。



△研究と演奏　右の如く、妾の一生は研究の時間でありますから、音樂會に臨み、壇上に登つて演奏する間でも研究と心得、別に意を他に用ゆることは曾てありませんでした。乃ち妾には研究と演奏との區別が無いので、一室に閉ぢ籠つて獨ピアノに對つて居る時も、登壇して公衆に對して居る時も、自分には頓と同一事で、別段研究だから奈うの、演奏だから恁うのといふ考はありません。只だ妾はいつも己が心の前に演奏し研究して居るので、隨つて何等の憚りも無ければ、又何等の慾もありません。要は只だ己れの意に會すれば夫れで足るので、公衆の拍手喝采の如き、元より頭初から豫期して居るものではありません。如此、演奏これ研究、研究これ演奏で、いづれも妾の日課の一つで、この日課を濟ましませんと、食事も安眠もこれを得ることが出來ぬまでになりました。

△樂器と依賴心　夫れから妾が尙一つの覺悟といふのは、樂器に對する依賴心を起すまいとの決心で、設令ばこのピアノは獨逸のスタインウエの出來だから、これで彈いたら自分の伎倆を一入あげて示めされやうの、恁ういふピアノで無ければ彈けないの、乃至ピアノが惡かつたから伎倆を下げたらうのと樂器を本位に彼此心配するが如きことは全然却けて、指鍵盤を彈ずるも、その音は指頭より發して決して鍵盤より生ずるものとは思ひません、よきも惡しきも、吾が心と吾が指とにあり、十指の赴く所、心亦そこに赴き、眼に樂器なく、聽衆なく、軈てまた自分もなくなつて始めて神に入るを得、曲了つて漸くこの身あるを覺ゆる時、この上の愉快は無く、富貴、名譽、成功、賞賛、それ等一切の希望は全く心頭を去つて、何にもかも忘れてしまひ、宛然美酒に醉つたやうな心地になります、恁くてこそ音樂の眞の味はひはあるので、妾はこの味はひを知つてからといふもの、生涯の研究も却々に樂しく、嬉しく思はれるのであります。

△聽者皆師　で、妾は以上の如く、自分の一生をあげてピアノの研究に致す覺悟ですから、いつの音樂會いづれの演奏會に臨むでも、先づその聽者を師と思ひ

努めて其の惡評を傾聽致します。さう申しては失禮ですが、他人樣の高評には往々虛僞のことが多く、隨つて研究者にとつては何等の參考にもなりませんが、惡評の中には能く其の短所や缺點が數へ立てゝありますから、よし一言半句でも非常に參考になります。夫故妾は自分の演奏を聽きに來て下さる方は悉く師として觀るが、別けても惡評をして下さる方を恩師と仰いで居ります。然るに、不幸にして近年此等の恩師に接することが出來ませんのは、亦尠からぬ遺憾で厶ります。

△質素と眞面目　世には音樂家といふものは、極めて華かな樂しいものだと心得て、同じくば一生を恁うした華かな生活で送り度いなどゝ、飛んでもない考から、音樂家にならうとの志を抱く方が隨分多いやうに見受けますが、音樂家は決してさうした華美しいものではありません。で、恁ういふ方に限つて、半途に思ひ立つたことを廢し、却つて意外の不幸を見ることがよくありますが、實際物事餘りに華美しくては浮薄に流れ易く、到底終局の成功を見ることは出來ません何事によらず質素の中に眞面目は存し、眞面目にして始めて眞價を見出すことが出來るので厶りますから、妾どもの眞面目に物を研究する以上は、成るたけ質素の生涯を送りたいと存じます。

△得意の曲　妾には別に得意の曲とてはありません、といつて又、得意でない曲も無く、詰まりは其時、其塲合で、自分の意のまゝに彈奏が出來れば、其の時その曲は得意であり、次の日同じ曲を演奏して意のまゝにゆかなければ其の時その曲は得意でなかつたので、必ずしも一定しては居りません。何を申すも生涯を通じてゞなければ、此等のことは言ふことも出來ませんし、恁んな事は妾にとりまして何等益する所が無いと存じまして、別に是れまで考へて見たこともありませんでした。何分妾のピアノを彈くのが、未だ他人樣の御意に成る物を爲すなどゝいふ技倆があるではなし否、妾自身にさへ夫れを得ることが覺束ないのですから、已往と現在にはさる得意の曲などあらう筈はなく、將來とても果して恁うした境に達するか奈うか、恐くは疑問で——併し妾は此の疑問を解かうより、只だ唯だ多くの研究を積むことを希ふのであります。

家政の栞

◎てがら中襟などの脂染みたものは、揮發油の中で振ればよく落ちる、これは脂垢が揮發石油に溶けるからで、揮發油は名の通り極揮發して行き易いものゆゑ、遠火に翳せば直ぐ乾きます、若し揮發油が手に入りませぬならば通常の石油でもかなり役に立ちます、然し此の石油を拔くには、布の上へ紙を五六枚敷き、其上へ温灰を載せ、此を二三度繰り返すのが手輕で宜うございます、脂垢はアルコール又は燒酎で洗へばよく落ちます、エーテルといふ藥なら此上無しです、別段乾かす工夫はせずとも、自然に乾いてしまいます、尤も色によつては拔ける恐れがありますから御注意なさい。

◎脂の汚染を拔く今一つの方法は、硼砂といふ藥七匁樟腦三匁五分、以上二品五合の沸湯に溶したものゝ中で洗うのです、剩餘は瓶に入れて貯へて置けば重寶です、蘿大根の摺り卸したのを汚染の處へ揉み付け、湯で洗へばよく落ちるものです、極上等の白土か白墨の粉の細かいのと、上等の石鹼水で練り、板と板の間に入れて押し固め、乾かしたものを拵へて置き、着物などの汚染のところを乾いた布の上に延し、之れへ拵へて置いた白土の塊を綺に削つてよき程に振り懸け、其上へ薄い紙二三枚重れて載せ、火熨斗で一二分間壓せば、大抵の汚染は白土に付いて落ちること妙です。

◎頑固な汚染は、酢か酸醤又は酸橙の絞り汁で洗へば落ちることがあるものです、若し酸橙や酸醤の汁の色が附いて落ちないならば赤豆の粉で洗へば奇麗に落ちます、鐵漿の汚點も酢で落ちるものです。

◎煙草の煙脂の附いたのは、鹽水か西瓜の絞り汁で洗つて御覧なさい、大抵落ちます。

◎凡て血、膿汁、此の類の汚點は、湯で洗つてはいけませぬ、矢張汚點になつて中々落ち惡いものです、水が宜しい、若し落ち難いならば、膠水で洗へば落ちるそうです、絹物で皺にしたくないならば、其の部を濡手拭で濕し、櫧の實の黒燒粉を振り懸け、紙を上せ、石を重しにして二三時間置けば容易に脱げる、[illegible]の汚點には白砂糖を揉み附けて洗ひ、鏽の附いたのは生薑をおろして洗へば直ぐ落ちると申して居ります。

◎浴衣手拭などの濡れたのを鐵釘に懸けて置けば、銹が附いて只では容易に落ちるものでありませぬ、若し薄銹なら酢で洗へば落ちますが、頑固な汚點ならば、先づ其部を濡らし、二十倍の水に溶した附子の粉齒黒用を附けてよく揉み、六時間置いて奇麗な水で洗ひ、次でしみを石鹼で洗ひ、水洗し、酸漿の絞り汁を付けてよく揉みこすり、前の樣に六時間置いて水で洗へば大抵は落ちます、凡て懸釘は、眞鍮か銅、又鐵釘へ、細竹の輪切にしたものを挿して打つべきです、筆軸の不用の者など至極結構です。

春七題

春の雨　　楓蔭

細かきは、降るとも霞とも見えわかず。蝶の翼だにさわらず。稍多きも歸る雁、ゆきかふ燕の翼濡るゝまでにて、軒の玉水音しげきまでには至らず。庭前の青苔の色日に日に青みわたりて柳の芽のふくらみゆくを見るにつけ、明日さへ降らば若菜や摘まん、早蕨や萌え出でむ、彼所こゝの彼岸櫻の火を點しやせんと、嬉しきは春の雨なり。

　ふるとしも知らでねし夜の朝戸あくればしとやかに降る一簾の春雨、輕塵を澁し、柳色を新にせるは、長閑きながめなりとはいへ、きのふけふ、櫻花のまさかりにて



未見の花もなほ多きに、風さへ添ひてはあたら芳魂を春泥に埋めやせんと、晴の待たるるは春の雨なり同一の歎聲なれど、人の感情には前後の違ひあり。

春雨やいまのも暮の鐘でなし

春雨や蜂の巣つたふ屋根の漏

月花の眼を休めばや春の雨　　文考

金殿に灯のともりけり春の雨　子規

霞まよふ空にしほれし雁が音のかへるつばさに春雨ぞ降る
定家

すみだ川みのきて下す筏士にかすむあしたの雨をこそ知れ
千蔭

かすむとも降るとも空はわかぬ間に玉ぬきそめぬ青柳の絲
契沖

みぞれより雪になる日のこゝちして春雨白く散る櫻かな

春宵一刻價千金

照りもせず曇りもはてぬ朧月夜、今を盛りの櫻花が微風にさそはれて、はら〳〵と散るは、夕暮に淡雪の降るこゝちすれども肌は寒からず。何れの處の樓臺にや琴の音ゆかしう聞ゆ。優に艶なる春の夜、海棠李花のそれならで世界にたぐひなき夜櫻の景を彼の一刻千金と歌ひしもろこしの詩人に一目見せまほし。

春の夜はさくらに明けてしまいけり　芭蕉

照りもせず曇りもはてぬ春の夜の朧月夜にしくものぞなき

夕暮にふる淡雪のこゝちして朧月夜に散るさくらかな
弘訓

ともしびを花の木陰にかすませて山櫻戸に誰かすむらむ
弘訓

さくら花風や誘ふと燈火のまたゝくごとに思ひこそやれ
光彪

春宵一刻直千金。花有清香月有陰。歌管樓臺人寂々。鞦韆院落夜沈々。

春の郊外

麥、菜花、れんげ、一は緑に、一は黄に、一は紅に野の面を着色し、かなたの堤、こなたの畦には、すみれの紫色なる、土筆の薄茶色なるもあり。鎮守の森の樹の間に見ゆる一朶白雲は問はでもしるき櫻花、色といふ色をあつめて描きなせる極彩色の景を薄絹のやうに霞のなびけるを、春風ゆるく吹きとけば、その絶間よりみだれて靡く青柳の糸も見え、動くとも見えで畑打つ農夫の姿も見ゆ、胡蝶の舞に雲雀の音樂、若草の上に休らふ牛の鳴聲は時にとりてのベースとも聞ゆ。

賤が藁屋もまた此の畫中に缺くべからざる景物。日

あたりよき家の前の空地にむしろ敷きて孫遊ばする老婆が片手わざに絲紡げる。其の傍に鶏犬の優々として遊べる。いづれか長閑ならざるべき。家の内には嫁の手わざにや機杼の響せわしきにひきかへ、前の小川の清き流に、家鴨悠々として泛ぶ。

春なれや名もなき山も朝霞
山櫻ちるや小川のみづ車
春の日の念佛かるき野寺哉
原中や物にもつかず鳴く雲雀　芭蕉
雉の尾のやさしうさはる菫哉　秋色
春風の吹きとく絶えまより亂れて靡く青柳の絲
いつ迄か野邊に心のあくがれん花の散らずば千代も經ぬべし



花咲けば櫻つゞきに踏みわけて野中の草を道になしけり　[illegible]

花見の景趣

月見て樂しむは風雅の人、雪見て喜ぶは家富みて世渡りのせちからきを知らぬ人の贅澤。貧しき身は、月に向はゞ却て斷腸の媒となるべく雪を見ては、坐ろに着る衣の薄きを感ずるならむ。唯貴賤上下男も女もおしなべて心の浮き立つは花見にぞありける。

日ごろ負ふた子に髮なぶられながら煮炊き洗濯たちぬひに暇なき裏棚住居の貧婦も晝に夜に綿埃りに塗る

る紡績工女も、花見としいへば、一枚の晴着に身を飾り、嬉しげに出でゆくさきはいづこ、手に持つ風呂敷包みの中やなに。

花はみよし野、嵐山、さては隅田川に限るものかは水村山郭到る處に見るべき花はあり。咲き滿てる花の下に筵敷きて取り出す行厨に花の散り込むべき汁も膾もなく唯手料理の煮染と握り飯とのみなれども、八珍の美味にも勝りぬべし。一口二口飲みたる酒に時ならぬ紅葉を散らすもあるめり。土筆たんぽゝ、れんげ、すみれの處せまきまでに生ひたるを摘み取り、あるは鬼ごつこなどして永き日を遊びくらし、入相の鐘の花に響くころ、うちつれて家路に歸る。げに半日の花見に十年の壽命も伸ぶる心地やせむ。

名園の中に紳士淑女、雲の如くに簇り星の如くに列り、綺羅紛黛、花と美を競ひ、酒は泉の如く肉は岡の如くなるも花見なれば、一樹の蔭、一瓢の酒に陶然として醉ふも花見なりけり。

木の下に汁も膾もさくらかな　芭蕉

さくら花咲きにけらしもあしびきの山のかひより見ゆる白雲

山さくらさきそめしより久かたの雲井に見ゆる瀧の白糸

俊頼

咲けば散る咲かねば戀し山櫻おもひたえせぬ花の上かな

中務

けふもまたゆくての花に休らひぬ山わけ衣袖にほふまで

兼好

思ふどちそこともしらず行きくれぬ花の宿かせ野べの鶯

家隆

ゆきくれて樹の下蔭を宿とせば花や今宵のあるじならまし

花見に招く文

庭前のさくら今を盛りと咲きそろひ候に付御覧願ひたく、御招き申上候は御婦人方のみに御座候　間御さしつかへもおはさずは十時ごろより御入來下されたく候何も御馳走はえ致さず。

一、向附　鯛煮附、うど　一、吸物　白魚すまし
一、御飯、香の物、浸し物。
外にすし、豆腐田樂

いづれも私の手料理にて外に御馳走は何も御座なく

候さやう御承知下されたく候かしこ。

雛あそび

舊き儀式にはいとも優美にして且つ子女教育の意をこめたる美風多きが中に、雛祭りばかり女兒の家庭教育にふさはしきものはあらじ。あたりまばゆき金屏風燃えたゝんばかりの紅氈もて飾られたる雛壇、見るだに心のあらたまるを覺ゆ、翠簾垂るゝ處、綏かに座を占めたまふ男雛女雛の相好端麗にして和氣靄々たるに對しては、夫婦和合の美を悟るべく、五人囃子に三人上戸、貴賤おの〳〵樂みあ



ることを知るに足らむ。三寳に供へたる菱餅は野人献芹の意にや、花瓶に挿したる桃の花のまだ蕾がちなる御雛にかしづく乙女子の、ゆくする美はしき實を結べとの寓意にや。市松人形に武者人形、古き新しき數々の人形は、皆愛らしく皆勇まし、人の妻となりてかゝる良き子を設けよとのこゝろならんかし、小さき竈に鍋釜、さては水桶、庖丁、俎、膳、椀、皿、鉢、德利、盃までもとりそろへ、ここに料理の小研究會を催し、賓客もてなす小主婦は、やがて未來の良妻賢母、幼き時より、家事の一端、接客の道を知らしめんとの用意はげに周到なりといふべ

し、かゝる優美にして、しかも有益なる遊は、西洋諸國にありやなしや、いかに日新の世とはいへ、かゝる美風はいつまでも保存したきものにこそ。

桃の節句に人を招く

けふは陰暦桃の節句なればとて例年の通り雛壇を設け候　娘よし事主人となりてお客さませんとて大騒動致し居申候本　年　新に買ひとゝのへし雛もこれあり少しは御目さきも變り申すべく　候　間、よしの饗應にては御馳走は覺束なく候へども皆々様正午前より御こし下されたく主人事、獻立の最中にて暇なしとの事に候故私　代りて御案内申上　候。

たらちれのつまゝすありや雛の鼻　蕪村

春の旅行を誘ふ

春は今うるはしき最中と相成り鳥さへ蝶さへ舞ひ歌ふものを、なにとて此の永き日を畑の都に送るべきかねて望みの京見物は今ぞと思ひ立ちしを吉日と今日午後一時の汽車にて母と兩人京都へ一泊旅行致すべく候餘り火急の事とて御用意の程も如何と存じ候へども私　共もほんの一枚の着替持參致すだけにて髮は例の手づくねの束髮いと手輕きいでたちに御座候間せひ御同行御勸め申上候使の者へすぐ御返事下されたく候あら〳〵。

蒲團きて寐たる姿の東山。
一と通り彼岸さくらの咲き散りて日永にめぐる嵯峨か太秦。
見渡せば柳櫻をこきまぜて都ぞ春の錦なりける。
大堰川月と花との朧夜にひとりかすまぬ波の音哉。
春は花いざ見にごんせ東山いろ香あらそふ夜櫻やうかれ〳〵て粋も不粋も物がたい二本ざしでもやはらかう祇園豆腐の二軒茶屋みそぎぞ夏はうちつれて河原につどふ夕納涼。
眞葛が原にそよ〳〵と秋の色ます華頂山、時雨をいとふ傘のぬれて紅葉の長樂寺。おもひぞつもる圓山にけさも來て見る雪見酒そして櫓のさしむかひ。
千里鶯啼緑映紅。水村山郭酒旗風。南朝四百八十寺。多少樓臺烟雨中。

運動會の賑ひ

ことし四月、學年試驗も滯りなう濟みければ、五日といふ日に、例の通り春季運動會を校內の遊步場に開かせたまひぬ。何くれの事去歲に比して一きは優りたり、いで其の詳況を記さん。

校前には綠門を設け草花もて運動會の文字現はせる大額を揭げ、國旗を交叉す、其の傍に受付所あり、胸に紅のリボン插したる生徒居並びて來賓を案內す、門を入りて左側に揭示板あり。會場の略圖と當日遊技の番組とを大書す。會場は中央に圓形の埒を設け、南手に賞品授與席、來賓席、父兄席などの設あり、また其の側に樂隊席あり、何れも上に天幕を敝ひ後に幔幕を張り、軒には數多の紅燈と國旗とを連揭し、机腰掛の配置いと整然たり。東西の兩方は各學校生徒席、一般觀覽席とし、北方は運動準備所幷に本校生徒席とし又場內三ヶ所に摸擬茶店あり。五年生手料理の、すしてんぷら、汁粉などを鬻ぎて客を迎ふ。會場の中央には一長竿を樹て、竿頭に大國旗と長旒とを飜し、これより數條の綱を引き渡して無數の紅燈と國旗とを吊したれば五彩爛然として目もあやなり。開會は午前九時との定なりしが、定刻前には來賓席も一般觀覽席も人滿ちて空席なきまでに至りしは、いかに我校の運動會が世人に歡迎せられつゝあるかを知るべく嬉しさ限りなし。やがて定刻となり、號鐘の響きと共に勇壯なる音樂は初まりぬ。滿場靜まりきつて待ち構ふる庭に、準備所より徐々と繰り出し來る一年生の一隊、教師の號令に從ひ海老茶袴の裾高く步調を揃へて進み、來賓席に面して靜止すと見る間に分列を作り、やがて初むる徒手體操、綏除節にかなひ遲速寸毫も違はず。恰も一人して動作するが如く、しかも一擧一動に力ありしは、見る人の目に留まりしなるべく、けふの運動會の序幕は、まづ多大の成功を以て閉ぢられぬ。次は二年生六十餘名の啞鈴體操、こはまた音樂につれて歌ひながらする體操にてアンビルコーラスとは即ち是れ唱歌の聲と啞鈴の音とは音樂の節奏にかなひて一絲亂れず。人をして恍惚として、手の舞ひ足の踏むを知らざらしめき。次は三年生の球桿體操その姿勢の整へる

その動作の活潑なる、男子にも劣らじと見えたり。體操はこれにて一段落を告げ、次には一年生のスプーン競走數番あり。二年生の旗拾ひ。三年生の寶拾ひ。四年生の提灯競走など、いづれも數回あり。梅櫻桃李とり〲に愛らしき諸孃が、競ひつ勵みつ、往きつ戻りつ、馳せ違ふさまは、時ならぬ嵐に百花の撩亂するにさも似たり。勝ちて悦ぶあり、負けて落膽するあり演技する人のそれよりも、來賓席に居たまふ父母兄姉の胸や幾たびさわぐらん。午前のプログラムはこれにて終りければ暫し休憩す。摸擬店の忙しさ言はん方なし。團子めしませ、汁粉は如何さまですと、あらん限りの愛嬌振り撒きて客を迎ふるに、口髭いかめしき紳士も氣品け高き奥方も、うち笑みながら入りて腰かけたまひ、汁粉に髭を汚し團子に頰を膨らせたまふ。此の間樂隊は絶えず節おもしろき新曲を奏して興を添へければ、和氣雍々として運動場に滿つ。

かくてまた一聲の號鐘と共に午後の遊戯は初まりて午前に比して嶄新なる趣向の多かりし中に、炊事競走といへるは、合圖と共に出發點を走り出で、途中に落ち散りたる手襷を掛け前垂を着け、手拭を被り、筍鼻緒の杉下駄を穿き、水入れたるバケツを提げて出發點へ歸り着く競走にて、幾十のおさんどんは場內を馳け廻り、手拭落すあり、手襷忘るゝあり、バケツの水こぼれて殘り少きあり。滿場笑ひどよめけり。看護婦といふは、これも競走の途中に看護服帽など手早く身に着け、繃帶、手に取りて馳けゆき、地上に横はれる人形に繃帶を施し、そを抱きてまた出發點まで還る競走にて、これも大喝采なりき。其の他コントラダンス、花渡し、花車、源平毬投など何れも面白かりし中に、最もめざましきは四年生の薙刀體操なりき。五十餘名の女丈夫、白鉢卷に袴のもゝだち高くとり、薙刀小脇にかいこんで凛と立つたる勇ましさは、昔の巴板額もかくやあらんと思はれたり。やがて號令につれて一上一下一進一退、かげらふ、いなづま、風車、縱横自在なる演技には、觀る者感歎せぬはなかりけり。

かくて豫定の番組を演じ了り、一同集りて君が代の曲を歌ひ我が校の萬歳をことほぎて散會せしは、たそがれ近き頃なりき。

立志の栞

奮闘的婦人の半生
（赤手巨萬の富を重ねし婦人の半生）

胡劍生

▲名もなき草花

花にも色々種類がある、艶陽四月、満都の士女を酔はせる櫻の色もあれば、氷風雪雨の重圍の裡に、一輪勁きを誇る梅の花もある、更に草花の部に入ると、夏の夕闇にほのかに匂ふ月見草、偖ては人跡絶えたる深山幽谷に、自然ながらの清香を放つ、名もなき草花など、種々様々であるが、夫と同じこと、人間社會の花とも稱すべき、婦人にも色々種類がある、交際社會の花と唄はれて、翩々蝴蝶の如く舞ふハイカラ婦人もあれば、錦心繡腸を吐露して、人情を歌ひ花月を詠ずる所謂閨秀作家もある、更に進んでは、社會の表面に堂堂と現はれて、目覺ましい活動をしてからに、公衆の喝采賛美を一身に集めると云ふ天晴れ女豪傑もある、婦人には此の通り、種々様々の階級があるが、今茲に掲げやうとする森川雪女は元より、人生の紛華場裡に馳驅して、交際界の女王となるやうな資格のある文明的美人でもなければ、また一枝の筆、千秋を照らすと云ふ才媛でもない、然うかと云つて、社會の公共事業に斡旋して、華々しい働きをすると云ふやうな、新智識や新學問のある婦人でも更らにないのである、たゞ家庭と云ふ、極く少さい天地に潜んで居つて、既に倒れかゝつた家運を挽廻したと云ふにとゞまる、名もない一婦人で、勿論彼の當節柄の賢婦人や、文明流の教育を受けた學校出身の細君のやうに、良人の髪を梳り、髯を拂ひ、靴を磨き、外套の皺を熨し、若しくは旦那様を玄關に送り迎へすると云ふやうな、奥様的の作法を辨へた婦人でもなければ、また固より、文藝などの嗜みのある婦人でもなく、さうかと云つて、生れ

てから割烹學などと云ふものを習つた覺えがないから、蝦茶料理を獻立てゝ、客に振舞ふなどと云ふ能力のないことは、云ふまでもなく、一體が無敎育者で、家政とか經濟とか云ふ樣な事は全くその頭腦にない、謂はゞ野生の一草花で、固より彼の女に、櫻花の嬋妍や、牡丹の濃艶や、菫の幽婉などを求むるのは、無理の注文であるのだ、が彼の女には、櫻にも菫にも、乃至牡丹にも芍薬にもない貴むべきものが一ある、夫れは何であるかと云ふに。

▲奮鬪的精神

である、更に切言すれば自助的精神即ち、如何なる浮世の困難と出會しても、百折撓まず必ず之に打ち勝つと云ふ精神である、當今の女學生は、文明流の辭令に慣れ、進退動止節度に合ひ、文明の智識と學問とは遺憾なく具備して居るが何うも、斯の自助の精神とか奮鬪的氣力と云ふものに乏しい、是れでは假令ひ一家を組織しても到底此の世智辛い浮世の狂瀾怒濤を凌ぎ退けると云ふことは、思ひも寄らぬ話である、して見れば、當今の所謂文明流の婦人は、よろしく此の無學無敎育の雪女に學ぶ所あらうと思ふ、一體この雪女は如何なる婦人であるか。

▲名譽の凱旋紀念

深川行き電車を終點で見捨てゝ、大通りを行くこと、五六丁、森下町の右側に、店飾りは左程立派ではないが、背後に黑塗りの巍々堂々たる大土藏を控へて、鷄卵問屋と云ふ看板を掲げた森川商店と云ふがある、是れこそ本記事の主人公雪女が、其良人（森川新之助）を助け勵まし、孱弱き女の細腕で、奮鬪し、あらゆる浮世の艱難辛苦と戰つて、遂に之に打ち勝つた凱旋紀念で、謂はゞ勝利の榮冠である。

元來森川夫婦は、千葉縣印旛郡大杜村の百姓、其の界限ではマア可なりの百姓であつた、で雪子が新之助に嫁したのは、二十歲の春であるが、雪女が嫁してから、六年と經たぬ間に、元來極めて好人物の新之助は、

他人の借金の保證人になるやら、善くない者に欺まされて、投機事業に手を出すやらして、非常の借財を背負ひ込み、二進も三進も行かなくなつて來た、其處で年久しく住み馴れた故郷を後に見、最愛の妻子を振り捨てゝ、東京へ夜逃げをして來た、此時跡に取り殘された雪女は、生れたばかりの乳呑兒を抱いて、食ふに食なく、被るに衣なく、搗て加へて夜晝債鬼に責められる、殆んど途方に暮れて居たが、斯うして居ても仕方がないので、非常の決心で知人から惠まれた天保錢三枚を懐にし、小供は親戚に預けて置いて良人の跡を趁ふて、東京に奔つて來た、何にしろ財布の底を叩いて、僅に



△天保錢三枚

の旅用であるから、勿論當り前の旅宿へ泊るなどと云ふことは、出來ないので、寒中石を枕に路傍の杜蔭で夜を明し、やう〳〵東京へ辿りついた、之れが明治十九年の暮であつた。

斯様に乞食旅行同様の四苦八苦で、東京へ着きは着いたが、固より廣い都會のことであるから、容易に良人の居處を尋ね當てることも出來ず、爾うかと云つて親戚や知り人がある譯でもないから、差し當り身を寄せる所もない、一時凌ぎにある餅屋へ住み込み、荒くれ男

と一所になつて、重い杵を揮り廻はして一生懸命に專の賃餅を搗いて、爰に五圓の貯蓄を有する身となつた、今迄一文無しの雪女に取りては、此の五圓の金は、實に龍の腮の玉も啻ならずであるから、天へも登る心地で、勇み進んで、先づ自分の立脚地を固むべく獨立で八百屋を始めた、で毎日

▲天秤を肩

にしては、當てもなく靑物々々と呼びながら、市中を賣り廻つて居たが、何を云ふにも五圓の金であるから、忽ち資本が切れて商品が無くなつてしまう、其時は何時も、松林に飛び込み、枯れ松葉を搔きあつめ、これを燃き付、として市中へ賣り歩きなどして倦まず撓まず、生活を續けて居たが、爰に偶然にも、雪女をして成功の緒を握らしめた、一つの出來事が湧いて來たのである。

▲奮鬪の數年間

雪女をして成功の緒を握らしめた、偶然の出來事と云ふは、或る日例の如く天秤棒を肩にして、靑物を擔ぎつゝ日本橋は兩崎町の土州邸内に荷ぎ込だ所が、庭先で若い衆が丁々發矢、掛聲勇ましく、盛んに擊劍の稽古を遣つて居つた、餘り其稽古が面白いので、暫時傍觀して居ると、若衆は調戲半分に雪女に向ひ如何だ一本參らぬかと戯れつゝ强ゆるので、こいつ小癪なと負けぬ氣の雪女は、襷甲斐々々しく、竹刀の代りに、商賣道具の天秤棒を大上段に振り翳して、場の眞中に突つ立つたが、隙を窺ひ、面を打つよと見せて、腰を拂ひ見事に相手を打ち斃したので、喝采暫らくは鳴りも止まなかつたが、此時奥座敷に居た殿樣は、此の事を聞し召され、小氣味よき女であると大層おほめになり褒美として、毎日彼女の靑物を買つて遣らうと仰せられて御目通りを許され、剩へ非常に御馳走になり、頗る面目を施して、其日は夫れで退出したが、是れが緣となり、毎日土州邸に出入して、靑物の御用をつとめるやうなッたので、市中を賣り歩く手數が省け、萬

事好都合になつて來て、翌くる年の七月には、五圓の金が廿五圓に殖えたから、今度こそは愈々一廉の商ひを爲やうと喜び勇んで居ると、不思議にも日夜行衛を捜して居た良人の居所が知れたので、殆んど夢に夢見る心地でます／＼

▲前途の光明

を得、滿身の勇を奮ひ起して人生の戰闘場裡に上るべく決心した、其處で先づ廿五圓の在り金を、悉皆良人に引き渡し、近郷近在から、鷄卵を仕入れ來らせて、自分は其の鷄卵を籠に



入れ、市内を此處彼處と賣り歩いて居たが、此の時分の雪女の辛抱と云ふものは、到底尋常人の堪え得る所ではない、朝は未明から夜は深更まで、寒風膚を劈く夕も、篠つく雨の激しき朝も、垢じみた單衣一枚に、破れ股引を穿き、夫れで草鞋は何時も途に落ちて居る古草鞋を拾つては履き代へ／＼、難義苦行を續けたが時には玉子の品切れとなる時があッて商賣出來ぬ時は淺野タンクの石炭運搬の日雇稼ぎとなり、土方人足の仲間入りをして、眞黑になつて男優りに精根限り稼いで、若干の賃金を

得ては、夫れを資本としては又鷄卵を仕込み、更に商ひに出掛け〳〵するを常として居たのである、今其商賣に根氣の善い一例を擧ぐれば、行商して宿屋や料理屋などに行つても、注文を取らないうちは、三度や四度は愚かのこと、幾度でも行く、日本橋傳馬町の旅人宿山田屋の如きは、

▲四十八回目

にやうやく賣り込み、今日までも得意として繼續して居る、斯う云ふ精力主義一點張りの婦人であるから、最も身體が人並み勝れて達者の所爲でもあらうが、產後の如きでも、十五日と經たぬ内に商賣に出掛ける、で大概の者は、雪女の根氣の善いのに感服して、根氣負けして、到頭最後には、其の得意となつてしまうと云ふことであるが一度得意になつて見ると、正直で一意專心得意大事と勉强するから、何しても他所から買ふ氣にはならぬと云ふことである、天は自ら助くる者を助くとは、雪女の如き婦人を云ふのであらう。

▲海底の眞珠

實に天は自ら助くる者を助く、二十五圓の資本で鷄卵商を始めた、雪女夫婦は、一年と經たぬ間に、百五十圓の貯蓄ある、前に比べると頗る富有の身となつた、其所で愈よ東六間堀に九尺二間の家を出し、彌勒寺橋際に引き越し其所で看板を出して、店商を張つたが、商買の暇の折には、たゞは遊んで居ず、近所の飲食店に手傳へに行き、水汲みとか、庖丁研ぎとか、普通の婦人の厭やがる仕事々々と選んで働いたもので、冬などはヒヾがひどくて兩方の手から鮮血滴るのも格別苦にもせず、稼いだと云ふことであるが、指の爪を剝いて働くとは、寔に此の事であらう、で十餘年の間と云ふもの、殆ど草鞋の紐を解かずに稼いだのである。フランクリンは「貧乏神は稼人の家を覗くとも決して之に入ることなし」と云つたが、實に稼ぐに追ひつく貧乏なし、若し雪女のやうに正直に勉强して、夫れで成功しなかつたならば、夫れこそ世の中は闇黑である、

所が決して世の中は闇ではない、

▲十年辛棒

の甲斐があつて、雪女の正直と勉强とは、遍ねく世の中に知れて來ると共に、信用がついて來て、商買は日に日に繁昌して、宛ら朝日の昇るやうに、身代はめきめき太つて來た、で彌勒寺橋に移つて來てから五年も經たぬ間に、年中の賣上高が萬を以て數ふるやうになり今では十人の雇人を使ひ、數十の家作建物を所有し、一箇年の營業高十萬圓に上り、納税額は千餘圓に達すると云ふことであるが、夫れでも雪女は昔しのことを忘れないで、四五年前に行商こそ止めたが、前垂懸に襷甲斐々々しく、毎日多くの雇人と一所になつて、立



ち働いて居て、決して贅澤の眞似は爲ないと云ふことで、まだ一度も髮結ひに髮を結はせたことがないさうである、雪女が半世の奮鬪史は、ザット斯うであるが、彼の女は平生自分の無學を深く恥ぢ、子供には十分の教育を仕込みたいと、常に人に語つて居るさうである、昔しの人は惡い女房は一生の不作だと云つたが、雪女のやうな辛棒の善い精神の堅固の婦人を、女房にした新之助は誠に多幸である、當今の新らしい教育を受けた、婦人諸君に向つて、雪女の眞似されよと云つたならば、必ず怫然と色を爲すであらうが、併し雪女の總てを眞似られよと云ふのではない、たゞ其堅忍力行の自助的精神にあやかりたいものである。

觀察

新郎新婦へ

湖處子

▲明治四十年を迎へて、予も大分年を取つたが、是でも嘗て一二度位は花婿であつた事もあるので。二度の花婿？、いや何其れは別に浮氣の沙汰でも艶福な譯でもムらぬ。正直の處偕老同穴を誓つた女に死なれたので、致し方なく友人の周旋で兩度結婚。而して其の對手が比較的に若かつたので、其の方を花嫁と云はう爲、僕まで花婿と云はれたので、旣う花婿どこではない立派な葉婿、其も若葉ならであるが、全くの朽葉婿と來て居る、世間の口も隨分惡い。

▲御世辭にしろ、惡口にしろ、兎に角二度妻帶を致したので、普通の人より正に一倍婦人に對する經驗を得たとのとは、道理上言へないこともなからうと思ふので、昔の失敗の懺悔旁、世の新郎新婦の方々へ、一言の勸告を致したいと思ふ。

男があれば女がある、男女があれば夫婦がある、夫婦のあれば隨て玆に夫婦喧嘩がある、と云ふ樣な物で、喧嘩は夫婦間の約束の樣に見えて居る。其故に西洋にても Wife beater（女房撲り）など云ふ不祥な名稱がある。位である然らば是れ我が日本に限らない。世界通有である。然し如何に世界通有であるとは云つても、是ればかりは決して名譽でない。「犬も喰ない」ばかりでなく、第一蠑螈が喰ひさうもない。謹で新郎新婦に申す必ず夫婦喧嘩を愼みたまへ。

▲其は一朝一夕の事でない、十年も百年も、死さへしなければ千年も萬年も連れ添ふ中であつて見れば。始終一樣にのみは行かない、變りゆく境遇に伴れ、疾病患難の起るにつけ、種々雜多の事實事情の起るにつけ、隱れて居た缺點や、過失を互に發見するにつけ、怒りたきことも起り、詰りたき事も起る、隨分癪に障ることも起る。打ち撲りたい樣な事も間には起る。其處で忍耐の必要なのは、何樣が萬止むを得ない限は他

の方法を用ひて是非とも喧嘩を避けて戴きたい。若し是非とも避けられぬと云ふことならば、此が離縁の端緒であると考へて行つて戴きたい。

▲夫婦喧嘩は夫婦の孰から起るか。女の嫉妬深い性質と云ふか、男に特別の缺點があると云ふ塲合の外は大抵火元は夫である。男が默つて怺へて居るか、但しは巧く女を諭して往けば一家は丸く治まつて往く。此彼男が危いのである。女は受身の方である、男を責むべき所があつても、決して古今の知人ソクラテスの細君ザンチツパ女の如き特別な駿馬でない以上、決てて『こら、是は何だ』なと云ふ樣な口調で以て、男を責め着くるものは鮮い。故に僕は此問題に於て寧ろ新郎の方に告げて居る譯なのです。

夫婦喧嘩が離縁の本である位は未だしもである。到底合はないものなら、分れた上に又合ひ性を求めて一になることが出來る。幸福になることも出來るが、惡くすると精神的に愛する者を殺すのである。否罷り違ふと肉體までも併せて之を殺すのである。僕の如きは實際其の一人であると思ふ。何も我が手で妻を打ち殺したと云ふ事ではない、又妻をして自ら首を縊らしたと云ふでも無い、ツマリ妻の不行屆や、遉とした過失を一々咎め立てをしたり、止しても善き物の行衛を細

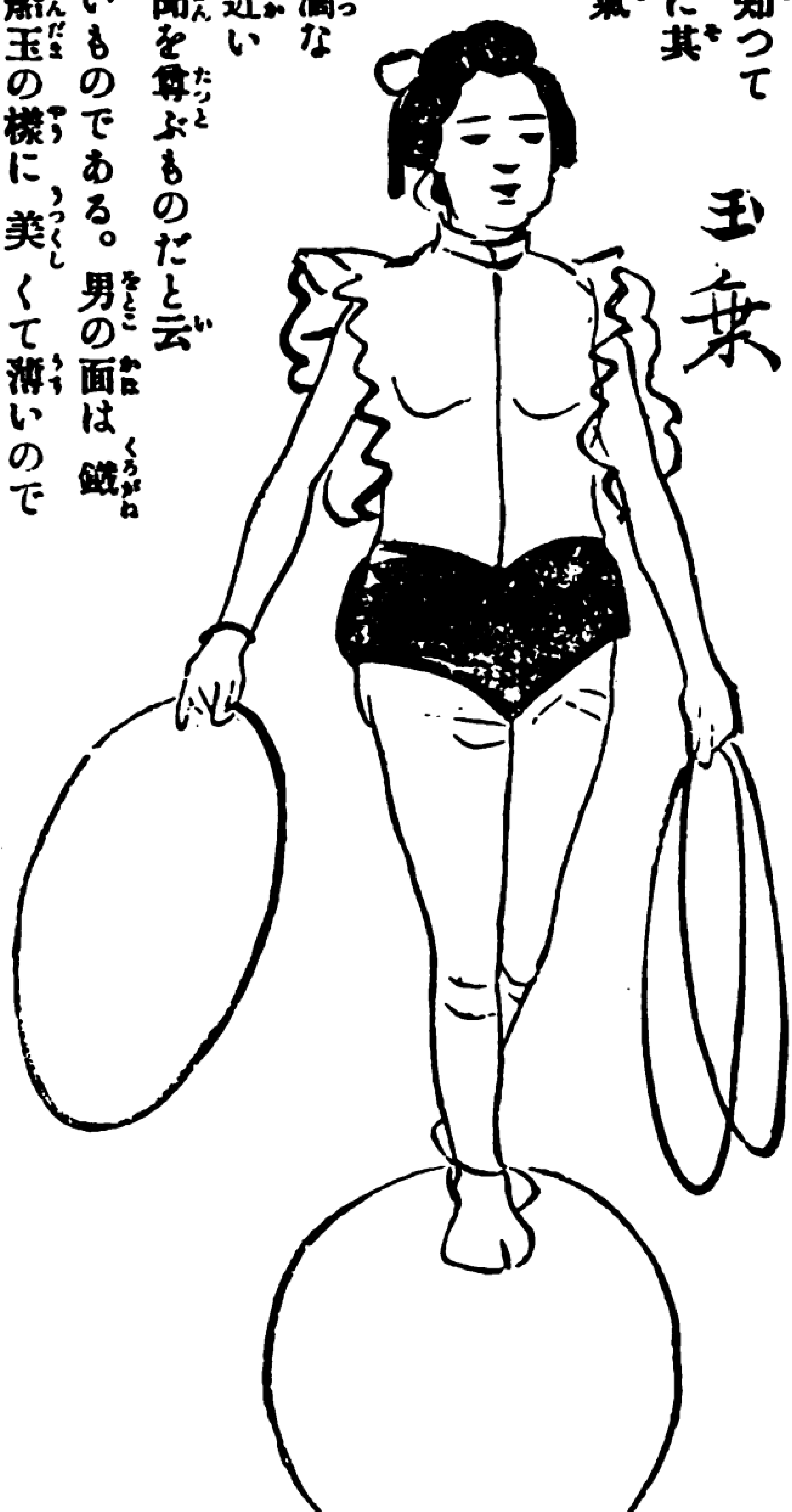


からしく追究して其處分を非難したり、自分と妻の智慧を比較して妻を遜と貶しめて見たりしたのである。男の方から云へば一時の怒である當座の戯に過ぎない。然し女の身になつて見ると、其が中々愛いのである、夫がもう自分を愛して居ないではないか、愛して居るなら其ばかしの事を其樣執着く咎めぬとて可ささうなものとも思ひ、又よしや猶は愛しては居るとしても、つまり斯樣な身の不束から段々夫の愛想が盡きはせぬかと、神經を傷め初むるのである。偶夫の歸宅が遲くなる、種々な邪猜を起す。是迄見知らぬ女客が來る。色々な心配を起すと云ふ樣になる。何時とも知らず神經が募る。何時とも知らず體が弱る。つい然までもない病氣のために大病を惹き起して死で了ふのである。女は絶望させてはならぬ。絶望は精神的の死である。精神的の死は軈て肉體の死である。僕はつくつく昨非を悔ゆる。下らない事を止して置けば善かつたにと思ふ、實に下らない事である、何にも今日取り上げて斯くと云ふべき物は一もない。其の下らない事の爲めに三千世界に唯一人の愛する者を殺したのである。聖書の敎に、夫たる者よ汝等も妻を遇ふこと弱き器の如くし、理に循ひて之と同に居れ」とあることを、人一人殺して後で始めて思ひ知つたが。既に晩かつた。是ばかりが僕の沈痛な恨である。

▲若し已むを得ないならば、聖書の敎の通りの理に循いて」之を諭すべきである。然すれば妻の方でも絶對に服從して却て不束なる身に新なる敎訓を受けた事を喜び同時に夫に對する愛敬を増すのである。然し好く考へて貰いたい。自分が果して妻を諭し責むるほどの資格があるか何樣であるか、妻も人間、自分も人間だ人間たる以上は過失があるに極つて居る。自分の過失を責むるものは誰もない。自分である、所が自分は其を責めて居ない宥して居る。故に自分は常に過失を犯しながら、毫とも自ら覺えて居ない。全く聖人の樣な面をして居る。若し古今の智人ソクラテスすら閉口したサンチッパ女ならずとも、其片腕などの女、例へばヲツプ、ヴン、キンクルの妻の如き悍馬頭からビル

ピシと責め立てられたならば、生きて居る空があるか、何樣であるかを考へて見て貰いたい、所詮夫婦は過失ある人間同士の集合である。故に互に同情を灑いで慰めあふべきが眞である。理を以て論した上に同情を以て慰め合つてこそ、始めて夫婦の情間と云ふものがあると云ふべきである。

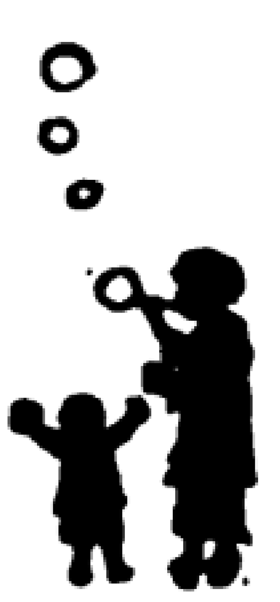
▲一體男女結婚をして差し向つて住むのである。夫婦互に對手方の何物たるを知つて居るべき筈である。而るに其處が未だ未熟無經驗の血氣盛の若い同士、愛情一點張の盲目同士と來て居るから一向に知つて居ない。知つて居ると思つても迂闊な事を知つてるばかりで手近い所の智識がない。女の名聞を尊ぶものだと云ふことにする氣の附かないものである。男の面は鐵の樣に厚いが女の面は風船玉の樣に美くて薄いのである。逢と觸るとパッと消える、其れほど女の面は薄い僅の事に直に傷かむ。直に消入る心地をするのであるから男子には何の感覺も與へない、一言の侮辱一片の戲弄が、既に女の面目を裂いて居る女は深く深く其言を心の内に鏤刻こんで、決して忘れないのである。否忘るゝことが出來ないのである。事ある毎に其言を言

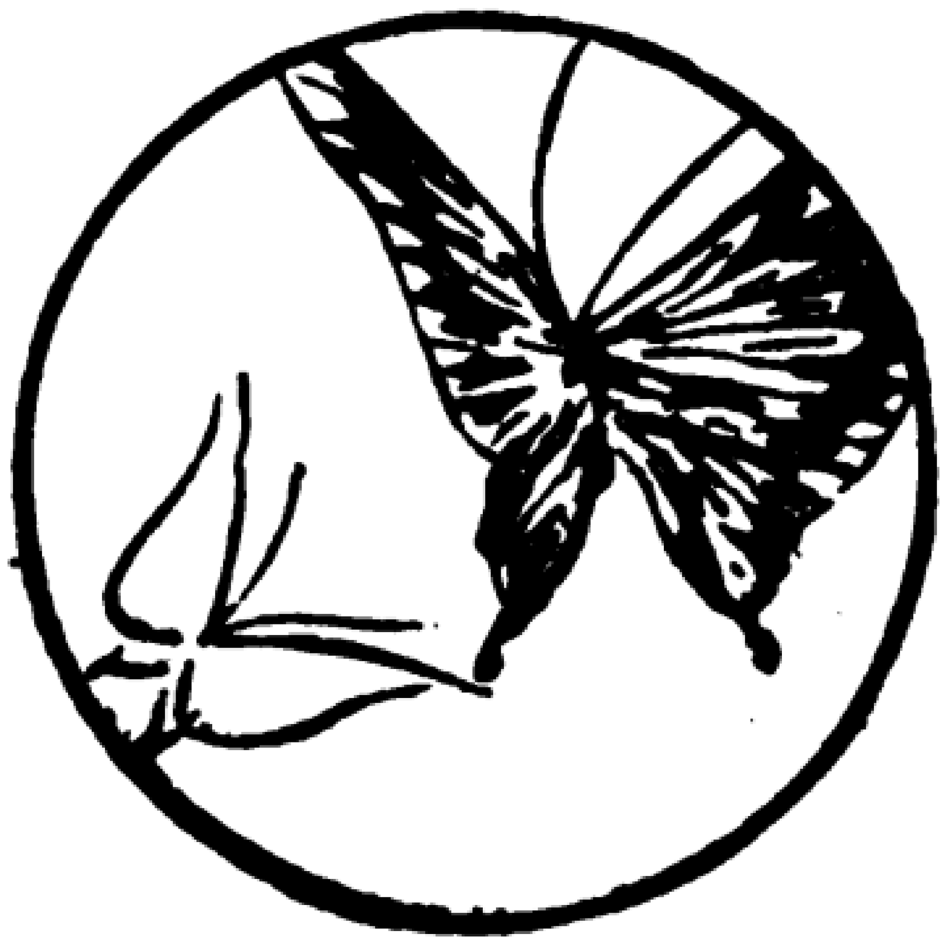


ひ出しては夫の無情を怨む。其は其時限である。其は根も端もない戯言であると、幾何辯じても回復が出來ぬ、其場は其で何樣にか濟しても、又後に其を言つては怨むのである。二年も三年も忘れぬのである。彼をして忘れさすまでには、他に與へた侮辱が返り打に我が胸に喰ひこんで終生の悔とならねば止まぬ。

▲男女の中は、水も洩らさぬ中でなくてはならぬ。其を男の一口二口の戯弄から段々女の心に愛情を逸する隙間を作らすやうな事では甚だ善くない。滑稽も好い諧謔も可い、偶には之を弄びて平凡化したる夫婦間の愛情を刺劇し蘇活せしむる効能もある。然し口は眞に禍の門で、効能よりも害毒の方が寧ろ多い、戯言も唯無邪氣に出れば何でも無いが兎角男と云ふ奴が意地が惡い。眞面目に言ひ難いことを戯言を假りて言はうとする、然樣でなくても無意識に戯言の中に本音が出る。其が眞に善くないのである。其の戯言が耳にある間は女も男と共に笑つて居るが、心に落つるとはつと思ふ。自分の事を指摘された者と思ふ。羞かむ考へこむ。悔しく思ふ情なく思ふ、其樣思つて居らるゝならば何故明らさまに言つて下さらないかと怨む。乃で男は却て困る。誤まる。諄々と其樣言ふ積ではなかつたと辯する。而して漸く女の感情を回復する、互に愛情を溫む。然し斯かる彌縫は既に愛情の破綻を示し彌縫の快味を感ずるほど、破綻の甚だしきを證するのである。斯樣な情合は不健全である。向上でない、夫婦の間に琴瑟の調和がない。死生相信ずる信頼がない。女の信頼を受けない男は始終後を顧ねばならぬ。社會に立つと氣慨が薄い、奮闘塲裡に橫行濶歩することの出來ぬ、敗軍の將に終るか、永久人後に在つて甘んじて居らねばならぬ。

▲故に聖書に又曰く「夫其婦を己が身となして愛すべし。婦を愛するは己を愛するなり」と此に相違ないのである。謹んで新郎新婦へ此の一言を獻げるのである。





當代の名物女

故奧村五百子女史の事

元祿

何時だつたか、先年然る地方の高等女學校生徒に、彼れ等の理想として居る、

○當代知名の婦人

の名を擧げさせたが、其の大多數は、故奧村五百子女史と下田歌子女史とに一致したさうである。處で、其の當時、餘りお口前の能くつて居らつしやらぬ例の所謂女子教育論者とやら仰せらるゝ御連中方が何樣這麼調子でもつて、女子の教育を進て行つて貰つては第一徒に百の下田千の奧村の出來損ひを製造するのみで、其れじやあ之れからの婦人はから始末に終へなくなつて仕舞はう、誠に困つた譯だ、甚だ嘆かはしい次第だとか何とかでもつて、大分眞目になつて、世の女子教育者を攻擊された向きもあつた樣に聞いて居る、成る程然う仰つしやられて見れば、如何にも御道理至極な譯では御座いますが、夫れかと云つて昨今の樣に、未だうら若い女學生を捉まへて無暗と家庭主義だ何だのと、餘り吹き込んで戴くのも頗る迷惑千萬の次第だ、可惜勉强盛りの十六七、未だ肩上げも碌に取れぬこましやくれたのが妾のハスバンドはね等と直きに之れだ、聞いて居る身になつても足まらないからよい加減な相手を何處からか見附け出して、あれ妾の兄さんよ等と頻りに氣障がる之れでは私共が何方とも軍配の上げて見樣が無い、畢竟は何方道角を矯めんとして却つて牛を殺せしの誹は免かれぬ事であらう。

と云つて、何も今更私共が局外者振つて兎や角小意地惡う申すではありませぬけれど、現に自分等の如きも、地方の學校へ出て居た時分には、矢つ張り御多分には洩れで、此の奧村五百子女史には少なからず

鼻毛を伸ばして居つた一人である、何でも一生懸命に勉強して、今に奥村女史の樣に偉くなつて世の中の人を驚かして遣らうと云ふ樣な考へは、絶えず念頭に去らなかつたらしい、第一其の頃の學校の敎師からして甚だ罪が深かつた、何かの講義の序に以て來て、少し間でも可ければ直ぐにやれ奥村は偉いの下田は出來るのと、淡い婦人の虚榮心を煽動てる、久しいもんだが其れでも流石に恐れ入つて謹聽して居るから頗る妙なものさ、其處へ以て來て血が未だ若い、經驗も至つて若い其麽談しでも聞かされると、何かしら心臓の邊りが變にむづ痒くなつて來て、餘り力み榮えのせぬ腕なから、無性に力んでも見たくなつて、終々まんまと人並に奥村五百子女史崇拜者の一人となつたのである。

嘗つて自分の郷里に、一人の甚だ

○面白い尼さん

があつた。

其の頃五十の坂を二つか三つか、色の淺黑い、肥滿つた脊の高い、眼球のぐり〳〵した、餘り小さからぬ口元のきつかりと引き結んで、見るから强つ狀な——面して至極饒舌家のお婆さんがあつた、機嫌能く饒舌らして置いたら、三時間や四時間ははて愚かな事、半日でも一日でも饒舌るは〳〵延べつ引つ切り無しと云ふ形、適ま蟲の居處でも惡い時に出會すると、隨分惡口する罵詈もする怒鳴り散らす叫喚き散らす、甚麽人だつて此のお婆さんに掛かつたら最後、忽ちぐうの音も出ず往生して仕舞ふと云ふ凄い豪傑、處で此の婆さん大いに自惚れで、天下我れに敵する者無しと獨りで威張つて居る。

けれど、此の婆さんの云ふ事は何處か沈痛として、能く味はふて見ると不思議に胸にぎつくり堪える樣な處もある、されば と云つて、元より敎育迚も丸で無い人の云ふ事であるから、饒舌る程の事が、怎うせ全然眞理に觸れて居るとは云はれませんけれど、其の怒鳴つたり叫喚たりする多愛も無い御託の中に何かしら人を魅する樣な深沈とした重みも籠つて居るので、だか

ら自分の事を露骨に甚く罵倒される樣な事があつても格別腹を立てる者も無く、無論氣にも止めず、誰れでも唯一口に面白い尼さんと先づ斯つて置く……と、自分の小さい狹い經驗から推して、未だ見ぬ戀のうら恥かしうも、其の頃六十に近い奥村五百子女史とは這麼人をもつと大きくしたのではあるまいか等と、時には遣る瀬無き想ひの止め度も無う妙な想像を逞しうする事もあつた。

處で、自分が始めて上京した其の年であつた、幾年隨喜の涙を禁じ得で、大空に物思ふ樣にひたすら見ぬ戀に憧れて居た奥村女史の温容に、ゆくり無くも接するの機會を得たのである。



其れは丁度夏は末つ方の放課後二時と云ふに、自分の學んで居た

○女學校の大講堂

で、同女史の演説のあつた時の事である、何事にも拔け目の無い伶俐な校長先生には、逸早くも全校生徒を一場に集めて仰つしやられるには、何でも彼の奥村のお婆さんと來たら、殆んど狂的に等しい厄介な先生なんだから、隨分演説最中やなんかでも嚔吹き出さずには居られぬ程の可笑しい事もあるであらうけれど、決して諸君方は笑つてはなりませんぞ、笑ふと彼の婆さん直ぐに怒り出して手が着けられなくな

つて仕舞ひます、聞けば、大阪邊の何とか云ふ女學校でも、同女史の演說最中、生徒の一人が其の身振りの可笑しさに失笑したとやら笑ひ出したとやら、婆さん怒るまい事か眞赤になつて席を蹴立てゝ去つたとやら云ふから、皆さんも怎うか其の意りで乾度笑はない樣に、充分袴の紐を締めて謹聽して吳れ」と云ふ樣な意味であつたのだ、……やがて演說が始まると、直ぐに其れを思ひ出した自分は、今現に面の邊り夢にも現にも外ながら慕はしと思ひ込んだ理想の御本體を拜まされた嬉しさよりも、一體大阪の女學校の生徒が、彼の人の何處が可笑しくて笑ひ出したんだらうと思ふと、其れがさあ無性と可笑しくて足まらぬ、お蔭を以て殆んど二時間に渡る長廣舌、幸福と欠伸の一つも出なくて濟んだのは、何よりの有難い次第ではあつた。

見れば、黑ずんだ單物の綿服に、例の小さな一輪の珠數を握り詰めながら、飽く迄熱心に息をもつがず、論じられるには饒舌らるゝには、舌端火にもや燒けなん畑にもや燃えなんかとばかり、滿場唯肅として聲無く、奇しき迄神々しい凛とせし面貌のふうはり、輪廓分明として虛空宛然白雲の流るゝ……人か我れか神か人か恍惚として仕舞つた、未だ見ぬ戀の昔ならいざ知らず、見れば目の毒聞けば猶更蟲の毒にもなる、いやもうすつかり、義理も人情も恥ぢも忘れて年甲斐も無く恐れながら逆上せ上がつて仕舞つたのである。

終其の二三日前の事であつた、恭くも海老茶袴の御開山、一子相傳大前髪庇髮華族前髮の本家御本元で居らせられる處の下田歌子女史がよせられて、矢張り同じ場所で演說をされた事があつたが、所謂粹で高尙で人柄とやら云ふ彼の人特有のぞつとする程美しい、誰れにも決して眞似の出來ぬしやなりとした如何にも品の善い鮮明な貴族的の擧動と、此の奥村女史の質實素朴にして、何處やら小供らしい天眞爛熳な無邪氣い體度とが妙な對照を爲して、少なからず我れ等の感興を湧かしめた事は、恐らく誰れも同感であつたらしい。

其れから越えて其の明くる年、不圖自分は去る

○知己の家

に訪問した時、折能くも又計らず女史の風骨に接するの光榮を得たのである。

が併し、何でも其の時は、丁度其の處に來合はせて居つた一人の髯の美しい色の小白い生若い青年を捉まへて、何事か頻りと例の同女史專賣の氣焔を吐いて罵倒して居られる處であつた。

御前は屹度何處かに取り落して忘れて來たのであらう、道理で女の腐つた樣で一向意氣地の無い骨なしだもの……とか何とか、若い女の私共には外ながらにも



聞いてる丈でさへ、面赤うする樣な事を平氣に怒鳴り巻くつて居られたには、流石に面喰らはざるを得なかつたで、其の時自分は這麼事を腹の中で考へた成る程此の恐ろしい見幕では、聞けば女史が朝鮮に設計しかけられた或る事業の事に就いて、嘗つて外務省へ怒鳴り込まれて、當時洋行歸りのハイカラ次官を散々な目に逢はされたと云ふのも、強ち迂詐ではあるまい、何樣西洋仕込みの男女別あり禮義は婦人の手前人知れず袖鏡も見兼ねまじき氣取り屋の優男を捉まへて、頭から此の野郎ごなしだから溜まり事はありやしない、怎うだ此の青二才、俺を誰れ

だと思ふ、間拔け奴箆棒め彥德面め」と迄云はれたか怎うだか知らぬが、思ひ樣啖呵を切つて飛んだ野洒しの一幕、可哀狀に次官先生赤くなつたり靑くなつたり言句も繼げぬ、途端、男恥かしう女恥かしう傍若無人落花狼籍、突然卓子目掛けて飛び上がり樣、くるりと裾端折つての大安坐には、前代未聞空前絶後外務省立ち始まつてより決して無い圖な騷ぎであつたと云ふ事であると、はて此の男餘程の果報者と見えて、彼れ程女史の逆鱗に觸れては居つたが、女史が得意の凄い十八番の拜觀を命せられなかつた丈が、命拾ひの大助り怎うやら漸つとお蔭樣でほつと胸撫で下した。

其の外女史に就いての經歷談やら逸事談やら、間接に色々人に聞いた事もあるし、猶當時の新聞雜誌等で見た事もあるけれど、自分が直接に女史を面の邊り見て、實際感じたのは、唯此の前後兩度の場合だけであつたのだ。

改めて申す迄も無いが、奥村五百子女史は實際偉い女であつた、明治聖代の傑物、現代婦人の名物女、今古我が國では甚だ稀に見る處の女丈夫であつたに相違ない、だから何事にも至つて經驗の淡白とした虛榮心の強い、其れでもつて根が至極お人善しと來て居るのだから、口でも遠慮なしにあんぐりと開けて居つたら何處からか牡丹餠でも轉げ込んで來やうかと云ふ、頗る具合のいゝ考へを始終持つて居らせらるゝ、當世今時の女學生さん方にあつては、

○女史の成功

が妙に頭腦を掩りつける、如何にも溜まらなくなつて來るので、其處で例の流行熱とやら、淸盛以後の不思議な熱病、御大層にも御奇特にも女史を理想の崇拜者と迄祭り上げたのは、強ち無理では無からうと思はれるのである。

だから、私共だつて何も缺點だらけの人類を捉まへて、飛んでも無い理想の表現として崇拜するのは愚の骨頂だと云ふ事を意味して申すのでも何でも無い、逆上せる者には逆上せさせよ、崇拜する者には崇拜せしめよ、唯一度は自分も犯される流行熱の、今更思へば之れも可笑しい戀は昔の懺悔談、流石に其の人の訃を聞いては、路傍の人の倒れた樣にも思はれ無いので、痛はしさに取り出す女史がありし寫し繪、俤偲ぶ反魂香の甲斐とてもなければ、有り難し稱名念佛の功力、未來は紅蓮の臺の上にと、あなかしこ。

時事寸言

△誇張說

男子五歩を進めば女子十歩を進む、最近十年間の統計によれば何れも女子が身心共に男子に倍加して進歩しつゝあるを證明せり、若し此勢を以てすれば男子は遠からず其月桂冠を女子に讓らざるべからずと米國の一婦人は氣を吐けり。

△婦人博覽會

博く婦人に關する内外の事物を蒐集すると共に各自の手になれる美術工藝品を陳列して女子の職業、生活方法等を紹介せん目的にて婦人博覽會なるもの組織せられたり有益の會なるべし。

△不穩當

女子師範學校の生徒七十名が同盟休校を試みたるは、新潟縣に於ける出來事なり、原因の如何は兎もあれ、少々不穩當に失せずや。

△文明と花柳病

近來花柳病の傳播は倍す猛烈となり、未婚者百人中にて男子七十五人女子四十四人、又既婚者にあつては男子二十人に對する女子四十七人の割合なりと。

△下婢の月給

婦人の職業範圍いよ〳〵擴張すると共に下婢の拂底を見るは何處も同じ事なるが、目下歐米に於ける廚室女の月給は普通四十圓より五十圓位なりと。

△理想的寄宿舍

米國紳士貴婦人の盡力により東京に理想的寄宿舍設立の費用として十萬圓の寄贈を受くる事となりしと云ふ、この目的は學生の風紀を矯正するにあり。

△五百子女史

故奥村女史は平生日蓮の教義には服せざりしも其の人格に太く敬慕して信念の固かりしは全くその賜物に外ならずと。

△白粉の撰び方

婦人が白粉を撰ぶに、第一裝飾第二香氣第三品質と云ふ順序を以てすれどコハ間違にて、第一は品質を以て主とすべきものなりと。

△母親の注意

小供の泣きし時又は眠き眼を擦るは單に視力を害するのみならず遂には眼の形狀を傷くるものなりと。

△婦人と年齢

婦人の一生中最も歡樂多く又煩悶多き時代は十六歳より三十歳位までにて、最も疾病に罹り易く死亡者の多きも亦此時代なりと。

△繪葉書に代る流行物

繪葉書の流行漸次下火となりし昨今一部の婦人間に嗜好さるゝは思麻帖てふものなりと、コハ祖母の時代、母の時代、及び己が娘時代等に

流行せし衣服類の小切をアルバム様のものに貼布し之に番號を附記して變りゆく流行のさまぐを説明せるものなりとこれは昔より有來りしものにて成程面白き工風と云ふべし。

△小學生徒の理想

某小學生徒に左の二問題に就て答案を徴したるに最も大切なるものとしては天皇陛下、天照大神、親、兄弟、生命、空氣、水、太陽、衣食金、智識等にて又最も不必要なるものは、苦痛、病氣、火事、蟲、美服露西亞人、乞食等なりき。

△娘を養育する費用

中流の家庭を標準として、父母が其娘を嫁入期(廿歳)まで養育する費用は、十年前まで千五百圓に滿たざりしも、此三四年以來は三千圓以上を要するのみならず之に結婚費を合すれば優に五千圓を費さゞるべからずと。

△酒と生産力

日本人一ヶ年の酒の量は平均一斗二三升にてこれが爲に失ふ國家の生産力は五千萬圓の多額に上るよし。

△家庭に及ぼす酒の害

酒は生理上に於て人を毒するのみならず家庭に於ても亦た時間と金錢とを浪費し、其結果一家の平和を破り、子女の爲に惡習慣をつけ且つ犯罪の原因を作るに至る。

△鼻は百病の本

婦人のヒステリー及び神經衰弱の病源は、其十中八九まで鼻腔内の故障に基因すとは昨今醫學界の新説にて、鼻と腦との關係の重大なるは實に衆人の豫想外なりと。

△男女兩學生の腦力試驗

米國の大學に於て男女兩學生が腦力の優劣を試みしに女學生は目の記憶力と、耳の記憶力に於て勝り、男學生は精神的の運動の速度と容積の觀念に於て勝り、其他は男女共に差異なかりしと。

△血族結婚と畸形兒

血族結婚の慘害は單に不姙症、流産に罹るのみならず、其生兒は概ね精神病、結核症、畸形兒、聾啞者の不幸を見るに至る、東京盲啞學校生徒二百廿六人中、血族結婚によつて生れたる者五十餘人の多きを見ると。

△道德論

世人は宗教家、教育家を以て特に道德の高かるべき者となし、政治家、實業家等を以て道德の水平線以下にあるものゝ如く考ふれど必しも然らず。

△非は兩者にあらん

昔の哲學者は細君に水を浴せられ、今の哲學者は細君に卵殼を抛擲す、是今昔の相違なりと新聞の諷刺畫に見ゆ、吾人は其の例の謎なるやを知らざれど、凡て家庭の波瀾は一人者の罪にあらずして、其責は夫婦共に之を負はざるべからず。



短文

◎印は入賞

◎旅立の前夜

韓國　保坂かす子

すつかり荷造りも出來、手さげの用意、旅着の仕度もすみ、心ひとまづおちつけば、そゞろに翌日の別れの悲しく、せめてわ、こよい一夜の話し明かさんと名殘惜しまるゝ母上とツイしめりがちに夜のふけるも忘れぬ。

異郷に行く身の何やかく兩親に賴み殘しゆく五ツになる愛らしき我子久雄のあしたわ、かあちやんを新橋に送るとて何やらうれしき夜でもあるやうに樂しみて床に入り、スヤ〳〵と罪なき寢顏見るにつけ今迄は本などにて見し別れのかなしさにおとせし淚も今は我が身のなつかしき親や子とあすの別れの辛さに袖ぬらしぬ

評、眞情流露

◎思ひ・出

小樽　白梅

私此の間大黑座へ芝居見物に行きました、藝題は母の心丁度去年の今頃見物した時も母の心でした、其の時は母樣と私とそれから私と一番中のいゝ幸子樣とでしたが、今年は其幸子樣も東京へいらしつて、私も人の妻となつて居ります、藝題も役者も一年前のまゝながら、かわつたのは私等の身の上、その頃はお嫁にゆく考などは更になく、唯々空想と虚榮にのみあこがれて、今の樣な境遇にならうとは、夢にも思ふて居りませんでした、來年又見物に行く時は、屹度人の母となつて居るのでせう。

◎一分間

京都　幽子

いつもの樣に御仕事をはじめて居ると、朝日が窓一ぱいにさして、離れの屋根に囀りかはす雀の影が障子にうつる、五羽、六羽。と思ふ間に俄かに、パツととび去つた。あとから大きい猫の影が、やがてそれも消えて解けおつる氷柱の板廂をうつ音がコトン……………コトン

評、奇警

◎櫻 花

京都 みどり子

天然の裝飾ともいふべき花おほきが中に最も人にもてはやさるゝは櫻花なり古人も花は櫻木人は武士といへる如く、げに櫻花ほど潔きはあらじその散る有樣は何にたとへんや、恰も忠臣の屍を戰場にさらすが如し古歌にも敷島の大和心を人とはゞ朝日に匂ふ山櫻花とありつる如く櫻は實に日本人の代表者たりされば吾等人と生れたるもの、豈櫻に劣りて可ならんや。

◎お 嫁 さ ん

神田 中上昌子

お勤めさんのお嫁さんを奥樣といひます。お商賣さんのお嫁さんを女房といひます。お宿のお嫁さんを女將さんといひます。お牛蒡方のお嫁さんを嫁といひます。ハイカラのお嫁さんをワイフといひます。

評、成程妙々

◎花 吹 雪

大和 西尾敏子

波樣のお部屋、櫻の古木を前に障子開け放ちて、今しがた歌留多取る手も忙がしく、我も人も懸命の折柄、風と一陣、生温き風の上氣せる面をなづるよと見し刹那、花の少女の寄手かあらぬか、風にまかせてハラハラと、落つるは花の吹雪か？、上座に置かれし燈火ハタと消えて、醉ひしが如き六たりの影法師夢のごと壁に長く。落花と共に亂れし歌留多札の月明りかすかに讀み得る、花より外にしる人もなし……。

評、彫法師に何者

◎梅 花

和歌山 山口文枝

此頃の暖氣に、後園の梅花如何にと、氣使ひつゝ家事の忙がはしきまゝ本意なくも一室に閉ぢこもり、裁縫に餘念なき折しも、聞ゆる鶯の初音に驚き、我を忘れて、立出づれば、馥郁たる香氣滿ちくて最早半ばは、咲き揃ひぬ、あわれ、見事に咲出でし此の花一人眺むるは、如何にも本意なき業と思ひ餘ぎ飾りて、日頃親しき、竹子の君へ梅の飾りを出しぬ。

降 雪

京都 みどり子

朝の風一入つめたく空には鉛のゆきゝあわたゞしく霰もふりくべき景色なり、やがて霰にまじりて綿のやうなる雪はらくとおやすみなく降る、しばらくにして地は一面に白く賤が伏屋も金銀をちりばめたらんかとうたがはる、木々の梢は時ならぬ六つの花を咲かせ青き松は重げに枝を垂れ南天の實いよく赤し。

袴

河内 田中八須子

隣の太兵衛さんの息子の嫁入に太兵衛さんが、祝言の式に列する時袴を着けて部屋から座敷へ來らるゝに歩きぶりが如何にも窮屈に見えた太兵衛さん自身にも、何と下といふもんは窮屈で歩きにくいもんじやの……といはれたから側へ行つて見て上げたら窮屈も道理、袴の一方へ

兩脚が？、

評、滑稽

梅日和

築地　堤いく子

梅日和とや云ひつべき空屋かの一日程近き梅屋敷とはいやと幼きを伴ひて出づ。梅が香にむせぶ鶯の聲おちこちよりもれて、紅梅白梅とりどりのわかぬ眺めにすゞろに深きまで分入りつ。幼きに乞はるゝまゝにそが爲なりし柴折戸そとおせばホ、ホケキョー一聲高く近き枝より羽ばたきあわたゞしふしら梅の二片三片おしや地にこぼれぬ。

下駄

栃木縣　玉野とし子

新婚の三つ目で實家に歸つたときのことでした、妹のふみちやんが妾の新しい下駄に目をつけ、とめるのも聞かずはき出したのは、案に違はず轉一轉、ふみちやんは泣きながらその下駄を……可哀相で叱ることもと出來ませんでした。

評　眞熱々々

花影

備後　立神壽子

麗い春の日がさして、今を盛りの梅の花の一枝が、窓の障子に影をうつして、さながら淡墨の繪の樣なるに、さと小鳥の影が一つ、美しい聲にふと氣づかれた愛らしいお孃樣が、あら鶯かと、窓の内面を忍び足にそつと障子の二寸許りを…淡墨の影はゆれて、一ひら二ひら花はこぼれぬ。

雛祭

栃木　白澤きく子

お母さん春ちやんのお雛樣は、あんなに新しくて立派ですのに、どうして姉樣のお雛樣はあんなに鼻がかけてゐたり、片髮がなくなつたり、それからあれには兩手がないのなどは、どうしたんですと、六つになる妾の妹が頻に母上に問ひ質すのでございます、母上は問はるゝに任せて、あれはお前の姉樣がお前より小さい時に玩具にして、あんなにしたのですと言はれた時妾は一入頑是なき子供の時が思ひやら　れたのでございます。

雀

上總　平井靜子

今朝戸を開て見たら　昨日よりの雪は思ひのほか積り何處を見てもよい景しきなれば、此景しきをながめながら御飯をいたゞこうと思ひ開ひろげて食事して居ると雀が二羽垣根にとまり、しきりと食を求めているけれど餌の爲見あたらないから、あちこち見まわして居るのを見て思はず食かけし、茶わんを持て椽がわよりばら〳〵とまいてやつた雀はびつくりして向ふの紅梅にとび移たが、すぐ降りて何やらひそ〳〵さゝやきながら、たちまち拾ひおはつてしまつた翌日より毎日連れ立て垣根にとまつて居る。

評、小禽有情

雪の朝

大阪　中西建子

總白く雪の夜は明けんとす、わらは例より早く起き出でゝ庭園をさまよ

ひぬ見ゆる限りは白妙の帷幄を下されたるが如し、然はれ植木棚なる紅梅の、身には白無垢まとひ笑みて吾れを迎へり、あゝ此時深くも悟りぬいかなれば寒さに堪へ雪に悩みてもかくぞ咲きほこるやと。實に吾ら必ず用ゆべきものは堪忍にこそ。

▲

大阪　花雪女

妾は今三年前満洲の野で名誉の戦死なされた、兄様のお寫眞に漸く綻び初めた白梅一枝を手向て居るので厶います、笑うて居るのは只二つの外は無數の未だかたい蕾はいづれも、又來む春に花咲く身を兄様は御國のために散り果て花は兄様のためにやがて散るので厶います。

人と花、嗚呼何といふ惜しい二つの犠牲で厶いませう。

春の夜

牛込　平塚白百合

朧にさして居る月影が歩めば共に歩むので、此淋しい一人歩によい路連が出來たと凝乎とみつめて見るとやがてドブンと。水輪が逐次に廣がつた其の中から何ともいへぬ心地のよい音が續いて起た　蛙の歌であらうこう人なれむりにみちびくやうなところ〳〵揃つて。

▲

本郷　かほる

霜にとざされて長き月影訪はざりし庭の築山に久しぶりにて、彌生二日と云ふ今日、新しき下駄をおろしぬ。土手のあたり只青々として、五分計りの小草此處彼處に、もえ出でゝ美しさえも云はれず。なほ〳〵此中には小雪もあらん、すみれもあらん、若々しき若草もあらん、今は只同じやうなる千ぐさのしな〳〵人の生いたちも其始めは此草のごと何れ變らぬものと思へばせめて此儘にてあらんと妾は思ひぬ。

磯邊の思ひ

尾張　白百合

あゝ如何に思ひ出多き磯邊なるよ、そは三年昔の夏の夕なりし、兄上と二人此磯邊をそゞろ歩きせしは……おゝそれよ其折兄上の吹きましゝハモニカの音に我は覺えずローレライの一曲を歌ひしが……あはれそも夢なりしか、我は今宵此磯邊に立ちて亡き兄上の昔を偲び彼の夜歌ひし一曲を小聲に低く口にすさびぬ。

評、星菫にあらずんば幸なり

雪降り

大分　加納豊子

今日は日曜で朝からの雪ふり、一番下の弟はおちやとう〳〵つて嬉こんで居る妹はお友達を大勢呼んで來て、そこらをびしよ〳〵ぬらしながら背手を赤くして、お飯事の眞最中弟は書生を相手に雪達磨で夢中になつて、丁度今よドンで目を入れる處であるお婆ア様はア、寒い〳〵年寄ると冬が一番いけぬ、わけて雪降り等は命も縮む思ひである、今日も廿一日だが是ではお大師様への御參詣も出來ぬと大こぼし扨私は？　之は又恥しながら和歌の一つも出來ないのであつた。

▲

秋田　星月董子

御正月に中尉に昇進せられた兄様が歸ていらして、歌留多會におはいり

なさいました、みんなで兄樣に御祝ひとして、おしろいを塗らうと意氣込んで居たら、妹がにこ〳〵しながら、かけて來て兄樣御父樣が御用ですと……おくの座敷で、御父樣と御母樣と兄樣と三人でしきりに何か話して御出でになる、時々きこゆるのはきく子きく子と私の名である、なにごとかと、聞くともなしに耳をかたむけたら、兄樣と私との結婚の御相談らしい、オヤテヘ、兄樣は私のほんとの兄樣でないか知らん……時しも、小間遣が小さなこゑで、御孃樣御目出たう。

むくひ

栃木　柴山武子

卒業試驗は既に終はり、證書授與式を待つ吾が寄宿舍の夜は、文讀む人は絕えてなく、彼方の燈火の下、こゝのストーブの邊相集りて互に式の晴衣の品さだめ、妾は家貧しければ此の仲間入りすることかなはで、片隅に獨り古き母上の玉草くりかへす折柄、舍監よりの迎ひ、驚き到れば舍監は、ほゝ笑みながらあなたは、此名譽答辭をお讀みになるのですと渡された、その時の妾の心中……。

評、此處一段の男氣を要す

▲

東京　廣守千能子

赤くなつた紅葉が散つてしまふと、大山が眞白になるのよ、其うすると、そろ〳〵雪が降るの、雪！奇麗だわれ、澤山積ると、雪達磨造つたり雪釣りしたり面白いわ、だけど病氣の姉樣計りは、何時も雪を觀ると眞青になつて、夜着を被つて泣いてゐらつしやるのよお可笑しいわ乳母がいつか謂つたつけ、兄樣つていふ人が遠くの國で凍えて亡くなられたのだつて其れで姉樣が病氣になつたり、泣くのだつて、お可笑しいわ。

れ！

評、不音の程にあれ

雪の朝

攝津　梅香

隣の太作は實になまけ者の隊長で、いつも小鳥の面白くさへずるのを見て羨やましがつて居ました、昨日の朝はいつになき大雪太作はつまらない顏して庭を眺めて居りしが、二三羽のすゞめの雪の中をもさらにいとわず餌をあさるのを見て何と感じたか、あゝと一聲すそはしれり衍を屑にしていつになき其勇氣姿も思はず。

評、勇氣可賞

春雨

加賀　土山ふみ子

ゴウゴウドシンドウ、續けさまに、盤石をなげるやうな日本海の磯打つ荒濤に夕餉すまして、情なつゝきつ爐を圍みて話聲さへ、打ち消さるゝこと屢々今宵はシヨボシヨボと降り出した、春雨さへ手にとるよう。

評、叙述巧

あるゆふべ

鳥取　紅梅

ふと耳に入る樂隊の音切きにみせばやと門邊に出づれば、人もあまた集ひぬ、こは新設鳥取孤兒院の寄附勸誘なりとい院兒は皆一樣の衣服にて

學齢位の楽隊に、それが後より小さき男女手を引き連れて、春また寒き夕まぐれ大路すぎゆく様のあはれさよ、をくれてひとり八歳ばかりの院兒「これ見て下さい」とわが手に渡す印刷物、「鉛筆もこゝに」と差し出すをうけてこの美くしき事業の賛成員に加はるべく記し達せば、「有難う」と……あゝいじらしの姿や、とゞめあえぬわが同情の涙は彼のうなじへ……刹那通りかゝつた二三の青年「棄兒奨勵の」……吾は覺えず總身ふるひぬ。

姉の許に

東京　山田菊子

朝風の寒さにしほ〳〵として例の雨戸をあけて見ましたら、どうでせうか、きのふまで知らなかつた、庭の小さき梅の枝に、今朝はかわゆき〳〵花が二輪咲きました、あゝ其うれしさ!!!いつか寒もわすれて眺めましたの、どうか姉様、近日きて下さいな梅見に私が丹誠したのですから。

惜しや鶯

滋賀　岩崎操子

日頃樂しみ愛し居たる、我庭の梅の木今日此頃はつぼみもなく散りもせず盛りにあへる嬉しさよ何處より飛び來れるか梅が枝にとまりて、初音もらす鶯又梅一層美はしかりき妾はこれを餘念なく眺め居たる所へ愛犬「ビス」我足下にたどり來たれば今迄ありし鶯の姿は見えずなりにけり。

評、鶯惜しくして犬憎し。

療養先より兄様に

京橋　きえ女

兄様私大變よくなりましたから御安心下さい、毎日編物で忙がしくつて此頃はもう顔も手もすつかり黒くなつて自分ながら驚いて居りますの、私れ毎日兄様が學校休みにいらつしたらば私の摘んだ草で御料理して差上げやうと思つて樂しみにして居りますから、お休みになつたらすぐ御出で下さいお待ち申して居りますよ、さよなら。

庭の眺

靜子

廣からぬ、庭も父母の丹誠にて此所の植木彼所の立石敷石など程よく置かれたり、此所の梅は二三年前に植えしに今年始めて二三輪咲き初たり數年の後には繁茂して、一しほの眺を増すならん、うちの坊も去年は母の胎内に居りしに、梅の咲く頃には産聲高く生れたり成長せしめて偉い人になる日を待ちつゝ梅を見る嬉しさは拙き筆には盡きぬなり。

評、眞に然り

猫の悪戯

越前　新保勝子

十二時過ぎ頃にガタ〳〵と裏の納屋の上に猫の音がする、この間の晩に小窓の硝子にのせてあつた瓦がすつて、漬物に雨が這入ると内の者のやかましい其の瓦や硝子を又踏みずらすのか、ガー〳〵と鋭いた喉をしばらく鳴らしてゐたが、遠くの方に蒸汽船の笛鳴つた時に、瓦の上に音もたてず、猫の鳴聲は聞えずなつた。

跡は時計の刻む音ばかりす。

夢と現

高崎市　絢江

朝は、何時でも、お勝手事で忙しく、碌々お化粧も出來なかつたが、今日は紀元節なので、飯炊きは、弟に頼んで、久しぶりで鏡臺に向つた髮も漸く梳き終らうと思ふとき、「姉さん大變々々、御飯の臭えよ、早く〳〵」「えつ……それは大變」と氣早く立とうとすると……身は未だ夢の中。

折しも軒端の梅に一聲。

ホヽーホケキヨ
ケキヨ〳〵

評、忙裏に閑あり

花の世界

藤中　梅子

立派にしてけ高き櫻は王樣に、菊の床しく上品なるは后にて美しく愛らしき薔薇は内親王。牡丹は美人にて山吹は詩人。菫の愛しく無邪氣なるは幼稚園の生徒にして、朝顏は朝起の赤ん坊なるべし。晝顏は寢坊のお三どん皆ぬ樣の雁來草は素人とも云ふべし。

評　比喩妙

元日の朝

福井　片山千里

今日は舊のお正月で、家中が昨夜お父つぁんがお調らべになりた大晦でお雜煮を食はふうすると、今年五つになつた弟の淸、昨日までお母さんに食べさせて貰ふて居たのに今日からは坊も一人でた、と云て別にお膳を拵らへさせて、お椀や箸も小いさいのでは承知しません、妾等と同じなのを持つて食べやうとしますの。

▲

武藏　青柳彌生子

桐杓井戸の傍に吹き亂れて居る山吹の花、黄金の色が水にこぼれそう今に顏を洗ひに來た十八九の娘、手桶持てる隣の老婦人と顏を合せてお早う。

黄金の花は水面に零ちた。

評、文に興味あり。

煤拂

備後　山川つた子

今日は煤拂で御座います。

頰かむりに箕ほうきの出で立ちは父樣だ、八の字のお髭がなんだかをかしい。雜巾片手にかゝさまかぶりして居らつしやるのは阿母樣。馬鹿に背の高い下男の長吉とおたなの樣でお化粧してゐるおさんとによつて出された疊五十疊、その側に燒物の招き猫が日なたぬくもりしてゐます。かくて淸らかな家に春の神を迎へるので御座います。

評、上乘の滑稽。

牛込　平塚白百合

赤にと照りし夕日は枯葉おちてのこされし柿の實に光をなげて狹かりし庭も千草すがれて廣やかに、されぱとて眺むる所もなき此庭今しも

となり寺に讀經の初まりしや鐘の音あはれと響きぬ。その名殘か該仁寺垣の山茶花は音もなくなりて淋しさいやましぬ。

評、寂寞。

私も男であつたなら

下野　臼澤きく子

お隣りの貞さんは昨年功七級金鵄勳章を頂いてお母さんと一人の妹さんとを喜ばせたのでございますが、此の間も金百圓を頂いて手の舞足の踏みどころも知れざる嬉れしく〳〵の喜び、私も男であつたなら縱ひ金鵄勳章はさて置き父母を喜ばせずとも君の爲め國の爲めに盡せるものなどうして男に生れなかつたのでせう、などゝ足袋の繕ひをしながら獨語を言つたのでございます。

評、殊勝々々。

平和の里

大和　西尾敏子

白梅薫る暮の野路、午追ふて歸る氣高き少年の後には、いたいけなる少女の姉様かぶりの手拭眞白く冴えて、急ぐ家路の足早く、語ろふ聲もたのしげに行き過ぎぬ。今出た許りの鐘の月は、二人の後影を照らして肩にせる鍬よりは銀の光が輝いた。そして白い煙が長閑に立ち登る小さき家に、はや影をかくしぬ、月は恰度愛の女神かの樣に優しい光に。家々を包みぬかくて更け行く里はいよ〳〵平和に。やがて彼の兄妹も暖かき夢に入ることであらう。

評、文雅健也。

冬の曉

尾張　今枝のぶ子

曉の鐘はゴーンゴーン、……ランプの焰は油盡きんとしてポツポツ……火燵は冷えた寒い風が布團の隙間からヒユー〳〵……、新らしき日は將に來らんとすれど昨夜からの和歌の下の句はうまく出來ない大欠伸一つ鷄の聲は馬鹿々々よ〳〵と連續して聞ゆ、いま〳〵しきことよ。

◎時雨

夫は三十七年の役に戰死し當年とつて、五歲の男子と只二人心細く日を送りて居りますが昨冬より病氣にかゝりし子供は何に彼と慰めくれますが追々病氣重くなり行くを見て母ちやん死んだら、いやよお父さん死んだし坊獨りになるよと泣く、折から外には時雨降る音高し我家には空より外の時雨に袖ぬらすなり。

評、可憐、又斷腸。

大原女

京都　村上花子

「花容女職人鑑」といふ古い彩色の繪本をあの雜店のつゞいて居る四條通でもとめましたが、その中の大原女が可愛いぢやありませんか、萠黄に梅散しの袂旬ひらかに、紅小紋の襷をからげて白の手甲白の脚絆、紅絞りの手拭に漆黑の髮を包むで、頭にのせたるは伽羅の香りもしそうな黑木一束、これに添へたのが青い枝の紅梅、年は十六ばかりで色白く花のやうな顏ばせ、これは常の大原女ではなくお姬が大原女を舞ふ姿を寫したものと思はれます、さても紅梅のよく似合ふこと。」



女代診（其七）

糸左近

血の道病（下）

前號には「血の道」の精神的病狀を述べた、依て今回は身體的の病狀を說き、進んで豫防法及び療法をも申します。

○頭痛がする——堪へられぬといふ程でも無けれど、何と無く鈍い頭痛がして整然と座つてることが苦い、續いて欠伸が出る、で何かに倚り掛つてるとか横になるとかして暫時休んでると、何時の間にか治つて了ふ、斯の樣な事は誰にでも無いでは無いが、血の道病の人は屢々有つて病進めば進む程數多くなり、又苦しむ時間も長い。

○顏色が惡くなる——何病に限らず病と名が附けば多少顔色の變るものなれど、本病は又特別である、即ち多くは蒼白くなつて、何處と無く淋しい色を呈はし生來の美人でも、又如何に化粧しても之を隱すことは出來ぬ、併し初の中は此の色が連續し無いで、一日の中に幾度でも變る、七面鳥といふ程では無いが、兎に角活々としたる顔つきをしてる時も有れば、又打萎れたといふやうな色を呈はす時もある、それが病の進むと共に萎れた色ばかりになつて了ふのだ。

○眩暈がする——氣の張つた御客と話してるとか、或は芝居でも觀てるなどの揚句に、目が暗くなつて來て身體がよろける、甚しきは其儘卒倒することもある。

○動悸がをどる——血の道の人は血液の循環に變調を來し易いものだ、或はこれからして此名の附いた譯では無からうか、それは兎もあれ僅かの刺戟即ち少し走るとか、驚くとかすると心臟の皷動は忽ち劇しくなつて、早鐘撞くやうに動悸が高ぶり、胸の內は苦しくて堪らぬことがある、但し平常は其の皷動却つて普通よりも緩くなることもある。

○逆上する――これも血液の變調だが、一寸した事に血は頭へ上り易く、少し腹が立つても眞赤になる、左程で無い事を耻ぢても眞赤になる、而して暫時經つと反對に眞青になつて卒倒することもある。

○月經不順になる――月經にも故障が出來て其の來潮期が早まつたり、遲くなつたり、或は月經時の長くなつたり、短かくなつたり、或は其の量が餘計にあつたり、少くなつたり、或は更に無いこともあつて、妊娠か知らと思つてると、又反對に、オヤ〳〵一月に二度も有るわといふやうな事もある。

○妙な感覺が起る――身體の方々に奇妙な感覺を起す奇妙と言つても多くは痛むのである、或は僂麻窒斯の如く關節に痛みを起すことも有れば、或は脊骨頭骨下腹などに痛むことも有る、斯くの如く何部と一定せぬ又身體の方々に蟲の爬ふやうな感を起すこともある、之を醫道では蟻走感覺と云ふ、其他燒け焦げるが如く感じたり、咽に何か閊へてるやうに思つたり、喉頭を占められるやうに覺ゆるなどする、少し話は違へど、食物に於ての感覺も妙になる、淡い物嗜な人が馬鹿に鹹嗜になつたり、或は酸い物好になつたり、或は大好物のお薩が嫌になつて、其代り大嫌な人參が旨くなると云ふ如く、凡ての感覺が妙になる。

○妙な癖が出る――今まで其樣な事の無つた人が、本病に罹ると、急に顏中を震はせて、顏地震とでも命名すれば可いやうな事をしたり、或は齒嚙をしたり、或は膝を振つたり、或は亂れてもゐぬ髮毛を頻りに手で撫で擧げようとしたりする、が「人間には無くて七癖」といふ諺もあつて、斯う申す私も友達から「君は妙に人の顏をジロ〳〵眺める厭な癖があるね」と忠告せられたこともある、男の血の道かも知れませんて、が併し私のは先天的、血の道のは風來的だから自ら異なる所がある。

○汗をかく――熱い飲食物を取つたり、大いに運動したりすれば、タク〳〵汗の出るは勿論だが、本病者は謂れ因緣無くて、鼻の上や腋の下、又は身體中に汗をかくことが有るものだ、これ或は何か精神狀態の變常

より交感神經に作用を起して斯くなるのであらう。

○熱が起る――血の道熱或は歇私的里熱とでも命名したら可からうか、兎も角熱が出て寒冒でも引いたのかと思へば、さうでは無くて、薬も服まぬ中に間も無く退散して、平常の通りになる、又或る時は更に熱の無いのに、本人は大熱が有るとて騒ぐ、計つて見れば嘘熱だ、實に妙な病である。

○便秘する――通常ならば一晝夜に大凡一回づゝ便通の有る可きが生理的なるにも拘らず、本病者は二日乃至三日に一度、甚しきは一週間も便通の無い事がある而して縱ひ便通があつても思ふ通りにドッサリ無い、それが爲め何とも言へぬ不愉快がある。

○消化不良になる――これも本病者の特徴と言つて可い位だ、即ち食欲は次第に缺乏し、揚句に惡心を催し或は嘔吐する、嘈雜は出る、胃部は痛むなど、恰も胃病の如くである、乃で醫士は血の道だと診察すれば宜いが、唯其の徵候だけに依て治療すると、浴びる程藥用しても功が無い、泉源濁れり何ぞ下流の清きを見んやである。

○睡眠不良になる――これ亦本病の特徴である、晝間の中とか或は人と話してる時などには薄ら眠いやうな事もあれど、いざ眠らうと枕をすれば眼はリン〳〵と冴えて、色々な思想が胸に浮ぶ、浮ぶから眠られぬ、



眠られぬから浮ぶ、斯くて夜の十二時乃至は一時二時といふ時に、漸と眠れば、悲しき夢、恐ろしき夢、或は取留の無い夢を見、それで朝も比較的早く眼が覺める、それゆゑ何時も精神は不愉快で、業務を取ることが懶いやうになるのである。

○痙攣がある――痙攣とは身體が引き釣るゝやうになる事をいふのである、悲しい事に接したとか、驚く可き事に出逢つたとかの場合に、身體を彼是に動かし、續いて仰になり、身を反らし、膝を立て、腰を持ち上るやうな風態になる、之を醫道では角弓反張の姿と云ふ、この間は精神が朦朧となつて、或は笑ひ、或は泣き、或は叫ぶこともある、それから聲が嗄れたり、吃逆が出たり、咽が塞つたりするものである。

○痲痺する――四肢殊に下肢に痲痺が起つて歩むことが出來ぬけれど、一脚のみ痲痺すれば其脚を後へ曳いて恰かも跛者のやうな歩き方をするものである。

○知覺を失ふ――痛い痒い等の感受性が悉く減退することがある、併し多くあるのは偏側の知覺脱失で、脱失せる部は種々の刺戟を更に感せぬ、而して色までが健側と患側と違ふ、健側は花やかであるに、患側は蒼白い、耳も患側は遠くて、舌も半分は味を感せぬ、又鼻も片方は香はぬ、眼も片方は大いに視力減じて、時には片方だけの色盲になることさへもある、是等の知覺脱失はシャルコーといふ人の初めて發見し、初めて詳論した事で、此の徴候が有つたら斷然本病者であると定めても可い、余の嘗て診察した某婦人の如きは此の徴候悉く具つてゐて、試に針で突いても更に感せぬと言つてゐた。

○人事不省を起す――上來述べたる卒倒或は痙攣等の揚句又は悲哀驚愕等の折に卒然人事不省になつて暫時又は數日の間何事も知らずに睡れるが如く死せるが如くになることがある。

○生殖欲の變換――之を或者は亢進すると云ひ、或者は減退すると駁し、甚しきは生殖器不能になるとまで論じてる人も有れど、余の狹き見解では亢進するものに非ずして、必ず減退若くは缺乏するに相違無いと確

く信ず、其の亢進せるが如く見ゆるは、意志が薄弱になつて、貞操を守るの心衰ふるからである、併し生殖器不能になるとは、餘り重大に言ひ過ぎはせぬかと思ふ。

ザット之にて精神的病狀 肉體的病狀を説いたが最も重症の者に至つては、內臟出血皷張全身屈曲等の徵候を呈するもある、けれど是等は稀に見る例外なれば省く、兎に角奇妙奇態な病である。

▲豫防法

本病は精神と肉體と半分半分の徵候を呈はす性質のものなれば、幼時よりの敎育の善惡が、即て本病を起す起さぬの大原因にならうと思ふ、女の子を有たるゝ方は、大いに御注意ありたいものだ、先輩及び余の考ふる所では、第一に子供の天賦の性質を考へて敎育せねばならぬ、例へば打ち沈んだ氣の弱さうな娘で有つたら、他の子供と學問技藝を同等に進步させようとしては不可ぬ、可成快活に遊ばせ、今は人に負けても、後に勝利を得れば可いといふことを、能々悟らせて、而も懦弱にならぬやう導くが如き類である。後日血の道に罹る婦人は其の以前に於て、父母の敎育が嚴重に過ぎ、爲に子供の天眞爛熳を妨げたのが基になつてる事が多いものだ



又反對に餘り甘やかして子供を譽め過ぎた結果が、後に虚榮心の種となつて、さらでだに此心の强くなり易い女の子を血の道に罹らすやうにもなる、寛嚴中とは動かす可からざる眞理である。次に子供の性質如何に關らず餘り多藝を敎ふるは後に本病を招くものである學校から歸る、間も無く三味線の稽古、踊りの練習、裁縫は勿論料理も和洋共知らねばならぬ、琴も覺えておけ、活花抹茶も奥許を取れ、日曜には和歌を詠め、三八の日は書の先生へ行け、斯の如く孱弱なる女の子に、彼も此もと精神を刺戟すれば、他日血の道病にならざんとするも豈得べけんやだ。次に子供の感情を抑へることに注意するが肝要である、即ち正當なる感情を學ばせねばならぬ、喜怒哀樂の情を縱いまゝにし、或は感情を偏固にしたりするのは甚だ宜しく無い。次に恐い話殊に怪物的の事は最も愼まねばならぬ、子供の折は斯る妖怪談を聽きたがるものである、然るに年長者が、好む儘に判斷力の乏しい子供に向つて、幽靈談を喋々する如きは、恰も其子に毒藥を服ませてゐると同じ事だ、一つ余の實見談を紹介すれば、或る年長者が十歳になる女兒に「或時或者が夜中旅行したるに亂髪の丈高き女が、黑き齒を剝き出してイヒヽと笑つて見せたるに出逢ひ、汗を流して逃げること數町、ゆくり無くも懇意なる知人に逢ひ、やれ嬉しや今斯々の物を見た、何うか我と同道してくれと頼む、所が其の知人は忽ち前の女と同じ姿に變り、斯ういふやうに笑つたかと、又イヒヽを行つたれば、其人其所に氣絶した云々」と話したるに、之を聞いた女兒は忽ち恐怖して其の翌日より熱發し、數十日の間病床に呻吟した今は其の女兒も三十歳前後になつてるか何と無く神經質で、今でも其話を思ひ出すと、慄とするとの事である、此例を見ても妖怪的の話は露聴かさぬやうにせねばならぬ、因に御伽話も餘り事實有る可からざる事は避けたいものである。次に猥褻なる話猥褻なる物は嚴重に避けねばならぬ、子供だから知らぬと思つて、子供の居るにも拘らず、大人同志が喋々話すに至つては言語道斷である、其時は無邪氣に聞いてゐても、後に

早熟の原因となり、早熟の人は本病に罹り易きこと東西の先輩が口を揃へて論じてる所である、彼の裸體畫裸體像なども宜しく無い、元來私は一定の年齡に達した、男女には學校又は適當なる書物に依て生殖に關する生理衞生を堂々と聽かす可き必要の有るものである却つて之を餘り秘密に過ぎると却つて好奇的の淫猥心を起さぬとも限らぬものである、中學校若くは高等女學校の生理衞生書には是非此の一章を加へて貰ひたいものだ、然れども此の一事は誠心即ち眞面目に書き、眞面目に述べねばならぬ、假にも某新誌某書の如く、其の衞生を說くに託して、淫猥心を挑發せしむるが如くに書いたのは、不埒千萬である、讀者の眼から見れば、眞面目に書いてあるか無きかは直ちに了る、宜しく撰擇す可しである、序に普通衞生書に就いても一言しておかう、世の中に澤山刊行せられてある通俗衞生書中には隨分人を臆病にするやうな、書振も有つて、之を素人の方が讀まるゝと、間違つた衞生思想を養ひ遂には僅かな病徵が有つても、其で無いか知らんとビク／＼恐れるやうになり、爲に却つて本病を起す種になる、嗚呼通俗衞生書の書方は六かしいものだ。次に子供乃至青年には形而上の事を餘り教育してはならぬ、可成實用適切の事柄を以て導くが宜い。同じく倫理を話すにしても、利己は何うの、利他は斯うのと理



論に走らずして、實話を聴かせながら本人自身に判斷せしむる工夫にしたい、形而上の事を詰め込んだ結果は、空想に流れ、想像に馳せて、後には悲觀的の人になるものである。次に毎度言ふ事ながら、小說芝居も大いに本病の原因となる、縱し本病にならざるまでも青年男女の爲には、何れかと言へば讀まぬが宜いと思ふ、三度離緣を請求し、四度目に漸と腰を据ゑたる某婦人に就いて、其の懺悔話を聴きたるに、曰く「私が幼少から小說を好み、書中なる人を以て己れの理想とし、夫を有つたら嘸や斯の樣に樂しいであらうとか、優しくして呉れるで有らうとかと、空想にのみ耽つてゐたが、即て結婚して見ると、豈圖らんや小說中の夫とは正反對である、さア不平で堪らぬ、其の次の夫も又其次の夫も矢張さうだ、是に於て飜然悟つて嫁いだのが今の家で御座います、決して若い者には小說を讀ますものでは御座いませぬ云々」誠に味ある言葉だ、されば見るにしても、識者の選擇を受けて然る後に致されたいものである。右の外豫防法に就いて澤山言ふ可き事有れど、要するに規律ある習慣　空氣日光衣食住の善良等に歸することで、是等は毎度述べたる事なれば、敢て言はずもがな。

▲血の道療法

原因を追求するが肝要である、例へば生殖器病より反射的になつてるのなら、其の生殖器病を治せば、本病も亦從つて消ゆるは必然の理なるが如し。次に精神の刺戟を避けねばならぬ、其れに就いては本人よりも寧ろ家族教育をして掛らねばならぬ、家族即ち親夫又は兄弟等にして本病に對する智識が皆無なる場合には到底治らぬものと言つても可い、何となれば如何に藥用其他の攝生をしてゐても、家族より斷えず精神上の刺戟を與ふるからである、本人は醫士より精神上の教訓遊歩の効用等を聴き、眞に其通りだと感服して歸るや否や、家族は「其位な病氣に、餘り我儘ぢや無いか遊歩も時に依りけりだ、今日は是非共御客の相手をして貰はにやならぬぞッ」と云ふ按排式にガミ〳〵遣ら

れたとせんか、折角の感服も自暴自棄になつて益々僻む、僻めば倘ガミ〳〵、事茲に至れば病は愈増長するのみである、然るに本病者は我儘言ふもの、僻むもの懦弱になるもの、妙な風になるもの、初期は病氣らしく無いもの等の事柄を辨へて居れば、其積りで處置するから、病者の爲には實に大幸福である

次に醫士の秘法を洩すやうな譯であるが思ひ切つて話せば斯うである、本病者に對しては「輕いから御心配なさるな」との慰籍は何にもならぬ、寧ろ害である、「仲々重い、が併し余は一心込て治療致しますから、氣長に余の指揮を守られよ必ず治して上げませう」斯の如くに堂々と重みを附けて答へねばならぬ、何となれば本病者は病氣を誇大に訴へて人の同情を請はんとするものであるからだ、而して醫士は患者の信用を得て居らねばならぬ、家人も亦患者の信用する醫士を撰ぶが肝要である、如何に名醫でも患者の信用せぬ人を壓制的に招き、壓制的に藥用せしめても其効甚だ少きものである。次に患者が滿足して運動するやう計らねばならぬ、運動法には種々あれど就中草鞋穿の旅行、庭園の掃除、植木の手入、登山、乘馬等最も宜い、兎



に角氣任せの運動を可成繼續せしめて、クヨ〳〵物事を考へるの暇無からしむるが何よりの得策である。次に冷水洗拭、海水浴、冷水灌注等の水浴法は神經を强固にする所の良藥である、これは寧ろ壓制的になさしめたいものだ、殊に痙攣及麻痺の徵候ある者には尙更である。次に滋養食物を轉々交互に取つて身體の榮養を計ることは大抵の病に必要なれども、本病は特に實行せねばならぬ、今朝は淡泊と湯豆腐を用ゐたら午飯には鯛のお鹽、晩餐には鷄肉の鋤燒といふが如く、品換へ、或は料理法を異にして、珍らしく樂しみつゝ滋養を取らしめたいものである。次に内服藥としては、阿魏、纈草、臭素加留謨、抱水格魯拉兒、スルフォナール等を諸家皆用ふ、今其の處方を記せば

1、纈草浸(二、〇)一〇〇、〇 括弧の分量を括弧外の分量なる溫湯にて煎ずるなり、臭素加留謨四、〇　單舍一〇、〇
右一日三回分服

2、阿魏丁幾三、〇　纈草丁幾四、〇　苦丁二、〇　單舍八、〇　水一〇〇、〇
右一日三回分服

3、纈草丁幾四、〇　林檎鐵丁幾三、〇　單舍八、〇　水一〇〇、〇
右一日三回分服

4、抱水格魯拉兒一、〇　橙皮舍利別一〇、〇　水三〇、〇　右臨臥頓服

5、スルフォナール〇、五乃至一、〇　白糖適宜
右臨臥頓服

說明‖1、2、3、は連服しても差支無れど、4、5は麻醉藥なるが故に習慣となる恐れあり、時々用ゐるを可とす。

（完）



試驗前の衛生

勉強の方法

寒い〱と言つても、最早三月の初旬、大いに凌ぎ易くなつて來た、是からが我等の好時節である、然れど女學生諸姉に於ては、試驗と申す厄介物が眼前にぶら下つてる爲に、「垂れこめて春の來るも知らぬまに、試驗の日割貼り出しにけり」といふが如き有樣でせうされば一風變つて今回はこれに就いての生理衛生を述べて見ようと思ひます。

▲勉強法――今日より試驗日までの日數を計算して適當なる勉强をせねばならぬ、其の仕方は道理上の記憶を要す可き者例へば數學物理學等の如きを先にし、言辭上の記憶を要す可き者例へば地名年號等の如きを後廻にするが宜い、何となれば前者は腦力を費すこと甚しけれども長く記憶に止り、後者は腦力を費すこと少なけれども早く忘れ易きが故である、即ち疲れざる腦を以て困難を打破り、疲れたる腦を以て困難ならぬ學科を覺ゆること衛生上勉學上に於て一擧兩得と申さねばなりますまい、此の說は如何にも平凡なやうなれど平凡な所に味がある。

▲十分に睡眠す可し――白耳義のルユニエー博士は多年研究の結果二十二歲以前の者は左の圖に依て勉强せ

睡眠	食事	智育	體育

よと言つてゐらる以て睡眠の如何に重んず可きかゞ了るでせう、然るに試驗前なりとて往々徹夜をするに至つては啻に一時の不衛生なるのみならず、後日に至り神經質の人即ち血の道を引き起す所の分子を作るのである、斯くして試驗當日にも良成績を得らるるかと云ふに、仲々さうは行かぬ精神は恍惚として書く可き事をも書き殘し、或は計算を誤るなどの失敗を招き易いものである、某氏曰く一度の徹夜は少くも一

年間の榮養を妨ぐるものであると、余は一生涯に關係すると訂正したいのである。

▲月經と試驗との關係‖諸姉若し試驗に差掛つて月經の來潮あらば必ず試驗の延期を乞はる可し、こは余のみの僻見では無くて先輩諸氏の議論する所である、元來月經は生理的にして病的の如きもの、而して此の期間に於ての精神過勞は種々なる疾病を招くものなれば、校長にして之を許さずんば一度の落弟何ぞ憂ふるに足らんや、斷然缺席して元級に止るが可い、嗚呼生理衛生の思想は今少し進歩させたいものである。

▲試驗後も適當に勉めよ‖試驗が終つたからとて、授業の始まる日まで一字も書かず一枚の書も讀まぬと云ふが如きは腦力を衰弱せしむる基である、恰かも年來勞働してゐた農夫が十日も閑居してゐたら、筋力衰へて急に働けぬやうになるが如きものである、腦も筋肉も同じく身體なる事忘る可からず。

衛生顧問

胃腸病、腰小便、中風症、
脊髄病、心臓病、呼吸器病

△胃腸病の療治

問 父事五十一歳は三四年前より胃に酸液生じ便通は一日に三四度もあり食物進まず、近頃は好める酒すら味無しとの玉ふ、胃を擦すればトク〳〵と音して粘液は次第に下り、其時は輕快を覺ゆると仰しやいます、これが療法を教へ下さいまし。(大阪父愛女)

答 察するに、大酒の結果、慢性胃腸加太児に罹られたのであらう。毎日温浴をして皮膚の機能を盛んにし、當分の中は野菜類、辛き物、酸き物、脂肪類、鹽に貯へたる物、酒類、過冷過熱の飲食物は用ゐぬやうにし、粥、半熟の卵、淡白なる魚の刺身、細切肉、牛乳、豆腐、百合、自然生薯などの類を差上られよ。少し許し過ぎるやうだが、是等飲食物の調理法を述べておかう。

▲病人飲食物調理法‖粥は大きな釜に少し煮るが宜い、若し小なる鍋で煮ると、沸騰の際大切なる滋養分が溢れて滓ばかり殘る憂がある。卵を半熟にするに、誰でも沸湯をかけて攪拌ぜるが普通なれど、之では飲物の量が多くなつて病人には困難である、故に卵を其儘温湯の中に入れて、煮きらぬ前に、之を割れば半熟になつてゐる、それに少量の食鹽又は醤油を少し落して召し上れよ。刺身は極めて新鮮なる物を刺

ぐと云ふより外に別の方法は無い。細剉肉は此の器械を求めれば、容易に出來るが、さうで無い時には、鳥の骨剉くが如くに、爼の上で滅茶苦茶に切り碎くのだ、別に六かしい事は無い。牛乳は深い土瓶に入れて攪拌せつゝ沸騰せしむること凡十五分時、決して上皮を張らせてはなりませぬ、上皮が出來たとて之を取除くなどは滋養物を捨つると同じ事です、而して牛乳の香を厭がる舊弊の老人などには、珈琲及砂糖を少量に入るゝが宜し。豆腐の料理法は幾百種も有るさうだが、兎に角ザット煮た方が宜い、餘りクタ／＼煮ると消化が悪きのみならず、甚だ不味い。百合自然生は鰹節でも入れて旨しく煮たのが宜い、トロ、は健康者には甚だ宜けれど病人には餘り感心せぬ。

内服薬は御地の醫士と御相談の上左の處方を參考せられよ。

重曹三、○　硝蒼二、○
　右分三包一日三回食後一包宛（胃の酸液を止め腸を調ふる目的）

含糖百弗聖三、○　括失亞丁幾三、○　單舍八、○　水一〇〇、〇
　右一日三回分服（胃を强壯にする目的）

硝蒼三、○　古倫僕末二、○　白糖適宜
　右分三包一日三回一包宛（健胃を兼れて下痢を止める目的）

含糖百弗聖三、○　タカヂアスターゼ○、五　撒里矢爾酸○、一
　右分三包一日三回一包宛（胃の消化を促し且つ胃中を防腐する目的）

若し又失禮ながら十分に轉地保養することの餘裕ある方ならば、冬は暖地夏は涼しき所の山水明媚なる温泉場にでも悠々閑雅保養せられたし、孝道に深き貴女以て如何となす。

問　夫四十歳は常に胃膓悪しく、胃を壓へると嘔吐する氣味あり、常に便秘し、眼痛頭痛不眠等の困難を訴ふ、酒は晩酌に一合、先生よ、其の療法御教示願度候。（丹波の住人）

答　前者と異なる點は下痢と便秘である、攝生法は略前者と同じ、薬用は(3)其他下劑として時々人工加爾々斯泉鹽、或は硫酸麻偏涅叟謨を用ゐられよ、其の處方は、

（甲）人工加爾々斯泉鹽一○、○　水五○、○
　右早朝空腹時頓服（時々一週間程連服）

（乙）硫酸麻偏涅叟謨五、○　稀鹽酸五滴、單舍八、○　温湯三○、○
　右朝食前に頓服（同上）

問　胃擴張の根治療法無之や（和歌山市吉田松子）（備後福山きみ子）（近江國兄妹）（高知市の高橋龜藤）等

答　胃膓病に巧者なる醫士に就き胃喞筒を以て胃を洗滌して貰はねばなりませぬ、攝生法は（大阪の父愛女）に答へたる通りを守られよ薬川は（丹波の住人）に答へたる（甲）と、外に

蕃木鼈越幾斯○、○八　硝蒼一、五　重曹三、○
　右分三包一日三回一回毎にオブラートに包み用ふ可し。

又腹部には彈力性の腹帯を施し、且つ筋肉の收縮を催すが爲に平流電氣を通ずること亦以て試む可し。

問　俗に申す癪にて、時には呼吸も出來ぬ位苦しみます、慈悲深き先生

よ、一時的の藥でも御座いますまいか。(河内の書生)

答痛は即ち胃痛或は胃痙攣でせう、醫士ならば莫爾比湼の注射又はコロ、ホルム等の吸入といふ所だが、素人療治としては、芥子を痛む塲所に塗つて、日本酒二勺程をグツト飮む可し、仲々效の有るものです但し常に酒を用ゐる人は今少し大量でも可い。

問腦病にて昨年の六月より今に時々下痢致し候これが治療法を御敎へ下さい。(新潟病婦)

答大阪の父愛女)に答へたる攝生法を守り藥用もそれを參考せられよ。

(函館のメノコ)に答ふ——胃痛は切開して治療するより外に治法の見込無し。

(新潟の花月女)に答ふ——腸に寄生蟲の生ぜしには非るか診察の上ならでは答へ難し。

(讃岐の大腹脹)に答ふ——胃擴張の初期に非れば健康體の徴でせう。これも診察の上ならではだ。

(大阪の過食女)に答ふ——上來述べたる所を參考せられよ、自ら其中に在り。

(天津二十歳女)に答ふ——リスリン浣腸差支なし、藥用餘り宜しからず。

(岡山の愛讀女)に答ふ——大根おろしの連食差支なし。

(百合子)に答ふ——胃腸病の爲に發熱並攣あるに至つては温僞家擬の及ぶ所に非ず、況んや四歳の幼見なるに於てをや、然れども上來替へたる腹部温包或は温浴其他の攝生法は大いに御參考下されたし。

▲寢小便療法

問弟は十八歳の今日尚寢小便の癖あり、何卒其の療法を御敎へ下され又賣藥一種鬪は本病に功あるや。(伊達の酒井ゆき子)

答種々なる原因有つて其の療法も一樣では無いが、兎に角共通法は(第一)運動が肝要である、能く運動すれば凡ての筋肉締つて膀胱の括約筋も亦自ら癒るのみならず、發汗多き爲に小便の量も亦減る道理なり(第二)午前より午後二時頃までに飮物を十分取り、二時頃よりは更に飮物を用ゐることを忍耐すべし、さうすると小便は寢るまでに大抵下るから夜中の遺尿を防がるゝものだ、(第三)寢際に小便して寢てから一時間目に又起して致し、それより拂曉即ち夏ならば午前三時、冬ならば午前五時に起して排尿せしむ可し、(第四)榮養食物を取りて身體を强壯にす可し、(第五)英雄豪傑貞女烈婦等の傳記などを話し或は讀ましめ精神をして懦弱ならしめぬやうにす可し。其他は藥用なれど原因に依て異なれば爰に之を省く。賣藥の效は醫士知らず。

(三京猴寢小便女)(長崎のAB女)(東北のプーア女)(東奥の質女)(近江の玉坂淸子)(周防の痔遺溺腹)(下谷の困離女)(長門の駐嫁)(尾州知多敎乞女)(京都銀座田中梅子)等に答ふ——何れも寢小便若くは近小便なれば右前答を應用せられたし。

▲中風病の療法

問 父五十六歳、昨年十一月初旬より中風に罹り左半身不隨となり、精神にも異狀を來し候、病氣故とは思へども、實に情なく候、何卒々々三月の誌上に其療法を敎へ下され度候。(四のはてのある女)

答 仲々治り難い病なれど、今其の大體を申せば枕を高くし、窮屈ならぬ衣服を着せしめ、室内は廣く且つ涼しきを選び、耳後及び顳顬に蛭を附けて血を吸はしめ、腓腸筋に芥子を塗り、皮膚を按摩し、消化し易き食物を與へて可成安靜に臥さしめ、便通を能く注意し、毎日藥用石鹸を溶かして灌腸し、便秘すること勿らしめよ、電氣療法、兩浴、温鹽浴酒精の塗布等は必ず試みればならぬ。

▲兩浴——とは微温湯或は冷水を樽に入れ其樽に如露を附け之を高處に上げ、雨の如く點々と水滴の降る下へ病者を素裸にして皮膚を摩擦しながら洗ふ方法である、但し感冒に罹らぬやうに注意せねばなりませぬ。藥用としては沃度劑殊に

沃度曹達〇、三　苦丁三、〇　單舍八、〇　水一〇〇、〇

右一日三回分服

但し沃度曹達は一週間毎に一日分〇、一を増量し、三、〇にも上る可し。然れど服藥中に沃度中毒即ち眼瞼結膜炎、流涙、鼻加太兒、頭痛等の徴候あらば一時中止して又始む可し。

(大阪の母を思ふ女)に答ふ——同じく中風なれば前答を應用せられたし。

▲脊髓病の療治

問 十七歳の女脊髓病にて脊骨所々に節出で、左の乳房よりミヅオチにかけ烈しく痛み、足釣り困り入候、何卒其の療法御示を乞ふ。(千葉縣小女)

答 脊髓病といふ丈では漠然としてゐるのみならず、病狀も餘り簡單に書いてあるから、確たる診斷は勿論出來ぬけれど、兎に角平流電氣を通じ、浴湯療法又は冷水療法を實行し、心身を安靜にし足脚の罨包法を施す等を實行せればならぬ、藥用としては(四のはてのある女)に答へたる沃度劑、或は砒石劑、鐵劑、規那劑、安知必林等であるが何れも醫士に就いて治療を乞ふ可し。

▲心臓病の療法

問 本年廿六歳の下級官吏、心臓の肺動脈瓣僧帽瓣に故障を生じ、呼吸困難、喀血、胸痛等の苦痛あれども目下醫士を求むるの餘裕無し、而して此の事項に付き投書すること四回遂に尊答を得ず、何卒御同情ありて女學世界にこれが療法の御答を乞ふ。(靜岡市投書不平生)

答 心臓瓣膜病は仲々の重病にて通信教授の素人療治出來る病で無いから、今まで沒書にしておいたのです、然れど失望し玉ふな、縦ひ根治はせぬまでも、其の攝生法に宜しくば、數十年の間悠々職務

に從事することを得らるゝものである、左に、

▲心臓病者の攝生法＝を言へば身體の過勞即ち擊劍柔術體操登山乘馬等は從來行ひたる人にても斷然止め、精神の過勞例へば悲哀熱心憤怒等を除くやうにし、飲酒喫烟の具は手にも取らぬことを誓ひ、普通人には強壯の種となる可き冷水摩擦冷水浴の如きは一切廢して、入浴は攝氏三十七度、我が體温と同等位の湯にて洗ふ外はなす可からず、而して寒冒及び其他の病の爲に發熱せしめぬやうに注意せねばならぬ、熱發の爲に、治らうとする心臓病も又元へ返る事がある、其他茶珈琲等の興奮飲食は一切避けて消化のし易き食物を取る可しである、而して可成は温暖なる地方に轉地することも必要である、內服藥としては實芰多利斯の浸劑であるが、これは畜積作用とて縱ひ少量たりとも續いて服む中には恐ろ可き中毒を來すものであるから、決して素人療治に用ゐてはならぬ。然らば如何なる藥あるかと云ふにこれも畜積作用の恐れ無いでは無いが、兎に角其性穩かなれば、御參考までに記しておかう御地の醫士に事情を打明して服用せらる可し

ストロフアンダス丁幾一、〇　珈琲涅〇、一四　單舍八、〇　水一〇〇、〇

右一日六回分服（三週以上連服するは不可なり）

（大阪薫宿女）（丹後幽天橋松子）（北國の松）等に答ふ＝唯單に心臓病とのみでは分られど、前答を讀まれたら御參考になるでせう。

▲貧血病の療法

問　私は身體に何處が苦しいと云ふでは御座いませんか、貧血なので顔色青く困り入候少し赤みを帶ぶるやう敎へ下さいまし。（小石川花子）

答　それは、無病なれども、唯一般に薄弱體なのでせう、果して然らば藥用する必要有りませぬ、それよりも日光に觸れて新鮮なる空氣を吸ひ散歩運動することを當分の務とし、ドシ〳〵肉食を取つて御覽遊ばせ日を追うて色美しくなるであらう。質問消中に美しき撰を入れておかれたり

文の山登るしたりにせよとての
　賢きなぞと思ひ侍らん

▲呼吸器病の療法

問　兄は肺病で亡くなり、私は時々胸痛ありて咳嗽出づ、この療法。（石橋病苦女）

十二指腸蟲驅除の後、家內に肺病患者出來、遂に死去、其後私も月經不順食慾不振になりました、肺病に非ずや。（遠州心配女）七八年前に輕き肺病に罹れり、近頃乳の上痛み首にグリ〳〵生ず、其の全治法（大阪不幸女）肺尖加太兒に鷄肉は惡しきか。（岐阜縣山岡兒思女、三度質問來）母は結核にて永眠せり、私も心配に堪へず。（大阪一小女）

其他、麴町うめ子)(山岡僻地在愛讀者)(福岡苦病女)(京都秋子)等何れも大同小異の問なり。

◎陰　暗き濕地には誰植えたと無く青苔の繁茂するものである、然れど、陰となる可き樹木等を伐り倒して赫々たる日光を當てれば青苔次第に枯れて了ふ、肺結核と身體營養との關係も亦これと同じ事だ、詳しく言へば肺結核は青苔で身體の營養は日光である、身體の營養が惡くて精神鬱々として居れば誰より傳染したと無く結核菌の特發することもある、然れども滋養の食物を取り、新鮮の空氣を吸ひ、活潑に運動して精神を愉快にすれば、今まで生じてゐた肺の結核菌も段々枯れて了ふ、此の道理を會得すれば肺病何ぞ恐るに足らん、結核何の恐る可き事やはある、然るに此道理を知らぬ人は無暗に結核を殺さんとするから仲々さうは行かぬ、恰かも陰を除かずして苔を取り盡さうとするやうなものだ、到底行はれぬ次第である、故に余は肺病者を治療するには殺菌劑或は防腐劑を投ぜずして、唯健胃強壯の藥のみを與へ專ら滋養療法を講じてゐるが大抵良成績を得たである。右の外(若松市外のオールドミス)(播摩の瀧上女)(千葉の義子)(陸中のNM子)(京都の櫻女)等の問は「血の道病」と讀まれたら自ら悟る所有らんと信ず。又其他內科に關する問數多あれど餘り紙數を費しますから、四月或は五月の雜部に於て答へませう。猶來月は眼科、耳、鼻、咽喉等に就て解答せん。



應急手當 素人療治

如山軒

腦充血で轉顚つたのなら抱へ起して頭を上げさせ腦貧血で倒れたのなら、足を上に、頭を下にして置いて、醫師の來るのを待つが能い、若しまた五六歳位の小兒が痙攣た時には、驚き慌てゝ矢庭に其れを引き抱へて、醫師の許に走け付けるなどゝは、以つての外の間違で、其の間に呼吸を引き取るなどの事は往々ある話し、此の場合には靜かに其の儘寢せて置て、早く迅かに醫師を迎へる樣にするがよい位は、何人でも御存知の事であらうが、さて手馴れて居らぬと、先に立たない後悔が出來るといふもの、玆に應急手當と題したからとて、固より生命に關する程の、怪我、災害の場合に對してゞはなく、いはゞ一時の苦痛除け、醫師を待つ間の素人療治、藥といふても唯モウ本の、勝手許の有り合せで用が濟むといふ、呪染みた間に合はせであるが、其れが利くからお試しなされ。

△火傷の手當

鐵瓶の蔓や火箸の燒けて居るのを、知らずに捉り、或はまた炎へタギる鐵瓶の蓋の把手、ランプの火屋、鍋の耳の熱いので、チリ、と指でも焦した場合には、早く醬油に浸すか、冷飯を貼り付けるか、些細の事なら、大抵是れで痛みは除ける、若しまた火膨れにでも成つたとすれば、山芋を葵卸しゝて磨つて着ければ、効驗は實に著るしいが、倘ほ其れ以上の大火傷、殊に顏や手の樣な隱すに隱されない、剝き出しの個處で、痛みは去つても、痕跡に成るといふ恐れを生ずる場合には、少しく費用を憤發して、近處の藥種屋から、麝香を購うて、傷部へ之れを塗るがよい、痕跡にも成らずヒツツリも出來ず、是れは稀代な妙藥である。

△挫傷の手當

腕を引つ張つて手が拔けた、相撲を取つて足を挫いた、滑つて指を痛めたといふ樣な場合には、松の靑葉を摺鉢で摺り碎いて、成る可く之れを細末にし、是れに適宜に酢を交へ、挫傷の局部へ塗り、着け置き、其

の乾くを待たず、重ねて數回之れを試むれば、大抵輕いので一兩日、重いのも三日で全癒する、但し餘りの重體なれば、中々些の妙藥でも取り留めが付かぬので接骨、又は醫師の手に待つより外はないが、茲に挫傷者の最も愼まねば成らぬ事は、一體此の怪我人は、他の內科的病者と異りて、食事には聊か差支へのない者であるので、平常の通り、何物でも口にしたがるが、打身、挫折には、第一に蕎麥、第二に天麩羅、是れは天麩羅と限つた譯でもあるまいが、總じて油氣のものは甚だ禁物であつて、之れを喰ると、折角癒り懸つたものでも、忽ち以前の通りに痛み出す、入浴も亦謹む可きものゝ一つで、是れ成れば良いといふ迄に成らねば、入湯は害をなすものである、其れから是れは療治外の事であるが、火事だとか、或は又地震だとかの場合に、二階、三階などの高處にあつて、逃げるに逃げ難き切迫の時に陷つて、唯萬一に生を得むとし、其の高處より飛び居りるに、多くは不用意にして、大地に踵を突き込むものであるが、かくては折角生命懸けで飛び下りても、飛び下りたが最後、再度起き上る事が出來なく成り人の來つて救護せざるよりは痛い目をしながら、其の儘其の場へ往生をせねば成らなくなる、假令また運よく生命を取り留めたとしても、後日に到つて其の治療が中々大事で、多くの日子を要する事となる、で其れなれば何う飛び下りたら好いかといふに恁うすればよい、先づ足を突き立てゝ、指先を大地へ突き込む樣にする、痛い事は、踵でも、指先でも甲乙ある譯ではないが、此の方なれば、飛び下りてからも直ぐに立ち上がられる、無論步行も出來て、飛び下りた目的が實行される、後日の療治の折にも樂に、踵の方に比べては、日數もズツト早く濟む、九死の際には其樣思案が付くものかと、其れが即ち用意と、不用意、爲すと爲さぬは勝手として、唯我が實驗上から注意するのである。

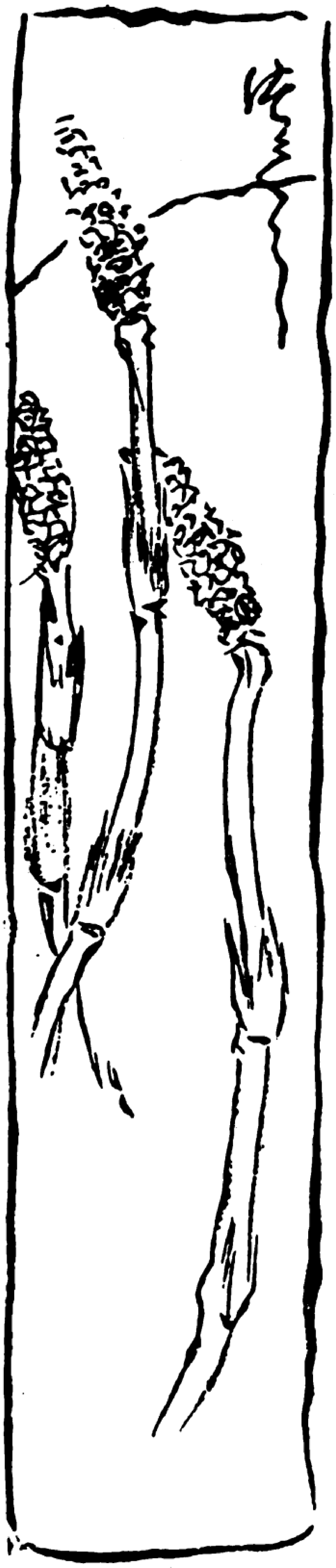
△打撲の手當

是れは重に小兒に適用す可き事であつて彼の漸くに捉まれ立ちする頃の嬰兒、七歲八歲より十二三歲頃の

惡戯盛りの、惡戯から柱や、障子、火鉢なんどに頭を打ち付け、又は額を撲ち付けて、瘤なら未だよし、劇しいのは、之れが爲に其の打撲の個處の一度は指ほど凹むで仕舞う事があるが此の際は必らず先づ其の凹むだ處を吸ひ上げて置て、直様其れへ白米を嚙むだのか又は黒砂糖を着るがよい、併し又尤も効驗のあるものは、金箔である、此金箔さへ着て置けば、大抵血がにじむだものでも、痕跡には成らずに平癒して仕舞う。

△辛子の効用

下痢には辛子濕、小兒の下り腹には、此の辛子三匙に、鹽三匙を袋に入れ、熱湯を入れたる桶の中にて振り出し、程經て適宜の溫度を見計ひ、病兒の下腹を能く溫むれば、少きは一回、多きは二回にして、効驗あり、大人の痢病にも亦甚だ効目がある、此の外肩の凝りには、辛子と饂飩粉とを等分にし、熱湯にて搔き交へ團子の如く丸めたるを、半紙二つ折として、其の一方に之れを置き、他の一方を以つて團子を押へつゝ引き延ばし、即ち紙一重を隔てたるものを、肩に貼附す大抵十五分間を經過せば、奇妙に凝りの經過するもので、此の方法は又直に歯痛、口熱等にも適用して効能が立處に現れるものであれば、お用ゐあつてお試しなさい。





絶代の姦婦 絶代の英傑

弔花

朔兒の首都なる聖彼得堡の市街が莊麗偉觀なる、幾多の彫刻線盤を以て飾られたる圓柱の建築物は、希臘、ゴシック風の屋根となりて蒼空に聳え、郊外に通ずる大道の巷には、曾て幾多の生靈を虐殺したる大王諸公の銅像の屹立する有り、倶崙達の要塞は、燿ける鐵頭塀や塗抹せる尖塔參差として柵内を埋め、子バの河流は片小なるゴンドラ船、壯大なる軍艦、宏壯なる商船、粗雜なる端艇の帆檣林立して上下に航行するあり、凡て此等は如何にして此の豐榮宏壯なる大都府が泥濘濕潤なるラドガ湖畔の低地に隣接せるかを疑はしめざるは無し。

元老院を出でゝ海軍々令部に至るの途子バの河水漾々として流るゝ處、馬に跨りて西方を睥睨せる彼督大帝の巨像あり、大帝は左手に其奔騰せる汗馬の手綱を握り、右手に王者の笏を把りて、巖石崎嶇たる臺石に立ち、曾て巴比倫の稱王が云へる如く「吁此宏壯雄偉なる大帝都は我力に依て、我れ陛下自身の爲に建設せられたる千古の偉觀に非や」と呼號せるに似たり。

彼得大帝の崩ずるや、帝位は、其皇后カザリンの繼

承する處となれり。此時彼得二世は年僅かに十四、母后崩御の後は己れ自ら九五の位に登る可き順位に當れるに係らず、遂に其の從妹なるアンの登極を見るに至れり。

アンは在位十年にして退隱しその幼兒イワンを立てて其の攝政となりしも、數年ならずしてアンの從姉妹エリザベスは、反亂せる親衛隊の首魁となりて、自ら女皇カテリナ一世と號せり。

エリザベスは、在位二十年なりしが、其始め王位に登るや、民衆に宣言して曰へらく「朕は如何なる原因ありとも、自家の憤怨の故を以て、決して臣民を死地に置かざるべし」と、之實に立派なる主義なりと雖も實際に於て遵奉すべからざるものなりしなり。果然蒼生の生命を奪ふに狎れたる、女皇は陸續として臣民を西比利亞に送るに至れり。

曾て其宮廷の典侍なる一婦人ジョアンナが女皇を諫止せんとしたる事ありしに、女皇は聲を勵まして曰く「ジョアンナよ、爾は西比利亞へ行くの道を知れりや」ジョアンナは此の諷示を默識し、慄然として色を失せりと云ふ。

○簒奪の幕

一七六一年女皇の崩ずるや其甥は立てピーター三世となれり。

而してピーター三世の一身に對する陰謀には古今無類の悍婦カテリナ皇后がその教唆者なりき。

ピーター三世は或日離宮よりペテルホフの宮城に還御せんとするに際し陰謀者等は王を途に擁して奪ひ去らんとせり、而も此の計畫は、王の守御隊長が極力王を庇護したるを以て成立せざりき。然るに此の陰謀の露顯を知れるダシユコフ公主は急行してペテルホフの宮廷に到りて之をカテリナ皇后に報せり。萬籟全く死したる夜半の二時、一將官突如としてカテリナ皇后の枕頭に立ちて呼ぶ曰く「陛下よ、一瞬時たりとも逸し給ふ事勿れ、起床して余に尾行せらるべし」と悍婦カテリナ皇后、即ち侍女と共に急遽略裝して將

宮オルオロフに伴はれて庭園に出づれば其處に一輛の馬車あり、之に乘れば將官手綱を執りて、暗夜に乘じて門外に疾走せり。

一行の馬車行く事未だ遠からざるに破壞して用を爲さず皇后は乃ち徒歩にて旅行を繼續せり。行く事一哩許にして道に農夫の二輪馬車を馳るに會ふ、將官之を諭して皇后に献せしめ、凹凸甚だしき田舍道を馬車を驅りて首府の方へ向へり。

吁皇帝ピーター三世が、靜かに離宮に眠れるの時、其皇后は狂奔して馬をペテルホフより聖彼得堡に驅り、全露國の王冠を自己が頭上に擬せんとしつゝある也。

夜はほの〲と明け放れたる頃、皇后は直ちに身を宮城の衛士に投じて曰く、「妾の夫なる朔兒は昨宵計を設けて妾を殺さんとせり、今や妾の唯一の守護者たるべきものは爾等なり。」と此虚言は忽ち守衛隊の信ずる處となり、彼等は身を以て皇后を守護し奉るべしと誓へり。



將官オルロフは即ち大聲を發して「カテリナ皇后萬歳」と叫べば、軍士之に應じて其聲天地を震撼せり。此時砲兵將官ピールボイスは顏を冒して皇后を諫止せるに皇后は傲慢なる態度を以て之に答へて曰く、「朕は、爾より忠告を受くるの謂れなし、爾は抑も何が故に此僭越の態度に出づるや。」と將官即ち皇后の決心堅固なるに驚き、吃訥として聲を

嚴はして曰く「陛下の命に從はん。」と斯くして兵器局と火藥庫は一兵に衂らずして皇后の掌中に入れり。

如斯くにして悍婦カチリナ皇后は二時間の後、帝位に登り一隊の兵を手中に收めて、首都を其脚下に踏まへり。不實なる皇后の所爲を夢にだも知らざるピーター三世は即ち黎明車を命じてペテルホフ指して我妻に會はんとて趣けるに、途中我妻の反亂を聞いて殆んど失神し、さながら物に驚ける小兒の如くなりき。暫くにして帝は元氣を恢復して恭順の親書を我妻カチリナ皇后に送り御身と共に王位を分たんと乞へるもカチリナは之に對して何等の答をも爲さず、却て一侍從を皇帝に遣はし迫りて位を辭せしめたり。如斯くにして怯弱なる帝はロッサの離宮に幽閉せられぬ。

女皇は今一擧にして帝位を簒奪せりと雖斯の如き暴戾の行爲に對しては何等か口實を發表して其罪惡を陰蔽するの必要あるを想ひ、簡單なる宣言を發布して自ら王位を繼承せりと云ひ、且つこれは人民の幸福の爲め、又希臘正敎の爲なりと云ひたり。

如斯くにして露國獨特の簒奪は僅かに一日にして成り一兵に衂らずして成功し、若き婦人にして而も皇室には何等の緣なき他國人なる皇后は嫡兒の皇統に飛び登れり。

女皇は帝位を簒奪したる後如何にして其地位を確保すべきかを思考し始めたるが、最大の障碍は云ふまでもなくピーター三世なり、女皇は已に彼をロッサに幽閉したりと雖も忠誠なる衞兵のあるを以てこれを始末することは當面の急なりしなり、反逆に與りて大功ありし將官オルロフは彼の許に派遣せられ、食堂に於て拭布を以て廢帝を絞殺し、首尾よく其使命を果せり。帝の訃が女皇に達したる時、彼女は正に群臣を召集して宴會を催せる時なりしが、彼女は少しも之を知らざるが如く、非常の注意と非常の快活を以て謁見を續行せり。次の日公會の宴席に於て廢帝崩御の事發表せらるゝや、女皇は突如として椅子を離れ、滿腔の悲歎を以て歔欷流涕し、遂に便殿に入り病と稱して出でざるもの數日なりしが、後遂に詔勅を發し人民に告げて

曰く「神は宿痾を再發せしめて、先帝を朕が手より奪へり、朕は爾忠良なる臣民が、朕と共に此不幸を悲まんことを望む。」と

然れ共何人と雖も斯の如き奇怪なる虚言を信ずるものなく、而も亦何人と雖も起ちて其大惡を爭ふの勇氣なかりき。而も是れ彼女に取りては、滿足すべき結果なりしなり。

○政治家手腕

女皇としてのカテリナ二世は、實に異常の手腕を示せり、彼女は幾多の緊要なる改革を施し、又重要なる



制度を建て、國交を奬勵し、學校病院を設立し、兵庫を建て、工場を起せり。彼女は又其一生に於て其領土に二百四十五の都市を建設せる事を發表せり、斯の如きは實に雄大なる音調を以て人の耳朶を敲つと雖、吾人は此に向て、バビロニアのセミラスの都市建設に對する如く、寧ろ滑稽の感を催さゞる能はざりし。

カテリナは常に一種人を威壓せんと欲するの感情及野心を有せり。而も其性質たるや、根本に於て私利私慾なりしかば

他を感化するの能力なかりき。女皇は主義堅固に、判斷果決に、性格峻嚴に而して德義に於ては救ふべからざる腐敗の淵に在りき。而も彼女は如何にして他より崇仰せらるべきかの術を知れり、故に當時の英豪フレデレリック大王(普王)ルイ十五世(佛王)マリアテレサ(澳女皇)等は、皆な非常の注意を以て彼女の行動を監視せり。

女皇は北國の歳出入を二倍せり、言ふ迄も無く、彼女は自國の商業を擴張して財源を増加し、又土耳古を征討して地中海の航行を自由にし、著しく露西亞の勢力を増加せんとせり。

女皇が其嬖人に對するや、財帑を惜まざる事恰かも渇水を撒くかの如く、其驕奢の樣は實に想像すべからざるものにして、彼女は之が爲に無慮二億圓を散せりと傳へらる。其臣民を己が赤子と呼び、奴隸の稱を廢して臣民と同列に置ける彼女は、其の一語によりて數萬の奴隸を開放する事敢て珍らしとせざりき、彼女は金剛石を一掴みにして與へ、金銀を瓦礫の如く散らせり。而も吾人が女皇の寵者、若くは大臣を見る時は、恰かも惡鬼會堂の集會者を見るが如き感を懷かざるを得ず。蓋し世何れの處と雖、露國宮廷に於けるカテリナ女皇の時代を措いて、惡魔、蠻族、兇徒、貪食者が王位の周邊に集りて、抑壓せられたる民人の膏血に飽ける百鬼夜行の狀態を見る可からざらむ。

女皇が平常企劃せる大計畫は二個ありき。一つは即ち波蘭を併呑して西方に延びんとする事にして、他は即ち君士坦堡より土耳古を驅逐せんと欲する事之也此に於て乎兵を進めてポ國に入り。ポ人を强いて自ら選べる王を立て銃劍を擬して法律を制定し、弱者を脅迫し、反對者を殺戮し若くは放逐せり。

波蘭人は如斯き壓制に堪ゆる能はず一齊に蜂起して露國に抗せしが、カテリナの侵入より掠奪に至る迄、波國は實に恐怖、災害の悲慘なる狀況を呈するに至れり。

波國は救を土耳古に求め、斯くして第一回の露土戰爭は始まれり、恐るべく血腥き激戰の後土耳古は屈辱的

平和を買はざるべからざるに至りしかば、カテリナは傲慢なる態度を以て、クリミヤの獨立を承認せしめ、黒海の自由航行を要求しぬ。

次で女皇は叛亂の加勢者オルロフを疎外して、ポテムキンを宰相の地位に置けり。女皇が信任せしポテムキンは如何なる人物なるやを知るは又女皇を観察するによき參考物なり、ポテムキンは政治家にも非ず、雄略ある軍人にも非ざれども、又尋常一樣の人物にはあらざりしなり、彼は恰かも頑是無き小兒の如く、短氣、無法頑固等凡ての缺點を有したれども、亦其一面に於ては大なる計畫を企圖して、之れを實行する性質を有し居たり。



されど只無定見なるが爲に、往々にして勇猛なる計畫を中途にして挫折する事ありき。或時は彼は自らポーランドの王たるべしと自稱し、或時は又自ら大僧正と爲るべしと稱したり、彼は多くの事業に着手して一も之を完成せず。財政は破綻し、軍隊の秩序は紊亂し、國家の民衆を滅絶せしめずやと思はるゝ事すらありき。彼は又生活を王侯に比し、或時は一個の甜瓜を取り寄する爲に副官を數百里の遠きに派遣せる事すらあり。而も亦或時は自己の控間に於て生の胡羅蔔若くは胡瓜を貪食するが如き、野卑なる擧動をも敢てする事有りき

彼は平常殆んど書を手にしたる事なしと雖、凡ての事を知悉し又之を忘れず、彼は頗る强記の人なり、彼は人が彼に語る處を凡て銘記して忘るゝ事なし、彼の偉大なる特質と缺點とは、遂にカテリナ女皇より大なる權勢を附與せらるゝに至れるなり。女皇は次第に他の群臣に飽けりと雖、ポテムキンの無定見にして茫漠なる性質と、其の廣大なる計畫とは、不絶女皇を喜ばしめて其歡心を失ふ事なかりき。

○壯大なる行跡

一七八三年第二の露土戰爭終り、クリミヤ、キユバンの地方が露國の領土に歸するや、ポテムキンは女皇に勸めて親しく此の新附の地に行幸して、民衆の喝采を受けしめたり。乃ち一七八七年一月十八日鹵簿肅々として聖都を出でぬ。女皇と其廷臣とは四十の橇に座乘し、從者百六十橇、五百六十頭の馬は至る處の驛に之を待ち、斯くして華麗なる行列は一日百哩の行程を以て氷上を辷りて行きぬ。其の止まる處には假宮殿設けられ、其キエフに到るや、五十艘の撓走船より成れる艦隊を率ひて、ジエルソン河を航行せり、此處に多くの金錢、食糧、軍隊は全國より集中せられ百五十萬の軍隊は新たに徵募せられ、砂漠は一時一大都會と變じ、一夜づくりの宮城は女皇の爲に荒野の內に建てられぬ。

ポーランド王は女皇の人質として此處に來り、皇帝ジヨセフは、女皇の侍臣に交はりて、其赫奕たる行を壯にする事を甘んせり。

女皇は其の所謂平等主義を以て金剛石を雨降らし、榮譽の徽號を惜氣も無く濫授せり。女皇は其旅行車の內に大なる綠色の袋を携帶せしめ、侍臣は之より黃白を手攫みにして、沿道の鹵簿を拜する人民に散ずるに忙はしかりき。

如斯き時人目を眩するが如き旅行を續くる事六ケ月の後、女皇は遂に聖都に歸來せり。

○藝術の保護者

威名赫々たる、ルイ十四世は、トリアノンを創立しフレデリック大王はサン、スーシを造營したるが如くカテリナ二世はヘルミテージの宮城を建築して其廓内に露國歴代諸帝王の王冠を並列し、斯くして彼女は文學美術の保護者を以て自任したりき。

此宮城に入るに當り大なる花崗石の巨像に支えられて、螺旋形の階段有り、此階段を通りて、寵衰へたる多くの嬖人等が、内心の忿瞋を抑へ、強ひて笑顔を作らんとし、燻りたる顔して如何に數多交々往來したるぞや。カテリナが其寵人に飽くに至れば、之に旅行を命じて遠ざくるを常とし「朕はほと／＼彼に飽けり、彼の無智なる、思ひ見るだに腹立たし。彼は露語の外語る能はざるに非ずや彼は宜しく英國に行き、佛國に行きて、其語學を學ばざる可からず」と云ひ、此諷示を受けたる朝臣は久しからずして其旅裝を調ふるの止むを得ざるに至るを常とせり。



ヘルミテージの宮殿に於て、女皇は多くの文學者に繞圍せられ、其内には詩人ロモノゾフ、脚本作者スモロコフ、悲劇作者ケラスコフ、史家シエレベトッフ、博物學者パラス等あり。女皇は誠に佛國文學者に深厚なる友情を示し、チデローを迎するに王侯の壯麗を以てし、且つ其圖書館を買上げ、ポルテールとは不絶文書の往復を爲せり。蓋し女皇は藝術に對して自ら何等の趣味をも有する事無かりしと雖彼女は之を保護する事を以て自己の名譽となし、且つ

其力量を示すべきものなりと爲せるに似たり。

されば女皇は音樂に對して何等の興味を有せざるのみならず、互に相異なれる二樣の音樂を聞き分くるの耳すら有せず、繪畫に於ても亦何等の嗜好を有せざるに係らず、價を吝まず佛伊の名畫を購ひて、之を隠居御所の廻廊に懸げ居たり。

聖ペテルスブルグ都を離るゝ五十哩の處に、宮殿あり。女皇は甚く之を愛し、莫大の費用を投じて之を造營し、其宮殿の前面なる種々の裝飾及び彫像は、皆厚き黄金の延板を以て張られたるが、數年の後其鍍金剝離したるを以て、命せられて此を修復したる工匠が、其殘存せる金箔のみを五十萬弗にて買ひ取らん事を乞へるに、女皇は傲然として此に答へて曰く「紳士よ、朕は古着を賣拂ふ事は爲さゞるなり」と。

○專制の面影

ザースコエセロの宮殿に入る通路に當りて、數個の支那の木像の飾られたるあり。

或朝女皇が例の如く此の徑路を逍遙しつゝ有りしに其偶像が衰へたる微笑を洩せるを見たりしかば、乃ち一層接近して之を熟視したり。

女皇は、何事にも恐怖を抱くが如き女性に非ず。彼女は直ちに此偶像に歩み寄り、此秘密を解かんと決心せり。然れ共彼女は一時驚けり、此等の塑像は女皇の進み來るを見るや、忽ち帽子を取りて挨拶し、陛下の朝の逍遙を壯にせんとて、却て少しく陛下を驚かしたる事を謝せり。蓋し這は女皇の寵臣なるポテムキンと其他二三の朝臣等が戯れに支那偶像の裝ひを擬ねて、其處に佇立し居たるものなりしなり。

ビスマルク公が曾てアレキサンデル二世の朝に、露都駐在の大使たりし時、一日皇帝と共にペテルホク宮殿の窓に立ち居たるに、一人の番兵の何事を見張るともなく廣大なる草庭の眞中に直立し居るを見何事ならんと。皇帝に尋ねたるに、皇帝は侍從武官を召して、「伯爵よ彼の番兵は何故に彼處に立ち居るぞ」と尋ねたるに、武官は「陛下よ、臣は其何故なるかを知らず」と答へければ、ツアールは輕蹙して他の士官を呼び來

らしめて之に聞ひたるに、士官も亦之を知らざりしかば、更に命じて軍隊の司令官を招き、「將軍よ、何故に彼の兵士は空地に佇立し居るぞや」と尋ねたるに、將軍は答へて、「陛下よ、之は古代よりの慣習によれるものなり」と遁辭を張れるにピ公はすかさず「舊慣とは如何なる種類のものにや」「余――余は只今之を記憶せず」と將軍は訥りて云へり、「然らば直ちに之を調査せよ」と皇帝は命じぬ。

調査は愈始められ、三晝夜の栓鑿を爲したる後、下の如き原因は發見せられぬ。今を去る八十年の昔、カテリナ二世が或はペテルホフ宮城の牎より、庭内を眺めつゝ有りしに、折しも五月の初花が、凍りたる庭上より其纎弱き頭を擡げ居るを見たれば、番兵を立たしめて何人も之を摘み取るものなき樣見張りせしめたるが女皇の此命令は其後文書に記載せられて永久の規定となり、斯くて八十年の間、夏冬の差別なく三伏の日も風雪の夜も、一人の番兵此處に立ち通すの慣例を開けるものなりしを知り得たりと。カテリナ女皇が專制主



義の極端なる事は、寔に如斯きものなりき。

○結婚の破壊者

瑞典王アドルフアスは、メクレンブルグの公主と婚約ありき。而るにカテリナ女皇は、王を聖　都に連れ來りて、己れの孫女なる亞歷山那に之を妻はさんと欲せり。即ち王を欺きて聖　都に到らしめ、直ちに結婚の申込を爲したるに、約束は締結せられ、華麗なる一大祝典は着々として用意せられたり。

定めの日は來りぬ、女皇は多くの侍臣に繞圍せられて冬宮の拜謁の間に座し、亞歷山那は美々しき花嫁姿に打粧ひて、祖母の側に座せり。凡ての準備は整えられぬ。一同は息を凝らして待ち設けぬ――而も花婿は來らざりき。遂に花嫁の顏色は眞蒼に變れり。女皇は眞赤なる顏となれり。侍臣は皆遑々として相顧みぬ。

暫くにして奇異なる光景は、瑞典王の房室に於て現はれぬ。大法官マルコツフは、結婚契約書を携へ來りて、形式的に之を朗讀したるに、聞き居たる若王は、前に契約せざりし事項の、其中に書きあるを發見せり蓋しスイーデンの國法によれば、外國婦人にして其國の皇后となるものは、國教に從ひて、希臘教より新教に改宗せざるべからざる事となれり。然るに傲頑にして權柄なる女皇は、己れの娘のみは此國法の例外と爲し、其旨を契約書に記載せり。

王は乃ち斷乎として之に署名する事を拒めり、大法官は仰天せり。一小國の一若王が、女皇の命を拒まんとは！其は實に大膽なる行爲なればなり。

大法官は阿諛せり、懇願せり、哀求せり、而も王は斷乎として之を聴かず。且己れを欺かんとする行爲を怒りて、契約書を跳ね飛ばせり。

王は勢猛く叫べり「不用なり！余は署名せず！」

王は起ちて己れの房に退きぬ。思はざる失敗は來れり何人か此吉報を齎らして女皇に到るものぞ。果然何人も敢て自ら之に當らんとするものなかりしが、遂に女皇の寵臣なるスウボツフは、辛ふじて女皇に近づきて事の始末を囁きしに、見る／＼女皇の顏は血を濺ぎぬ

起たんと欲して女皇は蹌踉けり。女皇は自ら制して、彼は病なり、との口實を搆えて群臣を退かしめたる後立ちて己れの房に退きぬ。憐むべし若き公主亞歷山那は、己れの室に導かれて消えも入りたく泣き入れり。彼女は其優しき心と、憂鬱と、傷はれたる自負心と相混じて、衝き來る悲みに堪難かりし也。

王位に登りて勇敢なる女皇は、自己の宮廷に於て甚く侮辱せられ其平常誇りとせる政略の裏を掻かれて、今は唯如何にしてその復讐をなすべきかを考へ以て、僅かに慰め得たる也。



國際上の禮儀は憤怒を發表する事を許さずと雖、精神的に致命傷を與えられたる女皇は、如何でか此儘にして默すべき。數日を經て、瑞典王が本國え歸りし後、女皇は全力を擧げて瑞典と戰ひ、惡むべき其若王を討滅し了らんとて、準備をさ〳〵怠りなかりき。――此時に當りて、死の神は俄然として女皇を見舞ひぬ。彼女は妖術者の如く忽然として現世を辭せる也。

一七九六年十一月九日、女皇は自己の房内に於て卒

中にて打倒れたるを、侍臣に發見せられしが、女皇を蘇生せしめんとて凡ての手段を盡したる甲斐もなく、一瞬時と雖も將來を考ふるの暇なく、用意する事なく悔悛する事なく、此恐るべき惡辣なる老婆は凡て罪名を其肩上に擔ひて、現世より葬り去られたるなり。

女皇が政治上の罪惡、個人的の罪障は彼女をして天下の呪咀を受けしむる事大なり、彼女は其天性凡て佛國女性の美德を具備し、宮廷の內に於ては實に深切、簡易にして、而も頗る諧謔に富み、其性質晴明にして其の態度の沈着なる、多く得易からざるの偉才なりしが、其光彩有り、絢爛たる性格の他面に於て、私欲、邪僻、橫暴等の惡辣なる形相の現はるゝは、史家の齊しく怪訝に堪えざる處なり。（終）

橇を曳く犬

東隆加より歸來せし人の話に彼地の犬はエスキモーの犬と同樣である。彼等は冬期氷雪の上に橇を曳く用を爲すが速力も早く艱苦にも堪へる重寶なる動物である。荷物を輕くしてやれば一日に五十哩位走りて、一週間以上も續ける事が出來る。時としては休息せずに百哩以上も走ると云ふ。一頭は先に立ち、後は二頭宛並びて橇を曳かせるのであるが、大概橇一臺に付犬三頭乃至二十一頭を例とす。先導者たる犬は最も怜悧の者を選ぶので、普通の犬は一頭五弗から十弗迄であるが、先導は五六十弗の價を有する。犬の食物は殆ど魚類のみで、生魚でも干魚でも腐りかゝつた魚でも喜んで食ふ鮭は東隆加に於て饒多の產物であつて、其價も至極低廉であるから、多く之を與へる。犬一日の普通食量は魚一尾であるが、旅行中には其の量を半減にする。土人の言ふ所に據れば十分に食はせるよりは半減にする時の方が能く旅行に堪へるとの事である。夫れ故誰でも旅行する際には、其の前日は一切犬に食物を與へぬ事にして居る。犬を馴らすには主人自身に食を與へる樣にして、主人を覺えさせて置かねばならぬ、左もなくば途中で逃げ出す樣な事が出來る。彼等は中々悧巧で、謀を以て人を欺くことがある、彼等は多勢一緒に居る時は勇猛であるが孤獨になる時は甚だ臆病である。



憐むべき少女の犯罪

登坂北嶺

（一）

街燈光黄に、枯柳寒風に戰ぐ三月十六日の曉、こゝ新潟の本町通を十一番町より西堀さして馳せ來れる一個妙齡の處女あり、顏色蒼く愁ひ雙眸血を含みて凄じきが亂髪に頰を打たせつゝ驀然警察署に駈け込みぬ。而して訴ふる所を聞けば、驚くべき哉、只今實父を殺害せりと、言ひ終つて泫然涙下り、嘘唏嗚咽、耐へずして終に倒る、吁、何等斷腸の光景ぞや。

處女、姓は片桐、名はムラ、明治十九年を以て生る今や春色正に闌にして人世の樂を極むべき時期にありながら自ら最慈の實父を刺して獨り殘生を鐵窓の下に葬らんとす、狂か、はた痴か、あらず、あらず、渠は恒に恰好なる女子の標本として目せられつゝありしなり。然らば何が故に此暴擧を敢てせしか、これ予が進んで諸孃に語らんと欲する所以なり。讀者よ、姑く先づ忍んで描き來るの慘圖を視よ。

實父三吉、本年五十二歲、平素小心翼々たるも一たび酒を被る時は罵詈亂暴至らざるなく、爲めに一家の平和を破ること數次なりしが、前夜も泥醉して例の狼籍を盡し、果は其まゝ茶の間に臥せるを見たるムラは

熟々と親の酒癖より常に紛紜の絶えぬを想ひ、遽然起つて姉の夫が所持し居たる三尺餘の白刄を索め、白鞘を拂ふや、空を斬る一次、曉嵐戞として刄端を掠めて去る。遮莫、曙色面に上れる熟睡の實父を透し見ては忽ち逡巡して刄を捨てんとせしも、再び氣を取り直して風呂敷を被り、探り寄りてグサと許り實父の咽喉を刺し貫けば、前後も知らぬ不覺の身の、哀れや最後の悲鳴だも擧げ得ずして空しく落命しぬ。餘刄疊に入ること二寸、鮮血ムラが裾を染めて腥氣室に滿てり、嗚呼何等斷腸の光景ぞや。

（二）

嗚呼何が故にこの妙齡の處女にして敢て此大罪を犯したるぞ。渠は常に實父に對して惡感情を抱き居りしが爲め乎、否。

渠は同胞六人にしてその五人は女なり、而して渠は其中に就いて最も至孝を以て稱せられき。父の酒癖を癒さんが爲には、曾て西堀通本覺寺へ心願を掛け、自己の一命を縮めてもとまで祈りを凝らし、或は種々の藥品を求めて只管其惡癖を矯めんとせりき。彼の殺害の前夜、父が醉臥するまで傍に侍し、尙其夜寒を慮りて搔卷を掛けたりしが如き、或は父の情婦に懇書を贈りて父の亂行を諫めしめんと計りしが如き、何の點より察するも、渠は決して不孝の子にあらざりしなり　あゝ世に酒癖の甚だしきもの何ぞ限らん、豈敢て此父をのみ尤むべき、然るに斷じて之を殺す、其心事を想ひやれば眞に斷腸に堪へざるなり。

然らば、渠は無教育の爲めに然りし乎。否、否。

渠は高等小學校を卒業する時優等の位地を占め、其後は專ら家事に奔勞せりと雖も、餘暇には最も讀書するを好み、其手跡なども立派にて、書き殘したる二通の尺牘より察するも高等女學校程度の學力は充分ありしなり。殊に、平素「ハガキ文學」「女子文藝」等を愛讀せしより考ふるも決して無智文盲の愚者にはあらざりしなり。苟くも倫理の一端を知れるものにして其父を殺すといふは、實に實に止むを得ざるものありしに依る、此孝女にして此學力あり、而かも到底最慈の實父

を殺さゝるを得ず、何等斷腸の運命ぞや。

然らば渠は自ら制するの氣膽なかりしに由るとせん乎。否、否、大に否。

（三）

渠の家は世々鮮魚問屋を業とせるを以て自ら膽略あり、猥りに躁がず女丈夫の風あり、故に曾て漁業上の大葛藤ありし時、自ら襷掛して衆に率先し、焚出しを爲して男子に聲援を與へしといふ。また自首當時の態度の沈着なりしには警官も竊かに舌を卷て驚きたりしことや、或は家を出づる時、妹を呼び覺まして懇に後事を依囑して些も狼狽せざりしことや、其他平素の擧動の大人びたるより歸納する時は決して渠を以て尋常婦人が驚愕して不意の妄擧に出づるものと同視すべからず。渠が自首して後、差入れの衣服に改まり、



巡査に護られて警察を出る時、萬感交々胸に迫りて車上に泣き伏したるを以て女々しきものと做すは餘りに冷酷なる觀察にして、此の如きはこれ人情の自然と云

はざるを得ず、諺に曰く鬼の目にも涙と。矧んや、此孝女にして此學力ありて、加ふるにこの氣膽ありて、忍びてこの大慘事を敢行す、之を聞かば仇敵と雖もまた應に斷腸の念に耐へざるべし。

　假りにも親となり子と育てらる、實に淺からぬ因緣にあらずや。如何に酒癖惡しといへ、如何に素行の修らざりしといへ、自ら手を下して之を殺すといふは、實に進退谷れる時の手段といはざるを得ず。予は今尚ほ之を想ふ、渠が殺害せんとしたる一刻前に、夜寒を慮りて搔卷を着せたる其心根の如何に可憐なるかを而して又之を想ふ、渠が現在父の顏を視るに忍びず、風呂敷を被りて目を掩ひたる心事の如何に悲慘なるかを、而して又更に之を想ふ、白刄を喉頭に擬して將に血に飽かしめんとせし一刹那にあたりて、渠が胸裡に閃ける苦悶の影の如何ばかり異樣に彩られたりしかを終に臨んで更に更に之を想ふ、事遂げて天漸く白む時昨温かき慈父が體は、今や冷かに横りて、呼べども答へず叫べども覺めず、永しへに哀しき眠に就かんとす而かも手を撿すれが血痕紅よりも鮮かに身は斃然として正に在り、夢に似て夢よりも果なき始末をくり返す胸の中の如何に亂れ苦しかりしかぞ。

　當世詩人おほし、盍ぞこの哀むべき女主人公を憫むで一片斷腸の曲をつくらざる。

（四）

　何が故に渠は此恐るべき大罪を犯して悔ひざるに至りし乎、未だ依然として疑問なり、而れども之を解かざれば渠は終に說解せらるゝを免れず、いでやこれより其止むを得ざる顚末を叙せむ。

　現戸主片桐三九郎には一男四女あり、又三九郎の妻サトが實弟にて三九郎の養子となれる被害者三吉にも一男五女あり、されば何人が見ても同家の相續人を定むるに就いて紛紜の生ずべきは明かなり、而して昨年中三九郎の長男を以て被害者三吉の養嗣子となし、三吉の長男を他家へ遣したるに依り、表面上には何等紛擾なきが如しと雖も、世間にある例には洩れず三吉は自分の子を相續人となしたく、事にふれ折にふれては

一家風波を起しつゝありしなり。然らば何故に三吉を先代が相續人とせざりしかといふに、三吉は若年の頃より放蕩にて見込なき故、妹に婿を貰ひて嗣子となし三吉を分家せしめたれど、悉く費消して再び同居する樣になりし時、三九郎の嗣子となることに極りしも、其後某樓の女將と馴染み一層放蕩に身を持ち崩せし爲め、益一家不和となり、其上、三九郎の子を養嗣子となし居るを面白からず思ひて、酒飲みては怒り散らすより一家は愈風波烈しくなりゆくを見て、ムラは終に最後の決心をせしなりけり。

以上は極めて概略に過ぎざれど原因を明かにするには充分なりと信ずこれ世上に往々生ずるの例にして家庭上の一大問題といはざるを得ず。畢竟家庭の不和あるが爲に如此大慘事も出來せりといふに歸着するなり、人間は社會に出でゝ働くの勞を慰する爲め、是非とも家庭の樂を享けざるべからず。社會に生きたるの人にして往々家庭に死しつゝあるものあり、彼の上流社會の如きは概ね冷かなる家庭に堪へず、强ひて火酒を呼びて纔に温を求むるを見る、歎ずべき哉。

渠が此大罪を犯したるも畢竟如上の如き家庭の不和を矯正せんが爲め、否根絶せしめんが爲めに身を殺して父を殺す、家庭の不和は忽ちこの二個の精靈を無理に奪ひ去りて永久に還さゞるを思へば吾人が第一に注意すべきは、家庭の和不和如何に在りと斷ぜざるを



得ず、世人は家庭は一家の私事として輕々に看過すと雖も、影響する所の此の如く大なるを思はゞ、須く猛省して過なからんことを期すべきならずや。

（五）

疑問は氷解して提案は終局に達せり、ムラが前途に對して諸孃の望む所若何。之を冷酷なる獄吏の手に委ねて絞首臺上の露と消えしむるを可とする乎。將た之を同情の涙に富める名判官の袖の下に匿れしめて、再び温かき天日に浴せしむるを欲ぶ乎。

　ムラが此兇行を敢てしたる動機を檢する時は家庭の不和てふ一個の障魔の爲せるものと斷じて必然之を赦さゞるを得ず。然れども此の如きは吾人同情に厚きもの丶温言のみ、卿等惻憐の心優しき諸孃の希望のみ。法律は明快なり、嚴肅なり、一歩も假借せず、情を斷じてそこに價値あり、權威あり、之を奈何ともする能はず。霜野の捨石に似たるはこれ法律の本體なり、如何に之に向ふて哀を乞ひ温を求むるも冷々として千古渝らず、頑として横はるのみ。あゝ、諸孃、此の可憐なる花の如き處女をして徒らにこの頑石に委し去つて顧みざるは果して血あり涙ある人間の所置なるか、苟くも人道の大義より打算して非難すべきものならざる乎。假に地を換へてムラの境遇に居らしめば諸孃の心事や果して如何、故に予は此際だけ予が法律を握るの地位にあらざるを終生の恨事となす。再び茲に之を云ふ、法律は明快なり嚴肅なり而して又冷酷なり、此の如く情實の明瞭なるものに向つても尙ほその本能を發揮せずんば甘心せず、あゝ。

家庭の不和を除かんが爲に、換言すれば社會の秩序を間接に保たんが爲めに、先づ自らを殺すの覺悟を以て其最慈の實父を殺す、其の苦衷眞に膓九廻の思あり是れ明かに愛他主義の發現にあらずや。

　あゝ滿天下の情深き諸孃、冀はくば遙かに此憐むべき處女が前途に對して多大の祝福あらんことを上帝に祈らせ玉へ、切に、切に、切に望む。

編者曰く月經時には多くの婦人は受感性となりて自

制の機能を遲緩ならしむるものなりと而して月經に異常を呈するものは必らず精神に影響して往々狂的行爲を敢てせしむるものなりと將して然らば彼女の行爲は裁判醫學上の緊急問題にあらずや。

實社會の觀察（承前）

伊藤銀月

其五

次には、愛憎好惡の感情が極端に激しかッたり、人生を悲觀したり、厭世的であッたり、天才氣取りの病的であッたり、ヒポコンデリーであッたり、ヒステリーであッたりする者は、縱令觀察眼と素養とが充分でも、滿足に實社會を觀察することが出來ない。

前にも述べた通り、社會の或一角面を觀察しやうと企てた時、己れは其角面を觀察すること丈けが好きだからと云ッて、之と連鎖の關係ある他の多くの角面を取離すことが出來ない、多くの角面の中には、厭やなのも少なくないだらう、又、時に依ッては、己れが嫌ひな種類の人間に就いて取調べなければならぬ場合もあるだらう、憎いと思ふ奴に就いて說を聞かなければならぬ時もあるだらう、それア誰だッて厭やなものは厭やだ、嫌ひなものは嫌ひだ、憎いものは憎い、けれども、實社會を觀察するの興味は何物にも換へ難いと思ふから、之に從事するの一時は、愛憎好惡の念に打勝ち、寧ろ打忘れ得るのである、所が、華嚴臭かッたり、天才氣取りであッたり、ヒポコンデリーであッたり、ヒステリーであッたりする者は、愛憎好惡の念が病的に激しいから、どうしても、之に打勝ッたり、之を打忘れたりすることは出來ない、こんな連中は、先づ其頭をたゝき直さなければならぬ。

たとへば、こゝに妙な種屬があるとする。

それは、娘を華族の妾に出して、其お蔭で、米の値段も知らずに暮らして居る夫婦である、何も、そんな下等の種屬を觀察しなくッてもいゝぢやないかと、云は

れると、それ迄だが、これも亦頗る興味で且つ或る場合には必要である、彼等が華族でもないのに、妙に華族氣取りになッて、平人を眼下に見くだし、其癖、蔭で惡口を云ひ、冷評をする者もあるだらうとの僻み根性から、内幕を知ッた者に對しては、可笑しい程固くなッて警戒するが、物見遊山に出たり、知らないものに向ッたりの時には、恐ろしく高く止まッて、馬鹿に威張るなどの、生活の裏面、機微の點に躍動するの心理作用を解剖するには、いやな事を忍んで見聞しなければならない、又、之れと密接の關係ある華族社會の生活の、虚僞、腐敗、馬鹿々々しく詰まらなく、御話しにならない狀態をも、進んで實地探險に及ばなければならない、之れを試みに道行きの間には、骨あり、腸あり、心あり、魂ある人間の、冷靜に觀察して居ることの出來ない現象にも觸れるだらう、いや、乾度觸れるに相違ない、斯る場合、愛憎好惡の念が病的に激しい者は、堪らず引ッ返して逃げ出す、が、愛憎好惡の念を制馭し得る迄に意志の訓練された者なら、巣鴨病院の名物芦原將軍を研究しやうと思ふ人が、膝行頓首三拜九拜、出來得る限り彼を崇め敬ふの態度を示し、彼をして、之に釣り出されて其全幅を露呈せしめるやうにすると、同じ心持でやり通すことが出來るだらう、これはまことに詰まらない例であるが、詰まらない事でも此通りだから、モット問題の範圍の廣い、モット内容の複雜な事になッたら、愛憎好惡の念を制馭するの必要が、益々多くなるに極まッて居る。

其六

最後に、更に〳〵困難至極の事がある、觀察眼と素養とが充分で、愛憎好惡の念を制馭すべき意志の訓練が遺憾なく出來上がッても、此點を確に引締めて置かないと、商賣なら元も子も無くする危險に逢ふ虞れがある、然らば、それは何であるか。

實社會を觀察して、或る消息に觸れ、事物の眞相と理論との一致を看取する迄の間には、種々なる誘惑に逢ふであらう、而も、誘惑は避くべきものではない、寧ろ誘惑を歡迎して、之を利用する程でなければ、卒

物の眞相に通ずることが出來ないのであるけれども、誘惑を利用する塲合に於ては、どんな際どい所に至ッても、タッタ一秒時間も、冷靜なる批評家たるの態度を失ッてはならぬ、失ッたら直ぐに墮落である、崖に垂れてゐる藤の花を採るやうで、危い所に妙味があるのである。

だから、實社會を觀察することは、まだ意志の訓練が充分でない青年には、或る制限を與へてやらなければならぬ、情火熾に、血氣定まらす、誘惑の爲めに身を誤り易い、二十前後の青年なら實社會を觀察するにも、或る範圍に留まッて、それ以上に進まず、嚴重に制限を守るやうにしなければならぬ、さうして、傍ら、意志の訓練に力を注ぎ、正當の順序を履んで世事の經驗を積み、シッカリ土臺が固まつて、誘惑の爲めに身を誤るの憂ひ無きに至ッてから、始めて誘惑を利用するの態度を取のである。



誘惑を利用するとは、空漠たる言であるが、是れ以上具體的に云はぬ方が、讀者の默會を容るゝ餘地あッて、却ッて趣深からう、何れの路に旅立ちしても村か町かに逢ふやうな、實社會の觀察は何れの方面に向ッても必ずそれ〲の誘惑に逢ふのである、社會と云ふ

ものは理想通りに出來て居ない、隨分不都合な點が多い、其不都合な點は即ち誘惑の潛む陷穽で、こいつへ足を落したらモウそれッきりである、誘惑を利用するとは、此陷穽を避けて通らずに、態と近寄ッて、ドッコイと其上を跨ぎ越えながら、上からチラと睨んだ一刹那の眼の働きに、穽の底迄覗透すことである、賢明なる讀者諸君は、これ迄云ッたら大概首肯かれるだらう、又、是迄云ッてもまだ首を拈ッてゐるやうな火移りの惡い人なら、いつ迄云つても矢張り分らないのである。

繰り返して云ふ、誘惑を利用するとは、陷穽の中へ足を突ッ込むことでなく、其上を跨ぎ越えながら、鋭い觀察眼の一瞥に、穽の底迄見透すことであると、だから、世の狡猾なイカサマモノが、實社會を觀察するに托して、縱まゝに墮落を働き、碌々として自ら「通」と稱するなどは、こゝに所謂誘惑を利用すると、大に意義を異にするのである、陷穽へ足を突ッ込むは、既に誘惑に支配されたので、之を利用するなどは思ひも寄らぬ、中へ入ッた上は、どんな鋭い觀察眼も役に立たぬ。

其七

ついでに云ふ、實社會を觀察する者は、所謂「通」になッてはいけない、所謂「通」は、一方に偏し過ぎて殆んど病癖をなした者である、大通は其病既に膏盲に入ッた者、半可通はチョット鼻風を引いたぐらゐで、大病人を眞似てウン〳〵唸る者、ドチラも餘り賞むべきではない、さうして、彼等は或る一の部門に心力を傾け盡くして、病的に陷ることを避けぬ者であるから、其當然の結果として、他の萬般の部門に淺薄迂遠なこと、お話しにならない、だから、實社會觀察者は決して「通」となるな、又全然「通」の言を盲信すると、「通」の言は、參考として缺く可からざるものゝ一つではあるが、決して參考として缺く可からざるものゝ全部ではない。

家政の栞

取纏め洗濯にかゝらふとするには先づ木綿物と麻物、絹物、毛物を別々にした上、同じ木綿物でも、順序を立てゝ先づ垢付の少ない白い物、次に垢の多い白い物、次に色付物の中色落の少い物、それから色落の多い物といふやうにするのが通例でせう。

▲さて木綿物の洗濯は、只湯をかけて洗ふか、湯の中で石鹸を付けて洗ふのが通例ですが、垢い甚いものは、鍋か釜の中へ入れて、掩ふ丈水を汲み入れ、石鹸を細かく刻み込んで、攪き交ぜながら半時間程も煮、盥に返し、二三度湯をかへ、石鹸を附けて洗へば、落ちます、石鹸の代りに洗濯ソーダを用つても宜いが、先づ別の器に溶かして入れ、分量も多過ぎないやうにせぬと、布の地を損傷める恐れがある、本フラネル、唐縮緬、絹物などは、何品に限らず煮ることは御無用です、手を入れ得る程の湯につけ、手柔かに洗はればならぬ、石鹸は上等、洗濯ソーダは使はぬがよし。絹布洗濯法の一番宜いのは、先づ上等の石鹸を砕き、粉にしたものを盃に一杯、蜂蜜を同く一杯、下等の焼酎をコップに二杯、以上四品をよく混ぜたものを用意し、さて洗濯せやうとする絹布を、裏を上にして張り板の上に擴げ、前の混ぜ物を塗り、手柔かに揉み擦り、柔かな水に入れて振るのです、地は痛まずに垢の落ちること受合です、其まゝ張板に張つて乾かせば宜しい、凡て洗濯物は極軽く絞つて水を振り掃ひ、竿か縄に懸けて乾すのが規則です。

▲西洋では皆洗濯を用ひます、布へ石鹸を付け、此ぎざ〱で擦れば、足袋の十足や二十足洗つても、手の傷むことは無く、單衣の十枚や二十枚は、少しの時間で、清浄に洗ひ上げることが出來ます、西洋人は洗濯物を干すに竿や張板を用ひませぬ、庭に棒を立てゝ麻縄を張り、洗濯物をこれへ懸けて、ピンで留めます、ピンは束髪のピンの形で、木で拵へてある、此干し方は尤も輕便なものである。

▲西洋洗濯法では、乾いた布に霧を吹いて柔かにし、皺を延べて巻き上げ、暫く置いて、板の上に薄い座布團を置いた位の柔かさの物の上に擴げ、重い火熨斗で熨して疊みます、糊は生麩、葛、片栗、馬鈴薯、麥などの澱粉、若くは海布、何でも宜しい。

▲東コート、洋服、二重廻しなどの襟や袖口に着いた垢は、随分持餘すものですが、何でもない、先づ其部を濡し、石鹸を澤山擦り付け、熱い湯に浸し、強靭い刷子で擦り、垢の取れたのを見て温湯の中へ入れ、更に刷子で擦り洗ひ、板の上へ延して陰乾にすれば奇麗になります、若し手に入るならば、此の温湯の中へ、アルコオルか焼酎を少し加へれば一段と結構です。

▲更紗などの彩紋物、其外褪め易い毛物などは、鉛糖と申す藥を水に溶した中で洗へば、色の落ちる心配が少い、若し鉛糖が手に入れることが出來なければ、明礬でも宜しい。

▲毛の類は炭酸ソーダの薄い液に石鹸を溶き交ぜたもので、繰り返し幾度も洗つた後、水洗し、其上を、微温湯へ「アンモニア」を少し溶して洗へばよく落ちる。

女學校の
模範寄宿舍

門田稲葉

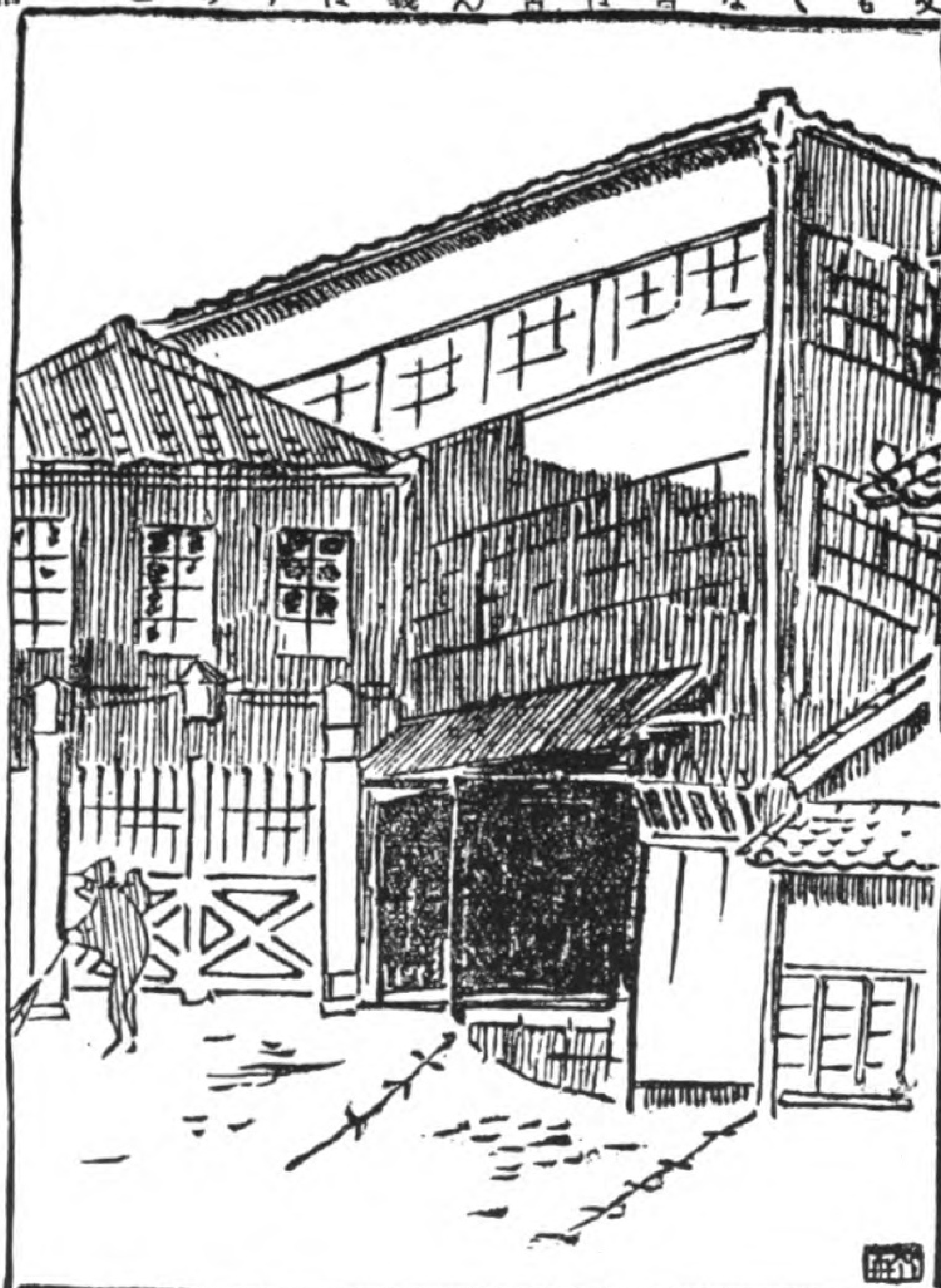
意ふに女學校の寄宿舍は、學校所在地に保護者も監督者もない、生徒を收容して、保護者や監督者に代つて、その誘惑を避けしめたり、墮落を防ぐばかりが能でもあるまい、即ち青春妙齡の危機を警戒すると同時に、女子の心得べき普通の事どもを、知らず〱の間に、習慣より得せしむるに於ては、學業の一助ともなるから、生徒は實地に女子の心得を會得し、學校も亦課外に實地練習せしむるやうなもので、所謂一擧にして兩得するものである、余はこゝに、一擧にして兩得しつゝある、福島縣下に於ける、隱れたる一の「模範寄宿舍」を紹介しようと思ふ、それは縣立高等女學校の構内にある寄宿舍で、その構造、制度、設備、起居、食事等、みな多く他の學校に於ては見る能はざるところであつて、總べて生徒敎養の上に多大の裨益を與へつゝある、此頃、余は創立以來の校長として最も効績ある中川殿太郎氏を訪ひ、親く此模範寄宿舍に就て見聞するを得た、長野縣立高等女學校の寄宿舍も、完備して居るといふが、長野縣のそれとは、全然、趣きを異にして居る、しかも此模範寄宿舍は、實に全國中其類を見ないそうで、文部當局者は度び度び視察せられ、常に各縣より來觀するものも多く、又北海道、靜岡、福岡等の各縣よりは構造、制度、設備その他に就て照會あつたそうである、近來、殊に世の注目するところとなつたから、左にその一班を掲げて一粲に供しませう。

（一）福島縣立高等女學校の位置及校舍寄宿舍

忍山の麓より南へ約二丁、遙か西に岩代山脈は蜿蜒として蟠え、吾妻山の噴火口より騰る煙も薄く流したやうに見え、眼眸を轉ずれば、辨天山の公園は市街の南にあつて、さらに東に走りて起伏し、恰度、市街の南東に廻した屛風のやうな渡利山は、近く浮動するかと見ゆるところは、福島の市街の北、楊枝柳といふ田圃中である、諸姉もし此地に遊び、信夫山の勝を探らんとするとき、必ずや此の眺望の佳なるところに熱閙の黃塵を避け、瀟洒たる平屋造の建築物を見るであらう、道路の東にある新しいのは即ち福島町第一高等小學校で、之と道路を隔てゝ西の田圃に、嚴しい柵に圍繞されたる十數棟の建築物は、即ちこゝに紹介せんとする女學校である、明治三十五年の建築にかゝるものであつて、女學校としては餘りに殺風景で、規模も亦隨つて大きくはないが、

校舍や附屬舍は皆として堅牢に、且つ衛生上に適ふやうに建築したものらしく、內外ともに何の裝飾も施して居ないから、固より輪奐の美は盡してをらぬ、併し五年間の風雨に外部を晒されて、稍々古びたけれども、さすがは女學校丈けに內部は壁の損じた所もなければ、勿論鉛筆などで敎師の惡口も樂書して居ないやうだ、此殺風景な校舍で余が觀察し得た諸點は輪奐の美を盡して居る校舍よりも寧ろ奧床しく、何んとなう中川校長の敎育主義が偲ばるゝのである、余は先づ寄宿舍の說明を爲すに方りて、諸姉を敎室から寄宿舍まで御案內しませう。

通用門は東向になつて信夫山から福島の市街に通ずる道路に添ふて居る、先づ此門から入ると眞ッ向ふは玄關、北と南とへ廊下がある、仍で北へ行くと廊下の西と東に一棟ある、西は普通敎室が三、東は數學敎室、普通敎室が三と別けられ更らに北へ行くと廊下は東に曲りそこに一棟、地理敎室、標本室、器械室、準備室、理科敎室等がある、こゝから廊下を戻りて、玄關の直ぐ南の一棟は、西に割烹室、作法室、裁縫室、音樂敎室、東に事務室、校長室、敎員室、圖書室圖畫習字敎室等がある、廊下を尙ほ南へ行くと、行當りは小使室、湯沸所、其傍は物置で、東の一棟は生徒控所、生徒昇降口、等離れたる西の一棟は體操敎室で、土間を往來するやうになつて居る、體操敎室の直ぐ前から南へ行くと、寄宿生の昇降口があつてこゝは即ち模範寄宿舍である、昇降口から、東に應接所、談話室、生徒室が五、外に便所と離れたる物置、西に舍監室、舍監控室、寄宿立徒室が五、外に東と同所に便所と物置がある而して昇降口から西の行當からと二つの廊下がある、其向ふの一棟は寄宿生徒室が七、病室、調劑所、看護室等があつて、其西の一棟は



日本女學校

浴室、小使室、洗濯所等である、離れたる小さき一棟は商人の控所、これで隅なく觀たことになるが、注意を拂つて見るには幾ら規模が小さいとは云ひ乍ら、餘程の時間を要すのである、而して校舎の西に當る校庭は、始終海老茶の點々する運動場で、まア一通の運動器具は備へ附けられてある。

（二）各室の經濟を異にする樂しく美しき生活

何づれの學校の寄宿舎にも、賄方の請負をするものがあつて、生徒は手を勞することなく食事を濟して居るが、其餘弊として、時に賄が不味かつたりすると、賄征伐といふ恐ろしい一種のストライキが、昔しから今に至るまで好くあるやつである。それが荒くれ男の學生のみならば未だしも、今はあられもない姫御前だちまでが、時としてやれ腹が痛いの、喰ひたくないのと云ふて、男の學生のやうに食器を滅茶々々にするやうなことはないが、賄征伐の眞似をして、いとも優しきストライキを爲しつゝあるそうだ、然るに此學校の寄宿舎に限つては、そんな亂暴な、そんな馬鹿げたことは些つともなく、誠に樂しく美しき生活を爲して、快く勉強することが出來るのである、さて寄宿舎の構造と設備とは、一寸前にも記したやうであるが、更に之を說明すれば、現在は二棟を十七室にわけ、その一室は十二坪五分であつて、東西兩面に深さ三尺の押入を設け、東西各十疊の間に八人を定員として居る、寄宿生の配置は何うして居るかといふに、補習科生、四年、三年、二年、一年の各級生徒を混じて八人となし、姉妹又は同鄕生は可成同室せしめ、別に主婦とか主母とかいふ名稱を附さないが、近頃、生徒間で上級年長生を室長と稱して居るそうだ、それから北廊下一間を隔てゝ、每室に九尺に十二尺（三坪）の炊事場を附設して置く、其所には無論流しもあり、竈、涼爐、鍋、釜、其一切の食器が取揃へられ、米櫃も、醬油樽も、味噌瓶も、漬物桶も、野菜もあつて、諸所方々の通帳までが釘に掛けられてある一寸覗いてさへ――此事を聞いてさへも――如何に愉快そうに、炊事のことを想像されるから、況して海老茶袴を穿いた、八人の姫御前が各自に手別して、飯を炊き、汁を煮、副食物をつくり、掃除を爲すのであるから、何がなくても美味かろうし、樂しいであろう！而して此寄宿舎は各室とも、週番といふものはなく、便宜に從はしむるのであつて、お互ひに扶け合ひ讓り合ふの美風があり、日々の食事は恁ういふ都合であるから、各室とも皆一定しないそうである。

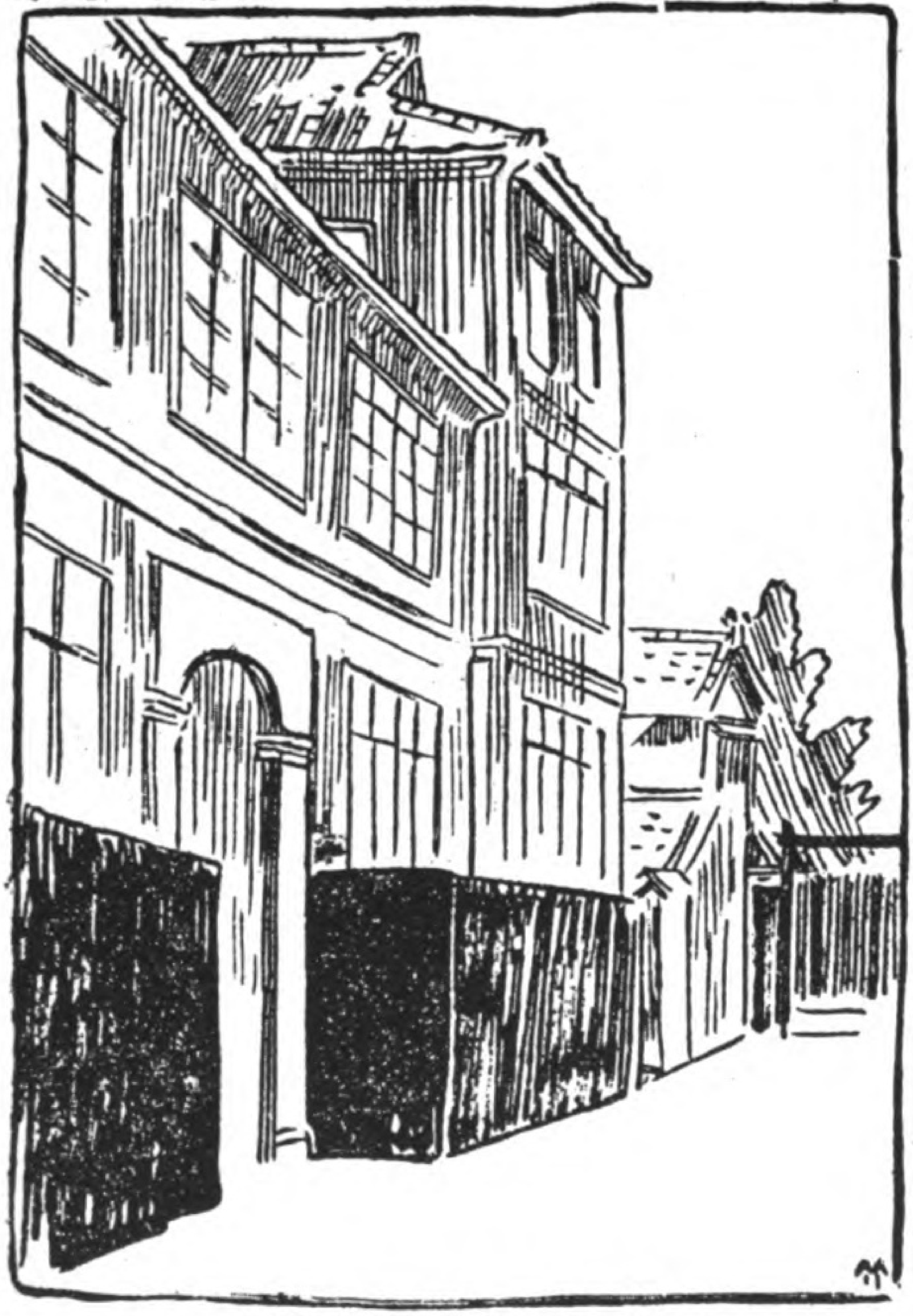
（三）如何にして食品の購入を爲しつゝあるか

恁ういふ風に、各室が經濟を異にして居たならば、氣隨氣儘の仕放題であろうと憂ふる人も無いではないが、自由の中に規律整然たるものあつて、炊金饌玉の贅澤もなければ、咬菜の吝嗇もないのである、然らば此の最も樂しい、而して美しい、團欒たる家族的生活を爲しつゝある

生徒等は、斯ういふ方法に依りて、日々の食品を購入して居るかといふに、寄宿舍の西に當りて一棟の商人控所がある、そこには學校で福島の町役場へ委托して撰んだ、二人の身元保證ある、確實なる商人を出入せしめて、米穀、味噌、醤油、野菜、肉類等を毎日午後三時若くは三時半までに集合せしめ、而して毎室の生徒が通帳を以て、隨意に各種の商人から各種の商品を購入するのである、舍監は常に其販賣品を鑑査して、食品から起る危險等はないやうにして居る。

（四）入浴を一週四日間とし衣類を自ら洗濯す

未來の良妻賢母と、女學生に對して云へば今日では惡口のやうに思はれる、此誠に好いところの良妻賢母と云ふ四字をば、惡口に用うるやうになつたのは、果して誰の罪であるかといふと、女學生に之を嫁さなくてはならぬ、女學生を妻君にすれば、乳母車に子供を泣かせて置いて、自分は良人と二人で、御轉婆の本性を現して、テニスでもして遊んで居るかのやうに、情なく世の人は思ふけれども、それは狹い觀察である。



女子美術學校

さて此寄宿舍生徒の入浴日時は、一週間に月、水、金、日の四日で課業後より點燈時を限りとするのである、汲込其他には、浴場の傍らに小使室があつて、一切小使がするけれども、衣類の洗濯は必ず自分が洗濯所でする、洗濯所は浴場の直ぐ隣りで、そこに堀井があつて、種々の器具が取揃へてある家庭にあつては召使の者を頼んでなり洗濯させて居た孃樣育ちの生徒も、コツコツやつて居る、而して一定の物干場にそれを乾燥せしめ、腰卷だけは洗濯所外に持出すことを許さないとの話した、斯ういふ風に實用向きに養成されて居るから、東京パックに材料を供給するやうな女學生は一人もない。

（五）海老茶式部の摘むは
何？ 菫？ 否あらず！

割烹を稽古しても、御飯が炊けず、貧乏な亭主を持つて瓦斯の何んのと、大道具小道具を亭主にねだり、臺所を飾つて居る妻君には亭主も泣かなくてはなるまい、所が之れは女學生上りに多い、然るに此寄宿に居る生徒は、上手に竈で御飯も炊けば、又洗濯もするし、勿論亭主はやり込められる憂ひもない、室內の掃除は毎朝の外に、毎土曜日に總がゝりの大掃除、押入の中まで常に綺麗にして置くから、實扶的里亞の患者なども出來ない、而して寄宿舍の周圍は、生徒が纖い手で常に草を摘りて居るから、何處でも瀟洒して、如何にも丹精の甲斐が見える。

（六）寄宿生は如何にして
慰藉しつゝありや！

以上の如く、面白く愉快に働き、且つ勉强して居つて、これが命令でもなければ、義理づくめであつて居るのでないから、段別に疲勞も感じないのである、されど土曜日の晩餐後は、互ひに相往來して、各室で談話遊興することを許されて居る、當夜は出入の菓子商に舍內に菓子を持込ましめて、一人五錢以內隨意に買ふことも許されて居るそうだ、思ひ〳〵の談話、思ひ〳〵の遊興、如何にも愉快そうではないか。

（七）外出の日時と及び來
訪者に對する應接所

寄宿生の外出は毎週、日、火、木、土の四日で、課業後より點燈時を限りに許し、日曜日だけは朝飯後よりとして居るが、躾の好い生徒は外出しても、危險といふことはない、火災保險ではないが、縱しあつたにしても千分の一とか二だ、兎に角に人の目を奪ふ樣な華美な容はして得ない、人は田舍臭いのだろう、と云ふてもそれは隨分素破らしい代物もあつたが、中川校長の教育主義は、今日の美風あらしむるに至つたのである、それから來訪者に對する應接は、舍監の許可を得た上で應接所でするのであるが、併し祖母、母、姉妹等の人々が來訪した際は、舍監及び同室生の承諾さへも得れば、自分の室內で應接することが出來るやうになつて居る。

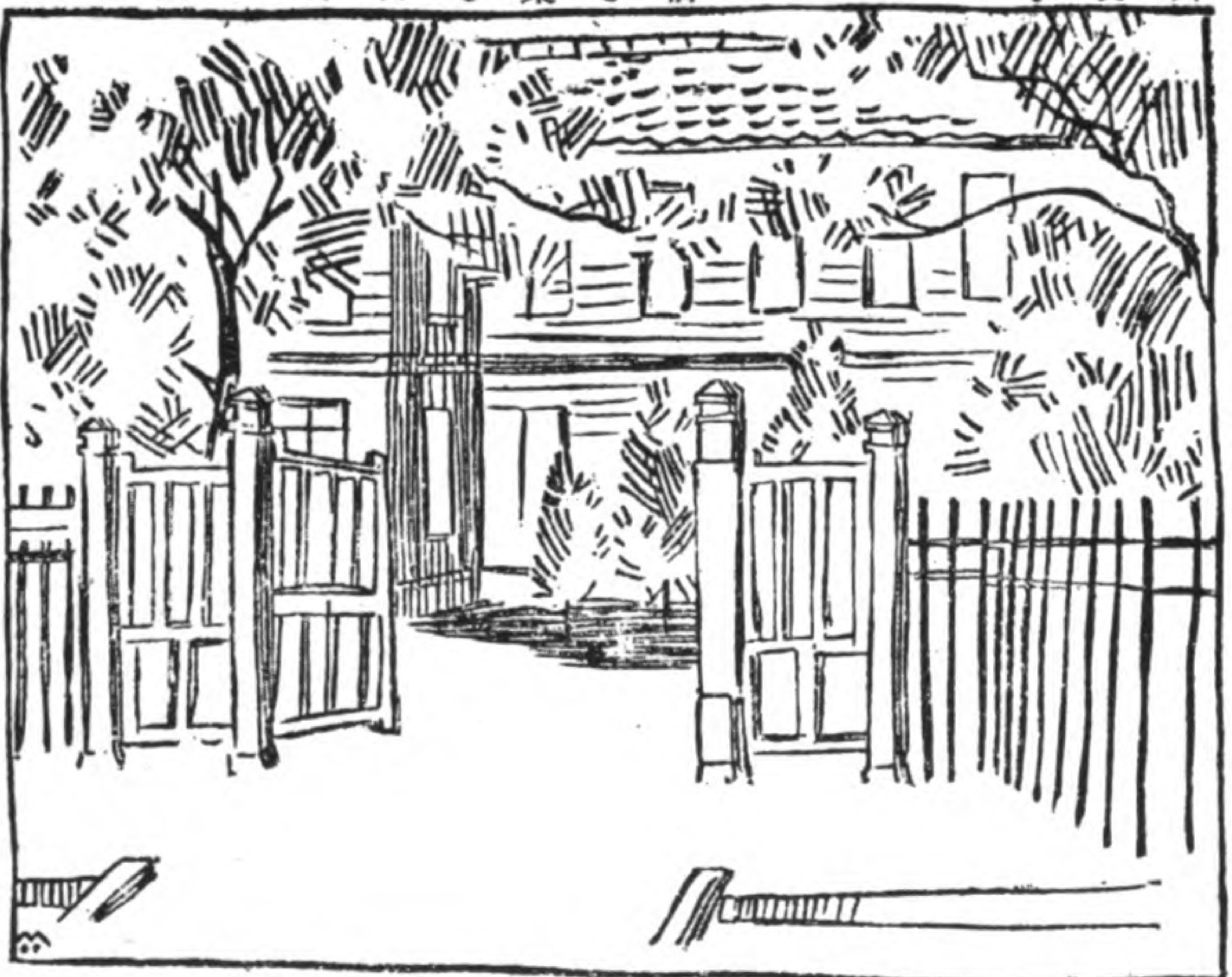
（八）生徒が往復する信書
に對する學校の取締

大膽なる女學生は、兄だとか伯父だとかいふて、ラーブレターのやり取りを、舍監の眼を晦して爲すものがある、それが單にキーピットの、星の、菫の、戀の摺つた採んだで終へるなら好いが、手紙一本で寄宿舍から遠出して、溫泉場邊りに散々ツばら巫山戯た末、知らん顏で歸つて來るのが多い、それで信書は必ず舍監の監查を受けて發送收受せし

め、又入學の際に豫め信書を往復すべき人名、及其住地の屆出を爲したる以外の信書は、生徒を立會はしめて、舍監が開封することあるを說示して置くそうだ、而して信書でおびき出されぬやうに、注意に注意して居る、勿論今日のところでは、そんな墮落した學生も居ない。

（九）病室は最も完全したる構造及設備を爲す

寄宿舍の一隅に病室あることは、前にも一寸記して置いたが、一體此病室といふものは、疥癬、百日咳患者で、課業には耐へ得るも、傳染の憂ひあるものを收容する目的を以て設けたものなそうだ、然るに開校以來、此種の患者あつて收容したことないそうだが、其構造は別棟四坪つゝの病室三、四坪の藥劑看護室押入附一、之に特設の浴場と便所とがあつて最も完全した構造であつて、好く設備されて居る。



東京音樂學校

（十）模範寄宿舍建築を主唱せる中川校長の談

創立以來の校長中川驗太郎氏は、嘉永二年の春、山形に生れた人である、一見舊弊らしく思はれるが、深く氏を知るに於ては、氏の新智識に富んで居ることを知るのである、即ち氏は曰く、恁うも總べての事は、理屈が前で困ります、理屈ばかりて甘く行かないのは、即ち所謂屁理屈であります、私は此理屈を後にして實行を前にする悪い癖があります、此寄宿舍などを建築する時なぞは、大分皆さんに御心配をかけたのです……生徒が自炊するのでは、勉強の時間をいろ〳〵の用の爲に殺がれはしやしまいか、と云ふことでしたが、年々の成績を見ると、寄宿生の方は却つて好いのです、私は皆さんの反對の地位に立つて、此の寄宿舍を建てましたが、此の成績を見るに至つて、やつと安心しました、いや之れは固より恁うなくてはならぬのです。

學年	人員	評點總數	一人平均
補習科	四	三五七	八九、二五
四學年	二五	二、〇一六	八〇、四六
三學年	五三	四、一一六	七七、六六
二學年	五五	四、二〇四	七六、四四
一學年	七三	五、三七七	七三、六六

これは三十八年度の成績表で、之を通學と寄宿とに區別して見るならば、補習科が平均點で一點六七を通學生より劣つたゞけで、他は皆通學生に勝つて居るのである。

學年	通學			寄宿		
	人員	評點總數	一人平均	人員	評點總數	一人平均
補習科	三	二六九	八九、六七	一	八八	八八、〇〇
四學年	一七	一、三四四	七九、〇六	八	六七二	八四、〇〇
三學年	二四	一、八一二	七五、五〇	二九	二、三〇四	七九、四五
二學年	二七	二、〇一三	七四、五六	二九	二、一九一	七八、二五
一學年	三三	二、三九〇	七二、四二	四〇	二、九八七	七四、六八

即ちこれが動すべからざる證左で、此寄宿舍が評判になつて以來、市内からも寄宿の申込がありますが、何分にも狹いので收容し切れません、明年度は增築するやうになつて居ります云々。

稻葉生曰く、學資及食費、其他の事に關して記すべき者多くあるが、夫等に就ては省略してたゞ他に見ざる所のみ揭げたのである。

△理想的美人

歐米の美術家が一般に理想とする美人の標本は、胸廣く前方に張出し臀部は橫に擴張して下肢の發達したるを尊び、又顏面は眼丸く瞼尻の下り氣味なるを良しとし、鼻は餘り高からずして小さく、口許の固く締りたるを美人の標本となす。

△一年間の女子敎育

敎育方針は、賢母良妻主義を旨とし來りしが、女生徒自身の考は最高の學問を修め、獨立自營の途を講ぜんとして男性的女性の增加せるは頗る寒心すべき現象なりと澤柳次官語る。

△忌むべき惡風

日本死亡率中死產の數の非常に多きは墮胎の結果にて、歐洲にては僅に三分前後なるに我國の死產は一割以上に及ぶと（吳博士）

△女子と布哇移民

昨年中布哇移民の總數は一萬八千餘人中女子は百分の四を占む。

△一吝文み

閨秀小說家として有名なる英國のサラー、グランド夫人は「幸福を得る術」との題にて、男子は能く金錢を消費する道を知り幸福を得るに機會を逸せざれど、女子は所謂一文吝みの百知らずにて、些細なる貯蓄をなさんが爲に求めて憫なる生涯を送る者多し、これ畢竟物質以外の趣味を解せざるに基因するものなりと。

精華女學校を觀る

三角生

嘗て內村鑑三氏の名と共に獨立女學校の名を記臆した私は、此の學校の創立者、加藤とし子女史が、十餘年の間、獻身的苦心慘憺の餘に成れる、歷史的經營の跡を聞いて、少なからぬ同情と嘆美の念とに打たれたのであるが、其の學校は、今日精華女學校と稱し、東京近郊の一女學校として、郡部に重きを置かるゝ由を傳へ聞いて、當時追懷の情禁じ難く、一日閑を偸んで之れを參觀した。

△位地

新宿停車場を離れて、西に行く事約二丁計、東京市淨水場の前、欅の樹立の立ち併んだ間に、朱門木造の二棟の建物がある。これが即ち精華女學校で、創立以來旣に二十年の星霜を經た、獨立女學校の今日である。門を入ると稍や勾配の庭園で、前の建物に添うて左りに廻ると、向ふに一面の校園が見える。其處には、色々の草花や野菜の植つた畑があつて之れと相併んでは、テニスのコートを中にした運動場がある。午後の休みになると、ラッケットを手にした一隊の女生が、網を圍んでボールの交換に餘念も無い、又其の傍では、人捕りや、草花を摘んだりして、三々五々、無心の遊戲に、面白可笑しく、塵も立たぬ淨い空氣の下で少時間を費やして居るのが見られる。東京市中の女學校、例へば、本郷とか麹町とか、神田、小石川等の學校は、一面賑やかな都の中にあり、一面通學に便利な處である代りに、矢張り繁雜な都爾の塵を受けて、種々の弊害も續出する事であるが、此の學校は、其の位地に於て少し遠いと云ふ缺點はあるが、電車汽車の便利はあるが之に、四周の狀態から云つて、子女の勉學するのに好適の處であらうと、斯う思ひながら生徒の一人に、「校長は」と尋ねると、「校長先生ですか」と云つて、極めて質朴な裝ひをした生徒が、叮嚀に私を導いて校長室へ案內した。

△校長

は鹿兒島の人で勝田孫彌と呼ぶ、けい子女史とは其の夫人で此の校の學監である。けい子女史は故の加藤とし子の門下として、才媛の譽れ高かつた婦人で、先年此の學校を引き受けるや、學事視察として單身米國に渡り、三年の間彼の地の學事を研究し、昨年春故國に歸つて、此の學校の經營に當つて、其の見學して來た處を着々實行しつゝあるのである。講師は男女合して十七名、或は大學出身、或は美術學校出身、或は物理學校出身、或は又文部省の檢定合格者などで、是等は凡て、英才を網羅する覺悟で、苦心の結果に集つたとは、校長自ら語つて居る處である。尙ほ此の學校は、校長勝田氏が從來の經歷上、現代知名の士と交際のある處から、其の顧問としては隨分色々の人を控へて居る。牧野文相、加藤高明、高峰讓吉、木場貞長、安藤謙道等の諸氏を始め、其他朝野の名士が多い。

は、之れを高等女學部と技藝部と分つておつて、前者は專ら高等女學校の學科を授け修業年限四年、後者は技藝を主として其修業年限は本科三年、專修科二年、速成科半年乃至一年となつて居る。此技藝部では、須要學科は勿論、裁縫、刺繡、造花、編物等であるが、尙ほ又別科として割烹、活花等を授けてゐる。此の方は學生以外に、講習科があるので、現に私の參觀した時には、白の前懸けをした夫人令孃等で、割烹室は賑つてゐた。

△實行主義

凡そ何れの學校でも、隱密の間に其の學校の氣風を養成しつゝあるものであるが、此學校の、一つの校風として見る可きは、實に一個の實行主義である。更に詳しく云ふと、外形の美を捨てゝ、內容の充實せるを貴ぶと云ふ風である。其の生徒の服裝を見ても、髮飾りを見ても、一點華美の二字を挿むべき點がない。むしろ少女に惜しき質素の風をしてゐる。これは一つは土地柄の然らしめる處でもあらうが、又校長始め、學監其の人の、人格の然らしめた處であらう。私は過ぐる日、東京市內の、さる女學校を參看して、絲織つくめに出來てをる、綺麗な裝ひに、眼を眩せられた時の事を想うて、其對照に一驚を喫すると共に、都を離れる事僅か數丁にして、尙ほ且つこれ程の差のあるものかと奇異な感をも惹き起したのである。

△愛の會

これは、寄宿生から成り立つて居る、土曜日の談話會である。夕刻一室に會合して、各自おもひ〳〵の話を持ち寄つて。互ひの智識を交換すると共に、學監けい子女史からも、教訓的の談話があつて、相樂しみながら、自から啓發する處がある樣に出來てゐるとの事である。

△報國社

此の學校には、現に給費生が數名ある。それ等は皆、戰爭の爲に打死した人の遺族で、生活に困難してゐる人の子女である。其學ぶ處は本人の撰擇に任せて、少しも他の學生と異つてゐない、一の慈善事業である。

△校長の談

校長は語つて云ふ樣「私の學校は徹頭徹尾實踐主義ですから、御覽の通り、寄宿の生徒でも、皆自分で、番に水を汲み、拭き掃除をし、風呂を沸かし、賄ひをして、まるで、一個の小家庭を形成つてゐるのですが之れに依つて何等か後年得る處があるに違ひないと思つてゐます。」と。成る程、氣が附くと、數名の女生は、早や井戸の處へ集つて、水を汲んだり、洗ひ物をしたりして立ち働いてゐるのが見られた。

私は之れ迄都下の女學校を見て慊らず思うてゐた節もあつたが、玆に質朴な府下の一女學校を見て、一種奧床しい感を禁じ得なかつた。

近々同校の紀念會があるといふので、再會を約して校庭に出でた頃には、もう庭球も果てゝ、生徒の影もチラホラとしてゐた。（完）



女子と蒔繪細工

帝國技藝委員　荒木寬畝翁談

社會の進歩に伴つて、女子職業の範圍も餘程擴まつて來た樣である、之れは婦人社會に取つて尤も喜ばしき事と云はればならん、去りながら如何なる職業が女子に取つて一番適切であるか、未だはつきりせぬ樣である。

全體女子の性質と云ふものは、手藝に巧みであつて、勞働的に立ち働くよりは、坐つて手內職的の仕事をすると云ふ方が、尤も恰好の樣に見える、そこで女子には美術の思想を養つて、日本に是れ迄傳はつて居る蒔繪の事を教へて見たいと思ふ、美術學校でも蒔繪の事を教へて居るが是れは男子だけに限られて、未だ女子に教へて居る所がない、蒔繪を覺ゆると云ふ事は、決して六ヶ敷しものでない、且少しの熟練と、纏め使ひ加減金の蒔き工合を覺えたら、夫れで充分に出來ます。

由來蒔繪は米、歐諸國の愛賞品で、尤も多く海外に輸出せられ、尤も多く日本美術の特色を世界に紹介するものであるから、益々此の技術を巧みにして、出來る限り精巧の品を輸出する必要がある、夫れには安い女の勞力を使つて、女子に適せる職業によつて、奇麗に製り出されたるものを輸出するに如くはない、ですから女に蒔繪の仕方を教へて、蒔繪の輸出を饒多ならしむる事は、女子職業の一生面を開くと共に一擧兩得であると考へる。

加之、狹込た一室に終日とぢ籠つて、少さき器物をいぢくり廻はして居る事は、男子本來の仕事でない、これはどこまでも女子に適當して居る、手先の仕事である、それに蒔繪は前述の如く左程六ヶ敷しものでない、繪の素養が少しあつたら十分であるから、是非共奬勵したいと思ふ、殊に女子が繪の思想を持つてるのは、何かにつけて便利のもので、家庭百般に應用する事が出來る、例へて見ると衣服の模樣でも縞柄でも、人によつて似合つたものが、此の繪心よりしてあみ出される、機を織るにしても面白い縞柄を作り、染物をしても恰好の色合を見付けるのである。

其他、日本の什器と云ふものは、皆美術に因んで出來て居るから、美術思想がないと少しく困る事がある、茶器でも蒔繪でも、衣服でも皆そうである、若し女子にして美術思想がなく、繪心がなかつたら嗜好觀念の時に無風流のものを出す樣の滑稽を演ずるかも知れない、斯くの如く女子が繪心は、餘程重寶の者で何人にても應用する事が出來る、一寸とした家內の裝飾にした所で、此の繪心から立派にする事も出來、蒔繪の材料も此の美術思想より取れます。

殊に日本は山水明媚の國であつて、それによつて美術思想を涵養せらるゝ事は自然の結果であるから吾人は益々これを助長せしむるの必要なるを知るのである、のみならず女子の爲めには新職業を開き、本邦輸出品たる蒔繪細工の増加を圖つて國を益すると云ふに至つては、女子に取つて尤も必要の事と思はれるのである。

近年女子の美術として繪畫を教ふることが盛んになつて來たのは、女子の品性を高むる上に於て甚だ喜ぶべきことであるが、之が應用の道を考ふると、蒔繪より外に適當したものはない、蒔繪は僅かの手數を要するのみで自由に仕上げる事が出來家庭に於ける手内職としても、なかなか奇麗の仕事であつて、女子が繪を應用すべき第一の階段であると云はればならぬ、去れば繪畫によつて女子の品性も高まり、家庭の内職も自然是れから涵養せらるゝ譯である。

麥飯の効用

（新發明よばし麥）

麥飯が人體に効能ある事は古來人の知る處にして滋養に富み衛生に適する事、大醫の均しく唱ふる處ろ海軍衛生の大家高木博士の如きは其實驗上より麥飯の効用を確信して二十餘年間これを實行するのみならず平素熱心にこの説を主張して世間に勧誘しつゝあるとなるが、都會生活の人就中東京人士は麥飯を嫌ふの習慣ありて効能は十分知りつゝ猶實行に進まざるは一つは麥飯の外觀惡しくして婢僕等の兎角に之を厭ふ處ろにもよれど又一つは都會生活の人々に向つて適當なる麥の供給方法充分ならざるの致す處ろによるべし、從來の丸麥は米と一緒に炊ぐ事能はずして一度煮ます爲めに薪炭と時間を費すの不便あり又、引割麥は味の劣るのみならず、往々小石の混入する物ありて之れ又都人の嗜好に適せず故に從來の丸麥と引割とを以て直ちに都人に向つて麥飯の奬勵をするとも俄かに行はるゝ事難かるべし、世人が麥の効能を知りつゝ斷行に鋭ならざるは、畢竟其の材料の適當なるものを得ざるに依るものならん、今回この缺點を補はんとして新たによばし麥と云ふもの發明せられたり、このよばし麥といふは麥を精げてよく洗ひ一旦蒸してこれを乾燥せしめたるものにて其の外觀は丸麥よりも美はしくして而かも之を使用するには洗滌の手數を要せず三四時水に浸し置きて米と一緒に炊げば麥は恰もゑまし麥と同じ樣に膨れて、程よき加減の飯となる第一ゑます世話も入らず、洗ふの面倒もなくして一升の米に二三合交へて炊けば程よき麥飯となりて旨まく柔かく食べられるゝの調法あり、而してその價は普通の丸麥と粗々同價にして經濟上衛生上至つて便利なる品なり、賣捌所は本所元町五番地鈴木商店市内は五十錢以上配達すと云へば試みに使用して見らるべし、若し普通五人の家族にてこれを用ふれば一ヶ年五拾圓以上の儉約になるべしといふ而かも衛生上の益は更らに大なるべし、猶麥飯の人體に効用ある實驗

に就ては高木博士の説あり大誌に記載すべし。

石油厨爐

薪を焚けば煙り、炭を燒するは手數が入る。これはマッチをすり付けて直ぐに點火せしめ而かも無煙無臭といふ調寶の器なり、構造は小なれども火力は強く座敷にも使用し得る樣に造られたり、されば飯を炊くに時間を違へず、火力も均一なれば出來不出來の憂ひもなしと云ふ、其外煮物一切、湯わかし、魚肉をあぶる事をも得べし、價は一號形が一圓二十錢一時間の石油料僅かに一錢位なりと云ふ、日本橋室町久能木商店にて發賣す。

家

園師庄一郎氏著

世の中が個人主義に傾けば家といふ觀念次第に薄らぎて倫理上に、風紀上に、兎角面白からざる結果を生ずべしとは一部學者の間に唱へらるる處なるが、本書の如きは即ちこの弊害を救はんとの主旨に出でたるものか其主眼とする處ろは、國民に家てふものゝ觀念を鼓吹して立國の本旨を發揮し、家道の眞髓を披瀝して時弊を救ふにあるものゝ如し即ち祖先、宗教、孝養といふものを尊重し、親族の關係を説き、家道を勵み家事を治め、財産を整へ、社交を厚くし、家庭を圓滿にし、以て帝國の基礎を堅固にすると云ふを本旨とす、其の説く處ろ、穩當、適實にして眞に家を重んずる長者の言として聞くべし、彼の自由戀愛を主張して徒に世の中を渡らんとするものに對して頂門の一針たるべし、經濟社發行定價一圓二十錢。

美文良材

學生寶鑑　　井原豐作

袖の長きものはよく舞ひ錢の多き人はよく商ふとは文章に對する千古の金言なり、錦心繍腸といふも必竟腹に美文の良材を蓄へてこそ萬朶の花を咲かし得べきなり、此書は近體文章の熟語を多く蒐集して文を屬する人の爲めに、座右の參照に便したるものなり目次はいろは別にし、花鳥風月より人事百般に亘りてよく網羅し得たり正續二篇あり。萬書堂發行一部價二十五錢

●女子大學のバザー　圖書館設立の費用に宛つる目的を以て、目白の女子大學にては來る四月上旬同校内にバザーを開くよし、目下同校生徒は此の製作に忙はしく、月曜日も休まず刺繍編物をなすと云へば開催當日は定めし盛況なるべし。

●東京音樂學校の生徒募集　同校入學志願者は三月廿日までに履歴書、戸籍謄本、及本人の寫眞と受驗料金壹圓を添へて三月二十日までに同校に願ひ出づべしと、其の人員は豫科三十人、甲種師範科三十人、乙種師範科二十人なり。

くさ〴〵

◉跡見愛四郎君の訃――跡見花蹊女史の令弟にして跡見女學校の經營者たる愛四郎氏は二月下旬肝臟病に罹り逝去せられたり、越えて二十四日葬儀を傳通院に於て執行せり、會葬者は、閑院宮殿下の御代拜を始め華族、朝野の名流等無慮五百名、殊に同校生徒一同黑服にて列を正しく會葬したるは哀しみの程にいと賑はしく見られたり。

同氏の維新の後花蹊女史と共に京都より上京して數年間某省に勤められしが、明治七年花蹊女史が三條公等の盡力によりて一女學校を設立せらるゝや氏は官を辭して專ら學校の經營に任じ、以來三十餘年間花蹊女史を助けて事務を經營し同校をしてよく今日の盛運を見るに至らしめたる者なりといふべし。

◉婦人記者懇話會――二月十九日神田ニコライ教會内青年倶樂部に開き、出席者廿餘名當日離婚と結婚てふ話題の下に建部家と谷家との離婚問題及石倉文學士と某女學生との間に成れる結婚問題に各自思ひ思ひの談話は交換されたり、甲は曰く建部家の離婚は其の原因谷家にあり殊に尤も惡るきは建部氏夫人なり、例令ランプ位を擲げ付けられたりとて之れを實家に行つて吹聽するの要なし、其の位の事を忍ぶにあらざれば到底紳士や學者の妻となりがたしとて建部氏に同情を寄せ今後の結婚は斯かる小瑕瑾ありしとて之れが離婚の原因にはならずと、乙は曰く結婚のもとは相愛、即ち愛の結合によつて成立するものなれば、容れられざれば去るべし、離婚すべしとて反對の語を唱ふるものありて、席上談話の花を咲かせたり次で結婚問題に入り、石倉氏の一例を引きて話したるが、若し果して結婚の根底が愛のみによつて成立せらるゝものとすれば、石倉文學士が自由結婚をしたりとて、少しも怪しむ所にあらずと云ふものありて、之れも可否の兩說に分れたり、されど建部氏の離婚は特り責任を一人のみに歸すべからず、建部家、谷家及夫人共に不可なりとし、石倉氏の結婚の如きは敢てなき例にあらざるも、結婚習慣の存する今日に於ては、風敎上多少顧みざるべからずと云ふに一致せしものゝ如し、次會の幹事は來馬琢道、福田英子、其他に依賴して、點燈の頃散會したり。

◉女子高等實習學校――赤坂檜町にある同校は設立日尙ほ淺きも校長敎員共に熱心に、家事に適當なる學科を敎授するを以て、評判よかりしが來る四月新學期生の募集と共に規模を擴張し學科に改正を加へ第一學年第二學年に若干の生徒を入學せしむと云ふ入學願書を出すべしとなり。

◉英語科女敎員――文部省高等女學校英語科敎員に登第したる眞方貞子は橫濱英和女學校出身明治二十八年の卒業生にして、芳尾千代子は橫濱共立女學校の卒業にして、芳紀將に十九歲なりと云ふ、目下高等女學校英語敎員の需要多き今日此の二女史を得たるは、斯界の爲めに祝すべき事なり。

◉女子判任官となる手續――女子判任官には志願したりとて直に登用せらるゝものにあらず、最初女子雇員採用願を郵便爲替貯金管理所長宛に差出し、試驗を受けて雇員となり、年數と其の人の執務成績を按じて任命せらるゝものにして、其の志願すべき資格あるものは高等女學校二ケ年修業のもの若くは高等小學校卒業者の内より採用するものにして、其の志願書式、履歷書式及試驗方法其他詳細のことを知らんとせば遞信省構内貯金管理所宛返信料を添へて照會せば直ちに敎へくるべし。

和歌

塚越停春選

●●●（天）梅　淺草　春江

雪霜を凌く雄々しき幹に似ず
●●●●●●●●●●●●●●
梅は香りも花もやさしき

評。古人の道破せざる所。

●●●（地）蝶　讃岐　佐藤よし子

花に生れ花に夢みて花にきゆ
●●●●●●●●●●●●●●
花は胡蝶の命ならまし

評。花を胡蝶の命とは面白し。

●●●（人）歳暮に懐　河内　田中八須子

隙をゆく駒の手綱の今さらに
●●●●●●●●●●●●●●
とむる甲斐なき年の關かな

評。用調巧妙を極む。

秀逸

○○たびの歌のうちに　備後　伊倉田鶴子

たびのみは日の夕ぐれと鐘の音と雨のふる日の無かれとぞおもふ

旅中誰も實驗する所、言ひ得て好し。

○○○亡き子を偲て　飾磨灣　高濱やな子

いつこにていしつむならん魂そらにゆきのころもながき合せつゝ

惻々人を動かす。情切なるもの然すしも修辭の整ふを須たず。

○○○失題　福井　島　萬壽子

霧のかすみにくるゝ山々や春の大和は歌によき國

歌によき國とは言得て面白し

、○○千鳥　和泉　水野久能子

住の江のはまの松風音高く月もさしでの磯千鳥なく

聲調流麗。

、○○失題　越前　つる子

と思ふ事よりもなほ世の中は思ひまゝならぬことばかりにて

、○○雲　京都　村上花子

あしたには不盡の嶺つゝみ夕へにはあふみの湖にくたるあま雲。

豪宕

○○○花　福山　森　靜野

よしの山霞も雲もまくらにて花より外のものなかりけり

△○○折にふれて　築地　堤　いく子

うらやましまたなか〳〵にあて人の及ばぬ事のなきにあられば

足るを知るもの幸なり。

、○○雪積紅梅　江連　藤野久子

本殿の御衣の襟の紅梅を雪ながらにてたをり見まほし

雪ながらの語殊に好し。

、○○春雨　神戸　足立あさ子

おり〳〵に軒のたまみづ音せずば降るとも知らじ夜の春雨

△○○夜梅　岐阜　度會清子

乾坤のなべてを靜する闇も獨ひそかに薫す夜の梅の香

上句人の未た道破せざる所。

、〇〇春霞　越後　中野　好

春かすみこしの濱邊に立ちそめて貴重波路のうへや引くらむ

下句好。

△〇〇名所雪　大分　加納豐子

波にうつる巖の影も神寂ひぬ二見ヶ浦の雪のあけぼの

、〇〇逸題　能登　栗倉基子

花籬につなげる駒のたてがみに春の風吹きて花ちりかゝる

、〇〇逸題　攝津　山路俊子

春雨に色まさり行く青柳のみどりの糸に風わたるなり

、〇〇失題　美濃　山田愛子

隅田河綱の手ゆるめて漕ぐ舟におぼろ月夜の花を見るかな

、〇〇詠草　越後　坪井わか子

春立つといふを名のみの越後には市にも雪の山を見るかな

、〇〇題知らず　牛込　平塚白百合

さけばこそ人もとひよれさればとて咲かすば春の心なからむ

、〇〇逸題　京都　さやか

ほの〳〵と山はあけながら冬川の水そこに殘る片われの月

光景如畫。

、〇〇春夜　岩代　菅野ひろ

おぼろ夜のおぼろゆふつき香に匂ふ梅多きさと笛高き家

何等の多幸なる境ぞ

佳調

春　岡山　田上濱子

池の面に花の一ひらそと散りて水輪をえがく春の長閑けさ

〇　下野　高鹽かつ子

湖添ひの柳の林ふとたえて道はつゞきぬ桃さく村へ

〇　兵庫　柳田白百合子

君に琴われ笛ふけばおぼろ夜の月もかすみて梅かほる哉

年の暮にすゝはきすとて　備後　重政清子

うつばりにつもるちりをば拂へども浮世のちりはやるかたなし

〇　香川　吉田ます子

そらはれてけさまだ殘る雪の上にこがれの玉と朝日てりそふ

二月木詩を見て　京都　波多野松枝

繪にもならずさらば歌にも成りもせで月になりゆく梅の一村

深雪　伊賀　服部うた子

村はづれところ〳〵に小高きは雪に埋もれし伏屋なりけり

〇　神戸　船戸ゆき子

玉琴のいみしき調べかつたえてさくら散る夜の雨靜かなり

紀元節　府下　原田靜子

天つそら開けそめにし君が世の千代の礎いはふけふかな

初若菜　磐城　猪股よし

契りてし其の昔の葉は根にのこりまたくる春にも衣出でにけり

立春　名古屋　山村榮

幾千とせ神代のまゝに春たちて大和島根はいとゞのどけき

送別　河内　伊地知　支那子
いづこまで見送るとても限りなきおなじ名残の別れなりけり

夜春雨　芝区　曾　嘉　子
ふとさめて母ゆきし夜の其のまゝににたるこよひの雨の音きく

○　神奈川　光　子
いと柳の風にみだれてほころびし紅梅つゞる川そひの家

青柳　麹町　藤安とよ子
むぎ畑のかすみ吹きとく春風になびきて見する青柳の糸

梅　前橋　宮内りき子
小流の音や黄昏月夜にてみづかげ清くかほる梅が香

熊野御前の歌思ひ出して　大隅　高杉やす子
ちる花のあらぬこの身もしかすがにふるさと戀し春の夕暮

山家春　尾張　西川みれ子
天津日の惠をうけて訪ふ人の無き山里も春はきにけり

別れにのぞみて　和歌山　植木梅子
露しげき袖をわかちてあすよりはくもゐのよそに君をしのばん

逸題　岩代　岸野常子
をさなきにかへりてながめけり雲ふるさとの稚子もりの峯

春雨　備後　立脇峯子
梅が香のしづくや袖にうけなまし春雨ほそき花園小路

摘若菜　上總　安西琴子
高峯にはまだ雪見えて若菜つむ袖ふく風の寒き野邊かな

柳を見て　名古屋　山根しげ子
風にも折れぬ柳の風をば世の乙めらに持たせてしかな

柳　鳥取　橋本鈴子
佐保姫の手染なるらしわがかどのやすなの糸もふかみどりせり

春の夜かりの聲をきゝて　麻布　澄江
月はあれどおぼろにかすむ春の夜を雲井はるかにかりなき渡る

鶯聲和琴　熊本　安田文子
彈琴のゆの手もあやに匂ふなりしらべ合はする鶯の音に

○　姫路　とし子
いまし月は老松が枝にかゝるらし障子にうつる月影見れば

逸題　大阪　中川艶子
さしくだすいかだもたゆて大井川流にかすむ春の夜の月

○　備中　高原ていこ
白駒に新鞍をきて嵯峨野路を月にはせゆくまゆうすき君

○　岩代　菅野和子
紅梅の下に筆とる僧老いぬひとりや悟る日あたりの庵

鶯　伊賀　浅沼花子
わが通ふやなの下道朝ごとにまち得てなくかうぐひすのこゑ

春月　筑後　ふじ枝
古里の花のおとつれひらく手にひらゝ散りまふ梅の一ひら

逸題　伊豫　渡邊梅子
二八二九十とせの昔さま〳〵に思ひ出おほき春の夜の雨

蝶　相模　文子
あたゝき春の日影をあびながらいかなる夢や蝶のみるらん

妻をめとりし人の許に　備後　重政久子
ちぎりつる今日の心を心にて幾千代までもむつみませ君

○　東京　啓子
糸車くり出すいとのながき日をちゞめてあそぶ野べのをとめ子

山霞　名古屋　清水みさを

春のそべ霞の衣染め上げて先こそきつれ四方の山々

○　山口　磯守なみ子

紅梅の花あたゝかき紳士の家の貝殻屋根に陽炎もゆる

○　芝區　松本美枝

仰ぎ見てこずえに春の月もれて風なき庭に花二つ三つ

新年松　芝區　吉田小萬代

わら玉のとしの朝日のみひかりに緑いろそふ庭の姫松

神の存在をみとめて　肥前　齋野金子

ゆきくれて雪原ひになやむとき行手に燃し聖火のかげ

春梅　下谷　鹽田幸子

花とのみながめし雪は消えはてゝ雪と見るまで梅の花咲く

初音　大和　西尾敏子

しばしとて旅の歩も杖とめて梅咲く里に初音まつなり

渡満の夫を慕ひて　香川　村田すみ子

雪ふりていとぞ寒のまさりけり立ち行く君が身を慕ふ身は

○　牛込　富子

わびしげに春をおとづる雨に雲のかしたる春雨の空

蟲　神戸　尾崎しのよ

カルバリのをかをひたせし聖き血に世の罪人も浄められけむ

春雨　秋田　小笠原紅子

神の御の其さゝのさやそれならん若葉にそゝぐ春雨の音

○　京都　高井愛子

寒風のいなゝき高く月ませば木馬ずまふ草原野の宵

○　姫路　中島德子

須磨の夜や磯の香こもるそゞろあるき浦の風ぬるく琵琶の音聞ゆ

○　伊勢　ぼたん

梅かほる小さきまどにともどちと語りに更くる春のおぼろ夜

失題　群馬　金山芳子

白妙の山のふもとやわれまちて老ひたる母の歎きまさん國

友の宿にて梟の音を聞く　和泉　津田濱子

旅寐して友かりやどるこの夕暗を通してふくろうの鳴く

黄鳥　群馬　田村すみ子

山里にすむかひありて黄鳥の谷わたりする初音をぞきく

○　上毛　大川しん子

小春日や枯野焼け行く夕けふり遠くなびきて黄昏れにけり

晩春　大阪　後閑八重子

長閑なる野邊は三里の菜の花や山も霞のかなたなりけり

遠山霞　但馬　黒田きく

消のこる雪はあれども春來ぬと遠山の端に霞立つ

○　紀伊　川俣たれ子

にぎはしきまどひはづしてそとなきぬ飾りに似たる人の面影

失題　下總　岩瀬不二野

病やみてひなうた細く聲すなり梅まさにほふ野邊の一つ家

春雪　信濃　松尾節子

消やすき春のあわ雪手にとけて人の命もかくと思ひき

御嶽山にて　八王子　江原花人

うつしみもなどかつくせん御嶽山神代ながらの山と水とは

○　姫路　中島德子

われまさる夏休めし白雲の森の夜がくれ虹美くしき

遠霞　北海　新野すゑ子
みどり子の笑ゝしなひて霞やつれ母が背に乳もらふ門

夾島曉月　宇都宮　松木のよ
あらなみのよるよるごとに浦千鳥うらみ果れて月になくなり

曙晴花　東京　平岩外江
のどかなる御代の光りをあびつゝも霞に匂ふあけぼのゝ花

○　栃木　森田たつ子
花かげの舟遊りの高き端の上に朧月見えて春の夜明けぬ

若菜　常州　森かつ子
あさまだき若菜摘まけ唱歌してかすみに消ゆる土堤の乙女ら

春の曙　鎌町　土田つる子
夜なのこすかげも朧のうす月夜かすみながらにあくる空かな

題不逸に遊びて　千葉　野田喜美子
不盡の嶺のま清水くみとりて心の塵をあらふ今日かな

春雨　東京　笠原節子
うちなびくしだり柳の風たえて軒はるみしく春雨のふる

春霞　美濃　杜若會資子
長閑にも野山をこめて立ち渡る霞ぞ春の匂ひなりける

子を思ふ歌　越前　新保勝子
子は男の兒その兒の母の乳は是ぞわが天地の春あたゝかき

海邊の霞　大和　櫻根こう子
波の音も靜まりはてし朝なぎの浦のどかなるうぐひすのこゑ

島時雨　美野　横前敏子
暮まつに夕日のかげをのこしつゝはなれ小島に時雨ふるなり

梅を見て　小樽　伊庭武子
見るたびに手植し人の偲ばれてこゝろまどわす庭の白梅

○　周防　眞弘入千代
たそがれて柳動かず人行かず十里のつゝみ梅かほるなり

雑沓の響　大阪　吉野ひさ子
いつになき雑沓にまれの響つみてつくりものなす市の賑ひ

人の子の逝ろを悼みて　越前　赤井かめ子
豆だいこさくしうたてしゆきまししひさき君の思ひ出されて

夕春雨　尾張　井口とよ子
くれ渡る夕のかれのうちしめりかすむ山邊に春雨のふる

▲鐵道汽船旅行案内　博文館發行

花も咲き鳥も啼き、東京博覧會も開かるゝので鐵道作業局では時間に大改正を加へ、發車數や速力を増して、便利な乘客に與へらるゝ相だから、我が博文館でも來る四月より毎月一回表題の雜誌を發行し、從來の種類の雜誌に比べると體裁にグッと新機軸を出して携帶にも便利で時間を見出すにも容易い樣にし、別に全國沿岸の汽船發着表や鐵道沿道案内記なども、統計家で名高い伊東祐穀氏だの旅行家で名高い坪谷水哉氏などが、多年の經驗より工夫した新案の旅行案内ですから、今後旅行を爲さる方々には此度重寶がらるゝこと受合だと思ひます。

謎々　◎印は入賞五十錢

小供の食事、古帽子、
客の長座敷、とかけて

▲古……無歯の上官と解く、心は頭に戴き馴れる　本郷　石原かほる

▲古……旨くない茶菓子と解く、心は誰も戴くものはない　下總　藤崎美奈子

◎客……鳥取縣の洪水と解く、心は伯耆(箒)も騒ぐ　加賀　文子

▲古……地圖と解く、心は色で分かる　横濱　齋藤いと子

▲客……夏の終りと解く、心は秋(あき)が來る　横濱　齋藤いと子

◎小……お寺の取次と解く、心は小坊主(こぼす)　羽後　許りやう子

◎小……下手な加留多取と解く、方々なまぜかへす　京都　濱部愛子

▲小……お姫様の膳と解く、心は萬事乳母の世話　京都　波多野松枝

▲小……激烈なる生存競爭社會と解く、心は食ふ事が困難　京都　同人

▲古……破れ太鼓と解く、心は打つても音(賣つても値)がせん　伊勢　きく子

◎客……蛇の狙ひと解く、心は蛙(歸る)を望む(二等)　岐阜　度會よし子

▲小……政事と解く、心は氣付藥(氣付役)が必要　福岡　田中とも子

◎小……借金の言わけと解く、心はよくこぼす　淺草　市村たか子

▲小……鉢植の朝顔と解く、心は手がかゝる　美濃　丹波やす

▲客……大祭日と解く、心は邦旗(帚)を立てる　本所　山田なつ子

◎小……凋れた活花と解く、心は動く度にはら／＼と溢れる　越中　無名女

◎古……迷信家の判斷と解く、心は八卦見の頭にあり　京都　小谷まさ子

▲小……時計の齒輪と解く、心はくつちやはなし／＼　羽前　谷山たに子

▲古……人望を失ひたる人、心は最早頭に上げられぬ　岡山　細江晨

▲小……六十以上の老人と解く、心は齒無(話)が多い　兵庫　入江藤吉

▲古……肺病患者の顔と解く、心は色艶がわるひ　芝　栗原琴子

◎古……泥醉の人と解く、心は色も變はれば形もかはる(第三等)　河内　田中八須子

▲に……運河の通事と解く、心は積荷が離れぬ(取れぬ)　無名女

▲古……[illegible]学と解く、心は天麩羅にするがよく　名々女

◎古……女學生の亂れ髪と解く、心は庇が傾いて居る　京都　靜枝

◎客……天井の掃除と解く、心は帚を倒さにする(第一等)

▲古……食後の御馳走と解く、心はモー頂けない　鳥取　榎本鈴子

▲客……人の經歷談と解く、心は參考(三更)になる事もある　鳥取　同人

來月の新題

△信玄袋とかけて
△田舍者の都見物とかけて
△權利株とかけて
△乞食の花見とかけて

ものはづくし　◎印は入賞

氣に喰はぬもの

▲政黨の盲從　東濃の女子

◎袖口八ッ口のあはぬ仕立　河内　陸山れい子

▲建國の老爺のしがみ顔　東京　よし子
▲昇校の厚化粧　神田　佐伯光子
▲成金連の紳士顔　備後　重政久子
▲かげ口をきく人　本所　武田たき子
▲叔父顔をして意見する奴　京都　波多野松枝
▲人の口眞似　美濃　杜若會育子
▲田舎者のハイカラ式　岐阜　度會よし子
▲意見してもにや〳〵して居るやつ　芝　栗原琴子
◎呼んでも知らん振りする人　函館　常野光子
▲小姑の總事　兵庫　入江梅香
▲婦人の物知り顔　越後　木島そう
▲眼前のおへつらい　奈良　毛利きよの
▲姑の猫なで聲　山口　實迫あい子
◎嫁入のうまく入らぬ時　信濃　松尾節子
▲女工の女學生風　麻布　はま子
▲笑ひながら吊み云ふ人　羽前　香澄子
◎物事を鼻にかける人　紀伊　川俣たれ子
▲いやに改る人　西陣　濱部愛子
▲嫁のした仕事　秋田　長谷川はる子
▲田舎女學生の風俗　下總　谷口鶴子
▲嫁のお追從　本郷　西岡古代子

◎口と心と違ふ人の顔　大阪　中西琴枝
▲日露戰爭の結果　調布旗子
▲成り上り夫人の貴婦人ぶり、注文品の出不來　韓國　保坂かつ子
◎繼母のせきばらひ、横目、　越後　石黑利由子
▲出過る人、心にもないおせじを云ふ人
▲招待して居ながら高位の人に機嫌を取る人　鳥取　榎本鈴子

あつかましき物

▲何處へでも子供をつれて行く人　大阪　俵文子
▲去られし家に婿の出入　淺草　よし子
▲再訪を禁じられて來る人　神田　佐伯光子
◎嫁とせがれの英語の對話　山梨　名執まさ子
▲賤婦の女學生風を装ふ　京橋　藤井きく子
▲込合ひの汽車に横臥　岐阜　度會よし子
▲自分の罪をかくして人の惡口を言ふ人　周南　喜田米子

◎小姑の嫁入り拵へ　奈良　村瀬みさを
▲偽病の無心狀　羽前　谷山たに子
◎卒業迄學資補助しくるゝといふ條件付の養子廣告　大阪　田中柳子
▲少しの縁に度々の無心　茨城　酒井いと子
▲怠惰な食客　富山　小竹文子
▲幾度も來る合力願　羽前　香澄子
▲旦那機嫌に入りの下女　紀伊　川俣たれ子
▲初對面に金の無心　大阪　中西琴枝
▲人の夫に戀する女、權利株の奪ひ合ひ　京都　靜枝
▲居候の贅澤　仁川　掛橋郁子
▲子供澤山ありながら妾を連れ込む人　越後　石黑利由子
◎繰り返し〳〵自慢話をする人　鳥取　榎本鈴子
▲井戸端會議の自慢話　神戸　久岡みれ子

やわらかい物

◎赤兒の手　大阪　俵文子
◎京言葉　浪花　[illegible]政子
◎つきたての餅、小猫の毛　河内　陰山れい子
▲小兒の頰と、出來たてのおまん　淺草　よし子

▲茶菓子の座蒲　岐阜　座會よし子
▲貞操、昆明の香氣　周南　早田　米子
▲クリームケーキとマシマロー　芝　栗原　年子
▲放蕩兒に對する母親の所置、お藥さまの御膳の上のおそふ菜（これはあまひものといふべし）　甲府　村松　下枝
▲流行のボーアー　信濃　松尾　節子
▲絹ハンカチーフに包んだ眞綿　但馬　米山　伊奈
▲柳をなぶる春の風　羽前　香　澄子
▲姫君のお言葉、赤ん坊の手　東京　濱野　愛子
◎三ツぶとんのひきどめ　田舍むすめ
▲ふのりで洗つた時の髪　岐阜　白　椿子
◎花日和の春風　仁川　瀬川　都子
◎嫁入當座の新人の言葉　越後　石黒利由子

來月の課題

長くて短かきもの
きりきりしたもの
親しみがたきもの
〆切三月十五日
◎印入賞は三十錢

一口噺 ◎印は入賞三十錢

◎　越前　新保　靜子

先生「皆様は朝學校へ來るとき父さんや母さんに挨拶をして來ますか
一生徒「私の父や母は私の學校へ來る時分は未だ寝て居ます

◎眼鏡　美濃　はつ子

子「眠れる父をゆり起し、お父さん眼鏡はだてゞすか、」
父「なぜ子眼鏡をかけて眠つて居るから、」
父「馬鹿を云へー、あれは今靜かに夢を見て居たのだ、」
子「へー、」

◎　小石川　佐々木濱子

姑「コレお前御飯たく事さえ出來ないで、お嫁に行つたら如何おしだえ、」
嫁「よくつてよ、ふかしメシ召上るやうなハイカラな方を夫にしますから、」

◎　美濃　安藤よい子

つんぼの札をかけたる乞食、善光寺詣りにとて、かどへに立ちける時、御詣りの一群にて立ち去りしとか、

◎鼻　周井　片山　千重

質樸なる女學生、めかし屋の女學生に向ひ、「貴樣のお顔に花（鼻）がついて居ますよ、めかし屋「早速懷中鏡を取り出し「貴樣何處に—」質樸、顔の眞ん中に。

投稿規程

▲ものはづくし　▲謎々　▲一口噺
右の内◎印あるものには規程の賞品（書籍切手若くは相當代價の書籍を呈す）〆切月の十五日

▲短文　▲美文　▲消息文　▲和歌
右天地人は五拾錢以上壹圓五拾錢以下◎印あるものは三拾錢の書籍切手を呈す

▲住所姓名を明記せざるものは賞品を送らず▲同案のものは先着者を採用す▲ものはづくし、▲謎々、▲一口噺、短文、和歌の投稿は一切端書とす▲字體不明、規程に相違するものは沒書とす

次號の本誌より「讀者通信」の一欄を設け廣く讀者諸君の便宜を圖り且つ質問應答及婦人家庭に關する事柄の手引たらんとす、どんな事でも遠慮なく質問通信せられたし、必ず次の號には掲載します。

懸賞小說募集

本誌は左の規程により懸賞を以て弘く小說を募る

一 枚數二十枚乃至三十枚(二十行二十字を以て一枚とす)

一 原稿總體カナ付の事

一 賞金は掲載するものに限り左の等級に應じて呈す

一等　貳拾圓

二等　拾　圓

一 原稿は博文館女學世界編輯局宛の事

一 〆切(第二回分)三月三十日限り

前號第一回分は雜事日限と締切〆切日との日數近接せし爲め本號誌上に掲載するの運びに至らずして作者並に讀者の希望に孤負せしことを深く謝す、依て來月の誌上より掲載し始むべし當選の札が即ち左の二篇に落ちたり

空蟬日記……………………岡部不二子

あやしの心…………………渡邊多美子

「呪はれたる女」の作者について

元祿姉さんに就て世評は紛々たり、或はいふこれ婦人にあらず、婦人を裝へる髭武者のいたづらなりとまことしやかにいふものあれば、否、姉さんは矢張り婦人なり、されどそんぢよそこらの黑人筋がゑび茶社會を騒がせんとの野心より男裝せる婦人をして男子ともつかず、婦人ともつかず、朦々朧々五里霧中の間にさまよはしめて河童の尻を拔かんとの恐ろしき巧みなりといふものあり、若し烏の雌雄を知らんと欲せば請ふ、「呪はれたる女」の冒頭數行の文字を見られよ。



結婚道しるべ

▲本欄は便宜的に結婚の紹介をなす▲申込者は求婚の希望を詳記して博文館女學世界交信部宛送らるべし▲申込者は成るべく最近撮影の寫眞を添付するを便とす▲住所姓名番地職業を確實に記さゞるものは取扱はず▲照會者は通信料として三錢切手三枚を送らるべし▲寫眞を望む方は切手貳拾錢を送らるべし▲同時に二名以上を紹介せず

行きたき方

▲年廿一高等女學校二學年修了後赤十字社看護婦卒業、容姿普通血統正確なり、軍人、官吏、教育家、銀行員、醫師等にて成るべく三十歳位の次男の方に嫁ぎたし(千葉一婦人)

▲知人の娠年三十一歳、嚴格なる士族の家に育ち性質温順容貌普通なり、目下福岡某病院の看護婦長を勤む、何れにか嫁入たし、相當の人ならば再婚者にても不苦(京都の知人)

▲田舍にて上流の生活をなし、親の產を相續すべき娠年廿六女學校卒業後家庭にあり、三十歳前後にて醫業に從事する人を求む、本人次第にては學資の償還又は學資の補助を厭はず(廣島の六花)

▲年二十四、初婚者容貌並、血統正、普通教育を卒へて目下家事練習中なり、家產の分配も若干あり、職業は問はず係累なき愛情深き人と結婚したし、(岡山の處女)

▲京都近在の相當資產家の娠にして某女學校を卒業後家に在りて家政實習中なり、中等教育を卒へ相當資產を有する前途有望の官吏又は銀行會社員に嫁したし、但し京都在住者に限る(京都近在の娠)

▲知人の娠年廿七、父は清國にて相當の官職を勤む、財產はあれども仕度はなし、容貌普通以上、品行正、高等小學卒業後裁縫に熟達す、四十歳以下にて家族の係累少なき人に嫁ぎたし但し岡山附近なれば尤も妙(岡山生)

▲地方稅務署長の娠、年二十高等女學校を卒へて裁縫の私塾を修業し目下小學校教員なり、門地ある士族、高等官、銀行會社員、又は進取の氣象ある商工業者の男子に娶はせたし(長野の望婚女)

貰ひ度き方

▲軟派記者として、嘗て大新聞に執筆し、現今實業に從事する一青年あり、普通教育を受けし基督教信者にして血正貞淑なる十八九歳の女と結婚したし(華華生)

▲友人年二十五豫備陸軍士官、專門學校卒業月收七十圓、無係累、無財產、年は廿一歲迄の高等女學校卒業したる商業に趣味を有する處女を求む(南韓の鬪生)

▲年廿歲性質柔順、容貌普通以上、血統正、昨年中學を卒業し、進んで醫學を研究せんとす、資金不足に付醫師たらしめん人の養子となつて志望を全ふしたし、御通知次第寫眞贈呈(福岡の辛苦生)

▲地方中以上の農家財產一萬圓あり係累なし、現に判任官の職にありて月收若干圓、酒煙を好まず、血正體健なり、師範出身の教員、又は女學校卒業廿六以下の處女を求む、但し支度を望まず都合上養子に行くも可、(舞鶴軍港生)

▲友人年廿七噐濶某要港の官職にあり、容姿美、

身體健、性快活なる二十五歳までの淑女を求む、但し三四月間文通の後結婚の事(臺灣C、8生)

▲海軍判任武官年二十七勳七等恩給及相當の資産あり滿期後一商店を出さんとす、高等小學卒業位の女子を求む、但し名古屋以西、神戸以東の者ならば可、(舞鶴生)

▲米國留學の一青年々廿四歳、來る五月商業學校を卒業の筈にて歸後商業界に活動せんとす、米貨五千弗を年五分の利にて滿五年間貸與せらるゝ商業家の娘と結婚したし、但し年齡廿歳以下女學校出身者たるべき事、(在米シヤトル生)

▲求婚者年廿六體格健全血統正、目下醫學專門學校在學究研中、學資不足に付卒業まで補助しくるる資産家の養子となりたし(熊本の研學者)

▲年二十六商家の嫡子、縣立中學を卒業す家財凡參千圓、教育の有無を論ぜず至急結婚を望む、戸籍謄本及本人寫眞あり、(吉備、T生)

▲明治廿一年生血正普通教育あり、家に相當の資産ある農家の一嫡子、本年中渡米研學し、歸朝後有望の事業を企劃せんとす、依て相當の淑女を求む、(但三年間文通交際の事)(和歌山K生)

▲明治二十年生血正の男子、東京市中獨占の商職に富める家に十二歳より從事し、主人の許を得て分店を開かんとす、資金不足に付持參金ある二十五歳以下の淑女を求む(市内幸運生)

▲年二十七、資産あり、身元確實、係累なし、身體健全にして同情心厚き淑女を求む、但し仕度不要、成るべく山口縣又は京都附近の方を望む(周防某)

▲友人年二十七郡書記の二男にして勳七等海軍下士、在任中は舞鶴軍港に住居す、二十三四にして高等女學校卒業位の學力あるものと平和の家庭を作りたし寫眞保管、(平和の主)

▲年廿一目下高等工業學校在學中なれども都合あつて貰家の養子となりたし(美濃某生)

▲年卅五地方の門閥家、資産參萬圓年收四千圓以上、家族は老祖母及兄弟二人各中學に入り外に前妻の男兒一人あり、相當教育ある廿六歳位の配偶者を求む(同情子)

▲年廿九南丹の出身にして苦學數年中等教育を卒へ、目下大阪某大商店の支配をなす、身體と意志の強健なる處女を求めて獨立したし但し都合上養子に行くも可(一實生)

▲明治十二年生、千葉の醫學校卒業後豫備藥劑官となり昨今開業せしのみにて無係累なり、性質温順容姿普通廿歳前後の婦女と婚姻したし(芝の未婚者)

同胞十二人の家庭(口絵参照)

元大審院判事として法曹界に令名ありし永井岩之丞氏は上掲口絵に示せる如き一家の清福に惠める人なり、氏はその夫人との間に十二人の同胞(令孃六人令息六人)を擧げ皆よくこれを鞠育して成人せしめたり。これひとへにその妻たり母たる夫人の平素の用意の尋常ならざりし事を知るに足らん、夫人は故松平子爵の家に人となり所謂お姫様育ちなれども一族に十二人の子女を儲け得事既に稀に珍らしき事實なるが、十二人の子女が皆それぞれ成人して前途の光、今や春の海の如くなる何ぼう芽出度き事ならん、氏は極て謙遜家にして中には一家の私事を世に傳へられんは心苦しき限りなりとて否まれしを記者の切なる請によりてかくは。

人事活斷

貴問規定

一毎月十日着までの分は翌月五日の本誌に解答を與ふべし
一發問は封書に限る、端書は總て沒書とす
一書は毛筆にて書かるべしペン、又は鉛筆書きは採らず
一事實は正直にありのまゝを記すべし、廻り遠く謎々の如く書くはよろしからず
以上

△東京の萩子女へ‖良人の酒亂は年を取るに從ひて止み老後は貴女の福分多しとありますから子供を大事に育て辛抱なさるがよし、

△麻布すみれ女へ‖學業は後れても差支なし、一年位學校を廢して一心に身體の攝養を計られたし、將來は多望なり、家運はいよく\榮昌の象あり、併し貴女の健康に就ては十分注意を拂はれたし。

△北海道の雪子女へ‖結婚は望みあり此方より申込みてよし。

△北海道の田舍女へ‖良人や舅姑の心に疑を懷く勿れ、これ却て事を破るの基なり、誠意誠心仕ふるの外なし、只懷胎は當分見込なし。

△名古屋の中島花子女へ‖帶に短しとは聊か贅澤の言なり、その短き處を我慢して足すのが貴女の働きなり、幸ひ話のある内に早く結婚なさるが萬善也。

△さぬきおとめへ‖軍人との結婚頗る有望なり。

△豐前田舍娘へ‖商家へ緣付いてよし殊に末は大吉なり。

△宮城縣の姫子へ‖將來著しき立身はなき樣なれども、平穩な家庭の主婦となりて立身に勝る幸福あり。

△南海の廿歳女へ‖廿七歳男との結婚は行末餘り幸運にはあらず。

△麻布白椿生へ‖母子相方とも五分々々の無理あり、故に互に讓り合ふこそ親子の情且つ家庭の圓滿を圖る譯なり、家庭に理屈の爭ひは一切禁物と御合點さるべし。

△むつの寒竹女へ‖折角御奮發あるがよし、併しその爲め結婚期を忘れてはならぬ、學問をする爲めに結婚期を誤りたらば一生の損償ふ時なし。

△山の櫻英女へ‖在韓の軍人との結婚は將來面白からず、他に良緣をお求めなさい。

△越後の琴歌女へ‖約婚破談は必ずしも落膽に及ばず、また成婚の上破鏡となるよりもよし、おあきらめが上分別さすれば四月頃に似合して緣談あり。

△薄運婦人へ‖運命には勝たんと思ふ勿れ、四子の成人までは相應に苦勞あり、併し老後は至つて幸福なり。

△川邊の浦人女へ‖暫くは父御の意志に隨ひて萬事御控へあるべし。

△深山の賤女へ‖本人が希望してゐる間は、他から如何程氣をもみても駄目なり、先づ令妹の希望と兩親の考とが一致するや否や他所ながら心付けるがよろし、良人の試驗は六分通り成功の見込あり併し十分とは行かないから今一段の奮發を要す。

△苦田の不運女へ‖それは貴女が相續するが家の爲めなり、只成婚が破鏡となりしはお氣の毒なれど不緣なれば致方なし、あきらめて徐に良緣を待たるべし、又令妹の結婚は少々早くとも談のあり次第緣付らるべし。

△神戸の白井たか子女へ‖一念婦人の道をお盡しなさい、愛兒を擧ぐるは夫婦相愛の賜なりこれに對して貴女の考へは順逆が轉倒して居るやうなり。

△露下机上煩悶女へ‖一方に短處あれば又他方に長處あり、世間は廣し决して悲觀すべきでなし、良人を大切にして兩親の指圖に隨へば無

縁なり。

△花の家女へ——未だ急ぐ節でもなし今年からそろ／＼縁談あるべし、徐にお撰みなさい。

△白雲女子へ——婚期も十分熟せり一日も早くその心掛け然るべし、マサカの用意に職業を習ひ措きたいとの志は一層は最なり、只婚の爲めには一歩を譲るべし。

△北山うら女へ——貴女に今年は必ず縁談あり應ぜらるべし、殊に四五月頃注意あるべし。

△前橋すみれ女へ——兄上に御相談ありて御話を試みて貰はれたし多少の望あり。

△軍港■■女へ——行き掛りの夫婦の中の冷淡なるは有中なり、親の恋愛が仇となつても何でも只此際に處するは誠意にあり、機縁は取り様によるものなり。

△秋風女へ——兩親の将來は兩親の■■の事、貴女は成るべく辛抱して結婚なさるが吉。

△三島不幸女へ——孝行は善行なり、されど事情、境遇が許さない場合は如何な孝子も其家を見ふするとは出來ず、只親許は■いて居るから、兄上は結婚して早く身の納りをつけるが上分別。

△多摩女へ——令兄の亡くなられた上は貴女が相續して先祖の祀をなされずばならぬ、■■者の■を迎へたしとの事、望なきにあらねど縁遠し。

△田舍の心配媒へ——兄母のお言葉に隨ひて再縁するが萬全、自■の事は前途遼遠日暮れて途遠し。

△肥前白菊女へ——今一勉强して御覧なさい、成功は貴女の意思の强弱にあり。

△大阪の露子女へ——再縁を氣に病むは愚の極、要するに結婚を苟且にしてはならぬとの誓めを注意なさるがよし、廿八男とは相性よろしからず。隨つて未來の見込少なし。

△高岡の■女へ——先づ貴女の心から落着いて先方より來る縁談に付て篤と考へ決定なされて遲からず。

△深山すみれ女へ——成功は容易に來らず、されど令兄の一■■は心配に及ばず又、無學ならば無學で濟む處へ縁付なさい、不釣合は悪縁なり、人生の幸福は虚榮心の爲めに破壞されるとが多くあるものだからお悟なさい。

△大和なでしこ女へ——何人の妻となつても差支ない所の婦道を修養さるべし、良き女學生となり得されば、良妻賢母たるを難し。

△遠州女史へ——希望は容易に達し難し、只此■に一方法あり即ち醫師開業資を調達されて求婚あらば其人の候補者を得るも難ひなし。

△■■の巴女へ——■見の■家はその意思が無いやうですから先づ六ケしい、貴女に對する情には異りなけれど、さりとて愛情などの分子は含でないから結婚の成立には距離が遠過ぎる。

△横濱住の紅女へ——良縁にあらず早く斷念せよ。

△要ひ子女へ——耳は治する具あり先づ大學病院にでも往つて十分診察して貰ひなさい、相當の縁談あらば應じて結婚なさるが吉、獨立の事は最後の手段です急ぐに及ばず。

△駿河婦人へ——三人の遺見を擁して獨立生活との御決心、天晴れの御志、天は必ず貴女を保護して賢婦人たらしむべし、併し英語の研究は少々考へ者なり。

△■津の須磨子女へ——妊身は職務、■■を害らず健見をお擧げなさい。

△靜岡の心配媒へ——手工ならば美術に關する繪畫とか刺繍（ぬいとり）とか云ふものを修業なさるがよし、又女醫も有望です、商業ならば雜貨商、書物商などが適當。

△むつのはながすみ女へ——廿二歲の教師と結婚なさるが幸福。

△和歌山のすみれ女へ——將來望みなし後に婚期を過して悔みを殘れないがよし、女子の操は■さ違ふべからず。



新生命

三島霜川

上

東海道興津の停車場から、右に取つて、砥の如き道を半里ばかり。舊の東海道の往來に當ッて、古風な一と村。戸數は大約五十もあらうか、昔は街道筋に當ッてゐたので、從ッて村も榮えてゐたが、今は寂れて、靜な貧しい村になッてゐる。それでも一年三百六十五日、風が吹いても、雨が降ッても、村の往來で、チヤランチヤラン、荷を着けた馬の鈴の音の聞えぬとは無い。風の摸樣に依ッては、何うかすると低い山越の波の音も微に聞えるが、海からは大分離れて山に近い。此の村の端、而も往來から西へ入ッて二三町のところに、低い杉垣に圍はれた一軒の藁屋。門には、灰納屋少し奥には納屋があッて、本家は東に向ッて日當りの好い家搆、見掛けたところ、左まで貧しい農家とも思はれぬ。

　其處らには、鷄が七八羽、冬枯の中に是ばかり綠の色鮮な菜畑の中の餌を漁り廻ッてゐて、立樹といふ立樹は、殆ど裸になッたかと思はれ、其處らがパッと明い。もう落葉も少なくなッた十二月の初旬、家の簷下にも、入口にも、椽にも、干大根が幾百千本となく

吊してをッた。椽の上には、五十ばかりの婦が何やら襤褸を繕ッてゐる。午少し前の冬の日光は、椽の障子に映々しく輝いて、大根の影がカッキリと映ッてゐる……ふいに、鷄が、け、けッ、こ、こ、け、けッ、こ、けたゝましく啼出したので、婦は、吃驚したやうな顏をして頭を擡げた。鷄は、ばさ／＼、ばさ／＼と或は屋根の上へ或は柿の木の枝へ飛上ッた。

「あゝこれ、坊ッちやよ、其樣な亂暴なことなさるでありません。」と婦は、少し訛のある聲で呼掛け「ま、其樣なものをお持ちなすッて。」と襤褸を下に置いて立起ッた。

「だッて婆や、那の黑い鷄ね、失敬なんだもの。僕が銀杏や柿の葉ッはで船を造えといたら、それを蹴散らかして行ッたんだもの。それだから……だから揆ッて遣ッたんだ。」

と坊ッちやんは、衙も持ッたる箒木を振上げて、彼の鷄を打たうとする身構。年は五ッか、六ッか、眼のパッチリした。色の白い、頰のふくやかな、そして熟んだ林檎のやうに色づいてゐる、眉のかッきりとした品のある凜々しい男の子。鄙に珍らしく、さッぱりした着物を着て、白の西洋前垂を掛けて、大きな草履を穿き、肩を聳かして力味返ッてゐた。誰が見ても、百姓の子とは思はれぬ。

「それは、まあ非ない鷄ですこと。耐忍してお遣り遊ばせ、那鷄は馬鹿でございます。坊ッちやんにやはまた、乳母やが好い物を作えて進げませう。」

「嫌だ、嫌だ。」と體を振ッて、「罰だから揆ッて遣るんだ。」

「誰方でございますか、また彼樣な解らないことを有仰いますよ。坊ッちやまではございませんけれども」

と優しくいふと、坊ッちやんは、嫌な顏をして、少し唖む語調で、

「むゝ、にア、坊ッちやまだえ。坊ッちやまが鷄の奴を揆ッて遣るんだえ。」

「それは、きッと他の家の坊ッちやまでせう。家のはいゝおとなで在ッしやいますから、其樣なわからずやを有

仰いませんの。』

巧く祗觸られて、今度は、坊ッちやん、些か悄げた氣味である。面倒臭いと謂はぬばかりに、知らぬ顔をして、ぷいと後向になッた。そして妄と箒木を振廻して、彼の鷄を威嚇すのであつた。

『そんなら坊ッちやま可うございますから、澤山遊ばせ。今度阿母様がお在で遊ばしたら皆然う申上げますからね、よろしうございませう。』

と儼となる。何を思ッたのか、坊ッちやんは、突如からり箒木を投捨てた。慌てゝ乳母やの傍へ駈寄ッて



『御免よ、ね、もう爲ないから御免よ。阿母様に謂ッちや可けないよ。阿母様にいふとね、阿母様、きいきが悪くなるから。』

此の怜しい言に、乳母やは『まア。』と呆れてゐて、やがて、莞爾する。

『おゝ、お怜悧ですこと。能くお止しなさいましたのね。いゝえ、坊ッちやまは、其様なにお怜悧で在ッしやるんですもの、何んだッて阿母様に申上げませう。』と椽の上へ抱き上げながら、草履を脱がうとして、兩足をばた〳〵させてゐる坊ッちやんの足を見て、『まア、此様な大きな草履をお穿きなッて。坊

ツちやまの草履何うなさいまして。」
「畑に放擲ツて來ちやツた。」
「何故、放擲ツてお在なさいましたの。」
「だツて汚なくなツちやツたんだもの。」
「それでは、後刻に乳母やが洗ツて差上げませうね。」
と着物の塵を拂ツて遣ツて、「もう、お午でございますから、乳母やと一所に御飯に致しませう。」と暫と日光を仰ぎ、「さ、此處で少し遊んで在ツしやい、乳母やは御飯のお支度を致して參りますから。」
と立起る。途端に、掛時計が、鈍い、併しながら高い響で十二時を打ち出す。坊ツちやんは、温順に點頭いてゐる、ふと、
「乳母や、阿母様、今度ア何時來るの。」
「もう、お近いうちにお出になりますよ。坊ツちやまが、おとなにお成んなすツたものですから、今度はきツとどツさりお土産を購ツて來て下さいますよ。」
と謂ひながら、乳母やは、とつかは奥へ入ツて行ツた其處らが急に寂寞する。靜な日和で、樹も動かなければ、影も搖れぬ。濕ツて、しんめりとした庭は、冬の日光のかぎろひに、處々冷な白い光が微に閃いてゐた冬枯である、其處らは索寞として、何も眼に入るものが無い……たゞ取殘された黄金色の柚と南天の實と僅むだ黄菊白菊とが、此の庭の色彩であツた。そして其處らには一面に籾殻が散亂ツてゐた、耳を傾げると、街道の方から、ガタ／＼、ガタ／＼と、息籠した息の漏れるやうに荷馬車の音が聞える。
　坊ツちやんは、何を考出したのか、獨、孑然と椽の端に突ツ立ツて、空行く雲を眺めてゐた……すると、屋根の上に、柿の木の枝に、または菜畑の中で、雞が諸聲を擧げて高かに時刻を謡ふ。坊ツちやんは、眼を丸くして、其處らを見廻すと、ひらり、眼前に鳥影が映した。見上げると、鴉が一羽、羽音輕く、此の家の棟角を掠めて、斜に、隣家の木立の方へ飛んで行ツた。
　殆ど其と同時に、此の家で搗きてゐる磑に當ツて、ガラ／＼と車の音がする。坊ツちやんは、急に眼を輝

かせて、熱ッと俥の音のする方を見詰めた。俥の音はパッタリ此の家の前で停ッた。乳母やは、此の音を聞付けたのか、奥から飛んで出て來て、
『坊ッちやま坊ッちやま、阿母様ではございませんか。』といそ〳〵する。
『然うだよ、きッと然うだよ。』と坊ッちやんは、じりじりして、凝如として居られぬか、トン〳〵足踏をしてゐたが、もう耐らなくなッてか、椽から飛下り、大きな草履を突ッ掛けて駈出さうとする……乳母やは慌てゝ其を押へて、
『まア、お危なうございます、其様になさらないでも直にお見えになるではございませんか、あら、何うしたら可いでせう、お力のあること……』
　と肩を捉へる、坊ッちやんは、其を外す。手を握るそれを振放す。また肩を押へる、それを潜脱ける、また腕を引ッ捉へる、それを拂ふ……坊ッちやんは、前へ突ン踣りさうになる、乳母やは其を支えて、自分も前へ轉びさうになる。すッたもんだで、其の騒と鬩ッたら無い。
　其の騒の中へ、黒の深張りの蝙蝠傘と信玄袋とを持ッて、温雅に其處に立ッた婦人。年は廿七八。
坊ッちやんは、其と見るや、燥りに燥り、遂々乳母やの手を振切ッて、
『阿母様。』と大聲に呼はりながら、其の婦人に縋付いた。
　婦人は、滴るやうな笑顔で、さも懐しさうに、
『おゝ、敏さんか。』と片手で抱きかゝへながら、少し濕味を有ッた、睫の長い、二皮瞼の眼を乳母やの方へ向けた。
『夫人、まア、可うこそ。』と乳母やは、襷を外すやらお叩頭をするやら、きよと〳〵して、『坊ッちやまが、ま、何様にお待兼でございましたか。』
『然うでしたか。』と鷹揚な調振で、『變りがありませんか。大變に無沙汰をしてね。』と細いが、能く透る冴えた聲である。
『え、お蔭様で、まアね、貴方様。』と鬩ッて、頽れる

やうな笑顔になッた。『加之、貴方様、俊吉が急に歸ッて來たもんですから。』
『然うですッてね。乳母や何樣にか悦しいだらう。眞ンとに好かッたことね。』
と、これも心から悦しいやうにいふ。
『え、え、まア、何んと申して宜しいのでございますが。歸ッて參りました時は、貴方様、夢ぢや無いかと思ッたのでございますよ。そりや眞ンとに死んだ者が甦ッた騷でございました……何んだッて、貴方様、亞米利加へ行ッてゐたのでございますッて。呆れた太腹の奴ではございませんか。』
『それぢや、すッかり變ッてお了ひだらうね。』
『え、變りましたの何んのッて、すッかりもうハイカラになッて了ッたのでございます。加之其の老けたことゝ申しましたら……尤も悴も世を越したのでございますけれども、そりや始めて見た時は人が違ッたのぢやないかと思ひましたの。』と謂ッて來て、ふと氣の付いたやうに、『まア、自分の勝手なことばかり饒舌ッて居りまして……さ、何うぞお上り下さいまし。坊つちやま、貴方何んでございますね。阿母樣がおうるさくッて在ッしやいますよ。』
軈て、夫人は家へ上ッて、先づ吾妻コートを脫ぐ。車夫は風呂敷包を持ッて來て、直に後へ引退ッて、空俥を曳きながら街道の方へ引き返して行く。
夫人は、久しぶりで逢ッた我が子の頭を撫でながら
『暫らく見ないうちに、ま、此の子の大きくなッたこと。』と頭から足の爪先まで染々と瞶めながら、『乳母やの丹精も大體ぢやないのね。』
『いゝえ、此の頃はもう、すッかとおとなにお成りなさいましたから、少しも手をお掛けなさいませんでございます。』
『三月ばかり見ないうちに、何んといふ大きくなつたんですか。』
『今がお成長りになる盛でございますから。』
『何樣なにか腕白なんだらうね。』
『いゝえ、もう……』と謂ッて、乳母やは、暫と坊ッ

ちやんの顏を見て、笑を含みながら、奈何でございますか。鳥渡坊ッちやんにお訊きになッて御覽遊ばせ。」

夫人は微笑したまゝ。坊ッちやんは、含羞むだ氣味で少しく頭を下げる　そして、母の顏と乳母やの顏とを見較べて、まじ〳〵としてゐた。そこで夫人は風呂敷包の中から、乳母やへ手土產、坊ッちやんへお土產の玩弄を出して遣る。中に洋劍が一口あッたので、坊ッちやんは、其を持つや否や非常な元氣で室中を飛廻る。乳母やは狼狽えながら慌てながら、辛而のことで茶を汲むで出して、それから一ツきり坊ッちやんの話で持切ッてゐたが、婦人は何やら落着かぬ體でそゝゝ、はそはしてゐた。で、乳母やの話が途斷れると、それを待ッてゐたといふ風で、



「然う謂へば、俊さんはお見えなさらないやうだけれども、何うしたの。」

「伜ででございますか。伜は貴方樣、銃獵に參ッたのでございます。尤も、ひよゝ、ッとすると、今日あたり貴方樣がお越しになるかも知れないと申しましたら、早く歸ッて來ると申して出掛けましたけれども……」

「然う。」と婦人は輕く謂ッて、「それで何んなの、俊さ

んは、私の事を知ッてお在なの……此の子や何んかのことを―」

「私が、ざッと話しましたから、大概のことだけは存じて居るのでございます。」

「私の今爲てゐることも……」

「え。」と點頭くと、

「で、俊さんは何んとか謂ッてお在でかえ……私のことね。」

「いゝえ、別に何んとも申して居りません……たゞお氣の毒な事になッたもんだ……何しろ一度お目に懸りたいと申して居りましてございます。」

「然うかえ。」と何氣なく謂ッたが、其の胸から微な歎息が漏れた。直に氣を變えて「然う謂へば、呉羽のお家は、また大變ね。」

「え、またでございますか。」

「何んだか知らないけれども、大變にごたでたしてゐるやうだわ。新聞で見たんだから、眞んとのことは解らないけれども、何んでも君麿さんは座敷牢へ入れられてお在なさるやうなんだよ。新聞では、まア、大層君麿さんの肩を持ッて、大殿樣のことを攻撃いてあるんだけれども……。」

「そりや當然のことでございますよ。ですけれども、若樣が何うして、座敷牢へなんかお入り遊ばしたのでございませう。」

「そりや大殿樣の細工に定ッてゐますよ。何しろ那の腹の黒い、沒義道な方のことだから、御自分の望通りになさる爲には、何樣な眞似でも爲さいますよ。大殿樣にして見ると、何うしても御自分の御總領の秋彦さんに御家督相續をなされやうといふお考で在ッしやるんだから、何うにでもして君麿さんを日蔭者にして了はなければならないのだもの。私にして見たつて、矢張那の方の犧牲になッたんだわ。那の方の爲に、君麿さんからあらぬ疑を掛けられて、彼樣なことになッて了ッたのだから……」

「然うでございますのね。私、那の時のことを考へると眞ンとに腹が立ッてなりませんのよ。だッて、幾ら

弱い者が虐められる世の中だッて餘りなんでございますもの。若樣に致しましても、輕卒で在ッしやるではございませんか。貴方樣と大殿樣とお話しをなすッてお在で遊ばしたからッて……たッた其ンばかりの事で彼樣な騷をなさるなんて、餘り何んでございますわ。」

「眞ンとにね、那の時私を信じてお呉れだッたのは、乳母や獨だけだッたのね。」

「だッて、夫人樣、餘り皆がわからずやで、酷いことをいふのでございますもの。それで貴方樣は逐々日陰者になッてお了ひなすッて、もう浮ぶ瀨といふはお有つて無いやうな譯ではございませんか。」

「そりや世間から謂へばね、私は死んで了ッた體ね。私も那の當時は然ふ思込むで、病氣にまでなッたけれども、今では活きてゐる道が出來たから、もう頓と平氣よ。何も運命だと諦めてね、自分の盡すだけのことを盡せば可いと思ッてゐますから……」

と謂ッたが、乳母やには此の意味が解らなかッたらしい。乳母やは、いた〳〵しげに、婦人の顏を瞶めてゐて、

「でも、何んでございませう。若樣も今となッては、大殿樣のお仕向や何かお考へ遊ばして御後悔なすッてお在でのことでございませう。」

「そりや何うだか知りませんけれども、狂人でも無い者を狂人にされて、監禁同樣な目に逢ッて在ッしッては、些とは何んとかお考へなッてお在でせうよ。何しろ大殿樣は、君麿さんを狂人にして世間に御吹聽なすッて、一方では秋彥さんの相續運動をなすッたのですとさ。」

「まア、呆れて了ひますのね。」

「呆れるにも何んにも、其はお話になッたものでは無いのですよ。何しろ罪の無い此の子まで……」と坊ッちやんの顏を見て「日陰者にしてお了ひなさるやうな方なんですから、到底常識では判斷の出來ない方なんですよ。假にも彼樣な方を男にして嫁いたのが、私の不運なんだけれども……」

と語ッてゐる折しも、輕い足音がして、戸口の方に

人の氣勢。乳母やは耳を引立て丶、

「おや、俊吉が歸ッて參ッたやうでございます。」

と鳥渡會釋をして、徐ら立起ッた。

中

そも此の婦人は誰。藤島多喜子と謂へば、慈善家として鳥渡其の界隈に名が聞いてゐる。多喜子は、奥津の在に相應な家を搆へて、二三人の婢を對手に、自分の手一ツて卅餘人の孤兒と癈疾の老人とを養ッてゐるのであッた。また近邊に行路病者があッたとあれば、自ら進んで引受けて介抱する。奈何に「我」を捨て丶信ずるところに向ッて盡してゐるとは謂へ、これが男爵家の長女に生れて、一度侯爵家の嗣子の夫人となッた人と謂はれやうか。幾ら乳母の家へ來るのだと謂ッて、苟も他の家へ行くといふのに、多喜子は、黒の紬の羽織に銘仙の綿入といふ質素な扮裝であッた。勿論多喜子は、家にゐては木綿の着物より着ぬのであッた彼女は今、廿幾人の孤兒に母と呼ばれて慕はれてゐるそれで自分の生の子が傍にゐては、愛が偏ると謂ッて其子を自分の乳母であッた者の許に預けてゐる。而も戸籍面には、其の子は多喜子の私生兒になッてゐる。何故であらう、多喜子は、果して私生兒を生むだのであらうか。其には何か因が無ければならぬ。要するに社會は缺陷が多い。

其の頃の新聞を見た人のうちには、或は記臆してゐる人もあるかも知れぬ。「花園侯爵家の汚辱」なる題名の下に、侯爵家の嗣子夫人多喜子が、家扶の某と密通した事件に就いて、東京の各新聞は三日四日に渡ッて其の三面を賑はせてゐた。何がさて花園侯爵家と謂へば、大名華族のうちでも、聞えた素封家で、そして勢力家で、而も屈指の家柄である。で、世間は、眼を皿にして其の記事を精讀した。多喜子の亂行は、尾鰭を付けて、忽ち日本國中へ吹聽せられた。世間の人は、各自に取ッて、何んの利害も無い出來事ではあッたけれども、心から貴族の體面を傷つけられた花園侯爵に同情を寄せて、口を極めて多喜子の罪惡を鳴らした。固より多喜子には、此の幾千萬の口を塞ぐだけの力が

無かッた。まだ敢て塞がうともしなければ、自分を辯護しやうともしなかッた、彼女の不埒は確實な事實となッて了ッた。そこで多喜子は、所謂交際社會ばかりで無い、世間へも顔を出されぬ運命となッた。勿論侯爵家は離縁となッた。裏面は知らず表面は殆ど放逐されるやうに、非常な冷遇、甚しい侮辱を以て離縁となッた。そこで公明なる世間は、侯爵家の此の所置に向ッて一點の非難も挾まなかッた。そして侯爵家の世嗣夫人多喜子は、たゞの藤島多喜子になッて了ッた。



さて藤島家は、公卿華族で、貧乏な男爵であッた。當主即ち多喜子の兄の放埒で、多喜子の醜名が世間に響渡ッてから間も無く、華族の禮遇を停止せられて、今は見る影も無く零落してゐる。自體藤島の家と謂へば、公卿華族のうちでも家柄の好い方であッたが、多喜子の父といふ人は、世才に疎い方で、從ッて家柄に對するだけの收入が無かッた。それで所謂公卿の位倒れ、門こそ嚴しく立ッてゐたが内帑は火の車。されば多喜子は、稚の自分から世の苦勞といふ苦勞を爲盡してゐたのであッた

其の苦しい中に育ッたのが藥となッてか、多喜子は、氣は勝ッてゐる、諸藝は優れて出來る、加之名門のうちにも稀な美人で、そして才女であッた。雖然兄といふ人は、妹と打ッて變ッて、少し頭が鈍い方であつた上に、放埒で、素行が修まらなかつた。其が爲に借財の多い家は更に借財を增して、轉ては、華族の禮遇を停止されなければならぬ場合となつた。一家は擧つて心配の歎息ばかりで、家は火の消えたやうになつた。其の騷の中に、父は其の氣病が因となつて、どつと床に着くやうになつた。事實泣面に蜂である。然うなつては、兄は兄で、自暴自棄だ。一家の沈落と、父の寂滅を眼前に控えながら、無理の上に無理算段をして遊び廻つて、家へは寄り付かぬ。然う此うしてゐるうちに、父は、悲慘なる家の末路を見ながら不歸の人となつて了つた。辛うじて藤島家を照らしてゐた一點の火光は消えた。そして多喜子等が百ケ日の忌服さへ濟まぬうちに、藤島の家も、もう是までといふ危機に立至つた。

其の折突然花園家から緣談を申込まれた、其の條件といふは、全て藤島家の負債を償却して、財政を整理し、そして家の體面を保つて行かれるだけの基本金をも出さうといふのであつた。所詮利を以て喚はされたのである。兄や、家從等はいふまでも無い、親族の人々までが、躍起つて狂喜した。そして一も二も無く受込むで了つて、若干かの結納金まで取つて、多喜子には事後承諾……多喜子は何んの思ふところあつてか頑固に頭を振通したのであるが、全て身分ある家柄では、多數黨の勝利となる仕掛となつてゐる。殊には、「藤島の家の爲」を楯に取つて、多喜子は遂に多數黨から壓伏せられて了つた。此くして多喜子は、家の犧牲となつて、花園家へ賣却せられた。それで藤島家の面目は一先づ取止めたが、一度惡い風に染込むだ兄は、其の後も放埒を止めないで、花園家から贈られた基本金も二年と經たぬうちに消費して了つて、復高利貸の厄介になるやうになつた。其結果として、多喜子が花園家を逐はれると同時に藤島の家も瓦解して了つた。

下

「ですから、私は、婚禮の其の晩から、これで生涯浮む瀬が無いと思つて居りましたの。」

と語つてゐるのは多喜子で。聞いてゐるのは、近頃亞米利加から歸つたといふ乳母やの伜の俊吉であつた俊吉は、多喜子より三つばかり年長で、互に穉い時からの馴染であつた。俊吉が故郷を出奔して、亞米利加へ行つたのは、今から九年以前、丁度多喜子が花園家へ嫁ぐ二三ケ月前のことであつた。

其の頃俊吉は、俊秀な靑年で、母の關係から藤島家の厄介となつて、政治經濟を志して某私立學校に通學してゐた。ところが多喜子の兄が亡くなる、藤島の家は慘澹たる有樣となる、多喜子は花園家へ嫁くやうな噂がある……と、なつたら、何を考へたのか、彼は突然故郷に歸つて、そして間も無く行方の知れぬ人となつて了つた。當時氣輕で、快活で、誰にでも親まれた血性の靑年は、今や沈着な、そして考へ深い、立派な紳士となつた。彼は、亞米利加に渡ると、最初最も下等な勞働者となつて、重に南方の殖民地を稼ぎ廻つて傍ら志す學科を修養してゐたのであつたが、軈て手蔓を得て密獵船に乘込む、鑛山に入込む、最後に濠洲に渡つて、鐵の如き心を以て、堅忍不拔、何うにか此うにか惡奮鬪に耐えて成効を收めて來たのであつた。これで彼が懷中に入れて來た金は殆ど十萬に近いといふ噂。

「雖然謂はゞお金で購はれた體でございますから、退くにも退かれません、何しろ花園侯爵といふ方は、有名な不身持な方で……口にするさへ奈何はしいことですけれども、女と見たらば、誰彼の差別無く手をお掛けなさいましたのよ。加之私の良人と仰いだ方といふのは、老侯爵の實子では無いんですの、何かの事情から、老侯爵は、一度順養子となつて花園家を御相續なすつて、それからまた、兄樣のお子に家督を御讓りなさるやうな譯になつてゐたのでございます。」

「妙な譯ですな。」と俊吉は、口を容れて、「前の侯爵は立派な嗣子がありながら、何うして老侯爵を順養子と

なすつたんですな。」

「それは、一つは嗣子が餘り弱さかつた故もありませうけれども、何かの御都合で、まア、然うなすつたものと見えますの。それで今度、老侯爵が御隱居なすつて、君麿に御家督を讓らなければならぬのですが、老侯爵は、其が御本意ではなく。老侯爵には、立派な實子が三四人もあるのですから、此の方等に御家督をお讓りになりたい思召です。けれど、世間へ對け、親族へ對け、然うも出來ないから、惡い企謀をお考へなすつて、所詮私といふものを君麿に娶はせて、世間の眼を眩まして置いて、そして君麿の體に綻の出來るのを待つて居られたのでございますの。で、一口に謂ひましたら、私は道具に使はれる爲に花園家へ購はれて行つたのですよ。また何か因が無くては、花園家で、數ある御同族の中から、私のやうな貧乏公卿の娘をお擇びになる筈がありませんわ。花園家の地位から謂つても、名望から謂つても、歷々の御同族から幾らでもお輿入になる方がありますのに、所故に莫大なお金までお出しになつて、私をお擇びになつたのは、老侯爵に深いお考があつたのですの。老侯爵のお考では、家柄さへ相當の者であつたら、出來るだけ勢力の無い謂はゞ抵抗力の無い、去來といふ場合には何うにでもなる家の者をお擇びになつたのでございますの。此うお話しましたら、花園家に於ける私の地位も君麿の地位もお解りになつたでせう。」

「は、解りました。」

「一體君麿といふ人は、成程神經が鋭敏の方で、何うかすると常識を失ふやうなことがありましたけれども至つて温順で、交際なんかも、なか〳〵拔目の無い方でございましたの。ですけれども、老侯爵の仕向が仕向でございますから、非常な不和で、殆ど衝突が斷えなかつたのよ。從つて家族の方等とも折合が惡かつたものですから、こればかりでも、私は、花園家で何の位苦勞をしたか知れません。それでも足掛五年といふものは、何うにか辛棒を爲通しましたの。而ると或晩のこと、丁度君麿が留守だつたのですが、老侯爵は、何

か内談があると謂つて私をお呼になつたのよ。」と謂差して、多喜子は、少時默つてゐて「今から考へると、それが、私が花園家の犧牲となつた動機ですの……尤も何うせ爲にするところがあつて購はれた體ですから何方にしても何れ一度は其の運命は脱れなかつたのです……』と悄默して、暗涙に咽ぶか、伏目となつた。さも言難さうに、良刻躊躇つてゐて、辛面のことで『參つて見ますと、老侯爵は、獨でブランをお飲みになつてゐて、まア、私に酌をしろと有仰るの。何んだか薄氣味が悪かつたものですから、兎く御用を伺はうと致すと、たゞニヤ〱笑つて、何うかすると怪しからない素振をお示せなさる、而も室は西洋室ですから、老侯爵は、憚氣なく勝手な眞似をして、私を窘しめてお在なさると、丁度折好く君麿が歸つて參つて、それこそ暴風のやうに室へ飛込むで參りました。一體君麿は、老侯爵に何時も妙な疑を持つてゐたもので、其の權幕と謂つたら、恐ろしい勢でしたが、さ、それから老侯爵と君麿の爭論となつて、お家はごつたすつた……』



多喜子は、尙も言を繼いで、ざつと摘んで、其の後

の事情を話すのであつた。
君麿は、老侯爵の我が妻に對する凌辱を見て、烈火の如に怒つた、さなきだに老侯爵の亂行を苦々しく思つてゐた彼、其の品性に慊らなかつた彼、而して其の我執を憎み、平常から其の暴慢なる仕向に壓伏せられて、無念心外を耐えてゐた彼は、突然に火藥に火を投げた勢であつた。そればかりか、稚い時から逆境に立つて、妙にひねくれて育つてゐたとは謂へ、所謂公達育で、世間の味を知らぬ彼は、其の狹い、邪推深い心の判斷から、一圖に老侯爵と多喜子との間に、不倫な關係があるとのみ思込むで、頭から離婚を叫んで、誰が何んと謂つても其の主張を曲げなかつた。そして離婚のことは動かすことの出來ぬ問題となつて了つた。
雖然此の時既に多喜子は身重になつてゐた。これが少しく離婚を面倒にした。君麿は、それを老侯爵の胤であると謂つて、何程の説明も頑として耳に入れなかつた。さればと謂つて、老侯爵に取つては、事實に於て覺の無いこと。それで聞くに耐えぬ爭論は、二月三月と日が經つて了つた。多喜子の腹は、誰の眼にも付くやうになつた。既に身重になつた夫人は故なくして離婚することが出來ぬ。設や離婚をするにしても、腹の子は引取つて、立派に君麿の長男としなければならぬ。それは絶體に不可能のことだ。君麿の眞つ直な心には、家の體面の爲に『我』を沒却するやうなことは出來ない。所詮正直な心であるが、別な言でいふと片意地だ！　されば謂つて、老侯爵の零れ種とは思も寄らぬ沙汰である。事情を止むを得ぬから、身重の體を其のまゝ多喜子の籍を藤島家へ復してはといふ沙汰もあつたが、それでは侯爵家の名譽に泥を塗り付けられるとあつて、それも出來ない。
何れにしても、多喜子は立寄る蔭は無かつた、君麿の傍へは寄つても付かれず、老侯爵は固より露ばかりの同情のある譯ではなし、家扶家從の面々はと謂へば要するに面從後背の小人ばかりである、設や其の情を知つてゐても、誰あつて、多喜子の爲に、正道を說いて人生の高義を發揮する者が無かつた。たゞ賴とする

には親族であつたが、これとても『力』の無い外交は何んの効果も無いと同様で、結局は泣寢入だ。弱は、狼の强壓に其の肉を喰はれなければならない。大の蟲は、何時でも小の蟲を犧牲にする權利がある、

此くして多喜子は三角波に揉まれぬいた。そして花園家の大奥は、多喜子の一身を所置する爲に日每の詮議で、各自智慧を搾つて苦心慘憺であつた。其の結果として、多喜子は、家扶の某と通じたことになつて、腹の子は表面家扶の胤と取定められた、これで花園の家には格別傷が付かず多喜子を離別することが出來た多喜子は花園家の蒙るべき惡名を全て一人で擔つたのであつた。此の犧牲者に向つて、花園家は、新聞を利用して、多喜子の罪惡を廣く世間に訴えて感謝した。此の感謝は多喜子に取つて全く意外であつた。彼女はよも自分の惡名が世間に吹聽されるやうなことはあるまいと思つてゐた。日陰者となるのは覺悟してゐたのであるが、悖德者となつて世間に拋り出されやうとは思はなかつた。多喜子は全く花園家の詐謀の罠に罹つたのであつた。後になつて何んと騒いでも悔んでも追付くことで無い。幽咽を鳴らしても齒が損するばかり幾ら歎いたと謂つて、悲むだと謂つて、此の惡名が拭はれるもので無い、墓の下にでも擔つて行かなければならぬ。多喜子は、貴族の娘として殺されて了つた、社會的に死んで了つた。

此く語つて來て、多喜子は深い歎息をした。そして、

『ね、俊さん。私昔の俊さんと思つてゐますから、何も彼もお話して了うのよ。私、今となつて、自分の潔白を吹聽しやうとも思ひません……ですから、誰にも辨解らしいことが無いんですの。乳母やにさへ委しいことを話したことがないのよ。』と快活な語調で謂つて、『それでもね、其の當座は、何樣なに口惜しかッたことでせう。幾ら恩があると謂ッても、義理が絡むでゐても、其樣な慘酷な眞似をするのなら、決して犧牲になるのでは無かつたと思つて、毎日々々泣暮して居りましたわ。』

「然うですか。」と俊吉は、同情に耐えぬやうに、「隨分酷く迫害を加へたもんですな。併し能く是迄怺えて來られました……いや、何うかすると、世間には、往々其樣な事實があるものです。或る惡漢が、何が爲にするところがあつて、事實を捏造して世間に吹聽したとする……それが世間の信ずるところとなつて、其の人は社會的に殺されて埋沒して了ふ……それと是とは事情こそ違ふけれども、ま、其ですな。だが、お諦めなさい、今となつて、何んと思つたつて爲方がありません……といふと、何んだか冷淡なやうですが、實際です。殊に貴方は、自分で行くべき道をお啓きになつたのですから！」

「え、そりや諦めて居りますの。もう家のことも思はなければ、世間のことも思ひません。餘り家のことを思つたものですから、ゝゝ、あらぬ惡名を着せられたのですけれども、家を忘れて了つたら、其の惡名も平氣になつて了ひましたの。」

「それが可いですよ。一體世間の人は餘り家を重じ過ぎるのです、そりや家も大事ですが、家の爲に人が左右されるといふのは、少し馬鹿げてゐるやうですな。人は人として活きて居れば可いぢやありませんか。そして出來るだけ人の爲に盡されたら、それ程結構なことは無いでせう……ま、貴方にして見たら、成程藤島多喜子といふ方は、社會から葬られて了つたが、貴方自身は、現に立派に活動して居られるではありませんか。新らしい生涯を作つて、新らしい生命を得て！……」

「然うですわ、眞んとに然うですわ。私、今の事業を思付いた時は、眞んとに甦つたやうな心地がしてよ。……」

「然うでせう。何しろ人といふものは、榮華とか、虚榮とか、全て滿らない現實的の滿足を忘れることが出來たら、非常に強くもなれゝば、また何樣な仕事でも出來るといふものなんです。人生は決して失望するものではありません、行くべき道は幾らでもあるのですからな。が、日光は、何處にても輝いていやうといふものぢやありませんか。」

「俊さんが、然う謂つて下さると、私眞んとに心强く／＼なりますわ。何しろ今までは一人として、同情を寄せて下さる方が無かつたんですもの。」

「いや、私は決して貴方の潔白を疑はない。何んでも關はんから、遣れるだけお遣んなさい。私も及ばずながら、貴方の爲に、また事業の爲に盡力致しませう。」

「まア、眞んとに？」

と謂つた時には、感情が昂つて來たのか、多喜子の眼頭には、白く涙が煌いて、其の頰は微に熱して希望の色が輝いてゐた。

「誓つて！」

と俊吉は、たゞ一言、明快に謂つたばかり。敢て多くの言を費さなかつた。

日は、靜に暮れかゝつて、障子の紙が蒼白く見えるやうになつた。乳母は夕餐の支度に勝手に働いて、坊つちやんは爐の傍に座つて、何か考へているやうな顏をして爐の火を見詰めてゐた。そこで、兩人の話は少時途斷れた。

其の夜、多喜子は、夜更まで乳母の家の團欒に加はつて、昔語りや世間話に、十年ぶりで温い家庭の人となつた。そして俊吉は、亞米利加から得て來た金の大半を割いて、多喜子の事業の爲に捧げることを約束した。其の約束の條件として、俊吉は、「お互に何處までも理想的に生存しやうぢやありませんか。」と繰返して謂つた。多喜子は、俊吉に依つて新なる生命を與へられた。

此くて多喜子は、翌年完全な孤兒院を設立して、俊吉も事業を共にすることゝなつた。併し兩人の關係は、何處までも事業を共にするといふだけに止つてゐた。

（をはり）



多摩子

松美佐雄

「一」

多摩子!!!

多摩子は××育兒園で、一番愛らしい娘兒でせう、多くの孤兒には肖ない――天使式で圓々と太つて居ます。

左うです此娘は、昨春の二月、私が旅から連れて來たのだ、まあ詩人が夕暮の野末路で、美くしい蕾の花束を拾つて歸つたやうなものでせう。それは詩人にせよ、野路の夕暮に徉ふて、主知れず捨てられた花束に蹤が落ちるやうでは、何れ詩材は得られないので、餘り詩興も起らないです――ですが、其花束を捨てるのも惜しく、持ち歸つて卓上の花瓶に挿すと、温む春水の情で香は鬱然と、花は鮮に微笑み初むるのです、花が咲くと、詩人は初めて卓を敲いて興が起ります。まあ私を詩人にすれば、多摩子は其花束でしたらう結局花束の多摩子が美くしく微笑だからこそ、私は之を語るに非常に興味の起つた譯であります。

誰もあることだらふと思ひますが、私は殆んど癖――性癖で、地圖を繙いて見ると、直に憧れる地點があるのです、其時などは、特に激しかつたので、或る意味に於ける、神の默示ぢやア無いかとも思つたのでした。

時は昨春更月のすえ、梅花の紅がうすがれて、簷に懸る朧月も、戀歌に更けゆく頃でした、私は靜に圓窓を締めて、淡き灯影に繙きかけの名跡誌を讀んで行くと、神流の里と云ふ鄉名が載つて居るので、もう其名が懷かしい、何んな地がと上野地圖を披いて見れば、南北境の神流川に沿ふた鄉で、續いて美久里村、土師鄉村、鬼石町、三波川村、美原村などゝ云ふ、如何にも詩になりさうな村落があります――此村落をつくッた神流川は、無論名の美くしい許りでなく、流水の清い川添えの麗はしい處であらふと、例の空想を初めたのです。地圖を辿つて行くと、此川は武州境の御荷鉾

山麓から湧いて、萬葉集に見ゆる佐野の渡舟の邊で、彼の清麗の妙義山から、流れ出る枯瀬川に合さつて、利根の本流に入るやうです。

妙義の神靈が絞る枯瀬川が、聖く碧ですから、御荷鉾の御手洗も清く深くあらふ——それに、御荷鉾の山姫は、大内裏の十二一重にも勝る百色の岩裳で、(俗には千枚岩層と云ふやうですが)此岩裳が、千斷々々て流れゆくと、艶かな小波を起す川底の異砂は、百色の燦きある紅寶石よりも美くしいのでせう——と思ふと嚴石を拾ひあげて、謠歌するのです。唱歌と云ふと、私の感想は其川添を伴ふて、朱や、紫や、紅の千縞の吾ながら吹出す事があるのですが、音樂の趣味などを解せぬ私にも、時には興の起つて卓を敲いては、韻文などを朗讀することがあります、胸の裡で密とやると緩調急調が酷く好いんで——思はず聲をあげて唱へ續けやうとすると、矢張り駄目!!! 不圖氣が付いて非常に興を殺がれることがありました。其夜なども矢張左うで、田蘆の五色石が、何か謡ひ出して面白く神流川の異砂に遊んで居ると、隣家に洋樂器の合奏が初まつて私は酷く興を殺がれ、彌猿啼く細谿道に行塞つたやうな思であります。

朧夜に洋樂!!! それが不調和からではなかつたでせうが、暢な感興の夜が、酷く掻きみだされて、將に散らふとする梅園に、春雨でも降るのぢやァ無いかと覗いたやうな譯で——梅雨に入ると、神流川にも濁水が出て、五色石も泥の化粧に、昔を偲ぶ俤もあるまいと、山鳥の尾のなが〳〵しい夜を、微眠ともせずに明したのでした。

翌朝は飄然と家を出たのです。

無論輕裝の儘で、上野發の高崎行(列車)に乘り込むと、根岸の里の朝霧は、此大怪物を嘯んで日暮里、田端と吐いて送くる、赤羽からは旭光をうけて、空には武藏野の影懷かしく村落の梅ヶ香は、それからそれと？

「二」

神保原驛を發車て差懸る鐵橋が、私の憧れた神流

川上流は村落から谿に消えて、流末は若春野に廣く流れ行く、日は午前、氣は爽に。

私は新町驛から降車て、藤岡街道を右に瞶めて――直線に川添村に向つて走りました。殘霜の褥から漸くおきた青麥は、微風に百陣の袂を拂つて畝から畝と野雲雀を歡迎するのです。畑の輪廓は素肌の桑株が、ヌーボー式に形どつて、私は其畔道の枯葉を蹈んで、川添に出たのですが、生憎にも此方岸は懸崖で、神流の水を思ふさま掬すると云ふことが能きませんでした。兎に角、向岸は廣い河原ですから、何處からか渡らふと、右盼左顧――見渡すかぎり春芝の堤防で、滑りゆく春風の觸る梢もなく、薄く霞く初霞の、村落をぼかするさまも暢かであります。

私は川添えを二里程登り辿りました。無論此間には軟竹の叢もあり、木の芽の萠いた林もあつたのですが、向岸に渡る丸木橋になるとは、流韻巖壁に咽ぶ峽い崖になつて、度々失望するのでした。戸塚村、土師村などを經て、潮村の渡場に懸りました。這麼谿間の壁で潮など丶云ふのは、鳥渡可笑しく聽えますが、此邊の瀨には、御荷鉾系の巖が斑立つて、之に咽ぶ流韻よりは踊る川浪の水泡が、潮のやうに見ゆるからでせう、勇む駒には渡れまいと思ふ丸木橋が、瀨の巖頭で三所程に續いてある――繪に書いた電光のそれか、くの字流れに河原に繫まれて、向岸は武州渡良瀨村であります。

私は橋上に踞んで流水を掬しました。

流水の清き、それよりは川底の眞砂の美くしさ、踊る小波にまで、五色の縞の浮かみ、浮かみて、神代からなる流れの僅か――神流川、神の小波、私は遂に巖頭を敲いて流の歌の節たかく、それから向河原に降りて、眞砂の色に染り染りて。

一個々々に拾て鮮き色彩りのあつて、詩趣の美くしく表はれた。詩人ならぬ私も雙の袂が重くなりまして、領巾振ふ山の昔は知らず、此色石に化したなら、花の雅典に逝くにもまさるだらふと思ふたのでした。

憧憬れた眼を不圖仰げると、日は多胡の入野の彼方

谿の深いだけに日脚の傾いて、午後三時も暮合の影――考へて見ると、私は晝飯も求めぬのでありました。何處か掛茶屋のある宿に出て、四隣を眺めれば、寂しい森――寂しい谿――趣きある松ヶ枝は、木枯のまゝなる林の上に、茅家の棟は森の影、水車の音の遠く、何と云ふ寂しみでしたらふか、拾つた石を離さぬまゝに、元來た方へ歩みを移さうとする時、橋下の巖の蔭から突如現れたのが――多嫌子でした。

初めは御衙鉢層の、巖の靈ぢやア無いかと思つたのです、襤褸の着物に襤褸の帶が、千枚岩層の縞色に背て居つたので？

私は聲を擧げて招だのでした。

「――彼の――孃ちゃん」

「妾」

「左うです――まあ此處へ」

「はあい、」と、其娘は身も輕く、石から石を翩々と跳ねて來ます。

憶れもせず來る姿を見ますと、山家育ちに似もやらず、縺れ髮の艶かさ、色は拔ける程の白美です。

「何方に行くと宿があるの、御飯を喰べるやうな」

「彼の晝飯のこと」

「左うです」

「ぢやア妾と一所に來ると、八鹽に行けるのだが」

生々する瞳を愛らしく、私を繁々と瞶るのでした。

「八鹽――つて」、私は優しく頭髮を撫でますと、綠髮がさらりと解けて――川瀨に寫る初虹の影!!!

「溫泉ですの、お客さんが皆來る」

「――八鹽溫泉、貴娘案內してくれよ」

「妾は溫泉の叔母樣處に居るんだもの、此岸へ石拾に來たの。斯んな可愛らしいのがあるんだから」と、小娘は袂の內から、美くしい小石を汲ひ出して見せます。

私も懷から出す。

「私のも綺麗でせう」

「貴君のは――大きいの」と、鳥渡覗いて見ました許り。

覗く覗かれる――宛如海邊の貝拾のやうでありましたが、小娘を前に橋を元へと戻りました。私も神流の流水の聖く、眞砂の美なると云ふまでは想像が能きたのでしたが、此谿に湧泉のあると云ふのは、豫想外で、まあ旅へ來ての土產であると、斷崖の腰――頭上は巖――脚下は碧水と云ふ樵夫の路（之でも鬼石街道ださうであります）を、御街餅を彼處と辿つたのです。案内の小娘は（八歳と云ふた）薙刀草履で小股走り、埃の中を縫ひながらも!!!

「三」

八鹽温泉は潮の渡橋から六町程、鬼石街道の右に仰ぐる山腹でした。

浦部と云ふ旅館を兼ねた温泉宿が一軒なので、街道から望むと、少し紅らんだ櫻林の梢から、白壁が燦々と見えて居ります。這麼深い谿で何の風勢があらふと登つて見れば案外!!!

名のみ恐ろしき鬼石の里、其裾から流れ出るやうな神流川は、曲線美を麗わしく、流れ〳〵て眼蛇の如く、渡らば武州渡良瀬の里であります。此里も只渡良瀬の里と訊いては面白くないのですが、實は關東の雅典と呼ばるゝ絕善の庭園があるのです。夫が八鹽の一畔の下で、神流川が曲り流れて、美くしい天然の公園を裝飾して居ります。

私は興が酷く起つたのです。草鞋を脱いで直ぐ浴槽に飛び込む――少し肌寒いながらも浴衣のまゝで、二階の欄干に靠れ懸つて、詩に憧れたのでした。

青葉の老た頃は、若鮎があるさうですが、其時は何物も無く、八鹽煎餅が麥酒の肴でした。生憎此日は浴客も無く、私一人でしたから、田舍娘其儘の女中が、お酌を遣つてくれると云ふ始末――都で山出の下婢を相手に飲むやうで、亦一種の興味がありました。

浮世譚の末でした。私は不圖膝を敲いて、

『左うだ――僕を案内してくれた娘ね、彼の娘は何と云ふかしら』

『貴君を案内、吁多摩子でせう――多摩子と云ふのですよ……………孤兒です』

「孤兒、彼の愛らしい娘が」と、私は何となく胸騒ぎがします。

『はア誰のお客樣に話しても、可愛さうと思はないお方は無いのですよ』と、女中は温順相な瞳に表情して繁々と私を瞶める。

『おやア僕にも聽かせなさい――膝とも相談と云ふ事があるのだから』

『お聽せ申しますとも――彼の多摩子の親達は、信州の須坂、あるでせう左う云ふ處が』

『あるやうだッたね』と、私は朧に。

『其處ですと、有名の財產家であつたのですが、可愛がりきッた若旦那で、全然使い捨てゝ、兩親が無くなると、お親――多摩子の母ですよ、お親さんと多摩子を捨てゝ、上州へ逃げて來たと云ふのです』と、女中は我ながら呆れたやうに、瞳を眴つたのです。

『ねえ貴君、可愛さうなのは多摩子親娘ですよ、借金取の中には居溜まれず、朧に訊いた父樣の跡を慕つて尋ねて來たのですが――まあ行衛は知れず、旅費は無くなると云ふ始末なのでせう。此地へ來た時などは、それは〳〵憐れの姿で御座いましたよ、まあ乞食さんと云ふやうな姿でね、其時、丁度、渡良瀨の伊三さんと云ふ若旦那株が、此座敷へ來て飲んで居まして――可愛いさうだからと、色々身上譚を聽いて、酷く同情した譯で御座いました。

伊三さんが、

何うだ子、身の振方のつくまで、渡良瀨の製絲場へ出ては、多摩子は僕が引きうけて此處で育てゝ貰ふことにするからッて。

妾達も側に居りましたから、共々勸めたので、お親さんも嬉し泣き、多摩子の食費は伊三さんが此家へ入れる譯で預かる、お親さんは工場へ這入ることになつたのですの。

今思ふと妾は、男なんてい者は恐ろしいのですよ――妾達は側で只可愛さうだ〳〵と、涙にくれて居りましたに、伊三さんは磨けば上玉になると睨んだからでせう』と、左う言つて女中も麥酒瓶を頻りに睨みつけ

て居ります。
私は女中の薄藤の地色に、紅菊を染めた襦袢の襟を眤と――無言で。
「それから一月程經ちますと、或夜妾達が寢やうとする頃、伊三さんがお親さんを連れて來たのです――多摩子に逢わせるのですと、
妾はお切介にも、多摩子を揺り起して、二階座敷へ抱きあげました。多摩子も三年前、五歳で、頰吻りながら多摩ちやん、母様が來たよと云いますと、左うと眠むさうな眼を判然明けて、嬉しさうに咲いましたの。お親さんは顔の艶もでる、髪も水々しくなる、見惚る程の別嬪になつてますの。
其夜は二時間程居つて歸りました、それから翌夜も、翌夜も來るのでせう、妾達は初め一夜は、別に不思議にも思はなかつたのですが、斯う毎夜ですと、疑わしくなつたので御座いますの。
全體貴君其工場は、彼れ――見ゆるでせう」と、女中は龜善の庭園の側、白壁造りの工場を指差して、
「彼處で、隨分嚴重で、二百人も居る工女を取締るのですから、夜などは如何事情があつても出す事は無いのですが、それを忍んで來るのですから、まあ怪しい譯で御座いませう、
貴君は何うして忍び出たと思ひますか」
「無論――僕には解らんさ」
「妾は後に聽いた時は慄然としましたが、女も娘の愛にひかされると、隨分思切つたことをするものですよ、
初めは伊三さんが、毎晩行つて工場格子まで呼び出して、多摩子の可愛らしくなつた事や、母を慕ふ事などを、頻りと言ふたに違いないのです、お終結にはお親さんの方から、何卒密と逢せてくれと、言ふやうになつたのでせう――何でも伊三さんと忍合せて」と、女中は私を促す様に欄干に凭れて、
「あら、彼の龜善の庭園に、川が流れ落ちる碧淵があるでせう、彼の懸崖に空を張つた電線が、石炭を運ぶので、此岸の懸崖から谿渡しに吊つてあるのです――向岸に櫓があつて、箱が吊つてありますの」

『見ゆる──宛如、空架式の運搬機だ』

『お親さんが彼に載て合圖すると、伊三さんが此岸で曳いて、聽くも身の毛の慄立つ、神流川の上を、鐵線一條を賴みに渡るのでせう、謂はゞお親さんは多摩子が可愛い〳〵で、伊三さんのお酌までするやうになつたのですよ。

這麼事が初まりで、段々逢瀨が重なつて、多摩子の顏さへ見れば自分は何樣なつても好いッて、晝だつて窓から此家を瞶めると、本統に氣の狂ふ程逢いたくなつたのですと、雖然左う〳〵は無言つて居られませんから、皆で意見したのです、それが、斯うと、夏の忙がしい時が過ぎて、初秋で御座いましたらふ。

お親さんも辛而、眼が覺めたのでせふ、頻りに淚を拭いては熟と多摩子を抱えて、もう霎時逢わないからと、泌々言ふて出懸けましたの。

可愛さうも、可愛さうで、多摩子は逢わんでも、妾達が育てゝあげるからと、能く言ひまして歸へしますと──翌朝でせう？

貴君が多摩子と逢つた潮河原に、お親さんが箱と一所に碎けて流れ寄つたのが。

まあ大變の騷ぎ!!!何うして電線が切斷れて落ちたか解りませんが、伊三さんは其後妾の家に來ませんし、多摩子はあゝやつて妾達が可愛がつて行くのですの』

『左うかね』と、私も呼とする許です。

『四』

神代からなる神流川の、淸き流水が、這麼憫れなる血汐で濁されて居らふとは、思ひませんでした。私は此譯を訊くと、折角の麥酒も醒めて多摩子を貰ひうけて歸らふと、心定めたのです。

直に浦野の主人を說くと、快よく承知する、多摩子に言ふと朧に默頭く、女中達は行末の爲だと、酷く喜ぶと云ふ姿で──其夜は多摩子の準備の爲に泊り、翌朝は親子と云ふ薄命婦人の墓詣をする、惡魔に誘惑された恐ろしい通路も見ました。

何でも女達は騷ぎ明しましたらふ、帶を片側取換えて遣らふ、襦袢の袖を長くする、宿まで行つて高襟リボンを買つて來る、お化粧をする、髮を結ふ──斯うしてみると、昴ぐる程の愛らしさとなつて、中には情しさうに落膽して居る女中もありました。

斯んな騷で遂遲く、午後多摩子を連て發足ました、鬼石街道を新町驛迄馬鐵で來て、三時の下り列車に乗込で、昨日憧れて來た神流川の鐵橋と別を告たのです。

何う考へて見ても、親子が神流川へ落ちて死んだと云ふのは、他動的では無いやうです。蛇と惡魔に穢された軀を、美くしい流れに濯ふ爲に覺悟して落ちたのでせう――能く婦人の意志や感情は流動すると云ふ說ですが、何うも其流動は、吾兒と云ふ者を軸に、圓形に轉流するだらふと思はれます。

さるにても多摩子の父、否男は何うでせう、吾兒吾妻を捨てゝ、何處の栖に溫つて居るか、比較すると、平行線を畫いて前から前と走るやうです。多摩子は列車の窓から、白雲深き鬼石の空を瞶めて居りますから、私は密と抱き寄せて、

「多摩さん――貴娘は父樣の顏を覺えて居りますか」

「父樣――覺えて居つて、もう忘れちまつて」

「忘れた」

「彼ね、母樣とお國から來るとき、暗い〳〵汽車の中で、妾御菓子だと思つて、父樣の寫眞を滅茶苦茶に折つたの――だから解らないや」

多摩子は悄氣て、寂しく呟とします。

「暗い〳〵汽車は碓氷の隧道だらふ」

「妾――眠むいので、無中で、信玄袋から出して折ちまつたの」

「好矣々々、父樣の寫眞はなくツても――私が本統の父樣だから」

「本統!!」

「本統さ」

私は夢路から夢路を辿つて居るやうな、無邪氣な多摩子のお頭を優しく撫でて。

「本統かしら?」と、多摩子は眞白々々と首を傾けて疑點の充たされた瞳を明々とさせました。

「本統――」と、私は明瞭答へて、ぐッと抱きあげ密に將來の幸福を神に祈禱ましたのです。

斯うして私は多摩子を家土産に歸りました。美くしい千枚岩層の破片をと思つたのが、多摩子。獨法師の空想詩人が急に父樣!!

前日、上野驛の構内を這入るときと、今日――出る時では全然頭腦が違つて居つて、我ながら斯う浮世の生命が解らないで、苦笑の内に歸りました。雖然私は獨身で――幸ひ義友の献身事業なる××育兒園に預けて、新家庭の出來るまで置く方針です。

* * * * * *

ですが、之は多摩子許りでない、斯な淡い運命に弄ばれた孤兒が、××育兒園には多い樣であります!!!（完）

四月號記事豫告

四月五日發行

每月五日發行

定價表

一冊（紙數二百八頁）…金二十錢	郵税 一冊 二錢
四冊（三ヶ月分）……前金七十五錢	
八冊（半ヶ年分）……前金一圓四十五錢	
十六冊（一ヶ年分）……前金二圓八十錢	
內（定刊數……十二冊 増刊四回…一、四、七、十月價格同一）	

廣告料

二十四字詰	一行	半頁（卅二行）	一頁（六十四行）
特等	五十八錢	二十圓	割引 四十圓
一等	五十八錢	十七圓	割引 三十三圓
二等	五十錢	十四圓五十錢	割引 二十八圓
三等	四十二錢	十二圓	割引 二十三圓

▲等級の位置〻切日等御照會次第御報可致候

註文略規

●本館發行の圖書は都て前金の外送本せず
●御拂込の前金相切れ候節は送本を停止す
●郵劵代用は一割增にて五厘一錢の切手に限る
●總目錄御入用の方は二錢劵相添申込あれ

明治四十年三月五日發行　第七卷第四號

編輯兼發行人　松原岩五郎

印刷人　山田英二

印刷所　東京市小石川區久堅町百八番地　博文館印刷所

發行所　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

電話　三百三番 / 千十八番
本局　二千六百二十番 / 三千二百二十九番

（後付の一）

毎編各專門
諸大家執筆

帝國百科全書

定價

並製 ●一冊四十錢●十冊參圓七拾錢●二十五冊八圓八拾錢●五十冊拾七圓●百冊參拾參圓●全部二百冊六拾五圓　郵稅一冊八錢宛

特製 ●一冊五拾五錢●十冊五圓●二十五冊拾貳圓●百冊四拾五圓●全部二百冊八拾八圓　郵稅一冊拾錢宛

全部二百卅冊
毎卷紙數約三百廿頁
總紙數約六萬六千頁

帝國百科全書の著者は悉く當代第一流の博士、學士、述作せる處は皆專門の科目、政治、經濟、法律、文學、理學、工學、農學、林學に亘り、方今世界の思想界と物質界とに於ける總ての最も進步發達せる理論と事實とを網羅し實に我が日本帝國の「エンサイクロペヂヤ」たるに恥ぢざるなり、而かも卷帙の浩瀚と内容の精選と各學科の具備とに加へて其代價の低廉なることに於て古今無比なるべし。宜なり本書が嘖々たる世上の高評を博し、毎卷數版乃至十數版を重ぬること、今や豫期の新序に因り其百六十餘編を發行するに至れり。蓋し社會の進步は更に各學科の微細に入り、日に進み月に磨き、分類に加ふるに分類を以てし、將來後刊行する所の本書に待つや少なからざるものあらんとす、本館は益々奮つて本書の完成に勗め、以て能く社會の森羅萬象は盡く網羅して遺憾なからんことを期す。

左に本全書中哲學、教育、宗教等に關するものゝ概要を揭ぐ參照せられよ!

哲學汎論

文學士 藤井健治郎君著

緒論
哲學とは何ぞや◉哲學の效用
◉哲學の分類◉哲學系統

第一部　知の哲學
第一編　寫象論
知覺◉思考
第二編　認識論
眞理の根本則◉個體の認識
◉哲學の認識即科學◉哲學
◉普通論理學◉直接理解及
說明

第二部　實在體の哲學
第一編　物的實在體の哲學即
自然哲學
自然哲學に於ける觀念論と
實在論◉自然界に於ける最
高概念◉自然科學と實在論
◉終局目的論と機制論
第二編　心的實在體の哲學即
心理學
第三編　人事の哲學
（甲）倫理學
（乙）美學
（丙）宗教哲學

西洋哲學史

文學博士 蟹江義丸君著

序論
哲學とは何ぞや◉哲學史とは
何ぞや外四項

古代哲學
總論　哲學發生以前の希臘の
情況外一項
第一期　ミレスト派、エレア
派、ピタゴラス派
第二期　詭辯學派、ソクラテ
イス派等
第三期　スイア學派、懷疑派、
混合學派
第四期　新ピタゴラス派ピタ
ゴラス化せるプラトーン派等

中世哲學
敎父哲學
煩瑣哲學
中世及び近世の過渡時代
古代哲學派の再興等六項

近世哲學
總論　古代哲學は美術的也
（外四項）
第一期　ベーコン、ホッブス、
デーカルト等
第二期　カント以後

東京　博文館　本町

支那哲學史

文學士 中内義一君著

緒論
第一編 古代哲學
第一章 儒家
第二章 道家
第三章 楊家—楊子
第四章 墨家—墨子
第五章 折衷派—鶡冠子
第六章 法家 管子◉中子◉韓非子
第七章 名家—鄧析子尹文子
第八章 詭辯家—惠子公孫龍
第九章 縱橫家—鬼谷子
第十章 雜家—尸子、呂子
第二編 中古哲學
第一章 漢代の思想界
第二章 六朝の思想界
第三章 唐代の思想界
第四章 五代の思想界
第三編 近代哲學
敍論
第一章 宗代哲學
第二章 元代の思想界
第三章 明代の思想界
第四章 淸代の思想界

論理學

文學博士 高山林次郎君著

第一章 總論
第二章 名辭命題及三段論法序論
第三章 名辭
第四章 命題
第五章 命題の對當
第六章 直接推理
第七章 思想の原則
第八章 間接推論概論
第九章 三段論法の式及格
第十章 三段論法の諸變態
第十一章 假言的三段論法撰言的三段論法及び兩刀論法
第十二章 三段論法論
第十三章 不正確なる推論
第十四章 歸納法的三段論法概論
第十五章 似而非同上
第十六章 自然法の一致
第十七章 因果律
第十八章 觀察設想及立證
第十九章 歸納的研究法
第二十章 原因の不定と結果の混淆とより生ずる研究の困難
第廿一章 經驗に關する誤謬
結論

處世哲學

文學士 杉谷泰山君譯

第一編 總論
○幸と不幸との分かるゝ所以○人格○精神思想○思想感情と宇宙萬有外十目
第二編 人格論
○人格の必要○快樂と主義○人格は固定性なり○快潤と健康○健康と攝生○運動の必要外十八目
第三編 所有貯產論
○慾望の三種—自然必要的—自然不必要的—不自然不必要的○要求と所有○職業と財產外四目
第四編 名譽論
○名譽と幸福○名譽と道德○譏譽褒貶と人生幸福外二十九
第五編 致訓格言論
○汎論三項○自己に關する處置覺悟十七目○他人に對する處置覺悟—二十六目○運命境遇に對する處置覺悟外八目
第六編 年齡論
○年齡と人生○幼少時代は詩的也外四十目
附錄＝ショーペンハウエル小傳 外一目

進化論

文學士 十時 彌君著

緒論
第一章 種の變異
◉進化論の影響◉種々の進化論等
第二章 生物界の分類
◉進化論の中心問題◉異種と變種等
第三章 地層中の古生物
◉化石の重要等
第四章 發生の歷史
◉進化論の直接證據等
第五章 地理上の分布
◉動物分類の問題の重要
第六章 ダーキン說
◉進化の事實と理論
第七章 晩近の學說
◉自然淘汰說の不備等
第八章 自然に於ける人類の位置
◉此問題の旨趣等

（後付の三）

社會學

文學士 十時彌君譯述

緒論 社會學とは何ぞや何が故に社會的現象は研究すべきものなる乎◉社會と社會的科學との關係◉科學としての社會學の宜しく占むべき領域
第一章 社會の有機的性質
第二章 社會の物質基礎
第三章 集合的社會に於ける社會の關係
第四章 社會的心意
第五章 社會的活動原因
第六章 社會的活動の法式
第七章 社會の產業的統制
第八章 社會的單位としての家族
第九章 社會的活動の機關としての國家
第十章 社會學の立脚地より見たる個人
第十一章 社會的發展の外的記述
第十二章 社會的發展の過程
第十三章 人間社會に於ける自然淘汰

倫理學

文學博士 蟹江義丸君著

序論 倫理學とは何ぞや
本論 純理學的及心理學的
第一章 善惡—目的論的見解及び形式論的見解 善惡に就ての見解の種類◯目的論的見解外四目
第二章 至善—快樂論的見解及び勢力論的見解 功利主義の批評◯快樂は行爲の目的にあらず外六目
第三章 害及び惡 物理的害◯道德的害◯其結果◯死
第四章 義務及び良心 義務感情の起點◯義務と性癖との關係外六目
第五章 利己主義及利他主義 利己主義と利他主義とは絕對的に矛盾するものに非ず
第六章 德及び幸福
第七章 道德と宗教との關係
第八章 意志の自由 其歷史的說明の事實の敍述◯其責任◯人間的自由意義

比較神話學

文學士 高木敏雄君著

第一章 總說 (一)神話學の概念及由來(二)比較神話學說(三)比較神話學の方法及神話の種類
第二章 天然神話 (一)太陽神話(二)天然物崇諸神(三)天地開闢神話
第三章 人文神話 (一)罪惡の神話的說明(二)人文神話(三)死と火との起原
第四章 洪水神話 (一)支那洪水神話の英雄(二)洪水神話の比較
第五章 英雄神話 (一)英雄成功神話(二)勇者求婚說話(三)怪物退治說話(四)動物說話
第六章 神婚神話 (一)神婚說話(二)白鳥處女說話(三)仙鄉淹留說話

東洋西洋倫理學史

文學博士 井上哲次郎君閱
木村鷹太郎君著

總論
第一部 東洋倫理學史
第一期 倫理學說の萌芽期 總論◉古聖王の倫理學思想◉天に就ての觀念
第二期 周末倫理學說 總論◉管子◉老子◉孔子◉易◉子思◉墨子◉楊子等
第三期 漢唐間の倫理學說 總論◉董仲舒◉揚雄◉韓愈◉李翺
第四期 宋明の倫理學說 總論◉王安石◉周敦頤◉張載◉二程子◉朱熹等
第二部 西洋倫理學史
第一編 グレシア 總論◉ソクラテス前の倫理學思想◉ソクラテース◉ソクラテース學派外四章
第二編 近世倫理學史 總論◉ホッブス◉カッドオース、モーア、クラーク及カンバーランド◉ロック◉シャフツベリー外十四章

日本佛教史

文學士 石原卽聞君著

心理學

文學士 速水滉君著

世界宗教史

文學士 加藤玄智君著

兒童心理學

文學士 松本孝次郎君著

社會倫理學

文學士 德谷豐之助君著

第一編 總論

●社會とは何ぞや●社會の種類●社會倫理學の任務●個人的良心、社會的良心●善惡標準外三

第二編 家族倫理

●近世家族の性質●家族倫理の第一義●夫婦の協同外十

第三編 人爲社會之倫理及び社交倫理

●人爲社會の發生●人爲社會と他の社會との異同外九

第四編 國家倫理

●國家倫理と家族倫理、人爲社會倫理社交倫理との關係、國家の職分及び國家倫理の地位と國民と國家外十四

第五編 國際倫理

●國際倫理とは何ぞや●國際倫理の區分●平時國際倫理●戰時國際倫理●結論

第六編 餘論

●人道論●人と生物●人と天然●結論

世界宗教制度論

法學士 工藤重義君著

第一編 總論

緒言

第一章 宗教及法律の觀念

第二章 宗教と法律との關係

第二編 國家宗教關係論

第一部 政教合一制度論

概論◉國教制度◉教國制度

第二部 信教自由制度論

第一章 概論

第二章 教會統治權の原則

第三章 信教自由の原則

第四章 政教分離制度

第五章 教會公認制度

第六章 我邦現時の制度

第三編 宗教內部組織論

第一章 概論

第二章 管長組織

第三章 長老組織

第四章 組合組織

第五章 我國に於ける宗教

第四編 餘論

第一章 宇內平和論

第二章 犯罪教濟論

近世心理學

文學士 德谷豐之助

第一章 緒論

第二章 心理學の史的發達

第一、第十七世紀及び第十八世紀

第二、第十九世紀の初期

第三、近世心理學

第三章 心理學の對象及範圍

第四章 精神及身體

第五章 心理學の研究法

第六章 心的官能

第七章 心的生活の組成及び發達

第八章 意識

第九章 心理學之法則

第十章 結論

▲索引……………………

（後行の六）

宗教哲學

文學博士 姉崎正治君著

第一部 宗教心理論

第一章 人間一面のみの宗教的機能

寫象としての宗教的機能◉感情としての宗教的機能◉意志としての宗教的機能

第二章 神と人と二面の宗教的關係

恩寵及信仰概論◉啓示の恩寵と知力的信仰◉解脱の恩寵と實行的信仰◉靈化の恩寵と實行的信仰

第二部 宗教形而上論

第一章 宗教的客體の形而上論即神論

第二章 宗教的主體の形而上論

第三部 宗教倫理論

第一章 濟度の主觀的過程

恩寵の喚起◉恩寵の開展◉恩寵の結果

第二章 濟度の客觀的過程

佛教倫理學

文學士 蜷川龍夫君著

上編 歷史的佛教倫理
◉緒論◉印度の倫理思想◉支那思想と印度思想との交涉◉日本の佛教倫理

中編 學理的佛教倫理
◉佛教倫理の基礎◉究竟目的論●實際的目的論◉善惡標準論◉心性論◉應報論

下編 實踐的佛教倫理
◉道德實踐の要旨◉八正道と三學◉四恩と六恩◉五戒及十善業◉六波羅密◉結論

宗教進化論

文學士 融道玄君譯

第一章 宗教學は成立つことを得
第二章 宗教を定義する方法
第三章 宗教の定義
第四章 無限てふ觀念に對するマックス、ミュ－ラ－氏及びスペンサ－氏の說
第五章 有限てふ意識を二元的に解するスペンサ－氏の說
第六章 神てふ觀念は知識の始にして又終なり
第七章 宗教進化の三大段落
第八章 最古の宗教たる客觀教
第九章 客觀教と道德との關係
第十章 希臘の宗教
第十一章 想像力が客觀教の發達に及ぼす作用
第十二章 主觀教の論理
第十三章 主觀教(一)佛教(二)ストア派の哲學的宗教
第十四章 (三)イスラエルの宗教
第十五章 客觀教と主觀教との對立
第十六章 善と幸福との關係てふ觀念竝にそが舊約全書に於ける發達
第十七章 猶太教と基督教との關係
第十八章 後期猶太教の問題并に耶蘇の解答
外に八章

佛教哲學汎論

文學士 石原即聞君著

緒論
◉佛教とは何ぞや◉哲學とは何ぞや◉佛教は哲學なりや宗教なりや◉佛教は如何なる宗教なりや◉宗教と哲學との關係◉宗教と科學との關係◉宗教と倫理との關係◉佛教哲學とは何ぞや

本論
宇宙論
第一章 序說
第二章 現象論
第三章 實在論
第四章 現象と實在との關係

附錄
解脫論
第一章 序說
第二章 小乘の解脫
第三章 大乘の解脫
第四章 解脫の形式

佛教美術

文學士 前田慧雲君著

第一章 緒論
●古代印度美術發達の狀態●年代表●印度美術に於ける宗教的影響●佛世尊●マガダのマウリヤ王朝●遺物の種類スタンバ●二大分類

第二章 古代印度の美術的形式
●古代印度の彫刻●ティルヤグヨイ●繪畫●サンチ專門凸刻に於けるカーシュヤパの傳說●サンチ東門の軒綠

第三章 ガーンダーラ式彫刻、即ち希臘式佛教彫刻
●政治史●ガーンダーラ遺物の發見、其研究●模型、佛陀の模型、佛陀としてのガウタマ外七節

第四章 佛陀及び菩薩の肖像
●チャクラバルチー、七寶佛陀の前身と後身外三節

附錄

近世美學

文學博士 高山林次郎君著

上編 美學史一斑
第一章 緒言
美學の名稱⊙美學とは如何なる學ぞ⊙美の兩面等
第二章 美學史の概見
希臘人の美學思想外十三目
下編 近世美學
第三章 キルヒマン氏美學美の概念⊙美感外六目
第四章 ハルトマン氏の美學
序言
第一節 美的假象論
美的假象⊙美感⊙美樂受
第二節 美の具象階級
第一次形式美即量美其他
第三節 美の種類
第四節 宇宙における美の位置
第五節 ハルトマン氏の假象論の由來
第五章 スペンセル氏及グラントアルレン氏
第六章 マーシャル氏の快樂論的美學

教育學

文學士 熊谷五郎君著

序論
教育の科學⊙理論と實行⊙教育學の個人的見解と社會的見解外五章
第一編 養護論
教育學に於ける養護論⊙身體機能と精神機關⊙營養及呼吸の養護⊙身體の練習と遊戲外六章
第二編 教授論
第一 教授の目的及教化の理想
第二 教材論
第三 教案論
第四 教程論
第五 教術論
第六 學制論
第三編 訓練論
第一 編入及交附としての訓練
第二 訓練の目的と德化の理想
第三 訓練の處辨
訓練の處辨 追加

最新教育學

文學士 中村爲松君著

序論
上編
第一章 個人的教育學及社會的教育學
第二章 ヘルバルト學派
第三章 ナトルプの教育學説
第四章 ベルグマンの教育學説
個人的教育學と社會的教育學との比較
中編 普通教育論
第一章 總説
第二章 教授論
第三章 訓練論
第四章 健全學
下編 特殊教育論
第一章 中等教育論
第二章 高等教育論
第三章 女子教育論
第四章 實業教育論
第五章 公共教育論

東洋 西洋 教育史

文學士 中村禮四郎君著

總論
第一編 東洋教育史
支那の教育⊙印度の教育⊙波斯の教育⊙埃及の教育⊙猶太の教育
第二編 西洋教育史
西洋太古教育史
希臘及羅馬教育の概論⊙希臘の教育⊙羅馬の教育
西洋中古教育史
歐州國民と教育の關係⊙基督教の主義と教育の關係⊙基督⊙基督教初代の教育⊙中世紀の基督⊙シャーレマン帝の教育中興⊙寺院外の教育⊙貧民教育⊙煩瑣哲學⊙同教の學問⊙大學の起原及び設立
西洋近代教育史
古文學復興前教育の大勢⊙古學の復興及び其の影響⊙宗教改革及び其影響⊙エラスマンの教育意見⊙ラベライスの教育意見⊙ルーテルの略傳幷に其教育意見外十八章



●月やくをつうじ子宮病血の道を全治す

▲月經不通 長きは數年間短きは二三ヶ月の間月經なく或は血塊抔と稱へ經水の少なき人

▲月經不順 毎月經水の日定まらず又月經少なく又は多きに過て「どかをり」等にて不同の人

▲月經困難 月經時又は其前后に身體に異狀を起し、腰或は子宮部に痛を發し氣分鬱ぐ人

▲女子十六七才にて月經なき人

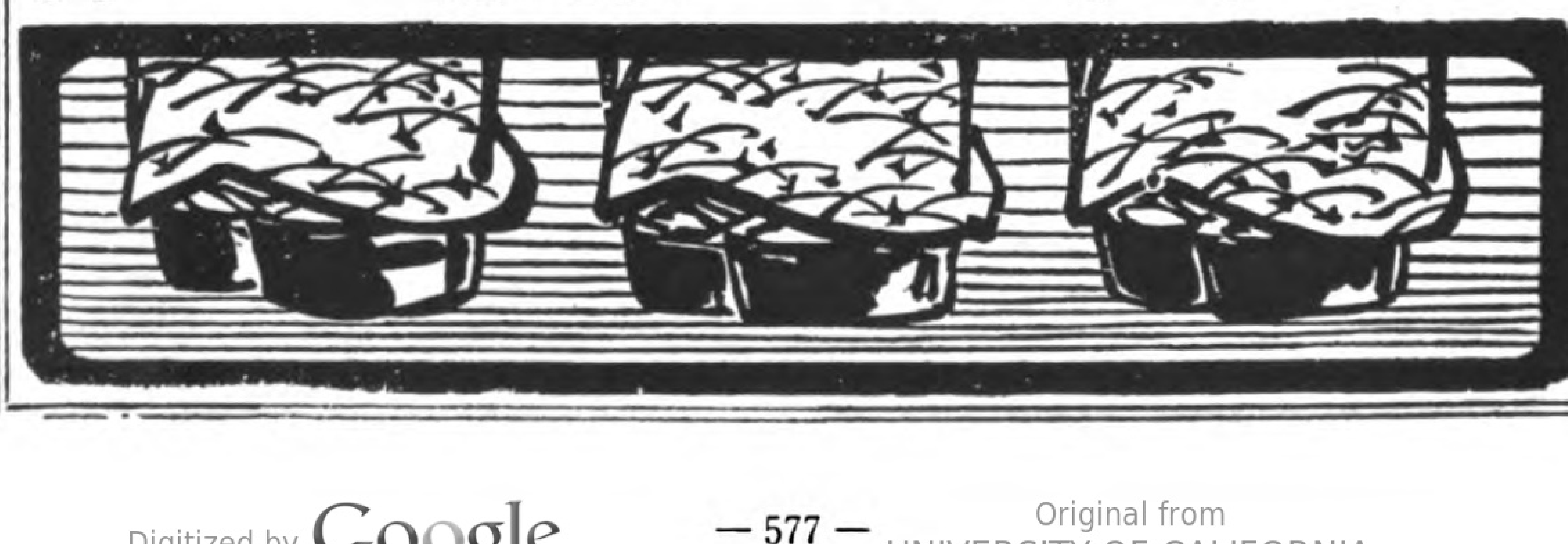
●其他月經不順又は月經不通より發る病症●逆上强く頭痛◎めまひ◎目かすみ◎耳鳴り癇高ぶりねむられず◎顔色惡く氣分鬱ぎ◎食物進まず通じ惡く◎腹腰子宮部に痙攣又は疼痛ある症等に用ひて腹内の停滯物を下し逆上をしづめ總て月經不順より起る諸病を根治する天下無類の良藥なり

注意 藥は思ひ立たる時に買玉へ全國有名藥店に取次販賣す若し無き時は本舖へ注文あれ全國無遞送料にて直ぐ送る

藥價表

一日分	金八錢
半週分	金廿五錢
一週分	金五拾錢
二週分	金壹圓

本舖 大阪市心齋橋八幡筋南 長電話東九百〇壹番 丹平商會藥房



女學世界
明治卅三年十二月廿五日 第三種郵便物認可
第七巻第四號
明治四十年三月五日發行 毎月一回五日發行

（定價金貳拾錢●郵稅貳錢）

監修
小山静子　KOYAMA Shizuko
京都大学大学院教授

女学世界（じょがくせかい） 明治期復刻版50
明治40年2月(第7巻第3号)、3月(第7巻第4号)

2008年12月10日　第1刷発行　　定価(本体20,000円+税)

監　修　小山静子
発行者　富澤凡子
発行所　柏書房株式会社
東京都文京区本駒込1-13-14(〒113-0021)
電話　03-3947-8251[営業] 03-3947-8254[編集]
協　力　株式会社博文館新社
印　刷　株式会社友美社
製　本　有限会社青木製本

ISBN978-4-7601-3505-9　C3321